

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第539集

さかい
境遺跡発掘調査報告書

主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連発掘調査

2009

岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部
(財)岩手県文化振興事業団

正誤表

P	行	誤	正
目次3P	6	(3)その他の出土品	(3)その他の出土遺物
目次3P	7	Ⅴまとめと考察	Ⅴまとめ
目次6P	16右	写真図版9～A柱穴状土坑～	写真図版9～A柱穴状土坑群～
目次7P	19左	写真図版30 SI11堅穴住居状遺構	写真図版30 SI11堅穴住居状遺構①
目次7P	20左	写真図版31～B区弥生面完掘	写真図版31～B区弥生時代面完掘
目次7P	21左	写真図版32 SI12堅穴住居状遺構	写真図版32 SI12堅穴住居状遺構①
2	表題	第1図 岩手県の主な都市と河川	第1図 岩手県の主な河川と都市
7	2	沼尻遺跡(18)	沼尻遺跡(19)
7	3	中島(19)	中島(18)
9	第1表	周辺の遺跡 13 後中野	第1表 周辺の遺跡 15 後中野
9	第1表	周辺の遺跡 15 落合	第1表 周辺の遺跡 13 落合
28	表題	SK01土坑、A区間状遺構	SK01土坑、A区間状遺構
32	14	(3)炭化物および焼土	(3)焼土遺構
50	18	(1)堅穴住居跡	(1)堅穴住居跡(堅穴住居状遺構)
66	18	(第27図 84～83図 写真図版28～77～79)	(第27図 64～94図 写真図版28～78～79)
81	33	SK26土坑(第33図、写真図版37)	SK26土坑(第33図、写真図版39)
84	15	SK33土坑(第36図、写真図版43)	SK33土坑(第36図、写真図版42)
89	21	SK48土坑(第44図、写真図版46)	SK48土坑(第43図、写真図版46)
90	4	弥生時代にかけて遺構で	弥生時代にかけての遺構で
94	36	確認したことから登録した	確認したことから登録した
97	36	C柱穴状土坑群《PP55～64》	C柱穴状土坑群《PP55～66》
116	第49図	E—F PP40	E—F PP44
143	9	長さは2.0cm～2.7cm	長さは2.0～2.4cm
144	22	石核や破片はその種類ごとに分けて	石核や破片はその種類ごとに分けて
150	第7表	110 備考欄	備考欄に 写真掲載イレル
154	第7表	310	311(番号のみ変わり、他は変更なし)
154	第7表	311	310(番号のみ変わり、他は変更なし)
155	第7表	365	366(番号のみ変わり、他は変更なし)
155	第7表	366	367(番号のみ変わり、他は変更なし)
155	第7表	367	365(番号のみ変わり、他は変更なし)
196	1	2 遺物	2 出土遺物
264	表題	写真図版56 1号配石遺構～	写真図版56 1号配石遺構②～

境遺跡発掘調査報告書

主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連発掘調査



平安時代竪穴住居跡カマド断面と土器出土状況



古代～中世の配石遺構



平安時代の土器



古墳時代と弥生時代の土器

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域と風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発に当たっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置を取ってまいりました。

本報告書は、岩手県北上市の主要地方道北上一関線下門岡地区道路整備事業に関連して平成18・19年度の2年間にわたり発掘調査を実施した、北上市境遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代晩期末から弥生時代、古代、中世から近世にいたる複合遺跡であることが確認されました。遺物では弥生時代の特色である特殊な石器や古墳時代に相当する占い土師器、平安時代の墨書き土器などが出土しています。これらの資料は岩手県でも類例が少なく貴重なものといえるでしょう。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成あたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県南広域振興局北上総合支局土木部、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成21年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県北上市稻瀬町字地蔵堂3～1ほかに所在する境遺跡の調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、北上市に位置する主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事に関する緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け実施した。
- 3 本遺跡の調査成果は、すでに「平成18・19年度発掘調査報告書」(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第505・524集)において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 4 遺跡番号はME86～0069、遺跡略号はSA-06・SA-07である。
- 5 野外調査の面積・期間・担当者、室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

野外調査

平成18年度	面積 1035m ² 調査期間 平成18年9月19日～12月4日
	調査担当者 烏居達人・木戸山俊子
平成19年度	面積 6100m ² 調査期間 平成19年4月11日～9月27日
	調査担当者 烏居達人・須原拓

室内整理

平成18年度	平成18年12月1日～平成19年3月31日
平成19年度	平成19年5月1日～平成20年1月31日
	整理担当者 烏居達人・須原拓

- 6 野外調査における委託業務は、以下のとおりである。

基準点測量	株式会社キタテック（平成18年度）
	株式会社キタミ・シーエーディー（平成19年度）
航空写真撮影	東邦航空株式会社
配石造構測量	株式会社シン技術コンサルタント

- 7 遺物や炭化物の鑑定は、次の機関に依頼した。

炭素年代測定	株式会社古環境研究所
石材鑑定	花崗岩協会

- 8 野外調査・室内整理にあたっては、次の方々の御協力・御指導をいただいた。
北上市教育委員会、北上市埋蔵文化財センター、高瀬克範
- 9 本報告書の執筆については、第Ⅰ章「調査に至る経過」が岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部、他は烏居達人が行った。編集は烏居が担当した。
- 10 本遺跡調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	1
1 位置・地形	1
(1)遺跡の位置とその歴史的背景	1
(2)周辺の地形・地質	4
2 周辺の遺跡	4
III 調査と整理の方法	11
1 野外調査の方法(18年度)	11
(1)グリッドの設定	11
(2)粗掘りと精査	11
(3)遺構の記録	13
2 野外調査の方法(19年度)	13
(1)グリッドの設定	13
(2)粗掘りと精査	13
3 室内整理の方法	13
(1)遺構図面・図版	14
(2)遺物の処理	14
(3)遺物図版	14
(4)写真図版	14
4 調査区および遺構名の変更	14
(1)調査区呼び名の統一	14
(2)遺構名の統一と変更	15
IV 基本層序と検出面	19
1 基本層序	19
(1)基本層序	19
(2)各区域の層位の特徴	20
2 遺物出土状況と検出面	21
(1)遺物出土状況	21
(2)検出面	22
V 平成18年度の調査・遺構	25
1 調査の経過と概要	25
(1)南側調査区(A区)	25
(2)北側調査区(B区)	26

2 検出遺構	26
《第1面》基本層序IV層下検出遺構	27
(1)土坑	27
(2)溝跡	27
(3)畝間状遺構	30
《第2面》基本層序V層以下検出遺構	30
(1)堅穴住居跡	32
(2)土坑	32
(3)焼土遺構	32
(4)溝跡	32
(5)堀跡	35
(6)柱穴状土坑群	39
(7)その他の	40
《第3面》基本層序VI層以下検出遺構	40
(1)包含層1・2	41
 VI 平成19年度の調査・遺構	48
1 調査の経過と概要	48
(1)B区	48
(2)C区	49
(3)D区	49
(4)E区およびまとめ	50
2 検出遺構	50
(1)堅穴住居跡(堅穴住居状遺構)	50
①古代	50
②縄文・弥生時代	66
(2)土坑	73
①古代以降	73
②縄文・弥生時代	77
(3)焼土および炭化物	92
(4)溝跡	93
(5)堀跡	95
(6)柱穴状土坑	96
(7)配石遺構	118
(8)旧河道と包含層	121
 VII 出土遺物	133
1 出土遺物概要	133
(1)平成18年度	133
(2)平成19年度	134
(3)2年間の出土総重量	134
2 出土遺物	134
(1)土器・土製品	134
①古代の土器	135
②縄文・弥生土器	136
③土製品	142

(2) 石器・石製品	142
① 剥片石器	143
② 石核・剥片	144
③ 繩石器	145
④ 石製品	146
(3) その他の出土品	146
 VIIIまとめと考察	192
1 遺構	192
(1) 近世以降	192
(2) 中世	192
(3) 古代	193
(4) 古墳時代	194
(5) 弥生時代	195
(6) 縄文時代晩期末から弥生時代前期	195
(7) 縄文時代晩期以前	195
2 出土遺物	196
 IX 自然化学分析	199
1 放射性炭素年代測定結果報告書(AMS測定) 境遺跡	199
(1) 遺跡の位置	199
(2) 測定の意義	199
(3) 測定対象試料	199
(4) 化学処理工程	199
(5) 測定方法	199
(6) 算出方法	200
(7) 測定結果	201
報告書抄録	301

図版目次

第1図 岩手県の主な河川と都市	2	第23図 SI04堅穴住居跡	62
第2図 遺跡位置図	3	第24図 SI05・06堅穴住居跡	63
第3図 地形分類図	5	第25図 SI07堅穴住居跡	64
第4図 周辺の遺跡図	8	第26図 SI08堅穴住居跡	65
第5図 周辺の地形と調査区	12	第27図 SI09堅穴住居状遺構	70
第6図 グリッド配囲図	16	第28図 SI10・SI11堅穴住居状遺構	71
第7図 基本層序柱状図	18	第29図 SI12・SI13堅穴住居状遺構	72
第8図 遺構配置図	24	第30図 SK03～06土坑	75
第9図 SK01土坑、A歓間状遺構	28	第31図 SK07～11土坑	76
第10図 SD01・02溝跡	29	第32図 SK12～17土坑	99
第11図 SD03溝跡、B歓間状遺構、SK02土坑、敷石遺構	31	第33図 SK18・19・20・22・26・28土坑	100
第12図 SD04・05溝跡	36	第34図 SK21・23・24・27土坑	101
第13図 SD06～09溝跡	37	第35図 SK25・29土坑	102
第14図 1・2号堀跡	42	第36図 SK30・33土坑	103
第15図 3号堀跡	44	第37図 SK31土坑	104
第16図 A柱穴状土坑群、柱穴列遺構	45	第38図 SK32・36・37土坑	105
第17図 包含層1・2位置図	47	第39図 SK34・35・38・39土坑	106
第18図 SI01堅穴住居跡	53	第40図 SK40・41・42土坑	107
第19図 SI01堅穴住居跡カマド	54	第41図 SK43・45・52・58土坑	108
第20図 SI02堅穴住居跡	56	第42図 SK44・46・50土坑	109
第21図 SI03堅穴住居跡①	58	第43図 SK47・48・51・53土坑	110
第22図 SI03堅穴住居跡②	59	第44図 SK49・54・55・56・57土坑	111

第45図 SX01～04燒土・炭化物範囲	112	第68図 繩文・弥生土器5	165
第46図 SD11・12溝跡・D柱穴状土坑群1・2	113	第69図 繩文・弥生土器6	166
第47図 SD10・13溝跡	114	第70図 繩文・弥生土器7	167
第48図 4・5号掘跡	115	第71図 繩文・弥生土器8	168
第49図 B柱穴状土坑群1・2、C柱穴状土坑群	116	第72図 繩文・弥生土器9	169
第50図 B柱穴状土坑群3	117	第73図 繩文・弥生土器10	170
第51図 1号配石遺構①	122	第74図 繩文・弥生土器11	171
第52図 1号配石遺構②	123	第75図 繩文・弥生土器12	172
第53図 2号配石遺構①	124	第76図 繩文・弥生土器13	173
第54図 2号配石遺構②	125	第77図 繩文・弥生土器14	174
第55図 3号配石遺構	126	第78図 繩文・弥生土器15	175
第56図 4号配石遺構	127	第79図 繩文・弥生土器16	176
第57図 旧河道・配石遺構位置図	129	第80図 繩文・弥生土器17	177
第58図 堀・溝跡全体図	132	第81図 繩文・弥生土器18	178
第59図 古代土器1	156	第82図 繩文・弥生土器19	179
第60図 古代土器2	157	第83図 上製品	180
第61図 古代土器3	158	第84図 石器・石製品1	181
第62図 古代土器4	159	第85図 石器・石製品2	182
第63図 古代土器5	160	第86図 石器・石製品3	183
第64図 繩文・弥生土器1	161	第87図 石器・石製品4	184
第65図 繩文・弥生土器2	162	第88図 石器・石製品5	185
第66図 繩文・弥生土器3	163	第89図 石器・石製品6	186
第67図 繩文・弥生土器4	164	第90図 石器・石製品7	187

第91図 石器・石製品 8	188	第93図 石器・石製品 10	190
第92図 石器・石製品 9	189	第94図 石器・石製品 11・古銭	191

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	9
第2表 遺構名変更表	17
第3表 A柱穴状土坑群観察表	46
第4表 土器観察表(1)古代	147
第5表 土器観察表(2)純文・弥生土器	149
第6表 土製品観察表	153
第7表 石器・石製品観察表	154
第8表 その他観察表	155

写真図版目次

写真図版1 航空写真	205	写真図版3 土層断面(A・B区)	207
写真図版2 発掘前状況	206	写真図版4 土層断面(C・D・E区)	208

平成18年度検出遺構

写真図版5 SK01土坑、SD01・02溝跡、A柱穴状遺構	211	写真図版9 SD09溝跡、A柱穴状土坑、包含層1・2	215
写真図版6 SD03溝跡、B柱穴状遺構、敷石遺構	212	写真図版10 1・2号堀跡①	216
写真図版7 SK02土坑、SD04・05溝跡	213	写真図版11 1・2号堀跡②	217
写真図版8 SD06・07・08溝跡	214	写真図版12 3号堀跡	218

平成19年度検出遺構

写真図版13 SI01堅穴住居跡①	221	写真図版35 SK07～10土坑	243
写真図版14 SI01堅穴住居跡②	222	写真図版36 SK11～14土坑	244
写真図版15 SI01堅穴住居跡③	223	写真図版37 SK15～18土坑	245
写真図版16 SI02堅穴住居跡①	224	写真図版38 SK19～22土坑	246
写真図版17 SI02堅穴住居跡②	225	写真図版39 SK23～26土坑	247
写真図版18 SI03堅穴住居跡①	226	写真図版40 SK27～30土坑	248
写真図版19 SI03堅穴住居跡②、C区1・2面完掘状況	227	写真図版41 SK31土坑	249
写真図版20 SI04堅穴住居跡①	228	写真図版42 SK32～35土坑	250
写真図版21 SI04堅穴住居跡②	229	写真図版43 SK36～39土坑	251
写真図版22 SI05・06堅穴住居跡①	230	写真図版44 SK40～43土坑	252
写真図版23 SI05・06堅穴住居跡②	231	写真図版45 SK44～47土坑	253
写真図版24 SI07堅穴住居跡	232	写真図版46 SK48～51土坑	254
写真図版25 SI08堅穴住居跡	233	写真図版47 SK52～55土坑	255
写真図版26 D区完掘状況	234	写真図版48 SK56～58土坑	256
写真図版27 B・C・E区VI層遺物出土状況	235	写真図版49 SX01～04焼土、炭化物範囲	257
写真図版28 SI09堅穴住居状遺構	236	写真図版50 SD10～13溝跡	258
写真図版29 SI10堅穴住居状遺構	237	写真図版51 4・5号堀跡①	259
写真図版30 SI11堅穴住居状遺構	238	写真図版52 5号堀跡②	260
写真図版31 SI11堅穴住居状遺構②、B区弥生面完掘	239	写真図版53 柱穴状土坑群	261
写真図版32 SI12堅穴住居状遺構	240	写真図版54 1号配石遺構①	262
写真図版33 SI12②・SI13堅穴住居状遺構	241	写真図版55 2号配石遺構①	263
写真図版34 SK03～06土坑	242	写真図版56 1号配石遺構②、2号配石遺構②	264

写真図版57 2号配石遺構③、3号配石遺構	265	写真図版75 繩文・弥生土器12	283
写真図版58 4号配石遺構	266	写真図版76 繩文・弥生土器13	284
写真図版59 旧河道、その他	267	写真図版77 土製品、古銭	285
写真図版60 古代土器1	268	写真図版78 石器・石製品1	286
写真図版61 古代土器2	269	写真図版79 石器・石製品2	287
写真図版62 古代土器3	270	写真図版80 石器・石製品3	288
写真図版63 古代土器4	271	写真図版81 石器・石製品4	289
写真図版64 古代土器5、繩文・弥生土器1	272	写真図版82 石器・石製品5	290
写真図版65 繩文・弥生土器2	273	写真図版83 石器・石製品6	291
写真図版66 繩文・弥生土器3	274	写真図版84 石器・石製品7	292
写真図版67 繩文・弥生土器4	275	写真図版85 石器・石製品8	293
写真図版68 繩文・弥生土器5	276	写真図版86 石器・石製品9	294
写真図版69 繩文・弥生土器6	277	写真図版87 石器・石製品10	295
写真図版70 繩文・弥生土器7	278	写真図版88 石器・石製品11	296
写真図版71 繩文・弥生土器8	279	写真図版89 石器・石製品12	297
写真図版72 繩文・弥生土器9	280	写真図版90 石器・石製品13	298
写真図版73 繩文・弥生土器10	281	写真図版91 石器・石製品14	299
写真図版74 繩文・弥生土器11	282		

I 調査に至る経過

境遺跡は、緊急地方道路整備事業である主要地方道一関北上線下門岡工区の事業区域内に存在することから、工事施工前の発掘調査が必要になり、平成18年度・平成19年度に発掘調査を実施した。

主要地方道一関北上線は一般国道4号を補完する重要な幹線道路であるが、当該区域は線形不良のため死亡事故を含む交通事故が多発し、通学時における児童の安全が脅かされていることから、開場整備事業と連携して道路の整備を進めているものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、当部から平成18年3月2日付北総土第298号において岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（以下、生涯学習文化課）に試掘調査を依頼し、平成18年3月14日に生涯学習文化課は試掘調査を実施した。その結果、工事施工前の発掘調査が必要であることが明らかになった。

その結果を踏まえ、生涯学習文化課の調整を受けて、財団法人岩手県文化振興事業団との間で平成18年8月28日、平成19年4月2日に依託契約を締結し、発掘調査を実施したものである。

（岩手県県南広域振興局北上総合支局土木部）

II 立地と環境

1 位置・地形

（1）遺跡の位置とその歴史的背景（第1・2図）

境遺跡は南流する北上川の東岸、JR北上駅からほぼ南に4.5km離れたところに位置する。現況は更地で一部水田となる。所在地は北上市鶴瀬町地蔵堂である。

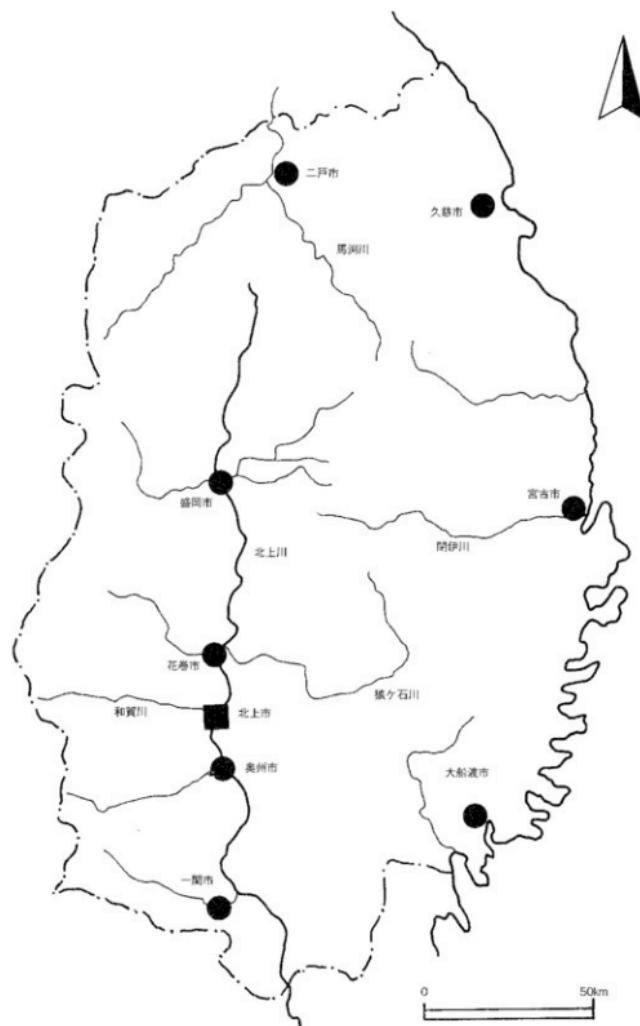
遺跡の所在する北上市は、岩手県北上盆地の中央部、ほぼ南流する北上川とその支流和賀川合流地帯を範囲として、昭和の大合併で昭和29年成立した。古くから北上盆地を南北に走る道と、和賀川沿いに西行すると奥羽山脈を越え、東方は太平洋岸にいたる東西道との十字路として、交通の要衝であった。近年では昭和53年東北自動車道一関－盛岡間が開通、昭和58年東北縦貫自動車道が、平成3年には東北自動車道秋田線が開通し高速交通網の拠点となり、また北上川テクノのボリスの中核工業都市として発展した。そして、平成大合併に先駆けて、平成3年に旧北上市、旧和賀町、旧江釣子村の合併で新・北上市となった。

次に遺跡のある北上市鶴瀬町下門岡地区を紹介する。この区域は江戸時代では仙台藩領江刺郡に属し、古くは門岡村と称した。繩文時代の椎山遺跡や、古代では天安元年（857）定額寺に指定された極楽寺と考えられる国見山庵寺があり、この2つの遺跡は国の指定史蹟となっている。

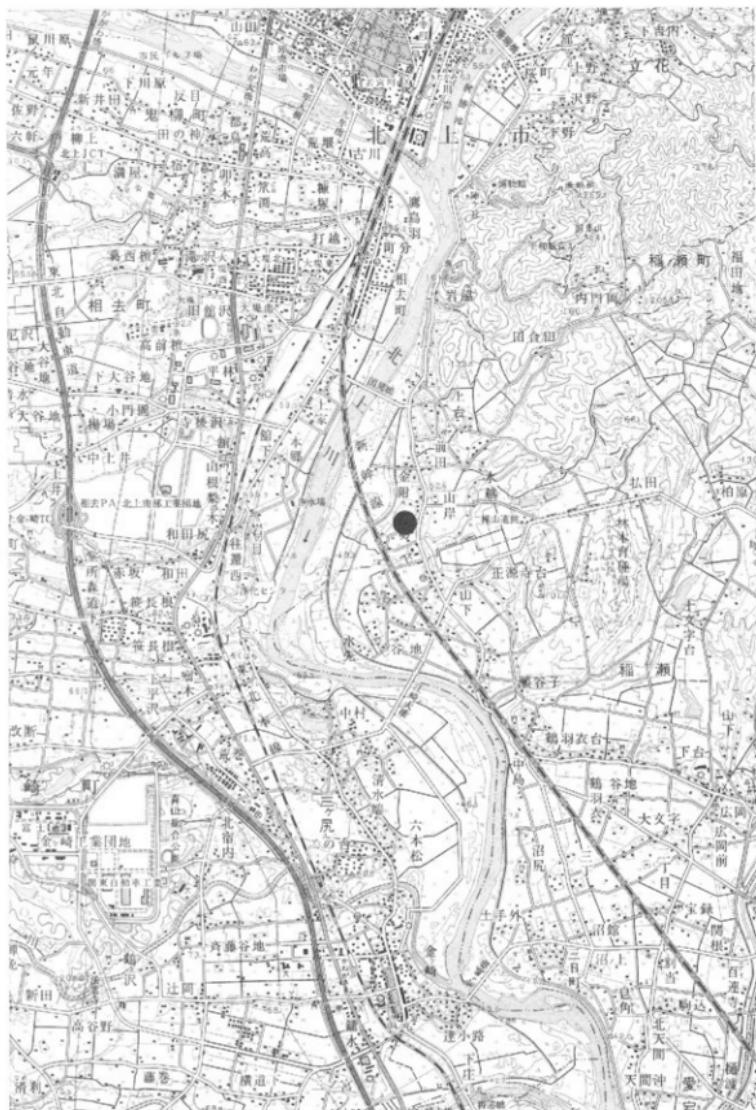
鎌倉時代になると、水越地区に承久の乱で敗れて奥州に配流された河野道信の墓と伝えられるひじり塚がある。また、戦国時代になると金附地区に齊羽場城跡が存在していた。

江戸時代初期には現江刺市西部域に水を通す目的で灌漑用水路を開削した。大堰または下門岡大堰ともいう。現在の陣ヶ丘付近から承応3年（1653）に北上川からの取水に成功したが平留水門の破損で通水不能となり、寛文4年（1664）トンネルを完成させるも寛文10年（1670）の洪水で破壊され、正徳元年（1711）、下門岡黒瀬で取水する新堰が完成している。総延長は2795間、幅は3～4間の大がかりなものであった。金附遺跡では、この大堰に関わるとみられる溝を検出している。

1 位置・地形



第1図 岩手県の主な都市と河川



第2図 遺跡位置図 (1 : 50,000 北上)

上記の通り、この旧門岡村は、江刺市稻瀬町にある瀬谷子古窯群や稻瀬古墳群などを含め、古代から中世にかけての貴重な遺跡や伝説、またその擬定地が数多く存在する地域である。特に古代においては胆沢城との関わりもある。近世においても江刺平野への灌漑用水路の取水どころとして大きな役割を担っており、また伊達藩と南部藩の境となっているため様々な動きがあったであろうことが予想される。

(2)周辺の地形・地質(第3図)

南北に岩手県を縦断する北上川は、北上川河谷平野を形成しているが、この地域では西部の扇状地性の台地群と東部の小起伏山地を含む丘陵地群に大きく区分される。図面上では凡例通り小起伏山地と丘陵地、砂礫段丘Ⅱ(中位段丘)と砂礫段丘Ⅲ(下位段丘)をそれぞれ1つにして示している。以下、図面幅の各々について説明したい。

山地および丘陵については、東部にみられる。これらは北上山地に属するが、地質的にみると新第三紀系で安山岩溶岩を含む集塊岩および凝灰質岩石、礫岩、泥岩などで構成され、北上山地のなかでは比較的新しい地質からなる地域である。西部では台地が卓越して丘陵地面積はごく僅かであるが、金ヶ崎に分布する西根丘陵(境遺跡の北上川対岸)は数mの礫層の上に数mから10m程度の火山灰質粘土および浮石質火山灰を載せている。

砂礫段丘Ⅰ(上位段丘)は稻瀬(境遺跡東側)付近に広く分布する。標高100m前後で最も開拓された段丘ではあるが、平坦面の保存は比較的良好である。

砂礫段丘Ⅱ、Ⅲ(中低位段丘)は西側に広く分布する。中位段丘の構成層は砂および粘土を基質とする礫層であり、各所で植物質薄層をはさむ。礫層の上位には黒沢尻火山灰が覆い、1m以上の黄灰色粗粒浮石を主とし、その上位には茶褐色火山灰をともなう。これら中位段丘面の一部は旧石器の遺物を包含する砂礫層として知られる。東側にも江刺市稻瀬町付近に見える。

北上川沿いには、幅1~4kmの谷底平野(図版右部分)が発達する。この平野には数多くの旧道路跡が残り、また自然堤防の分布も顕著である。図面内では金附遺跡周辺は旧河道に挟まれた谷底平野になっているが、調査の結果、時代を越えた2つの自然堤防の形成が確認されている。境遺跡調査区内でも、西から東に延びる自然堤防状の微高地を確認しており、住居跡などの遺構も検出している。これらの例から、この谷底平野には多くの自然堤防や洪水等の痕跡があると予測させる。和賀川沿いに関しても同じことが言える。
〔参考文献：岩手県(1979)北上山系開発地域土地分類基本調査・北上〕

2 周辺の遺跡(第4図・表1)

北上市周辺は旧石器時代から中世あるいは近世まで、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターや北上市教育委員会、北上市埋蔵文化財センターまた奥州市教育委員会などで多くの発掘実績がある区域であり、発掘報告書の刊行は多い。近年では(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査した金附遺跡発掘調査報告書(2006金子)に非常に詳細な紹介がなされている。特に縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての遺跡は周知のものと最新のデータを含めてほとんど網羅している。よって本項では北上市の縄文時代～弥生時代初頭期までの遺跡は図面幅内にある代表的なもの以外は割愛し、やや南に焦点を置き、奥州市を含めた弥生時代と古代から中世の遺跡について触れていく。

まず、縄文時代では樅山遺跡(1)がある。境遺跡の東方1.2kmの丘陵の斜面に位置する国指定史跡である。縄文時代前期から後期にかけての遺跡で、遺構は配石遺構と住居跡群からなる。特に配石遺



第3図 地形分類図

構は30数カ所確認され、東北各地で検出されている後期配石遺構の先駆的な遺跡で縄文時代の祭祀・葬制の研究上重要なものである。

境遺跡の北側には金附遺跡(2)が隣接する。平成16年度から17年にかけて、遺跡の北端4094m²が調査された。主な時期と遺構は縄文時代中期末の竪穴住居跡、晩期末～弥生時代中期初頭の集落跡、奈良平安時代の小規模集落跡、中世の火葬墓、近世の集落跡と大溝跡である。注目されるのは、縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭までの豊富な土器出土状況と石器製作址としての性格である。その金附遺跡の東側段丘上には相田遺跡(3)がある。金附遺跡出土と同時代の土器が出土しており、報告書の中で「金附遺跡の立地と石器組成の特殊性を考えれば、相田遺跡が本来の集落で、金附遺跡は石器製作を主とする作業場であった可能性が高い」(金子 2006)としている。その北方には平成14年に新規登録された安楽寺遺跡(4)があり、弥生時代から古代にかけての土器が出土している。このように周辺は縄文時代晩期から弥生時代前期、また古代にかけての遺跡がまとまっており、当遺跡の土器や石器出土状況も類似点があることから、大いに参考になる。境遺跡(5)では弥生時代の中期から後期にかけての土器が出土していることから、この一帯は弥生時代全般にかけての好資料を提供しているといえる。

さて、その弥生時代の遺跡に関しては岩手県では資料が豊富とは言えないが、江刺平野から水沢市にかけては比較的発掘調査例がある。図版内でいえば沼の上遺跡(6)が知られている。1977年に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで、周知の遺跡であった遺跡の範囲確認のために発掘調査されている。トレンチ方式による調査で、住居跡の検出はなかったが弥生時代中期の土器が出土している。東北新幹線関係では図版の南隅から南東500mの江刺市愛宕字庵にある庵II遺跡(7)がある。遺構は古代のものが中心であったが、弥生時代中期から後期にかけての土器が多く出土している。中期に属する土器から櫛痕が見つかり、江刺平野の稲作の始源を解明に好資料を提示した。また落合I遺跡(13)でも弥生土器が出土しており、最近では反町下層遺跡(8)から竪穴住居跡7棟とともに、前期の水田跡と推定されている遺構が検出されている。

その他、当時期の土器を出土させる遺跡としては、図版外の北上川左岸にある常磐式土器の標式遺跡・常磐広町遺跡(9)、なお南方にある橋本式土器の標識遺跡である橋本遺跡(10)、前沢町には中期の標識として近年唱えられている川岸場式土器の出土する川岸場II遺跡(11)がある。岩手県の中では弥生土器の資料が豊富な区域だと言える。

古代では周辺には遺跡が多い。稻瀬段丘面には稻瀬古墳群(12)があり、また岩谷堂周辺にもいくつかの古墳が登録されている。また、上記反町下層遺跡で検出された2棟の竪穴住居跡は、遺物は出土しなかつたが、AMS測定の結果、古墳時代のものと推定されている。奈良時代では愛宕地区の後中野遺跡(13)などで畑跡など遺構が確認されている。江刺平野東側の新川III遺跡(14)では竪穴住居跡4棟が検出されたが、8世紀前半から9世紀後半のものと推定されている。また、検出された畑跡は7世紀後半と推定され、反町下層遺跡(8)の住居跡の年代に合う。以上のように古墳時代や奈良時代の遺跡もあるが、平安時代になるとその遺跡数は圧倒的に多くなる。以下に新幹線関連の遺跡を挙げる。いずれも標高50m以下にある。

江刺平野東部には落合I(15)や宮地遺跡(16)がある。これらの遺跡では住居跡を含めた多くの遺構が検出されている。どちらも輦轔痕のある土器を中心とした出土状況で、落合I遺跡は9世紀後半から10世紀にかけて、宮地遺跡は、若干9世紀前半の住居跡を含むが、やはり10世紀前後に遺構が増加する様子が伺え、その他周辺の状況などから、当期の大きな集落があったことを想起させる。宮地II遺跡検出の焼土遺構から出土した灰釉陶器は、10世紀前半の東濃窯・大原2号様式に位置づ

けられ注目されている。その他では、北上川沿いに祭祀跡として登録されている阿弥陀堂跡(17)や沼尻遺跡(18)などがある。

江刺平野北部の中島(19)・鶴羽衣(20)・鶴羽衣台(21)・瀬谷子(22)・谷地遺跡(23)は縄文土器の出土はあるものの古代の遺構・遺物が中心となる。近傍には古代の古窯である瀬谷子古窯群(24)がある。中島遺跡では土師器・須恵器の他に瓦片が出土しており、この区域の様相をよく表している。谷地遺跡では9世紀後半から10世紀前半の住居跡が検出されており、出土した須恵器の中には底部に刻字のある杯があり、瀬谷子窯の工人との関わりを指摘されている。瀬谷子遺跡では碗に転用されたとおもわれる瓦なども採集されている。古代ではないが鶴羽衣台遺跡では瓦の他に明錢「宣徳通寶」が出土しており、比較的流通が少なかった古銭が境遺跡にも出土していることは注目に値する。

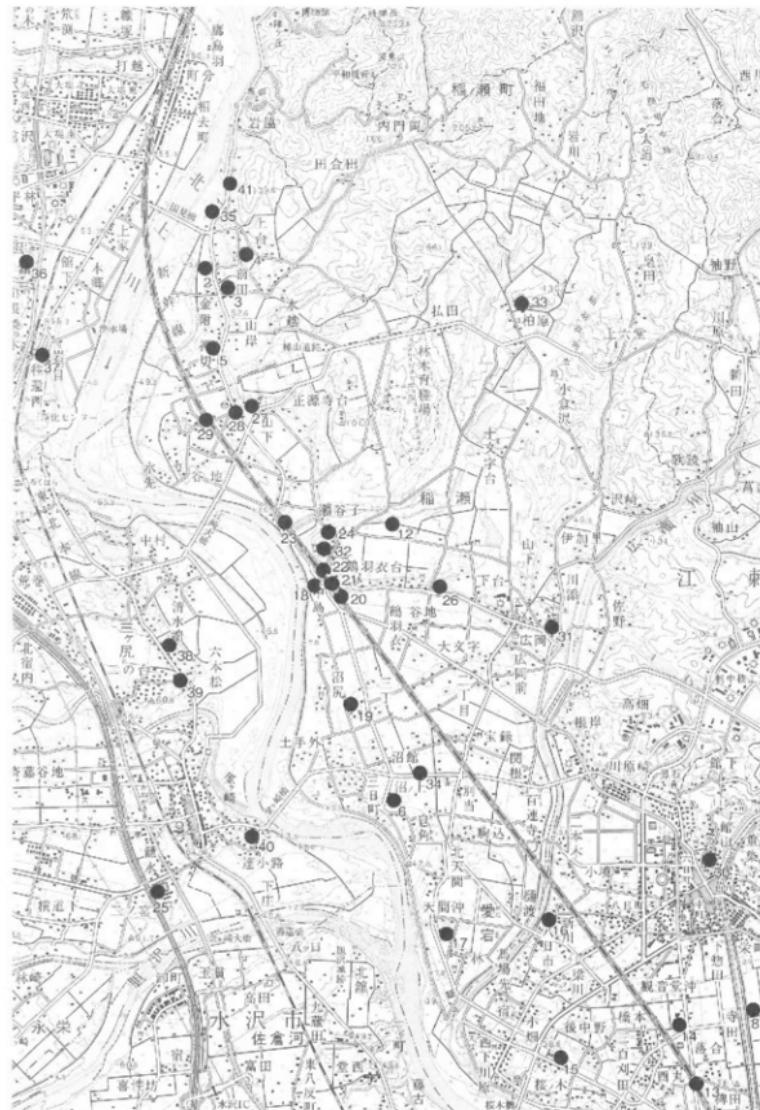
これまで見たとおり、古代の遺跡は江刺平野や胆沢城近隣に集中しているが、境遺跡のある北上市稻瀬町には発掘例は少ない傾向がある。「古代の重要な遺跡に囲まれた場所に立地するが、自然堤防という低い土地が当時嫌われたのか」(金子 2006)もしさず、奈良時代の遺物出土は特に希薄になっている。金附遺跡では10世紀初頭前後の土坑や焼土遺構が、境遺跡では10世紀初頭前後の住居跡が検出されているが、これらの集落は小規模集落の拡散化(伊藤 1998)という動きの中で生まれてきたものであろうと指摘されている。(金子 2006)

古代後期、前九年の役にまつわる遺跡もあり、最も有名なのが対岸にある鳥海柵(25)である。また江刺市稻瀬町にある鶴羽衣柵(26)は、「陸奥史記」に前九年の役で源氏・清原連合軍が、安倍氏が撃った「鶴脛・比与鳥」の二柵を破ったとみえる鶴脛柵擬定地にされている。また、西方の白幡城(32)は藤原泰衡が源頼朝に追討された後、泰衡の妻が残党を率いて撃ったところといい、境遺跡の南西にある兵部館柵(27)は鶴脛柵に関連する柵跡とする説がある。これらの柵を北にたどると国見山廃寺に向かう。その国見山廃寺は北上市内門岡地区にある。昭和13年からの発掘調査において、古代の大規模な山岳伽藍跡であることが確認され、天安元年(857)定願寺とされた極楽寺跡と考えられている。平泉以前の10～12世紀に最盛期を誇ったらしい。その他、境遺跡の南方には古代の土器を出土させる山下道跡(28)と月日神社前遺跡(29)などが登録されている。

中世では、館跡は江刺平野北部丘陵地と北上川右岸に比較的多く分布する。岩谷堂城(30)深山古館(31)、白幡城(32)、柏原館(33)などほとんどが丘陵地に位置するが、沼館(34)は低地にある。同じように低地に位置する館跡としては南に駒込遺跡があり、この2つの館跡の存在は、境遺跡検出遺構である駒跡の性格を考える上で大いに参考となる。対岸には相去城(36)・岩の日館(37)・丸子館跡(38)・花館(39)・金ヶ崎城(40)などがあるが、稻瀬町(北上市)では岡版北側、北上川左岸沿いの金比羅神社境内一帯に斎羽場城跡(35)がある。天正年間(1573～1592)及川若狭吉種の居城と云われる。金附遺跡で中世末期のものと思われる土坑墓が副葬鏡を伴い3基検出されている。また、遺物では明錢(永楽通寶他)や常滑焼きの破片も出土した。

その他では岩脇遺跡(41)で塚2基、火葬墓4基、土坑墓41基などが検出されており、修驗山伏・族累代墓地と推定されている。北上市黒岩には平安時代後期の白山寺跡があり、対岸の相去町には白山神社、北上稻瀬町低地には同神社の小さなほこらがある。前述の阿弥陀堂跡(17)の存在を含めて、江刺平野からこの近辺は古代から近代にかけて修験者の盛んな活動があったことを想起させる。

(文献 表1参照)



第4図 周辺の遺跡図 (1:50000 北上)

第1表 周辺の遺跡1

番号	遺跡名	主な時代	主な遺構・出土遺物	文献
1	樺山	縄文	縄文時代前～後期の住居跡 中期配石遺構	岩手県地名辞典
2	金附	縄文・生	縄文時代晩期末～弥生時代前期の捨て場跡・石器製作社跡	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第482集
3	相田	縄文・生	晩期末から弥生前期土器・石刀・独鉗石	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第482集から抜粋
4	安楽寺	縄文・弥生・古代	縄文弥生土器・土師器・須恵器	岩手県文化財調査報告書岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成15年度)
5	境	縄文・弥生・古代・中世	本文	本報告
6	沼の上	弥生	橋本式土器・常磐式土器	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第5集
7	垂Ⅱ	弥生・古	古代整穴住居跡4棟ほか、弥生中期・後期土器	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第8集
8	反町下層	縄文・生	整穴住居跡11棟(縄文3弥生7古墳2)・土坑・水田跡16枚・大洞B式・弥生時代中期土器	岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第27集 平成12年度市内遺跡発掘調査報告書
9	常磐広町	弥生・古	弥生時代後期 常磐式土器・アメリカ式石錐・管玉	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
10	橋本	弥生	弥生時代中期 橋本式土器・円筒状土器製品・土偶・石鏡・尖頭器・石錐・不定形石器・石核	岩手県立博物館研究報告第10・11号
11	川岸場Ⅱ	縄文・弥生・古代	縄文時代晩期住居跡4棟・埋設土器・近世建築跡など、弥生時代前・中期土器・石器・石製品	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第317集
12	福瀬古墳群	不明	壙土塁郭	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
13	後中野	古	畝状遺構・土師器・須恵器・鉄器・石器	江刺市埋蔵文化財報告書第14集市内遺跡発掘調査報告書[後中野遺跡・愛宕梁川遺跡]
14	新川Ⅲ	古	整穴住居跡4棟・握立柱建物跡・溝跡・烟跡・土師器・須恵器	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書
15	落合Ⅰ	弥生・古	平安時代整穴住居跡6棟他・土師器・須恵器・弥生時代中期土器・石器	岩手県文化財調査報告書第33集東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書I
16	宮地	古	整穴住居跡・握立柱建物跡・土坑・溝跡・土師器・須恵器・須恵系土器・陶器・鉄製品・古鏡	江刺市埋蔵文化財報告書第21集 宮地Ⅱ遺跡発掘調査報告書
17	阿弥陀堂	古	祭祀跡・石鏡・石匙・磨製石斧・管玉・曲玉・布目瓦・須恵器	江刺市埋蔵文化財報告書第33集 大文字遺跡 表1から抜粋
18	中島	古	土壘・土師器・須恵器・風字形鏡・鬼瓦片・布目瓦	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表
19	沼尻	古	八陸鍾・軒瓦・汁器・彷彿鏡	江刺市埋蔵文化財報告書第33集 大文字遺跡 表1から抜粋
20	鶴羽衣	古	平安時代の整穴住居跡2棟・須恵器・土師器・高台付坏・土鈴	岩手県文化財調査報告書第33集東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書I
21	鶴羽衣台	古	溝跡・土坑・縄文弥生土器片・石器・須恵器・瓦片・古錢	岩手県文化財調査報告書第33集東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書I
22	瀬谷子	古	集石遺構・大木10式土器・大洞C2式土器・石器・瓦	岩手県文化財調査報告書第33集東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書I
23	谷地	古	平安時代の整穴住居跡・溝跡・柱穴状土坑・土師器・須恵器	岩手県文化財調査報告書第33集東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書I

第1表 周辺の遺跡2

番号	遺跡名	主な時代	主な遺構・出土遺物	文献
24	瀬谷子古窯群	古代	窯跡推定200基を超える県内最大の生産遺跡	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
25	鳥海橋	古代	城郭跡 郭・堀、土師器・須恵器	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
26	鶴羽衣櫛	古代	縄文晚期土器 石刀	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
27	兵部館櫛	縄古文・代	縄文土器・須恵器	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
28	山下	縄古文・代	土師器	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
29	日月神社前	古代	須恵器	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
30	岩谷堂城	古代・中世	城郭跡 縄文土器・土師器・須恵器・陶器・石刀・石斧	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
31	深山古館	中世	縄文土器・古代土器	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
32	白幡城	中世	縄文土器 須恵器 石斧 石槍 石匙	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
33	柏原館	中世	城郭跡	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
34	沼館	中世	跡跡 縄文土器・剥片	江刺市埋蔵文化財報告書第33集 大文字跡 表1から抜粋
35	齊羽場城	中世	城郭跡 一部堀跡	岩手県中世城館跡 分布調査報告書岩手県教育委員会 1986
36	相去城	中世	城郭跡 主郭・土塁・空堀・腰郭	岩手県中世城館跡 分布調査報告書岩手県教育委員会 1986
37	岩の目館	中世	城郭跡 単郭式 堀切跡	岩手県中世城館跡 分布調査報告書岩手県教育委員会 1986
38	丸子館跡	中世	城郭跡 堀・土塁・平場・郭	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
39	花館	中世	城郭跡 堀	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
40	金ヶ崎城	中世	城郭跡 堀・郭	江刺市埋蔵文化財報告書第31集 新川Ⅲ遺跡発掘調査報告書 周辺の主要遺跡表抜粋
41	岩脇	縄文・近世	縄文時代土坑2基・弥生土器・土師器・須恵器	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第235集

III 調査と整理の方法

1 野外調査の方法(平成18年度調査)

(1) グリッドの設定(第6図)

調査区は北西から南東に約25mの幅を持って、総延長250mに及ぶ長さがある。平成18年度調査は調査区域の南側であるが、次年度の調査を考え調査区全域を囲む形でグリッドの設定を行った。その全域は東西南北200mの正方形で囲めることから、北西隅に起点を設け50mずつ4等分し北西隅から東にI・II・III・IV、南にA・B・C・Dと区分した。50m四方の大グリッドが16個できたことになる。その大グリッドはそれぞれを5m毎に10等分し算用数字の1～10、ローマ字のa～jの小グリッドとした。大グリッド内に100個の小グリッドができる、これで調査区内は5m四方の正方形で1600個に分けたことになる。そして、それぞれのグリッド名は北西隅の杭であらわすこととした。北西隅の起点となる杭名はIA 1a、南東端のグリッドはIV D10 jとなる。

平成18年度調査では2点の基準点を設置し、世界測地形による座標値を与えている。その数値は以下の通りである。()は第6図に示している略号である。

基準点1 (18基1) X = -84495.000m Y = 24840.000m

基準点2 (18基2) X = -84450.000m Y = 28810.000m

標高は以下の通りである。

基準点1 50.058m 基準点2 50.176m

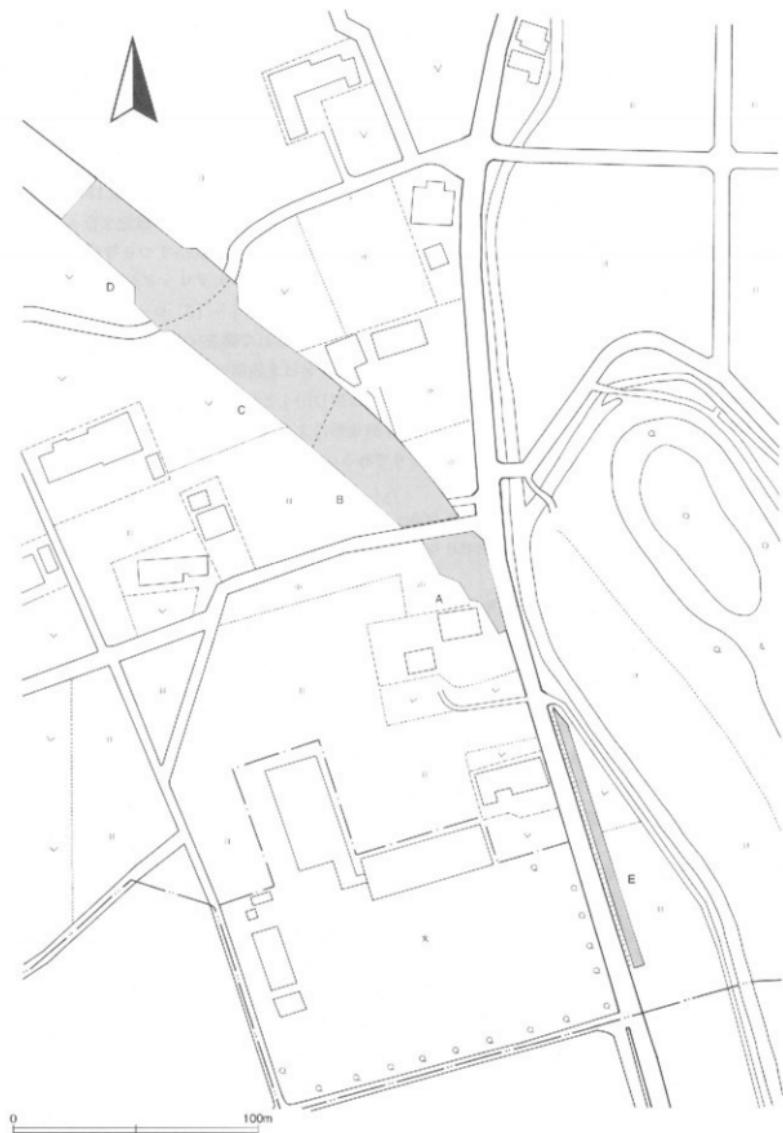
(2) 粗掘りと精査

まずは数ヵ所に2×4m程度のトレンチを設定し、土層と遺物分布の状況を知るために慎重に深掘りをした。その時出土した遺物はトレンチ番号を明記し、岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘結果から得られていた基本層序を参考にして、記名し取り上げた。その結果、北側調査区では表土が薄く、重機での粗掘りは、検出面まで1mほどの表土が載っていることが分かっていた南側調査区から進めた。

検出は面ごとに鋤籠で丁寧に剥ぎ、プランを確定させた。不鮮明な部分はトレンチを設定して断面による観察を行っている。登録後、精査を行った。

精査は、基本的には竪穴住居跡は四分法、土坑等は二分法による埋土の観察を行った。溝や堀に関しては、適宜にセクションベルトを設定して掘り進めた。精査終了後、遺構ごとの実測と写真撮影をし、その面全体の写真撮影した後に、次の面までの粗掘りを重機で行った。南側調査区はこのような作業を3回繰り返したことになる。

遺物の取り上げについては、遺構内では出土層位を明記して慎重に取り上げたが、底面(住居跡出土のものは床面)出土のものはできるだけ平面図に載せるように心がけた。遺構外出土遺物は、グリッド単位で層位を記入して取り上げたが、位置が明確でないものは区域名となっているものもある。また出土層位については、調査初段階において把握が困難で、記名後に変更しているものもあり、その詳細については VI 出土遺物 1 遺物出土概要で明記している。



第5図 周辺の地形と調査区

(3) 遺構の記録

調査区域は南側市道を挟んで南北に分かれている。調査員も実際2つに分かれて活動しており、検出についてはそれぞれに進めている。そこで混乱を避けるために、遺構名は分断することにした。南側調査区で検出された遺構は検出順に南側調査区1号・2号、北側調査区で検出された遺構は北側調査区1号・2号と呼ぶことにした。番号は遺構種別ごとの検出順に連番となっている。柱穴状土坑のみPPを略号として使用している。北側調査区で検出された遺構で1号溝が重複したことから、1次面で検出された溝についてはA 1号溝とした。

それぞれの断面図の作成は、遺構の上面に水糸を張り、基点を設定して行った。平面図については遺り方測量と考えたが、実測者の人数と経験また遺構の大きさなどから断念し、すべてトータルステーションによる実測とした。縮尺については20分の1を原則にしたが、範囲や遺構の性格に応じて対応した。

写真では、構造の段階において撮影を行った。使用したカメラは35mmモノクロ、35mmカラーリバーサル、 6×7 cm判モノクロ、デジタルカメラの4機種である。基本的に35mmとデジタルカメラは全ての遺構について撮影したが、 6×7 cmについては省略することもあった。空中写真撮影については、調査期間と天候の関係から平成18年度においては行わなかった。

2 野外調査の方法(平成19年度調査)

(1) グリッドの設定

グリッドは平成18年度の通りで、新たに南と東に大グリッドを100mずつ延長した。

平成19年度調査でも新たに2点の基準点を設置し、世界測地形による座標値を与えている。その数値は以下の通りである。

基準点1 (19基1) X = -84350.000m Y = 24700.000m

基準点2 (19基2) X = -84350.000m Y = 24889.000m

標高は以下の通りである。

基準点1 49.481m 基準点2 50.403m

(2) 粗掘りと精査

平成18年度では調査区中央部の2面までの精査を終了させていることから、平成19年度には前年度に残した区域の3面検出から行った。他の区域は前年度にある程度土層を把握できていたことから数カ所試掘トレンチを設定したのみで、重機での表土剥ぎを行っている。

検出や精査の方法については平成18年度と変わらない。平成19年度に新たに検出された配石遺構では礫の分布状況と礫を除いた状況での平面図、埋土断面と礫下の掘り方の断面図を記録したが、1基の配石遺構は礫の数が非常に多いことと、終了期間が迫っていたことなどから依託業務とした。

3 室内整理の方法

室内整理作業については、当埋蔵文化財センターの「平成16年度室内整理及び発掘調査報告書に関する改善検討委員会」室内整理作業検討チーム（金子佐知子ほか）によって平成17年3月にまとめ

られた資料を基準として行った。

(1) 遺構図面・図版

遺構図面は点検・修正の後、必要に応じて第2原図を作成した。挿図中の縮尺については住居跡や土坑また焼上や敷石遺構は平面図・断面図ともに40分の1を基本としている。また、堀跡や溝跡また柱穴状土坑等については、平面図は80分の1～100分の1、断面図では40分の1～50分の1となり、同図版上で必ずしも一致しておらず任意の縮尺についてはスケールを付してある。なお、使用したスクリーン・トーンは図版に明記している。土層注記は基本層位にローマ数字を、遺構の埋上にはアラビア数字を用いた。

(2) 遺物の処理

出土した土器や石器などの遺物は、水洗して乾燥させ、出土状況に合わせて仕分けをして接合・復元の作業を実施した。土器片の記名は、接合した土器や土製品は、同じ出土状況のものに限り1ヶ所とし、他は全点注記した。

登録した遺物は写真撮影を行い、実測図・拓影図・拓影断面図を作成し、トレースして掲載した。遺物の掲載基準については以下の通りである。

土器については縄文時代晩期末葉から弥生時代後期にかけてのものが多いことから、器形が推測できるものは勿論、口縁部、底部は粗製土器でも掲載することとした。

石器・石製品は、石器製作祉に関わりがありそうな出土状況のために、製品においてはすべて、また未製品とおもわれるものについても極力掲載することとした。石核や剥片・フレークについては南側包含層においては石質鑑定をすべて行い、実測や写真撮影は代表的なものを選択して掲載した。

その他の出土遺物（占鉢）は実測と写真・写真のみに分かれるが、全て掲載している。

(3) 遺物図版

遺構内出土遺物は遺構順に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。挿図中の縮尺は2分の1を基本としているが、任意の縮尺についてはスケールを付してある。写真図版のみの掲載となっている遺物に関しては、遺物観察表に明記している。

(4) 写真図版

遺構写真是各遺構の平面・断面を中心に、堅穴住居跡は竪や遺物出土状況等も合わせて掲載した。遺物写真では立体土器は3分の1、土器破片や石器その他は2分の1を基本としている。

4 調査区および遺構名の変更

(1) 調査区の呼び名の統一(第5図)

発掘調査は2年間にわたった。平成18年度調査では調査区は南側の市道で区切られていた。よって南側調査区・北側調査区という形でそれぞれ遺構名を付している。平成19年度調査区は南北に長く、市道や県道によって隔てられる。また残土置き場が視界を遮り、前年度精査した大型の堀が横切る形となり、調査員2名が離れて調査を担当せざるを得なかった。そこで検出は区域ごとに分け、遺構名は区域ごとの通番で命名することとし、前年度に古代面まで精査終了した堀跡から南側までをB区、

堀から市道までをC区、市道から調査区北隅までをD区、南側の県道脇調査区をE区としている。よって平成18年度北側調査区は平成19年度のB区と重なり、平成18年北側調査区1号竪穴住居跡と平成19年度B1号竪穴住居跡は同じ遺構となる。

そこで、2年間をまとめた報告書を作成するに当たって、混乱を避けるために平成18年度南側調査区をA区、北側調査区をB区と一括する。

まとめるとき調査区を横切る2本の市道そして平成18年に検出した大型の溝をそれぞれ境にして南北から北にA～D区、そして離れ小島になっている県道脇をE区とする。(第5図参照)

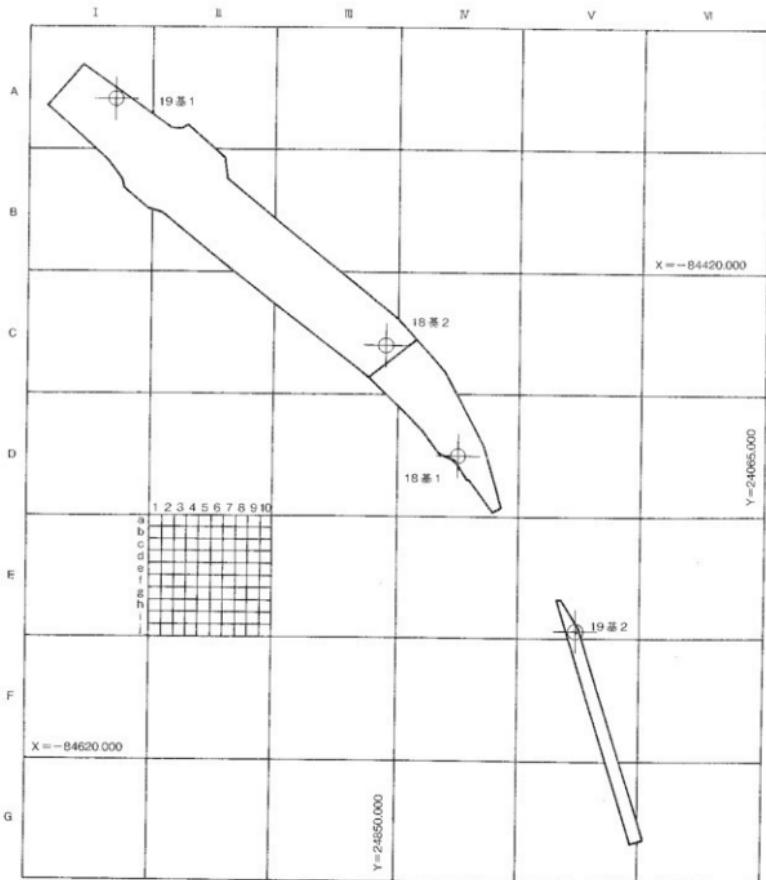
(2) 遺構名の統一と変更

遺構名は調査区ごとに、遺構の種類ごとに区域名を冠につけて連番でついている。調査が2年間に亘ったことやそれぞれの年度で調査区を分断して調査したために、同じ番号が多く使われる(1号がやたら多い)こととなった。そこで2年間を統一して共通の略語を用い、野外での精査や室内での整理でボツとなつた遺構を除いて、可能な限り新しいものから順に01～の連番を付すことにした。各遺構種別名は以下の通りである。

竪穴住居跡	SI	土坑	SK
溝跡	SD	焼土・炭化物集中	SX

なお、大型の溝は、冠をつけずに堀とした。また、配石遺構と敷石遺構も冠をつけない。畝間状遺構についてはそのまま、柱穴状土坑については調査区名を入れてPPを用いて表す。

4 調査区および施設名の変更



第6図 グリッド配置図

第2表 遺構名変更表

竪穴住居跡	旧遺構名
SI01	B 1号竪穴住居跡
SI02	B 7号竪穴住居跡
SI03	C 3号竪穴住居跡
SI04	D 1号竪穴住居跡
SI05	D 2号竪穴住居跡
SI06	D 4号竪穴住居跡
SI07	D 6号竪穴住居跡
SI08	D 7号竪穴住居跡
SI09	B 2号竪穴住居跡
SI10	B 4号竪穴住居跡
SI11	B 5号竪穴住居跡
SI12	C 1号竪穴住居跡
SI13	C 2号竪穴住居跡

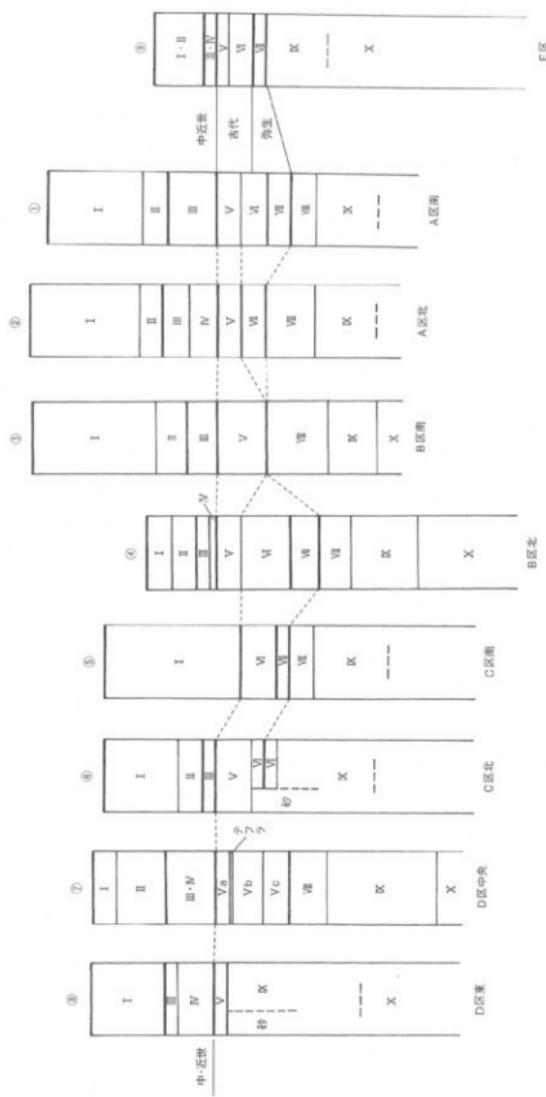
その他	旧遺構名
SX01	18年北側調査区1号焼土
SX02	B 1号焼土
SX03	B 2号炭化物範囲
SX04	C 2号炭化物範囲

溝	旧遺構名
SD01	南側調査区1号溝
SD02	南側調査区2号溝
SD03	北側調査区A 1号溝
SD04	南側調査区3号溝
SD05	南側調査区4号溝
SD06	北側調査区1号溝
SD07	北側調査区2号溝
SD08	北側調査区3号溝
SD09	北側調査区4号溝
SD10	E 1号溝
SD11	D 1号溝
SD12	D 3号溝
SD13	C 1号溝

土坑	旧遺構名	土坑	旧遺構名
SK01	南側調査区1号土坑	SK30	C 2号土坑
SK02	南側調査区2号土坑	SK31	C 3号土坑
SK03	D 1号土坑	SK32	C 4号土坑
SK04	D 2号土坑	SK33	C 5号土坑
SK05	D 3号土坑	SK34	C 6号土坑
SK06	D 5号土坑	SK35	C 7号土坑
SK07	D 6号土坑	SK36	C 8号土坑
SK08	D 7号土坑	SK37	C 9号土坑
SK09	D 8号土坑	SK38	C11号土坑
SK10	D 9号土坑	SK39	C12号土坑
SK11	B 1号土坑	SK40	C13号土坑
SK12	B 2号土坑	SK41	C14号土坑
SK13	B 3号土坑	SK42	C15号土坑
SK14	B 4号土坑	SK43	C17号土坑
SK15	B 6号土坑	SK44	C18号土坑
SK16	B 7号土坑	SK45	C19号土坑
SK17	B 8号土坑	SK46	C20号土坑
SK18	B23号土坑	SK47	C21号土坑
SK19	B24号土坑	SK48	C22号土坑
SK20	B25号土坑	SK49	C23号土坑
SK21	B26号土坑	SK50	C24号土坑
SK22	B29号土坑	SK51	C25号土坑
SK23	B31号土坑	SK52	C26号土坑
SK24	B33号土坑	SK53	C27号土坑
SK25	B34号土坑	SK54	C28号土坑
SK26	B36号土坑	SK55	C29号土坑
SK27	B39号土坑	SK56	C30号土坑
SK28	B41号土坑	SK57	C31号土坑
SK29	C 1号土坑	SK58	C33号土坑

堀	旧遺構名	堀	旧遺構名
1号堀跡	南側調査区1号堀	4号堀跡	D 1号堀
2号堀跡	南側調査区2号堀	5号堀跡	E 1号堀
3号堀跡	北側調査区1号堀 B 1号堀		

配石遺構	旧遺構名	配石遺構	旧遺構名
1号配石遺構	D 1号配石	3号配石遺構	D 3号配石
2号配石遺構	D 2号配石	4号配石遺構	C 1号配石



第7図 基本層序柱状図

IV 基本層序と検出面

1 基本層序

(1) 基本層序(第7図 写真図版3・4)

2年間の調査区域は北西部から南東部にかけて幅約25m、距離約250mにわたる。平成18年度はそのうちの南東側を調査した。地域によって違いが多くみられるが、基本層序として最上位の表土・盛土層から10層を確認できた。平成19年度も上記10層を元に調査をしている。

※は平成19年度調査で明確になった点を補足という形で記している。

I層 表土・盛土(20~150cm)

現況は更地になっているところが多いが、南側は以前畑として利用されていたらしい。北側は民家があったところであり、搅乱が激しい。

II層 旧耕作土(20cm前後)

南側に厚く堆積する。市道寄りに大きな水路跡のような断面が確認された。

III層 褐色土 洪水堆積層1 粒の粗い砂質土(10~50cm)

下位に酸化鉄層を形成しているところもある。

IV層 やや明るい褐色土 洪水堆積層2 粒の細かい砂質土(5~10cm)

柱穴状土坑や堀の埋土上位に堆積が確認できる。

※最北部では褐色砂質土の他に黒褐色の砂質土が形成されている。III層とIV層の間にはさまる可能性もある。また、その下V層の上に黄褐色のシルトがあり、最北部検出堀の壁となる。
※一部地域に小礫層が帶状に混入する。

V層 暗褐色から褐色土層(30~50cm)

IV層とVI層に挟まれた層と考えれば最低でも3層に分層できる。

a 最も黒みの強い暗褐色土。

b 極暗褐色から褐色砂質土。北側では古代の住居跡埋土がこれに当たる

c VI層上にある粘土質の褐色土。VI層と区別がむずかしい。

※最北部ではVa層の下部にテフラ状の灰褐色砂質シルトが混入する。

VI層 褐色の砂質~黄褐色粘土質土層(50cm前後)

下位は粘土質になる。2層もしくは3層に分層できる。

a 砂質の褐色土。弥生時代中期から後期の土器が出土する

b 暗褐色土。南側で確認できたが、北側でははっきりとしない。弥生時代前期か

c VII層上にある粘土質の黄褐色土。

VII層 暗褐色砂質または粘土質層(0~40cm)

上位に黒褐色土が筋状に入り込む場合がある。炭化物が比較的多く混入する。

VIII層 黄褐色の粘土質層(未確認部分もあるが50cmを測る区域もある。)

遺物は確認できない。

IX層 灰褐色の沙 洪水堆積層3 (非常に厚い)

X層との境に酸化鉄層を形成しているようである。

※深いところでは1mの形成を見る。またV層と同レベルでもき出しになる例も見られた。

X層 砂疊層

非常に深く、面として確認できたのは一部の区域のみである。

(2) 各区域の層位の特色(第5・7図)

ここではA～E区まで①～⑨に大きく分割し、それぞれの層位の特色を見る。平成18年度に作成した基本層序によっているが、平成19年度に新しく確認した層のうち、I～Xに入るかどうか明確にできなかったものについてはそのまま記している。以下の①～⑨は第7図と合わせており、また図版内の点線は深さを確認できなかったことを示している。

① MD 5～8 f～i グリッド付近 A区3面包含層1検出区域

I層の盛り土が非常に厚く1m以上堆積し、その下はほぼ基本層序に準じる。Ⅲ層がやや厚く堆積し、古代層(V層)は認められるが、遺物は少ない。Ⅶ層上面に炭化物を多く含む黒褐色土が完形に近い土器を伴い出現する。このⅦ層は北西側から流れ込んでいるかのような様相を示していた。

② MD 3～7・c～e グリッド付近 A区2面堀跡検出区域

中世・古代面であるIV・V層の堆積が目立つ。またその下に見える褐色土層は無遺物層で厚く堆積するが、遺物の出土は少ないことからⅧ層(最下層)とする。洪水堆積層と思われる黒色の薄いラインがⅦ層にみられ、縄文晩期の土器が出土した。北東側に向かって沢状に落ち込んでいる様子が見える。

③ III C10 i・j MD 1～4・g～j グリッド付近 B区南側2面敷石遺構検出区域

Ⅲ層とV層の落ち込みが顕著にみられる区域で、沢状に窪んでいる様子がうかがえる。北側に存在するVI層や縄文土器の出土するⅦ層は、V層やⅢ層の落ち込みに削られてしまった觀がある。また、現代(道路や水路)の攪乱が激しい。

④ III C 5～10・c～h グリッド付近 平成19年度B区北側遺構密集地区

南側に見えていたⅢ・IV層は北側に向かって消滅していく。特に住居跡の検出された中心部はII層の下がすぐにV層になる。調査区全体の中で最も標高の高い地域で、段丘面となる。

V層から下に多くの遺物を包含する。Ⅶ層の砂は調査区の中で比較的高いレベルで出現する。

⑤ III C 2～6・c～e グリッド付近 平成19年度C区南側

V層より上面は削平されているようである。IV層は大きな溝に埋上となっているのが確認されるのみとなる。II層の旧耕作土下や住宅基盤の下褐色土はVI層となるが、B区に比較すれば土器の出土は少ない。その下のⅦ層暗褐色土は薄いようであるが、遺構に埋上となって現れる。Ⅶ層の黄褐色粘土の堆積も薄く、Ⅷ層砂の厚さは不明である。

⑥ II B 3～8・e～h グリッド付近 平成19年度C区北側(旧河道を除く)

旧河道を形成する要因からか、最も複雑な土の堆積状況を示す区域である。

北西に向かってゆるやかに下がっている地形のためか、C区南側でなかったV層がやや厚く堆積

している。しかし同じように旧地形が下がる平成18年度調査区に日立ったⅢ・Ⅳ層はここでは見あたらない。旧河道周辺には粒の粗い砂（浜砂のよう）や小砾を含んだ層が入り込んでくる。砂は一部に限られているが、V層の下に入り込む可能性が高い。V層上の疊層は配石遺構の埋土の一部となっている。

⑦ IA 2～8・d～h グリッド付近 平成19年度D区中央部

I層とII層が搅乱（道路付設のための礫や水路・電信柱）を伴って厚く堆積し、その下に薄く黒褐色土がある。堀の埋土に入り込むので、IV層の一部なのかも知れない。その下に洪水堆積状の小疊を伴う層や黄褐色の砂層がある。その上下関係は把握できなかった。次にV層があり、基本層序通り3つに分かれる。上位にはテフラ状の灰褐色砂質シルトが確認された。VI・VII層は形成されていない。VIII層は東側で厚く西側で薄い。西側の断面でIX層の厚さを観測できた。IX層は大小様々に粒を変え、幾筋も堆積を繰り返しながら1m以上ある。その下は疊層（X層）で湧水がひどい。

⑧ IA 8i～IB 2 b グリッド付近 平成19年度D区東道路下）

水路や排水パイプなどの施設があるために、トレンチで確認のみとなった。道路下の基盤層が厚く、その下にIV層褐色砂質土とV層の暗褐色土がある。VI・VII層はなく、粗い砂が深く堆積している様子が見えた。

⑨ VE～VG グリッド付近 平成19年度E区

調査区が狭く、湧水がひどいためにⅤ層以下は確認できなかった。表土I層・II層の下に暗褐色土があり、これをVa層と判断した。ただし明確なテフラ状の灰褐色砂質シルトは確認できなかつた。その下に褐色土があるが、土師器・須恵器・弥生土器が混在しており、VbとVI層と考えられる。またやや黒みがかっている部分もあり、若干古めの土器が出土することから、VII層も存在すると判断できる。全体的にV～VII層にかけては薄く形成されているだけという観がある。このV層以下の堆積状況は、厚さは異なるが平成18年度の南側調査区（A区）に似る。

2 遺物出土状況と検出面

（1） 遺物の出土状況

基本層序で示したとおり、北上川に近い河岸段丘上に位置していることから、非常に複雑な堆積状況を示している。また、似通った土質を持つ層があつたり、あるはずの層がなかつたり判断に苦しんだが、上記したⅢ層以下の層はそれぞれに、次の遺物を包含していると判断した。

Ⅲ・Ⅳ層	近世・中世？
V 層	古代（平安時代）
VI 層	弥生時代
VII 層	縄文時代

Ⅲ層は近世、Ⅳ層は中世の層と区分できるかもしれないが、明確に違った遺物が出土したわけではない。VI層については弥生時代前期から後期に分かれる。VII層については縄文晩期末葉から弥生時代

初頭期の土器を有する層とそれ以前の縄文時代後期の土器を包含する層に分かれるかも知れない。

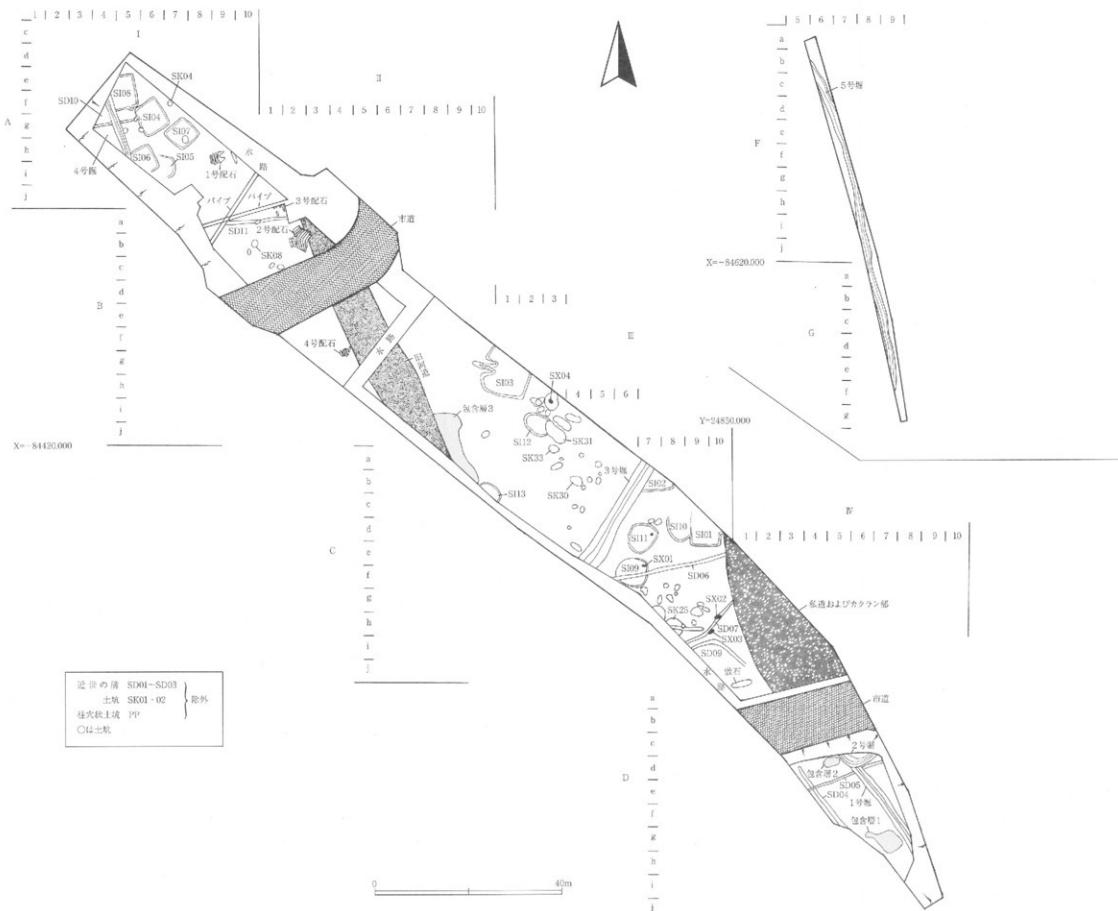
(2) 検出面

非常に土質が難しく、はっきりとした区別が付かない部分があり、検出面の判断は困難を極めたが以下的一面でそれぞれ検出を行った。

第1検出面	近世～中世	IV層下位
第2検出面	古代	V層下位
	弥生時代	VI層下位
第3検出面	縄文時代	VII層下位

第1から第3まで検出できたのは平成18年度南側調査区(A区)のみである。これはIII層IV層が厚く堆積していたからである。他の区域に至っては明確に中世面として捉えられなかった。第2検出面上を中世最終面としてとらえ、柱穴や溝また窓を検出できたのは、B区・D区となる。そのうちB区は古代面V層下位での検出を試みたが、VとVI層はほぼ同質の土で、土師器・須恵器が出土していた区域から、突然弥生土器が出現するといった感じであった。よってV層とVI層の判断が難しい区域ではサブレンチを設置して断面による検出を行っている。そして得たプランは遺物などから判断して古代か弥生時代なのかを判断した。よってB区は第2検出面と弥生面そして最終検出面の3回の検出を行っている。D区は古代面のみの検出である。

C区は弥生時代と縄文時代との明確な境はなく、最終的にはVII層上面で2つの時代の遺構を検出することになった。



第8図 遺構配置図

V 平成18年度の調査・遺構

1 調査の経過と概要

平成18年度は9月19日から同年10月31日までの予定で発掘調査を行った。面積は2400m²である。調査範囲の南側に横断する市道部分と付設する水路部については、調査不可能として手をつけないことにとなった。それによって調査区が2分することとなり、便宜的に市道より南側の590m²を南側調査区、北側残りの1810m²を北側調査区として調査を開始した。調査員2名、登録作業員14名(10月12日3名増員計17名)で予定通り9月19日からのスタートである。

まずは北側調査区でトレントを5ヶ所設定して試掘を行った。南側調査区は県生涯学習文化課の試掘結果から検出面まで1m以上の深さがあるという情報を得ていたため、作業員は南側でトレント掘りを行い、同時に進行で北側に重機を入れて表土除去および試掘を行った。その結果、検出面が2面以上あることが判明し、登録作業員数と調査期間また重機の移動などを考慮し、南側調査区に調査員(木戸口)を専従し、作業員も多めに配備して調査した。北側調査区は遠隔の確認できる面が現れていた区域に限り、南側調査区の重機での表土剥ぎが終わるまで手掘りで広げていった。

10月31日終了予定であったが、検出面が3面あることなどの理由から調査は延長され、県生涯学習文化課や委託者との協議を重ね調整しながら調査は継続され、11月28日終了確認を行った。18年度終了部分は南側調査区の全部(面積590m²)と、北側調査区の南側一部(面積445m²)の1035m²となつた。そして12月4日、今年度分の調査を終了し撤収した。12月5日午前中、埋め戻しのため重機を稼働し全て終了した。

くわしい経過・概要是各調査区に分けて述べる。また、出土遺物は項を変えて述べる。

(1) 南側調査区(A区)

当初の検出面と思われていた暗褐色土(IV層)がひろがった面で、溝状のプランを得た。また、陶磁器片も出土していることから、古代より新しい面であることが分り、第1次検出面とし、下位の暗褐色土が土器などを出土させることから、古代面は暗褐色土を取り除いた面で検出する(第2検出面)とした。第1次面で検出された遺構は、南西から北東に並行して延びる溝2条、土坑1基、畝状(畝間状)遺構1ヶ所である。

精査終了後、IV層を慎重に取り除き、クリーニングした結果、南東部から北西部にかけて延びる溝状のプランを得た。土層断面を観察するため、ベルトを設置し掘り進めた結果、堀であることが判明した。その北にはもう1条の屈曲した堀も検出された。2次面で検出された遺構は、土坑1基、堀に並んだ溝1条、堀と直交する溝1条、薬研堀状にV字状に彫り込まれている堀2条、柱穴列1条、柱穴状土坑32基である。それらの新旧については本文で述べている。

試掘トレントからもう1つ下に暗褐色土層(VII層)があることが分かっていたが、土器を伴うものなのかどうかはっきりしていなかった。しかし堀を掘削中に、壁面で炭化物を作う土器が出土し、包含層があることがわかった。そこで2面精査終了後にVII層上面まで重機で4ヶ所トレントをあけ、調査したところ、縄文時代晚期から弥生時代にかけての包含層2ヶ所を確認した。土器を取り上げながら精査したが、遺構には至らなかった。しかし、ほぼ完形に近いが深鉢や壺などを出土させており、近隣に住居跡などがあることを伺わせた。

その後何ヶ所か深掘りし、無道物層を確認してから埋め戻しを行い終了とした。

(2) 北側調査区(B区)

先に私道の東側部分のトレンチと南寄りの部分で第1次検出を行った。その結果、東側では搅乱層が厚く堆積しており、またV層も大きく落ち込んでいることが分かったので危険を考えて中止した。南寄りの部分で溝1条と畑状(畝間状)遺構1ヶ所を検出した。

北側微高地では4ヶ所のトレンチから土層の様子を観察していたが、土が硬く似たような色調のため、把握できなかった。そこで、県生涯学習文化課の試掘したトレンチを再現することから始めた。非常に搅乱が多く、そのトレンチを探すことに苦労した。やっと再現したトレンチ断面で住居跡の埋土と掘り込み面を確認できたが、平面での検出はむずかしいという判断だけが残った。そこで重機で南側から順にV層上面と思われるところまで剥いで、柱穴状土坑や溝の検出できなかった区域にグリッドに沿ったような形のトレンチを入れ、断面観察で遺構の確認を行った。ある程度下がった状況で土師器等が出土せず、または弥生・縄文土器が出土するところで古代面の終了とした。検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡1棟、焼土1基、溝4条である。

当初、柱穴住居状とした遺構では、精査の結果、土師器ではなく弥生もしくは縄文土器が出土した。(この結果VI層の存在が明るみとなった。)また、複数の土坑が床面から検出されており、遺構か否かの判断は次年度に回した。

最北部は盛土が厚くVI層と考えられる面まで削られていた。盛土を剥ぎ、クリーニングした結果、IV層を埋土とする東西に延びる大きな溝状のプラン(堀)を得、掘削し精査を行った。調査予定だったその北側はコンクリートが厚く、調査不能であった。

一方、延び延びとなっていた畠状遺構の下の古代面の検出は、私道下の水道管移設工事を待たなければならなかつたが、重機で下げる前に手掘りで古代面をあらわし敷石遺構を検出した。

11月14日に水道管移設工事が終わり、中止していた東側のVI層以下の確認と同時に敷石遺構周辺の掘り下げを行つた。荒天が続き、水をポンプで抜きながらの作業であった。この地域は南側調査区検出の堀の予想延長線に当たるために、慎重な精査が望まれた。検出作業は困難を極めたが、深掘りの結果、敷石遺構の市道沿いは旧住宅の跡壁や水路の搅乱が激しい地域であることが判明した。また断面などの判断から南側の堀の延長は見あたらず、また、縄文土器の出土するVI層の存在も確認できなかつた。

検出された遺構のうち柱穴状土坑は数量も多く、まだ検出されることが予想されたために精査せずに次年度へ回すこととなつた。よって18年度の遺構にはならない。

南側引き渡し部分は、適宜にトレンチを設定し深掘りにより遺構の有無を確認しのち、埋め戻しを行い終了とした。中央部の微高地はブルーシートなどで養生し、危険箇所にはロープを張つて次年度の調査に備えた後、終了とした。

2 検出遺構

南側調査区(A区)は3面の調査となった。1面は近世以降、2面は古代から弥生時代にかけて、3面は弥生時代から縄文時代となる。2面から3面に至つては検出方法にばらつき(面でとらえたり、断面で判断したりと多様である。)があるが、1面は信頼性が高い。そこで近世以降と、それ以前の時期に分けて、遺構毎に取り上げる。

《第1面》基本層序IV層下検出遺構

(1) 士 坑

SK 01 土坑(第9図、写真図版5)

〔位置・検出状況〕 IV D 6 e グリッド。検出面は第1面でIV層下位面。全体的に上層が分かりづらいなかで比較的はっきりとしたプランをもって検出された。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。畝間状遺構の並びの中にある。

〔埋土・堆積状況〕 砂質の暗褐色土を中心としている。人為的堆積か。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸の長方形で、長軸121cm、短軸80cmを測る。

〔断面形・深さ〕 畝状で壁は垂直気味にあがる。深さは、西壁で最大28.4cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 近世以降の遺構と考えられる。墓壙だった可能性もある。

(2) 溝 跡

SD 01溝跡(第10図、写真図版5)

〔位置・検出状況〕 IV D 8 g・7.8 h グリッド。調査区の最も南寄りに位置する。検出面は第1面でIV層下位面であるがII層の下(III層上面)から掘り込みがみられた。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。北西約4mにSD 02がほぼ並行して延びる。

〔埋土・堆積状況〕 縮まりのない砂質の黄褐色土を中心とし、下位に水性の堆積物を含む。

〔平面形・規模〕 ほぼ北東から南西に、それぞれ調査区外に延びる。確認された延長は7.10mである。幅は50~70cmで大きな差はない。底面の比高は北と南で10cm程度の差が見られ、北東側が低い。

〔断面形・深さ〕 畝状で壁は緩やかに立ち上がる。深さは、最大でも10cm程度で浅い。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や検出状況から近世以降の遺構と考えられる。

SD 02溝跡(第10図、写真図版5)

〔位置・検出状況〕 IV D 7・8 e ~ g グリッド。検出面は第1面でIV層下位面である。

〔重複・隣接関係〕 遺構のほぼ中心を生文課の試掘トレンチが横切る。南東約4mにSD 01がほぼ並行して延びる。

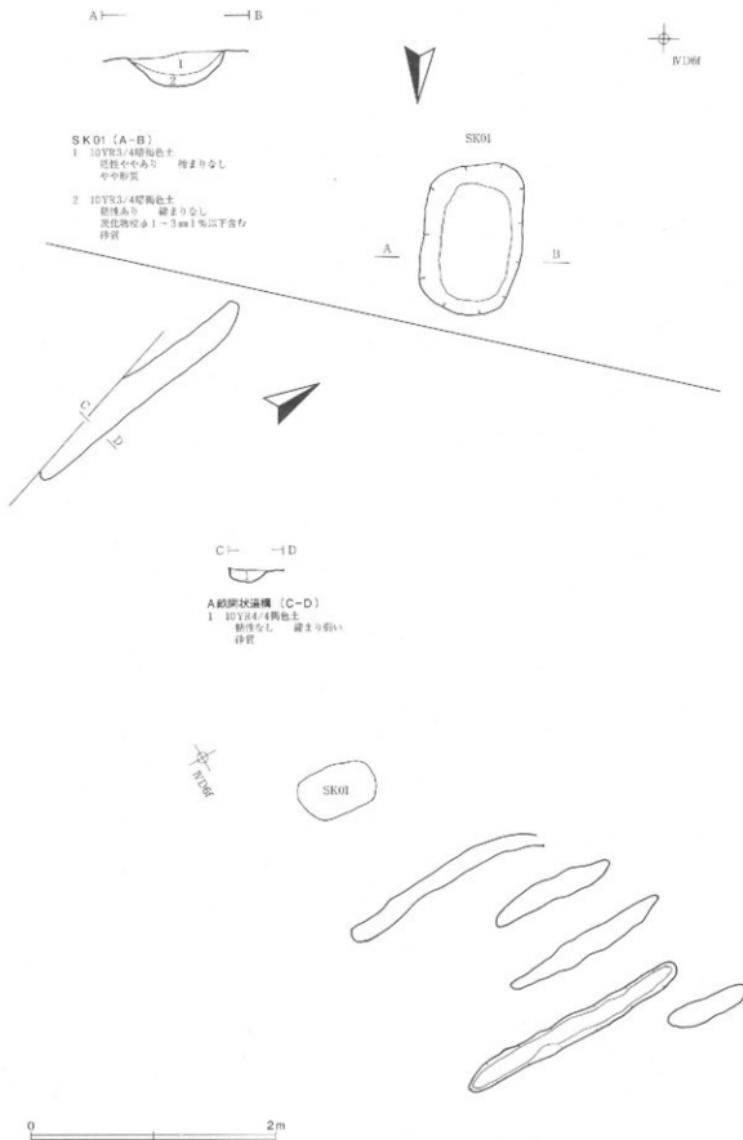
〔埋土・堆積状況〕 縮まりのない砂質の黄褐色土を中心とし、下位に水性の堆積物を含む。

〔平面形・規模〕 ほぼ北東から南西に、それぞれ調査区外に延びる。確認された延長は13mである。幅は南西側で30~50cmであるのに対し北東側でひろがり、最大1.20mを測る。

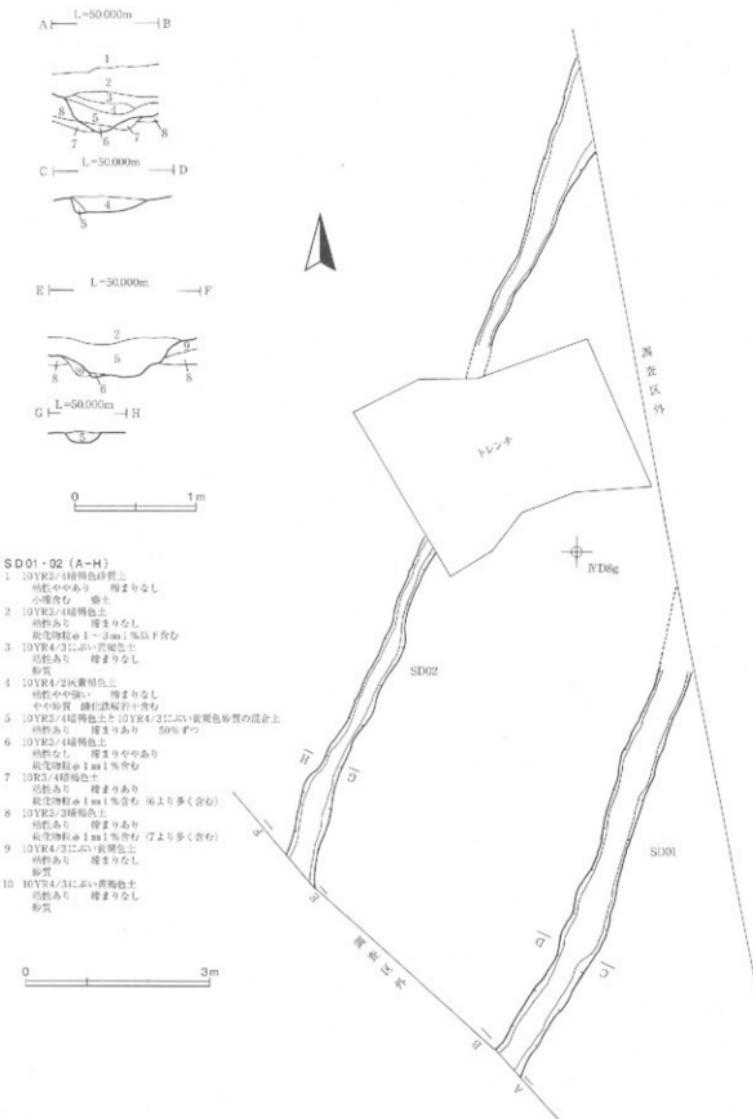
〔断面形・深さ〕 畝状で壁は緩やかに立ち上がる。深さは、南西側で5cm程度であるが北東に行くにつれてやや深くなり、最大では14cmを測る。底面の比高は北と南で30cmの差があり、SD 01と同じく北東よりで低くなっている。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 埋土や検出状況から近世以降の遺構と考えられる



第9図 SK 01 土坑、A区鉛脚状遺構



S D 03溝跡(第11図、写真図版6)

〔位置・検出状況〕 III C10 i・j 及びIV C 1 i・j グリッド。北側調査区の最も南寄りに位置する。検出面は第1面でIV層下位面である。

〔重複・隣接関係〕 北側に烟状(歛間状)遺構がひろがり、一部の歛間を切っている。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのない砂質の黄褐色土の単層で、下位に水性の堆積物を含む。基本層序Ⅲ層からの落ち込みがみられ、V層を掘り込んでいる。

〔平面形・規模〕 ほぼ西から東に延びる。確認された延長は6.60mである。幅は西では34~50cmであるが、東側は約80cmと広くなる。

〔断面形・深さ〕 瓢状で壁は緩やかに立ち上がる。深さは、最大でも10cm程度で浅い。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や検出状況から近世以降の遺構と考えられる。

(3) 歛間状遺構

A歛間状遺構(第9図、写真図版5)

〔位置・検出状況〕 IV D 6 e グリッド付近で検出された。検出面は第1面でIV層下位面である。遺構図では、確認作業のために下げた状況で図として表している。よって残りの悪いもの(浅いもの)は下げすぎてしまった。実際の畠としての面積はやや広いものとなる。

〔重複・隣接関係〕 SK 01周辺にひろがる。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのない砂質の黄褐色土の単層となる。

〔平面形・規模〕 ほぼ北一南に延びる2~3mの長さの溝状の遺構が並んでいる。削平した部分を含めその面積は約20m²と推定される。

〔断面形・深さ〕 瓢状で壁は緩やかに立ち上がる。深さは、南北側で1~5cm程度である。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や検出状況から近世以降の遺構と考えられる

B歛間状遺構(第11図、写真図版6)

〔位置・検出状況〕 IV C 1 j グリッド付近で検出された。検出面は第1面でIV層下位面である。遺構図では、確認作業のために下げた状況で図として表している。よって残存状況の悪いもの(浅いもの)は検出後に消失している。実際の畠としての面積はやや広いものとなる。

〔重複・隣接関係〕 SD 03周辺にひろがる。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのない砂質の黄褐色土の単層となる。

〔平面形・規模〕 ほぼ北東一南西に延びる2~4mの長さの溝状の遺構が並んでいる。削平した部分を含めその面積は約40m²と推定される。

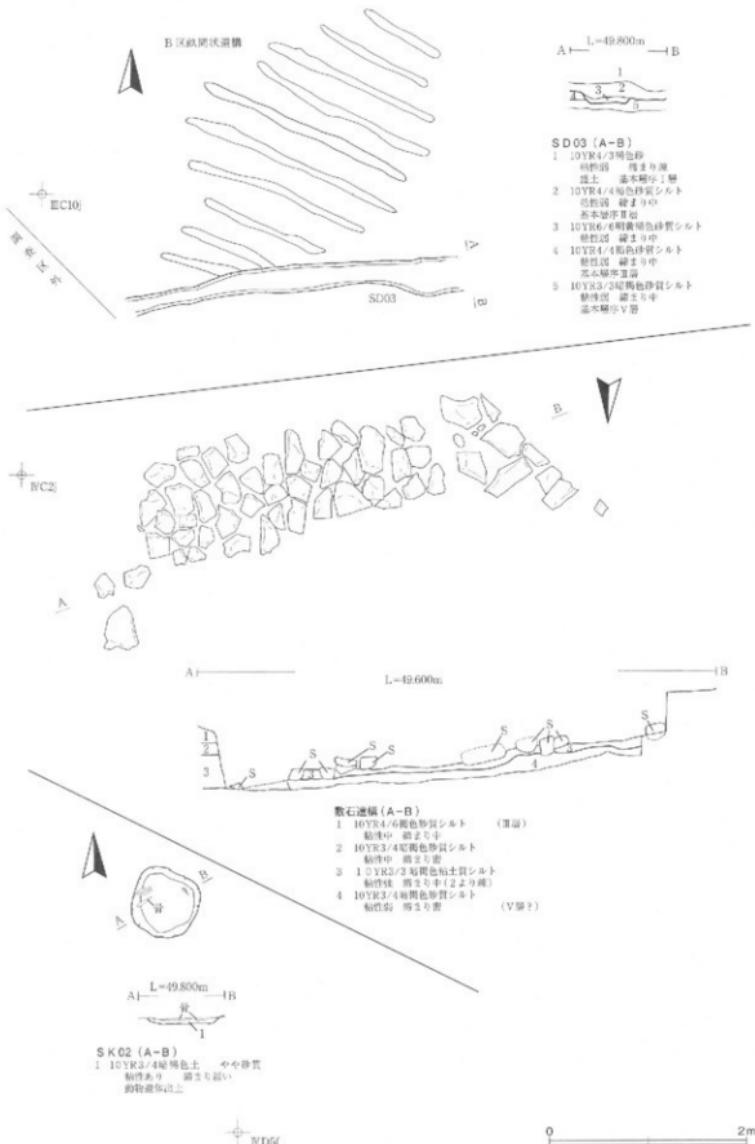
〔断面形・深さ〕 瓢状で壁は緩やかに立ち上がる。深さは、南西側で1~5cm程度である。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や検出状況から近世以降の遺構と考えられる

《第2面》基本層序V層以下検出遺構

V層より下でとらえた遺構は竪穴住居跡1棟、焼上1基、土坑1基、溝跡7条、堀3条、柱穴集中区1箇所、柱穴列1基、敷石遺構1基である。



第 11 図 SD 03 溝跡、B 鉄鋼状遺構、SK 02 土坑、敷石遺構

(1) 壺穴住居跡

S I 01

平成19年度検出遺構でまとめた。

(2) 土坑

S K 02 土坑(第11図、写真図版7)

〔位置・検出状況〕 IV D 4 e グリッド。検出面は第2面でV層下位面。S D 04の延長を調査するために調査区域ぎりぎりまで広げた結果、検出された。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。S D 04の東側、S D 05の北側にそれぞれ隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのない砂質の暗褐色土を中心としている。人為的堆積か。

〔平面形・規模〕 平面形は略円形で、開口部径1.35m～1.50mを測る。

〔断面形・深さ〕 盆状で壁は緩やかに立ち上がる。深さは、10cm程度で浅い。

〔出土遺物〕 墓土上位から動物遺体が出土した。

〔時期〕 2次検出であるが、墓土や検出状況からやや新しい中世～近世の遺構と考えられる。

(3) 炭化物および焼土

S X 01

平成19年度分で説明する。

(4) 溝

S D 04溝跡(第12図、写真図版7)

〔位置・検出状況〕 IV D 4 d・4 e・5 f グリッドにまたがる。第1次検出の際に、遺構のない部分にトレンチを設けて試掘したところ、暗褐色土の掘り込みプランを検出し、登録した。

〔重複・隣接関係〕 北側でS D 05と重複する。S D 04の方が占いと推測する。また、獣骨の出土したS K 02と北側で隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 基本層序V層に相当するとと思われる締まりある暗褐色土を主体とする。1次面で検出された溝にみられる酸化鉄分等は観察できない。

〔平面形・規模〕 ほぼ北西から南東に延びる。北西側は削平されたのか調査区内で途切れた。南東側は調査区外に延びる。総延長は16mを測る。幅は南西側で82～92cm、北東側で40～52cmを測り、全体的に南側で広くなっている。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿状である。東壁が緩やかに、西壁は比較的垂直気味にあがる。深さは南東側で計測10点平均13.2cm、北西側で計測10点平均4.7cmを測る。底面のレベルでは北西側の方が若干低くなっている。

〔出土遺物〕 墓土から摩滅した縄文土器片2点(15g)出土した。流れ込みと考えられる。

〔時期〕 検出状況や墓土から古代から中世にかけての遺構と推測される。また、1号堀と同時期であると推測する。

S D 05溝跡(第12図、写真図版7)

〔位置・検出状況〕 IV D 4 c・5 d・5 e・6 d・7 d グリッドにまたがる。2号堀を検出し、掘

削している途中で、その近隣で検出した。非常に埋土の色調が刷りと似ており、プランの確定はむずかしかったが、SD 04に直交する形状として促えた。堀との交点については、断面で確認している。

〔重複・隣接関係〕 SD 04や1号堀に切られる形となり、より古いと判断した。屈曲する2号堀は北側で隣接する。その新旧は判別できない。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのない砂質の暗褐色土を主体とする。V層に当たるかどうかは不明である。酸化鉄等の水性堆積物は見あたらない。混合された土が壁面を覆っていること、全体的に締まりがないことなどから人為的な堆積の可能性がある。

〔平面形・規模〕 SD 04や1号堀とほぼ直角に交わり、南西から北東に小さく蛇行しながら、北側調査区を横断するように、それぞれ調査区外に延びる。確認された総延長は16.50mで、幅は40～50cmを測り、大きな差はない。

〔断面形・深さ〕 断面形はピーカー状で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴状土坑の形状に似る。深さは、東側計測10地点29～46cmで平均37cm、西側計測8地点18～33cmで平均は23cmを測る。底面のレベルでは西から東に向かい低くなっている、最大で64cmの差がみられる。

〔出土遺物〕 埋土から3点の繩文土器の破片が出土したが、流れ込みの遺物と判断した。

〔時期〕 検出状況や埋土状況から、古代から中世にかけての造構と推測される。また、1号堀やSD 04よりは新しいと判断している。

SD 06溝跡（第13・59図、写真図版8・60）

〔位置・検出状況〕 III C 6 fからIII C 10 eにかけて、北側調査区微高地を東西に横切るように位置する。IV層下検出中に若干のプランを得ていたがはっきりせず、V層をやや下げた状況で登録した。従って一部上部壁を壊している。また、西側は、下層VI層で土器を多く出土させる包含層があり、混乱を避けるために、平成18年度はプランだけ実測し、掘りきっていないが、19年度に完掘した。

〔重複・隣接関係〕 多くの柱穴状土坑と重複するものとおもわれる。また、下位には弥生時代や縄文時代の造構が検出される可能性が大である。また北側でSI 01と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのある黄褐色または褐色土の混合土を主体とする。自然堆積よりも人為的堆積の可能性の方が高い堆積の状況である。

〔平面形・規模〕 西側の推定プランを含めた総延長は21mとなる。ほぼ西一東に位置し、西側は水路に、東側は未調査区に延びると推定する。開口部幅は観測地点5地点で50cm～112cmで特に中央部でひろがっている。これは検出面を下げる部分で結果的に狭くなつたもので、造構の特性的なものではないと考えられる。下場の幅は16～28cmとなる。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で概ねなだらかに立ち上がるが、深いところではピーカー状にやや垂直に立ちあがる所もある。深さは比較的の良い北側壁高で見る。計測17地点で8.7～31.4cmの深さがあり、平均すれば19.3cmとなる。また底部の標高は、東側が49.7m、西側が49.8mあり、ほぼ平坦であるが、なだらかに東側に傾く。

〔出土遺物〕 縄文（弥生）土器片232gと須恵器片1点、石器では頁岩製の石錐293が出土しているが、繩文土器や石器は下部の包含層のものを掘りすぎて得られた、もしくは流れ込みと判断した。ここでは須恵器片のみを取り上げる。1は須恵器の壺の底部破片である。回転系切り痕が観察され、縁をもつてやや内湾しながら、なだらかに立ち上がる器形となる。

〔時期〕 検出状況や出土遺物から、古代の造構と推測される。出土須恵器から、SI 01とは同時期と考えられるが、判然としない。

S D 07溝跡(第13図、写真図版8)

〔位置・検出状況〕 III C 10 g・h および III C 9 i に位置する。1次検出された歓間状造構の北側をクリーニングしている最中に得たプランである。IV層下あるいはV層上での検出となる。ここでは最終的には歓間状造構の載る面をある程度下げた状態で登録している。よって第2面検出遺構としているが、古代面よりは上位にある。

〔重複・隣接関係〕 重複はないともわれる。北側1m離れて S D 08、南側1mに S D 09が隣接する。遺構はやや屈曲するが、その屈曲部分に S D 08 が延び、S D 09はそこから前に曲がるように延びる。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのある砂質の褐色土と黄褐色粘土の混合土の單層。自然に堆積されたものと考えられる。

〔平面形・規模〕 西から東に延び、途中で北東側に屈曲する。西側は水路に切られ、東側は本調査区に延びる。総延長は12.60mとなる。上場幅は50~80cmで違いが見られるが、下場は概ね20cmを測り、ほぼ一定している。

〔断面形・深さ〕 断面形は碗形状であるが、上場幅が広くなっているところは、北側壁がなだらかに立ちあがる傾向にある。深さは南北壁とも12~24cmを測る。底部の標高は北東側が49.6m、南西側が49.4mでなだらかに西側に傾く。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 検出状況や埋土観察からはっきりとした時代観は得られない。古代から近世にかけての遺構であると考えられる。

S D 08溝跡(第13図、写真図版8)

〔位置・検出状況〕 III C 8・9 h に位置する。検出状況は S D 07 と同じである。

〔重複・隣接関係〕 南側に S D 07 が隣接する。西側で水路に切られる。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色粘土を含んだ暗褐色土の單層である。自然堆積の可能性が大きい。

〔平面形・規模〕 ほぼ西から東に延び、S D 07 の屈曲部分で途絶える。延長は6.20mを測る。幅は狭いところで22cm、広いところでは44cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿状で、深さは3~10cmと浅い。底部は若干の凸凹はあるが標高は49.6mで一律である。

〔出土遺物〕 磨滅した縄文土器片2点(10g)が出土しているが、流れ込みと判断した。

〔時期〕 検出状況や埋土観察からはっきりとした時代観は得られない。古代から近世にかけての遺構であると考えられる。

S D 09溝跡(第13図、写真図版9)

〔位置・検出状況〕 北側調査区の最南端III C 9・10 i・IV C 1 i・j に位置する。この区域は第1検出で歓間状造構が検出されているが、2面の検出は遅れ、調査の後半に登録したものである。天候が悪く雨続きで、また北側調査区で最も標高の低いことが災いして、水が溜まり充分の精査ができないかった。結果、南側の延長が未確認となっている。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。西側を水路に切られる。北側で S D 07 と隣接する。後述する敷石遺構との関係は把握できなかった。

〔埋土・堆積状況〕 上位に締まりのない暗褐色土、下位に締まりある褐色土が覆う。全体的に粘性が強い。自然堆積とおもわれる。

〔平面形・規模〕 ほぼ西から東に S D 07と平行し、途中でなだらかに屈曲し北西から南東に延びる。総延長は13.50mを確認した。幅は50～70cmで一定している。

〔断面形・深さ〕 断面形は碗状で両壁共に60度前後に立ち上がる。深さについては南上場が掘りすぎているので、北側壁高で見る。計測地点10点で浅いところで21cm、深いところでは50cmを測り、平均では34.5cmを測る。底面の標高は北西側で48.7m、最南端で48.4mとなり南に向かって落ち込んでいる。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 近世と思われる面ではプランは確認できなかった。2次検出面ではあるが、上記のS D 07・08よりも下位からの検出である。出土遺物もなく埋土も明確ではないが、古代から中世の遺構の可能性が高い。南側から続く堀、もしくは溝との関連も考えられる。

(5) 堀 跡

1号堀跡(第14図、写真図版10・11・62)

〔位置・検出状況〕 IV D 5 d～8 hグリッドにまたがる。2号堀については、1次検出面を若干下げたところでIV層の人り込みのプランがあったが、この遺構については第2次検出面でクリーニングした時点で判別したものである。

〔重複・隣接関係〕 遺構の南側を県生涯学習文化課の確認トレントに切られている。前述したとおりS D 05を切る。また、2号堀にも切られ、S D 04に並行する。同じく東側に柱穴列が並行し、西側には複数の柱穴が検出された。

〔埋土・堆積状況〕 炭化物を多く含む暗褐色土を主体とする。炭化物の含有率で幾層かに分層できる。中位や最下位に酸化鉄分を含む砂質の黄褐色土があり、2度ほど水を蓄えていた可能性を示している。その層を挟んで、砂質の暗褐色土と粘土質の黄褐色の混合土が、繋ぎた状況で入り込んでいる。下位は人為的堆積、上位は自然堆積か。

〔平面形・規模〕 南側調査区を北西から南東へやや弧を描きながら緩走する。従って北側は市道下に南側は住宅下に延びていくと思われる。確認した総延長は26.30mに及ぶ。開口部径は中央部で1.70m、最大は、北側2号堀との交点近くで2.36mを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は上場から半場までなだらかで、下場まで垂直気味になるV字状となる蕭研堀である。特に幅の狭くなる中央部においてその傾向が強くなる。深さは南側で63～72cm、北側で78～87cmを測る。底面の標高は、南側で海拔48.8m、中央部で48.5m、最北部で48.2mを測り、北側に向かってなだらかに傾斜しているのはS D 03と同じである。

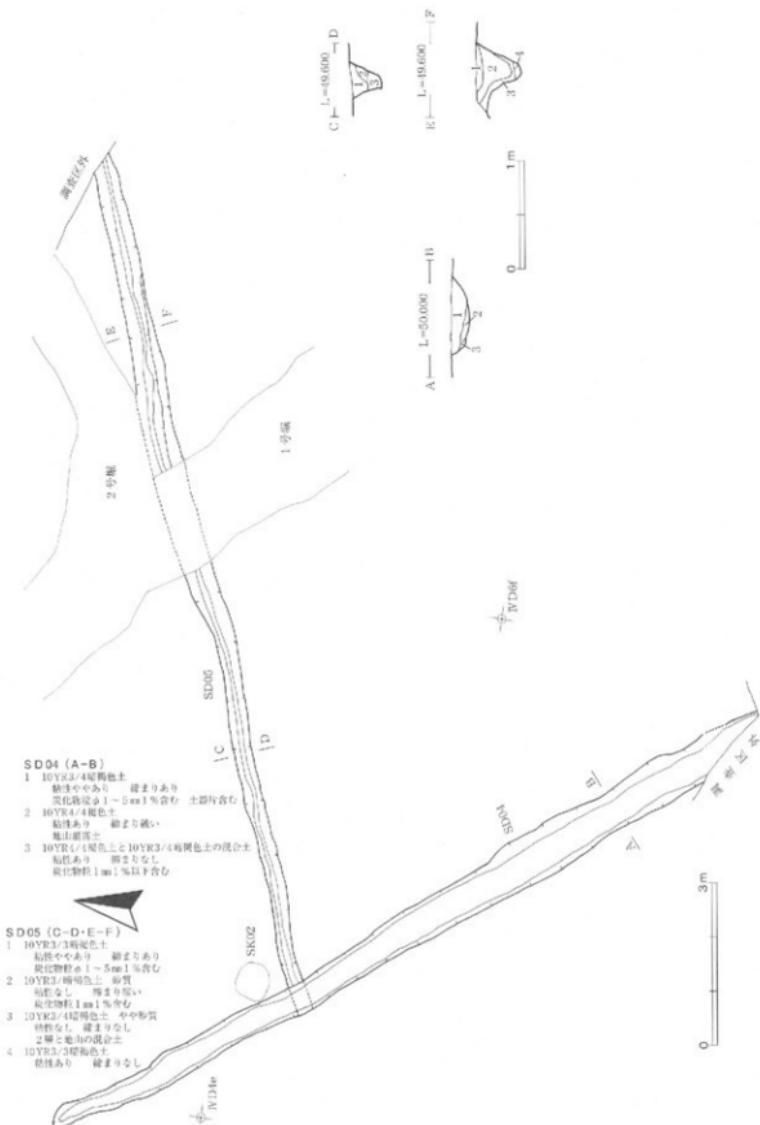
〔出土遺物〕 内黒の壺?の破片が出土したが、摩滅が著しく掲載しなかった。埋土下位の壁際から摩滅された縄文土器の破片が3片(25g)出土したが、3箇所検出(VII層出土)のもので、包含層1に含まれるものと考えられる。包含層1の上位層V層から5点の土器類・須恵器が出土している。

〔時期〕 埋土や検出状況また出土遺物から古代から中世にかけての遺構と考えられる。

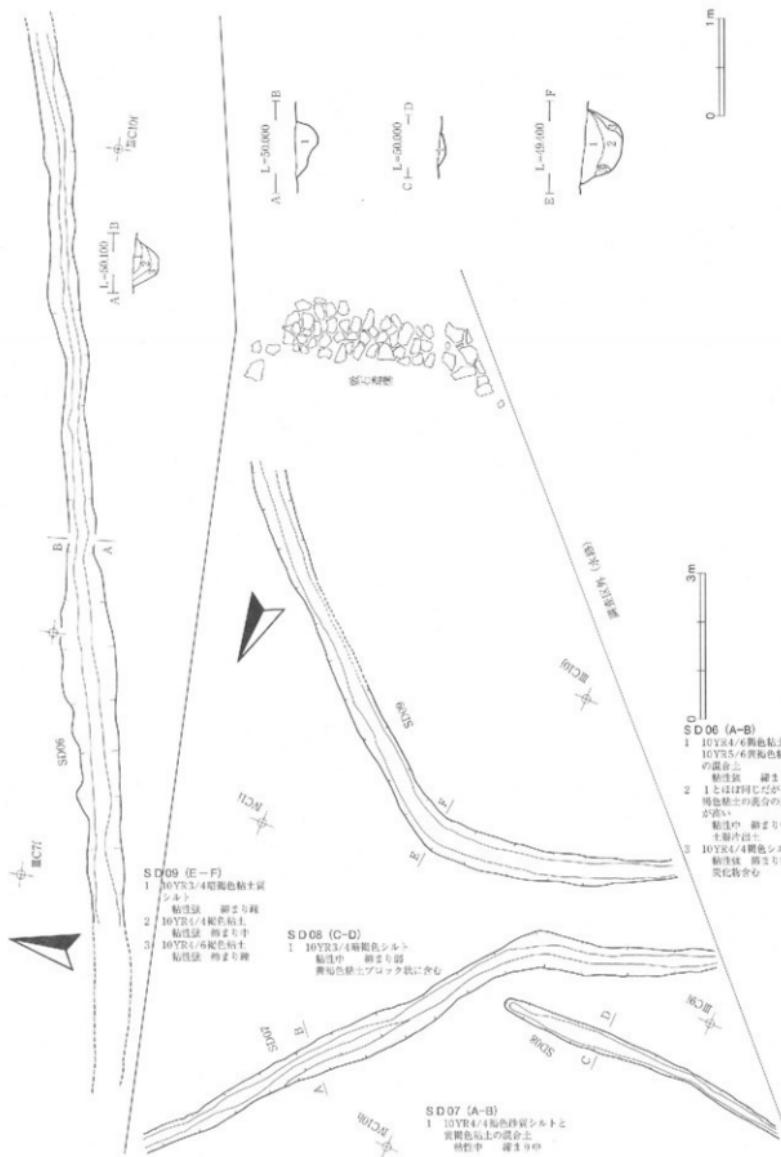
2号堀跡(第14図、写真図版10・11)

〔位置・検出状況〕 IV D 4・5・6 dグリッドにまたがる。1次検出面を若干下げたところで、IV層と思われる褐色砂質土の入り込みのプランがあったが、遺構として登録できなかった。1号堀の掘削と同時に得た、新たなる遺構として登録後、その事実に気づいた。

〔重複・隣接関係〕 1号堀と重複する。新旧は1号堀より新しい遺構と考えるが、1号堀が埋まっ



第12図 SD 04・05溝跡



第 13 図 SD 06 ~ 09 溝跡

た後に構築されたかどうかは判断できない。S D 05と隣接する。その新旧については定かではないが、やや古い印象を持つ。

〔埋土・堆積状況〕 上記から本來であれば、最上位にIV層である砂質土が入り込んでいたはずである。埋土断面には観察できなかったが、1号壙に比べれば検出面がやや低いので、埋まりきらなかつた分残っていたのであろう。よって大きな時期差はないとおもわれる。埋土状況は、1号壙とほとんど変わらないがやや砂質で、1号壙が安定した（自然堆積的な）状況であるのに対して、水性の堆積物である酸化鉄層が北側から流れ込んでいることなど入浴的堆積の觀があるが、大きな相違点ではない。

〔平面形・規模〕 北西から北東にU字型に湾曲しており、それぞれ調査区外に延びる。平面形は門形周溝のように見える。総延長は1号壙との重複部分をあわせて8mを測る。開口部径は東側で1.20m、1号壙との交点地点で1.70mを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はV字型で業研振状であるが、1号壙に比べ壁はややなだらかに落ち込む。深さは北側壁高で40～44cm、南側壁高で35～42cmを測り比較的差がない。底面の標高は、湾曲する中央部で標高48.5m、最東部でも48.5mとなり多少の凸凹は認められるが、ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や検出状況から、古代から中世にかけての遺構と考えられる。時期としては1号壙・S D 04とS D 05の間にに入るという時代觀が与えられるかもしれない。

3号壙跡(第15・69図、写真図版12・68)

〔位置・検出状況〕 III C 5 d・e・6 c～eに位置する。この区域は盛土が厚く堆積している区域で、その厚さは1.50mに及ぶ。その盛土を剥ぎ取り、クリーニングして得たものである。遺構が深くなることから、西側の水路近くは掘削していない。また、同じ理由で東側の民家近くは通路として利用しているため、法面を残し安全を確保した。平成19年度調査で発掘した。

〔重複・隣接関係〕 重複はないと思われる。西側は水路に切られる。東側は未調査区から調査区外に延びると推測できる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土上層①は縦まりのある褐色砂を中心に堆積する。この砂は基本層IV層に相当すると考えられる。A区の1面2号壙の上位で検出された状況に似る。炭化物は上位に多く、土器片も出土する。下位に従って黄褐色の粘土をブロックで含むようになり、粘性縦まり共に強くなる。中層②には、固く縦まる暗褐色土がある。同じように粘土が混入するが全体に散らばる形となる。土器片は少ない。中層と下層はほぼ水平に分かれれる。下層③は暗オリーブ褐色粘土を主体とし固く縦まる。水性堆積（酸化鉄）の状況で、特に最下層に、筋状に酸化鉄が確認される。下層にも摩滅の激しい土器片が出土する。

下層は水性堆積、中層は人為的堆積で、その上位は自然に埋没したものと予測される。

〔平面形・規模〕 ほぼ南北から北東に直線的に延びる。確認された総延長は約12mに及ぶ。幅は狭いところで3.50m、広いところでは4.50mを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状？で両壁は緩やかに弧を描いて立ち上がる。南側壁にやや段を持つ。底は1mほどの平坦になる。深さは、北側壁高の計測12点で、98cm～1.10mを測り、平均値は98.6cmとなる。底部の標高は、計測値全てで48.4mとなっており、多少の凸凹はあるが概ね平坦である。

〔出土遺物①〕 繩文土器片や弥生土器片840g、土師器・須恵器類10点、陶磁器片1点、石器は礫石器5点(885.5g)剥片石器13点(328.3g)が出土している。土師器や須恵器片は破片のみで図下できなかった。また陶磁器片も微細で実測できなかったが、16世紀の漁戸・美濃産と推測される陶器小

片が出土している。120～122は縄文もしくは弥生土器の鉢または甌の破片である。石器では353の磨製石斧の未製品と思われるものや359・360の敲石などの礫石器とともに、不定形石器の出土が多い。

〔平成19年度精査状況〕 平面形に大きな違いはない。幅も前年度に準じる。確認された総延長は20.60mとなった。断面形は北側でやや鋭角に落ち込んでおり、平成18年度には皿形状としているが、最深部がやや窪む業研掘状となり、底の平坦部分の幅が狭くなる感じとなった。平成18年度にやや掘り足りず、底部が不明瞭だったのかも知れない。深さもそれによって変わるが前年度の数値を使用した。

〔出土遺物②〕 平成19年度は、前年度に残していた西側の埋土ベルトと、北側の法面部分の調査となり、土器片445g、石器が27点(4485.4g)出土している。土器は圧倒的に縄文・弥生土器が多く、土器類・須恵器類は少ない。石器は前年度より多くの出土量となったが、これは礫石器が多いことにによる。

〔時期〕 出土遺物の大半が流れ込みの可能性が高い。埋土や検出状況から古代から中世にかけての遺構と考えられる。陶器片が16世紀に相当することから、中世の遺構の可能性が最も高い。

(6) 柱穴状土坑および柱穴列

A柱穴状土坑群(第16図、表3、写真図版9)

〔位置・検出状況〕 柱穴状土坑はPPとし、番号は検出順である。位置は表に示す通り。PP 1～3は1面下での検出であるが、検出された地域が2面まで下げきったと判断し、2面検出とした。1号堀とSD 04に挟まれた区域で多く検出された。

〔重複・隣接関係〕 1・2号堀と重複するものは登録していないが、図面上には載せた。

〔埋土・堆積状況〕 表に示すとおり、暗褐色土が主体となる。

〔平面形・規模〕 開口部径は18～40cmと様々であるが20cm程度のものが多い。

〔断面形・深さ〕 断面形は柱穴状であるが、一部木痕などの自然作用のものも含むと思われる。また、深さは5～40cmを測るが、深くなっているものは掘りすぎのものもあると考えている。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 堀と関わりのある施設(掘っ立て柱建物跡)の可能性もある。また、後述する柱穴列と堀を挟んで同程度離れる柱穴(P14・3・24)はなんらかの関連性も指摘できる。古代から近世にかけての遺構と考えられる。

A柱穴列遺構(第16図、写真図版9)

〔位置・検出状況〕 IV D 7 d・eに位置する。第1面(IV 崩下)では検出されず、堀検出の際に溝状の遺構として検出された。精査の結果、柱穴状の土坑が連続して並んでいることから溝状のプランとなつたことが判明し、柱穴列遺構とした。

〔重複・隣接関係〕 重複はないと思われる。SD 01と平行している。

〔埋土・堆積状況〕 締まりのない混合土が埋まる。酸化鉄が観察された。

〔平面形・規模〕 口径30cm程度の柱穴状土坑が、10～20cm程の間隔を持って7基ほど並んでいる。土坑がない空白部は溝になっている。総延長は北西から南東に5mほど伸びている。北側にはほぼ北一南に延びるもう1基の列を観察できる。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿状。深さは5～7cm程と浅い。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 堀との関わりは明確ではない。埋土は異なるが並行している点が気にかかる。堀と関連するのであれば柵跡や橋脚跡の可能性もある。2次検出面での検出はあるが、極めて1次検出面に近く、中世から近世の遺構としておく。

(7) その他の遺構

その他として、礫の積み重ねられた遺構を検出し、敷石遺構とした。いわゆる縄文時代の住居跡床面に付設される敷石とは性格が違う。また、中世にある道路状遺構に利用されるものでもないが、適する名称がないことから、便宜的に名称を使った。

敷石遺構(第11・13図、写真図版6)

〔位置・検出状況〕 北側調査区南隅IV C 1 jとIV D 1 aグリッドにひろがる。1次検出で畝間状遺構を検出した際、南隅に数個の礫が見えていた。当初は土坑と思い、重機で全体を下げる際に登録しようと考えていたところ、私道下の水道管移設工事を待たなければならなかつた。そこで重機で下げる前に手掘りで礫周辺を下げたところ検出されたのが当遺構である。精査が終わり、同時に古代面の検出を行つた。その際に重機進入路の確保から敷石は取り除いての掘り下げとなつてしまい、残念ながらSD 09や1・2号堀との関連は明確にできなかつた。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。図面上では遺構の東側に向かってSD 09が延びてくる様子が見えるが、現場に至つては判然としなかつた。

〔埋土・堆積状況〕 埋土断面に見える1層は基本層序Ⅲ層。3・4が基本層序V層と考えられる。礫はV層上にある。

〔平面形・規模〕 ほぼ東一西に長さ4m、幅1mに礫を敷いている。東西端は礫が少なく、コの字型に北側に屈曲する。礫の個数は56である。長さ20~50cmの角をもつた礫の平坦部を上面にして凸凹がないように敷き詰めている。礫間を小さな石で埋めている様子は見えない。固められているのか礫は安定している。

〔断面形・深さ〕 断面で観察すると、上位の礫の下に礫は見えず、意識的に重ねられている様子は見えない。西から東側になだらかに傾斜している。標高では西端が礫上面で49.3mを測り、SD 09の西端の上場とほぼ同じ高さとなる。また、1号堀北東端の上場の高さは49.2m前後で、誤差はあるがほぼ同じ標高といえる。また、東端の礫上面の標高は48.8mとなる。これはSD 09南端底面や2号堀の底面の高さとほぼ一致する。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 埋土状況から中世から中世にかけての遺構であると考えられる。1・2号堀と同時期の可能性もあり、SD 09との関連も考えられるであろう。

《第3面》基本層序Ⅶ層以下検出遺構(第17図、写真図版9)

基本層序Ⅶ層以下の面としてとらえたのは南側調査区(A区)のみで、遺構は確認できなかつたが遺物が集中する区域が存在する。

南側調査区のVI層以下の遺構・遺物確認はトレンチを設定して、4ヶ所確認調査を行つた。その結果トレンチ1(T 1)とトレンチ4(T 4)で遺物が出土する層を確認した。トレンチ2(T 2)・トレンチ3(T 3)では遺構は検出されず、遺物も出土していない。

(1) 包含層1・2

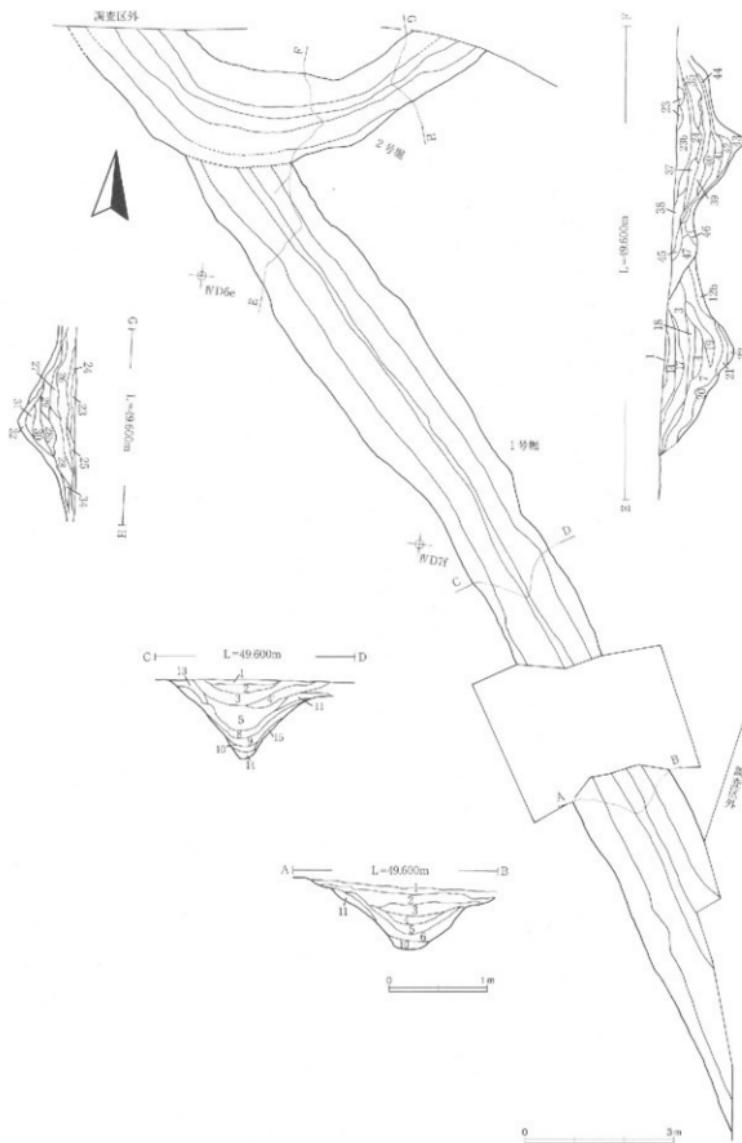
包含層1（第17・70～73図、写真図版9・68～70）

トレンチ1は北側のⅥ層上位に炭化物を多く含む黒褐色土の堆積が認められ、遺物が多く出土した。ほぼ完形に近い壺や石製品および土製品の出土もある。住居跡を想定して精査を行ったが壁の立ち上がりは認められず、柱穴や焼土といった施設なども検出されなかった。総出土量は土器片10180g、石器95点(10589g)である。特徴的なのは粗製深鉢の出土の割合が高いことと、浅鉢のほとんどが貼縫と口縁部内面に沈線を持つことである。また、石核や破片が多く出土し、中には接合するものも含まれる。出土石器の中には磨製石斧の未製品と思われるもの、敲石(ハンマー)や凹み石、磨石(砥石?)も出土している。土製品では、金附遺跡で出土している結髪土偶と呼ばれているものの類似品や土偶の足と思われる破片の出土もある。

これらの特色から土器や石器の捨て場としての機能があったと思われる。また、出土遺物の特色などから近隣に（西側の調査区外に）小規模であるが石器製造を営む縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけた居住地の存在の可能性も指摘できる。

包含層2（第17・73図、写真図版9・70・71）

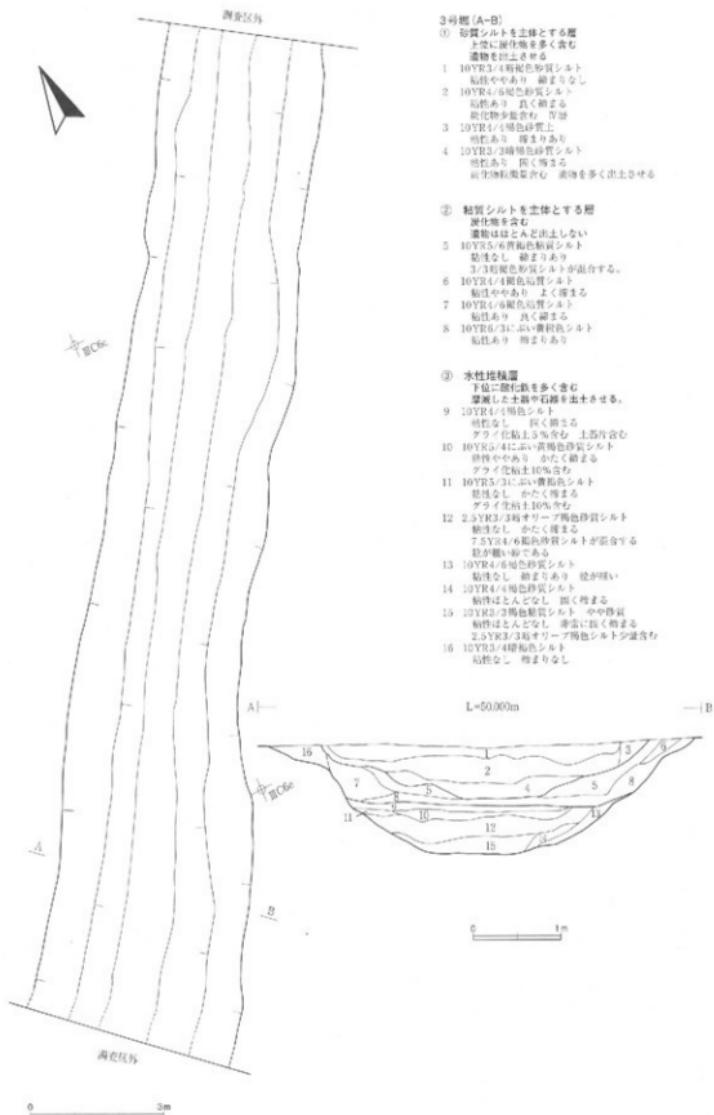
トレンチ4でも1と同じような黒褐色土の堆積があり、遺物も出土するが出土量は包含層1と比較して少ない。出土量は土器3855g、石器3点(398.3g)である。特色としてあげられるることは石器の出土がほとんど無いことと、上から押しつぶされたようにほぼ同時期の甕や壺が2個体出土していることである。包含層1出土状況とは違い、意図的(埋設土器?)であり、並べたという言葉が当てはまりそうな状況であった。包含層2付近は墓域であった可能性も指摘できる。出土した土器は包含層1・2出土のものをまとめてB類として類別した。これらの土器や石器は項を改めて取り上げる。

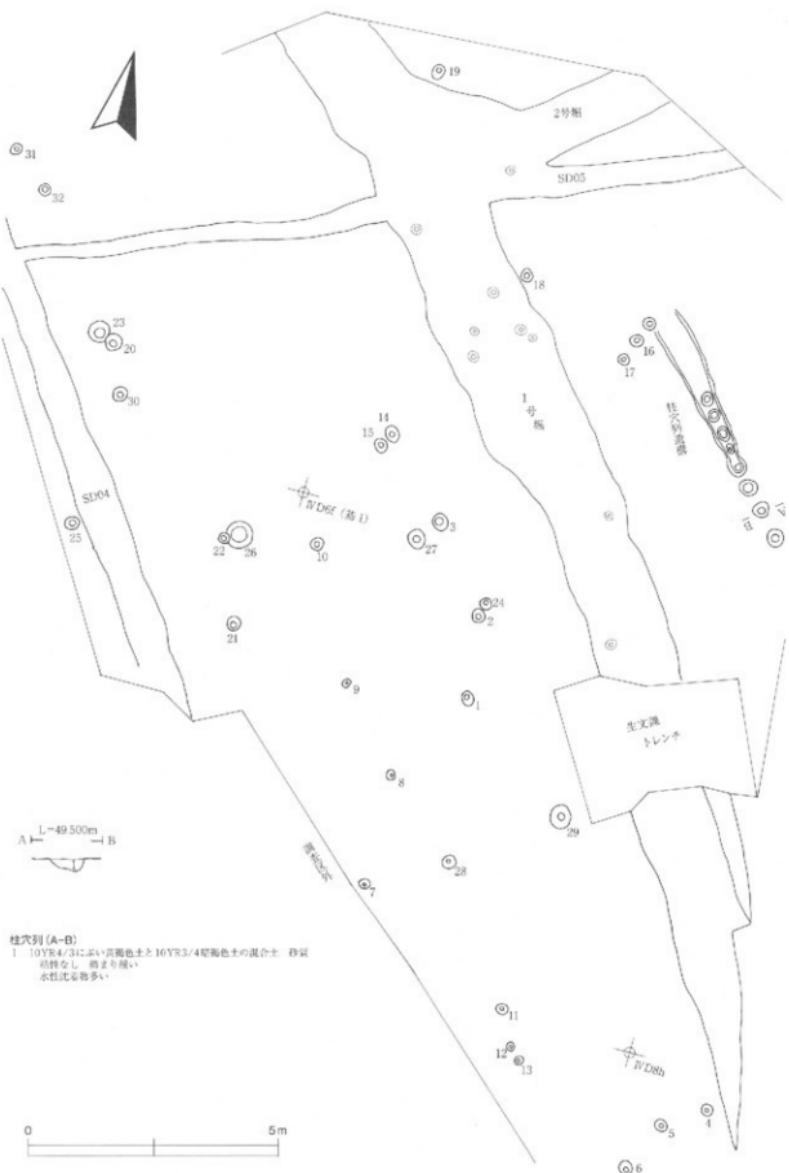


第14図 1・2号堀跡

1号・2号層(A-B-C-D-E-F-G-H)

1. 10YR3/4褐色土
粘性をもつており
2. 10YR3/2褐色土
粘性をもつてあり
3. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
4. 10YR4/1褐色土
粘性をもつてあり
5. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
6. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
7. 10YR4/3に近い褐色土
粘性をもつてあり
8. 10YR4/3に近い褐色土
粘性をもつてあり
9. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
10. 10YR4/3褐色土
粘性をもつてあり
11. 10YR4/4褐色土と10YR4/4褐色土との混合土
粘性をもつてあり
12. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
13. 10YR3/2褐色土
粘性をもつてあり
14. 10YR4/4褐色土(礁石付) 60%と10YR3/4褐色土との混合土
多くある よく被まる
15. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
16. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
17. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
18. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
19. 10YR4/3に近い褐色土
粘性をもつてあり
20. 10YR4/3褐色土と10YR4/4褐色土との混合土
粘性をもつてあり
21. 10YR4/3褐色土
粘性をもつてあり
22. 10YR4/3褐色土
粘性をもつてあり
23. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
24. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
25. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
26. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
27. 10YR3/3褐色土
よく見る 被りあり (2より多い)
28. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
29. 10YR4/4褐色土
bからDにかけて
30. 10YR3/3と10YR4/4褐色土との混合土
粘性をもつてあり (2より多い)
31. 10YR3/3と10YR4/4褐色土との混合土
粘性をもつてあり
32. 10YR4/3に近い褐色土と10YR4/4褐色土との混合土
よく見る 被りあり
33. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
34. 10YR3/3褐色土と10YR4/4褐色土との混合土
粘性をもつてあり
35. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
36. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
37. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
38. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてあり
39. 10YR3/3褐色土
よく見る 被りあり
40. 10YR3/4褐色土
粘性をもつてあり
41. 10YR4/3褐色土
粘性をもつてあり
42. 10YR4/4褐色土と10YR3/4褐色土との混合土
粘性をもつてなし 被りあり
43. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
44. 10YR4/3に近い褐色土
粘性をもつてなし
45. 10YR4/4褐色土
粘性をもつてあり
46. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてなし 被りあり
47. 10YR3/3褐色土
粘性をもつてなし 被りあり

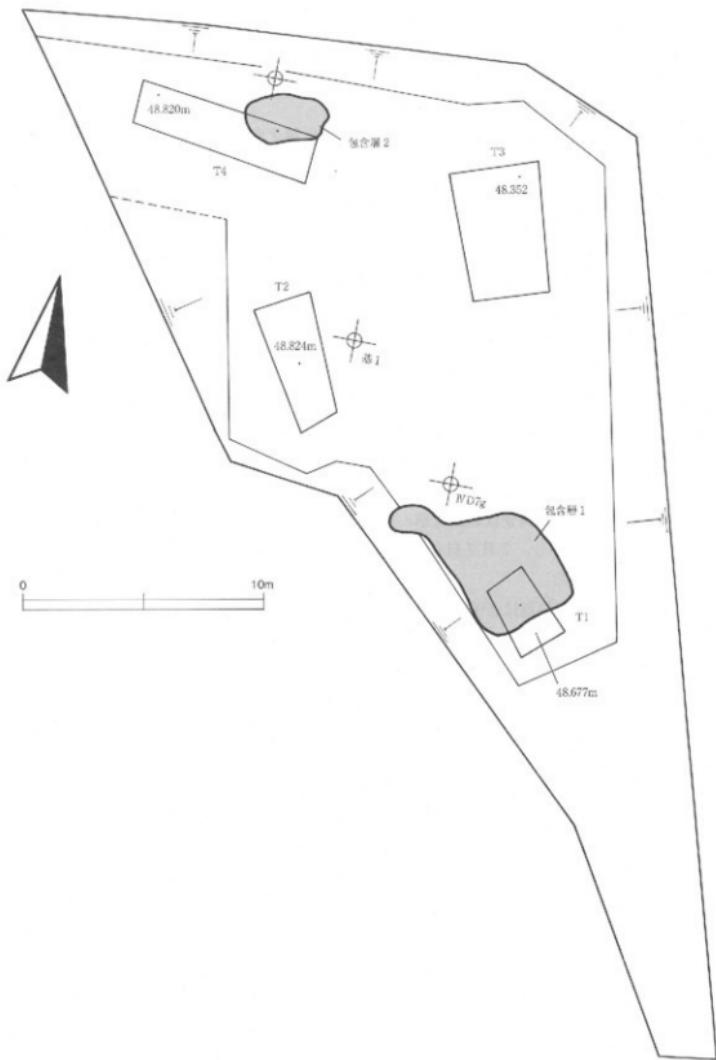




第16図 A柱穴状土坑群、柱穴列造構

第3表 A柱穴状土坑群観察表

PP	位置	口径cm	深さcm	埋 土	備 考	重複並行関係
1	IVD7g	24	42	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりややあり	炭化物粒φ1mm 1%以下	
2	IVD7g	26	13	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりややあり	10YR3/4暗褐色砂質土	
3	IVD6e	21	10	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりややあり	ブロック状に含む	
4	IVD8h	24	27	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりなし	炭化物粒φ1~3mm 1%含む	
5	IVD8h	26	21	10YR3/3暗褐色土 よく粘る 繊まりあり	炭化物粒φ1~3mm 1%含む	
6	IVD8h	24	5	10YR3/3暗褐色土 よく粘る 繊まりあり	炭化物粒φ1~3mm 1%含む	
7	IVD7g	20	11	10YR3/4暗褐色土 粘性あり 繊まり纏い	炭化物粒φ1mm 1%含む	
8	IVD7g	20	28	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まり纏い	やや砂質	
9	IVD6f	20	28	10YR3/4暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	やや砂質	
10	IVD6f	24	18	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まりなし	炭化物粒φ1~3mm 1%以下含む	
11	IVD7g	21	18	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物粒φ1~3mm 1%以下含む	
12	IVD7h	18	10	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まりなし		
13	IVD7h	16	5	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まりあり	炭化物粒φ1mm 1%含む	
14	IVD6e	28	23	10YR4/4褐色土 粘性あり 繊まりなし	砂質 炭化物粒φ1mm 1%含む	
15	IVD6e	26	24	10YR4/4褐色土 粘性あり 繊まりなし	やや砂質炭化物粒φ1mm 1%以下	
16	IVD7e	24	15	10YR3/4暗褐色土 粘性あり 繊まりなし		
17	IVD7e	18	17	10YR3/4暗褐色土 粘性ややあり 繊まり纏い	P16よりやや砂質	
18	IVD6d	24	19	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まりなし	やや砂質	
19	IVD6d	36	26	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物粒φ1mm 1%含む	
20	IVD5e	32	6	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物細粒 1%以下含む	
21	IVD5f	23	14	10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性あり 繊まりあり		
22	IVD5f	20	10	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物細粒 1%以下含む	2号土法と直視より判別
23	IVD5e	40	15	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物細粒 1%含む	P20と直視より古い
24	IVD6f	25	—	10YR2/3黒褐色土 粘性なし 繊まり纏い	やや砂質 炭化物細粒 1%含む	
25	IVD5f	24	28	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まりなし	やや砂質 炭化物粗粒 1%含む	
26	IVD5f	40	26	10YR3/3暗褐色土 粘性なし 繊まりなし	炭化物細粒 1%含む	P22と直視より古い
27	IVD7g	26	31	10YR3/4暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物 1%含む	
28	IVD7g	28	26	10YR3/3暗褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物 1%含む	
29	IVD7g	42	37	10YR3/4暗褐色土 粘性なし 繊まりあり	炭化物 1%含む	
30	IVD5e	25	18	10YR3/3暗褐色土 粘性ややあり 繊まりなし	地山との混合土	
31	IVD4d	22	13	10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性あり 繊まりあり	炭化物粒 1%含む	
32	IVD4d	22	12	10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性なし 繊まりあり	炭化物粒 1%含む	



第17図 包含層1・2位置図

VII 平成19年度の調査・遺構

1 調査の経過と概要

平成19年度の調査面積は、前年度に調査できなかった区域を含め6100m²で、調査期間は4月11日から9月27日までの予定で行われた。担当した調査員は2名、作業員の登録は22名である。まずは交通量の多い南側県道と調査区を隔てる目的で、単管による柵を設置し安全策を施した。委託者の要請で県道脇を最優先地区とし、重機による表土剥ぎを行うと同時に、前年度に第2面(古代面)精査まで行われた区域の第3面(弥生面)の検出から調査を始めた。

調査はスタートしたが春先の天候不順から、思うように進まず難航した。北側でも検出面までの深さが2mを超える、近現代の搅乱箇所も多いことから土量が増加し、昨年度の排土置場だけでは不足した。よって新しい土捨て場の確保のため、前年度からある住宅基盤の早めの除去が必要となった。

5月2日、調査区域内の残る旧住宅基盤(コンクリート)の除去が、バックホーと10tトラック10台のフル稼働により終了した。その結果、V層は削平されていたが、意外にも弥生面の残りは良く遺構が検出される見通しから、作業員を増やすこととし5月7日に10名を登録した。その後6月1日には7名を増員し、最終的な登録作業員数は39人で、概ね1日当たり28人前後の作業員で調査は行われた。

環境が整えられたことから調査は順調に進んだ。6月27日には奥州市立人代小学校の教諭2名と児童6人が体験学習で来探し、7月7日には、現地説明会を開催し47人が参加している。また7月23日には空撮をおこなった。

依然として増える残土の処理に苦労していたが、委託者の計らいで排土の移動ができるうこととなり7月30日から2日間、バックホーと10tダンプ8台が稼働し花巻市の穂貫田まで土を運んだ。

8月下旬には調査区北側に新しく3基目の配石遺構を検出した。5~20cmの大いな礫が隙間なく並べられており、過去2基の精査経験から、実測には時間と手間がかかりそうであった。中川調査第二課長や総務課と協議した結果、写真実測を依託することになり、9月5日に空中撮影による平面実測を行った。

8月29日に部分終了確認(5000m²)を、9月25日には終了確認(1100m²)を委託者と岩手県教育委員会生涯学習文化課の立ち会いの下に行い、9月27日撤収し全てを終了した。

始まりから終了まで日程通り行われたが、重機の使用に若干の変動があった。重機による表土剥ぎは、当初は前年度の実績から、全ての調査区において3面の検出(中世・古代・弥生もしくは縄文)が必要であると思われた。少なくとも2回重機で下げる計画であった。しかし、住宅の基盤下は古代面(V層)上位がほぼ削平されていて弥生面からの検出ですみ、最北部は試掘トレンチの観察でV層下は厚く砂(区層)が堆積していること、県道脇は調査区が狭く重機の進入に制限があったことから、全区域1回の表土剥ぎで終わっている。

次に調査区ごとに詳しい経緯と検出遺構をまとめる。ここでは旧遺構名を使って説明している。

(1) B 区

この区域は平成18年度にブルーシートを敷いて養生していたところである。調査はシートをはずしクリーニングしてすぐ始まった。前年度に残した古代以後の柱穴(B区柱穴状土坑群)の精査実測

後に、土器や石器が集中している箇所をすこしづつ下げ、1回目の検出を行った。検出面はVI層下(VII層面)である。4棟ほどの住居跡のプランを得た。精査した結果、1つは土坑の集中区となり削除したが、3基が堅穴住居状遺構となった。(B 2号、B 4号、B 5号堅穴住居跡)そのうちB 5号からは地床かを検出している。

3棟の住居跡精査後にVII層を下げ最終検出面(VIII層上)での2回目の検出を行った。検出されたのは焼土や炭化物の集中する遺構2基、土坑16基である。

調査区は地表面から2mほど下がっており、平成18年度には安全を考えて、東側に大きく法面を残して終えた。また平成18年度北側調査区1号堀も中途に終わっていた。そこでまず堀を完掘させ、その後に慎重に調査範囲を広げたところ、平成18年度北側調査区1号堅穴住居跡(B 1号住居跡)の東壁にカマドを確認した。そして2つの遺構にはさまれる形で新しく古代の堅穴住居跡(B 7号住居跡)を1棟検出・精査して調査を終了した。

(2) C 区

旧住宅を中心とする区域(C区南側)では、旧地権者の「約1.50m掘って土をかぶせた」という話通り、盛り土が厚く堆積していた。コンクリートと盛り土の撤去後にトレーナーで土層を確認したところ、古代の遺物を包含する層(V層)はすでに削平されていた。よってやや厚く堆積するVI層を慎重に下げ埴層面での検出となつた。

C区の南側で検出された遺構は堅穴住居状遺構2基(C 1号、2号堅穴住居跡)、炭化物集中区1基、土坑30基、柱穴状土坑12基である。

C区は北側に向かって緩やかに落ち込んでおり、旧河道と判明した。その河沿いにはV層が残っており、古代と思われる堅穴住居跡1棟(C 3号堅穴住居跡)を検出した。また、その旧河道の西側に配石遺構を1基検出している。

旧河道は北東から南西に延びていることが分かったが、その南西側の東縁は角度をもって落ち込んでいる。それに沿うような形で1条の溝を検出し、その脇に土坑(C-34・35・36・37号土坑)のプランを持って調査を進めていった。多くの遺物を出土させたが、土坑とはならず弥生時代の遺物を含む層とした。

台風や長雨により水没することが多く難儀したが、危険区域を埋め戻して終了した。

(3) D 区

調査区北側になる。当初の予定では検出面の標高は高く、遺構は削平されているだろうと予測していた区域である。現況は道路付設のための礫が厚く堆積していた。重機で1~2mほど下げたところから暗褐色土が見え、トレーナーで試掘した結果、この面を縄文時代の検出面として調査を開始した。ところが、暗褐色土の下層から、火山灰のような灰褐色砂質シルトを伴って土器片が出土した。このことから暗褐色土はV層(古代面)であることが判明した。よって検出はV層を除いた埴層面で行っており、検出された遺構は古代以後の時代を与える。

道路際は土捨て場にしていた関係で検出が遅れ、また大型水路や塩化ビニール管などが巡らされており調査は難航した。検出についても遺物が少なく、灰褐色土(テフラ)と褐色砂質シルトのプランを手がかりにした。

検出された遺構は堅穴住居跡5棟、土坑8基、2条の溝跡と1条の堀跡、柱穴状土坑47個そして3基の配石遺構である。

(4) E区およびまとめ

調査区南西隅の県道脇にある。幅約5m、延長約100mにおよび、現況は県道から1mほど下がっていた。トレントを設定して試掘したところ、50cmほど下がったところで溝1条を検出した。

排土置き場と隣接する田の関係から、先に北側半分を調査し南側を排土置き場に、終了後に反転して南側を調査することとした。先に溝を精査したあと、堀状のプランを得てベルトを設定して調査を進めた。出土する遺物は調査区が狹く南北からずれており、グリッドで取り上げることができなかつた。そこで調査区北側では北から埋土観察ベルトごと（6～8m間隔）に6区域に分けE①区～E⑥区としている。また調査区南側は、ほぼ5m間隔でE⑦～E⑩区として遺物を取り上げた。（第48図参照）検出されたのは溝1条の他に、堀1条である。

まとめると平成19年度検出遺構は堅穴住居跡（住居状遺構を含める）13棟、土坑58基、柱穴状土坑121個、炭化物の集中している遺構3基、溝3条、堀2条、配石遺構4基、弥生時代の遺物包含層1箇所となる。

次にそれぞれの検出遺構について記す。平成18年度では第1面から3面の確認ができたことから面ごとに説明したが、平成19年度ではほぼ同一面での検出であり、一括して種別毎に取り上げる。

また、S I 01は平成18年度に精査したが、平成19年度にも一部精査をしており、同時期の堅穴住居跡も検出していることから、こちらで説明する。

2 検出遺構

(1) 堅穴住居跡

① 古代

古代遺物が出上しないものもあるが、埋土や平面形などから古代としたものである。

S I 01堅穴住居跡（第18・19・59～61・83・84図、写真図版13・14・15・60～62・77～79）

〔位置・平成18年度検出状況〕 III C 9・10 d・eグリッドにひろがる。県生涯学習文化課の試掘で判明していた住居跡である。最初、トレントから検出面を確認し、重機によって表土を剥いでから平面上でのプランを得ようとした。しかし、南側調査区の検出遺構が多くなり、北側に重機が入るのが遅くなることから、手掘りで検出面を広げざるを得ず、平面での検出をあきらめ、生文課の試掘トレントを再現することとした。搅乱が多く、それをを探すのも苦労したが、実際再現してみてからも、土の明暗だけで判断しなければならなかつた。北側が調査区外と現代の搅乱で、はっきりしなかつたが土器の出土状況などから住居跡と登録した。その後掘り進めたが、断面でみてもその壁の立ち上がりが明確に把握できずに掘りすぎている所もある。

〔重複・隣接関係〕 重複はないが、北側は現代のゴミにより搅乱されている。南側壁は試掘トレントにより喪失している。北東側全体は調査区外に延びている。南側にS D 06が南壁と平行に東西に延びる。

〔堆土・堆積状況〕 最上位に非常に固く締まる黒みかかった褐色土が載る。中層に砂質の黄褐色土や褐色土があり、若干縮まりが失せるがなお固い。下位に従って砂粒が粗くなっていく。最下位の暗褐色の粘土との間に、酸化鉄を多く含んだ褐色のシルトが床面を覆っている。この水性の堆積物は壁溝などの埋土となる。土器片は上位と下位に多く含まれ、中層の砂質褐色土には出土しない。また、

水性堆積物層は西から東側に向かって厚くなっていく傾向が見えた。このことから南西側から埋まつた可能性が高い。

〔平面形・規模〕 北側と東側は調査区外である。検出したのは住居跡の西側壁の一部と南壁の一部のみである。その南壁の東側は、埋土と壁の区別が付きにくく、やや掘りすぎている。その後、床面の精査や断面観察などから図には推定線を入れている。それを元に記すと、平面形は長方形で隅はほぼ直角に曲がる。正方となるかどうかは定かではない。規模は東一西壁間が5.74mで、検出された南壁の長さが4.73mとなる。

〔断面形・深さ〕 断面で見る南壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は46cmを測る。西壁から南壁計測5地点の壁高は44~50cmであり、平均値は46.5cmとなる。

〔焼土〕 住居跡南壁東側の床面に、炭化物や遺物の混入する広がりが見られた。土質は、黄褐色粘土と炭化物の混入するしまりのある混合土である。範囲は東西に2.60m、南北に最大で1.16mを測る。不整な楕円形状である。炭化物が形状を残して出土している区域もあるが、おおむね散在する。土器を埋設しているような痕跡は見あたらない。

この周辺はカマドの可能性を考え慎重に掘り進めている。しかし、カマドを構成するための要素(礫・袖部の高まりなど)を確認できず、また壁上を精査したが、剥出しピットや煙道なども検出できなかつた。そこで炭化物を取り除き精査したところ、その下に焼土のまとまりが現れた。規模・平面形は85×60cmの楕円形状で、深さは15cmを測る。焼土は、にぶい黄褐色土と赤褐色土との混合土で締まりはない。

南東壁を切って観察したところ煙道風の窓みを確認した。窓みには炭化物などは確認できなかつたことから、かつてカマドがあったが、あまり使用されずに廃棄された可能性を指摘できる。

本米のカマドは北・東壁のどちらかにある可能性が高い。

〔床面施設〕 確認された壁下に幅10cm程度の溝を検出した。南壁東側にもその壁溝は巡り、南東隅で北側に曲がる。そのことから、検出に難航した南壁の延長線が調査区外小前で北側に曲がることが分かり、推定線を描く参考とした。

〔柱穴〕 床面上で13基(P4は欠番)確認した。口径・深さは第19図に表示した。調査区外に延びるP1は断面形から柱穴とは言い難いかもしれない。P2は炭化物に覆われおり、柱穴として機能していたかどうか疑う。P5は口径や深さから見て、主柱穴と見ていいだろう。P7・9・14が西側床面に並んで配置されているように見える。

〔出土遺物①〕 埋土や床面から土器器約200片、須恵器約40片が出土しているが、特に上部器については小破片のみであった。須恵器については比較的の残りはよい状況であった。

2~6は図面上にその出土位置を載せてある。2は須恵器の短頸壺の口縁部で、床面南東部の炭化物集中区で出土しているが、埋土中はもちろん、西側のⅢc6fグリッドや南西部のⅢc8hグリッドの検出面(V塙下)で出土した破片とも接合する。廃棄されたか何かの施設(カマドの心材?)に利用された可能性が考えられる。3は床面で伏せた状況で出土した須恵器の壺で、回転糸切り痕が観察される。断面図下層出土土器片Pと接合した。4は須恵器の大型の壺の体部片。生文課試掘トレンチの際の埋め戻し土(堆土)や土層断面ベルトの2層からまとめて出土した体部と接合する。6は土器器の壺で糸切り痕が観察できた。出土土器には内墨の土器片(図中5)も含まれるが、破片が多く、7が唯一國化できたものである。石器は287の磨石が焼土炭化物範囲から出土している。

〔平成19年度調査概要〕 平成18年度調査で、安全のために大きく法面を残して中断していた当遺構の東壁を、平成19年度に精査した。この調査は私道が直角に削られ危険を伴う作業であったが、前

年度に検出できなかったカマドを検出した。大きなカマドで、東側に煙道部などが延びると思われるが調査区外で確認できなかった。また、東壁との関係(袖部との境界等)も把握できなかった。

〔カマド〕 東壁の南寄りに付設されている。規模は幅1.15mで、南壁際から1.80m程離れた位置にカマドの右袖が、2.95mのところに左袖の高まりが検出された。それぞれに長さ40cm程の礫が埋められ袖の心材としており、ハの字状に礫が配設されカマドを構成している。検出時は大きな礫が、前方に2個ほど水平な形で載せられていた。その礫の後方を慎重に精査したところ完形の甕9が正位状況で現れ、その後方には甕10(右)と甕11(左)が逆位で現れた。また周辺には多くの坏の破片が散乱していた。10と11を取り除くと礫が土師器甕に被さるように埋められていた。大型の礫の下からは土器は出土していない。カマド埋土が人為的要素の強いことから、大型の水平な礫は構成座ではなく、人為的に埋められたカマドを塞ぐような機能を持っていたのではないか、出土した甕や坏は儀礼的な意味を持つのではないかと推測される。燃焼部は非常に広範囲で、焼土の厚さも最大で15cm程になる。奥の構造と煙道などの施設は、精査できなかったが、長い間使われていた可能性を示す。そのカマドを棄てるに当たり土器を設置し、そのうえに土をかぶせ、最後に土器を壊さないように礫を置いたという行動が見える。

〔出土遺物②〕 新たに4024gの土師器・須恵器が出土している。カマド周辺で出土した上記の土師器の甕3体は、明確ではないが墨書きや朱塗りされているような痕跡がある。また12のカマド内から出土した土師器の坏には墨書き(木)が確認された。墨書き坏以外の土師器坏はカマド内ではなく床面から出土しており、内墨のものはない。唯一、17の高坏もしくは台付き鉢の内墨の底部が埋土上位から出土している。一方カマドの中は須恵器の坏が多数を占め、19にも不明ながら墨書きの痕跡が見える。カマド出土坏の口径は、14cm前後となるのに対して、床面で出土した2や26などは口径が15cm超えるものがある。これらの坏は周辺で出土した坏とともに、底部には回転糸切り痕が観察される。

土製品ではカマド内と周辺から2点の土鍤(273・274)が出土している。その他276や277の不明の粘土塊が出土している。

〔時期〕 出土遺物等から平安時代9世紀後半から10世紀初頭にかけての遺構である可能性が高い。

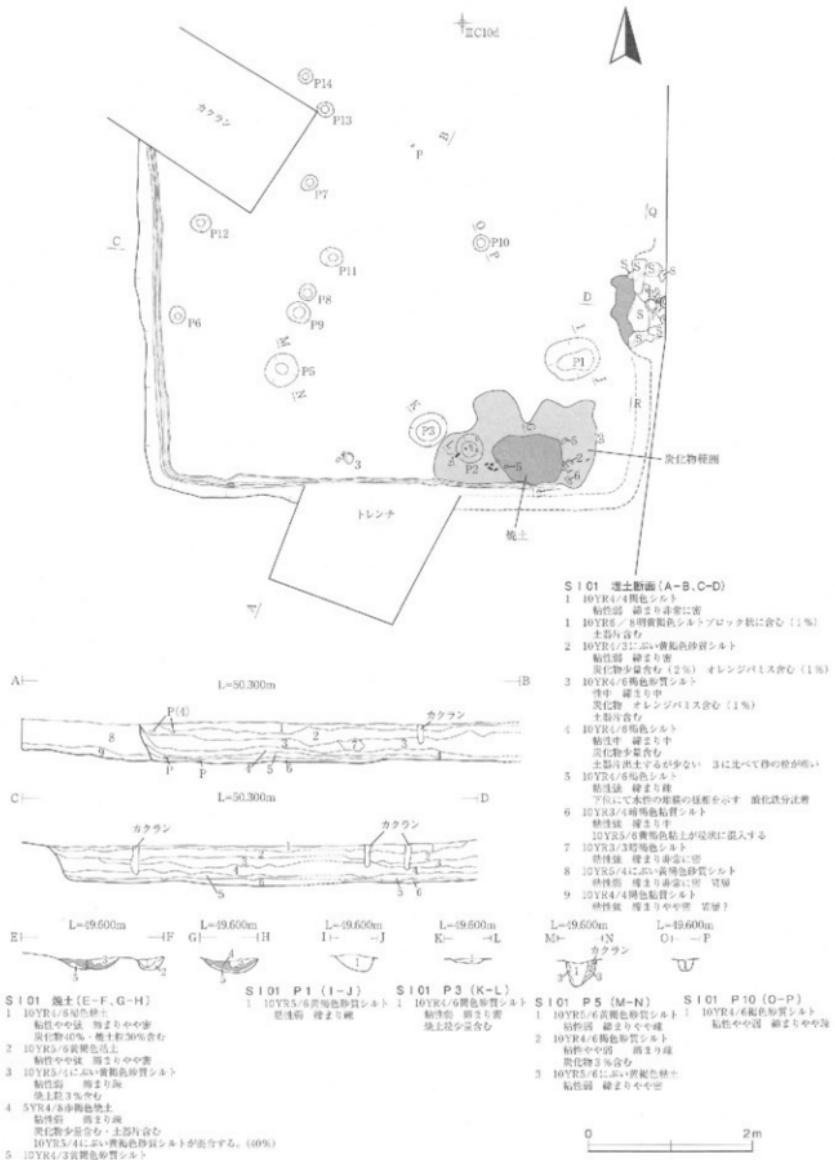
S I 02 穴住居跡(第20図・62図、写真図版16・17・63)

〔位置・検出状況〕 III C 7・8 bグリッドにひろがる。平成18年度の調査で宅地との境界を法面として残していた区域での検出である。3号堀の東側を精査終了後に、V層の掘り下げを行っていたところ調査区外に近いところで土師器が出土し、プランを見つけようとしたが得られず、VI層下で炭化物を含む焼土を検出したことから、聚穴住居跡(B 7号聚穴住居跡)とした。断面の観察の結果、壁の立ち上がりが一部判明したが、ほとんどが削平した状況での登録となった。

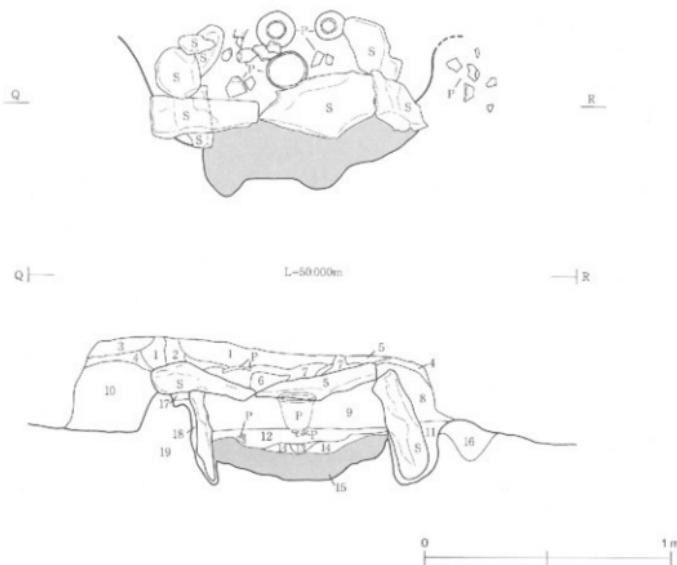
〔重複・隣接関係〕 遺構の北側3/4が調査区外にある。また西側は3号堀に切られる。約7~8m南東側にS I 01がある。

〔埋土・堆積状況〕 最上位に非常に固く締まる溝みかかった褐色土が載るのはS I 01に似る。主体は中層の非常に固く締まる砂質の黄褐色土や褐色土で、炭化物が多く含まれる。下位にはやや粘土質の暗褐色土がある。全体的にみればS I 01と同じような堆積状況を示すが、酸化鉄を多く含んだ褐色のシルトや粒の粗い砂ではなく、埋土に土器片の混入が少ないと云う違いはある。上位から西側にかけて3号堀の埋土となる基本層IV層が遺構を切っているのが確認された。

〔平面形・規模〕 北側は調査区外で西側は切られており、また南側壁を削平したことから全体像はつかめない。よって平面形は方形としか言えない。検出したのは住居跡の南床面の一部のみである。



第18図 S I 01 壁穴住居跡



- S I 01 カマド (Q-R)
1. 10YR4/4褐色シート
粘性やや強 硬まり難
炭化物3%、熱土粒り含む
 2. 10YR3/3暗褐色シート
粘性やや強 硬まりやや密
 3. 10YR4/3(1)・3(2)褐色シート
粘性強
炭化物10%含む
 4. 10YR4/3(3)・3(4)褐色シート
粘性やや強 硬まりとても密
炭化物少含む
 5. 10YR4/4褐色シート
粘性やや強
熱土多量含む(40%程度)
 6. 10YR3/3褐色シート
粘性やや強 硬まりやや密
炭化物20%、熱土10%含む
 7. 5YR3/4暗褐色硬土
粘性強、弱まり薄
炭化物5%含む(8%熱土セメントブロックで含む)
 8. 10YR4/4褐色砂質シート
粘性強、硬まり薄
 9. 10YR4/4褐色砂質シート
粘性強
硬まり難
炭化物微塵に含む
 10. YR3/4暗褐色シート
粘性強
炭化物含む
 11. 10YR4/3(1)・3(2)褐色砂質シート
粘性やや強 硬まりやや密
炭化物3%含む
 12. 10YR3/4暗褐色砂質シート
粘性強、硬まりやや強
炭化物ブロック(10%) 热土粒(10%)含む
上層片含む
 13. 10YR4/4暗褐色シート
粘性強 硬まり難
 14. 5YR5/4褐色砂質
粘性強、弱まり薄
炭化物20%含む
 15. 2.5YR4/6中硬急凍土
粘性強 硬まり難
炭化物に含む
 16. 10YR5/4黄褐色シート
粘性強、弱まり難
炭化物含む
 17. 10YR3/4褐色シート
粘性強 硬まり難
 18. 10YR4/4褐色シート
粘性やや強 硬まりやや密
 19. 10YR4/4褐色シート
粘性弱 硬まり難、厚壁?

P	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
口徑cm	47	38	40	欠	36	20	17	20	28	16	26	24	20	18
深さcm	20	6	4	欠	30	5	17	7	10	14	19	7	7	4

第19図 S I 01 蝋穴住居跡カマド

それから推測すれば規模は東一西壁径が4m前後となろう。

〔断面形・深さ〕 断面で見る南壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は48cmを測る。この深さはS I 01とほぼ同じ数値を示す。

〔焼土〕 住居跡床面の南東側に炭化物や遺物の混入する上坑状の凹みを確認した。埋土は炭化物を多く含む黄褐色土と焼土が混合された状況で人為的な様相を示している。底面からは土師器の壺が一括で出土した。南側半分の検出で詳細は不明だが、南北に70cm以上、東西に65cmを測る。不整な橈円形状である。

〔床面施設〕 焼土の南側に煙道状の凹みがあり、小さな竪穴住居跡のプランが検出された。規模は南側の東一西壁径で3.64mである。埋土は暗褐色土を中心とした混合土で縄文土器片が1点出土した。これらのことから、南壁の東寄りにカマドを持つ4m前後の古い住居跡を埋めてS I 02の貼床としたことが考えられる。

〔柱穴〕 全部で12個の検出である。開口部径はP 1が68×62cm、P 2が40cm、P 3が概ね30cm前後を測る他は、10~20cmで小さい。古い住居跡の煙道部と想定するP 12を柱穴とするならば開口部径52cmで位置や規模的にP 1と主柱穴を成す可能性がある。

〔カマド〕 S I 01と同じように南側壁にあったものを廃棄して新しいカマドをつくったとすれば、東壁の南寄りに設置されている可能性が高いが調査区外になり確認できなかった。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器が1475g出土した。ほとんどが破片であり、復元し図化できたものは土師器2点、須恵器2点のみである。27は焼土内一括で出土した土師器の壺が墨が観察される。同じように28の土師器杯と29の須恵器壺でも墨の痕跡がある。どちらも口径は14cm前後となり、S I 01のカマド内の状況と似ている。

〔時期〕 出土遺物等からS I 01と同時期の平安時代9世紀後半から10世紀初頭にかけての遺構である可能性が高い。

S I 03竪穴住居跡(第21・22・64図、写真図版18・19・64)

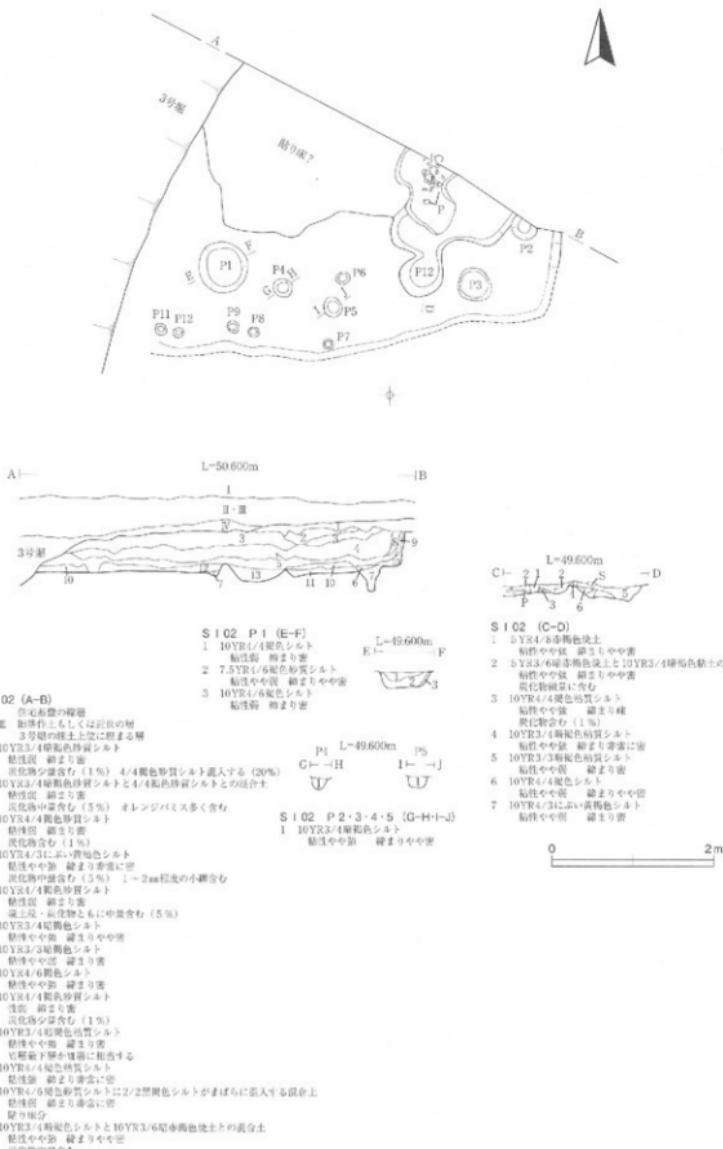
〔位置・検出状況〕 III B 1・2 h グリッドにひろがる。C区北側河道域近くでのⅦ層面での検出である。このグリッド近くは河道側(西側)にむけて若干下がり気味であり、北側は砂(基本層序参照)が厚く堆積していた。砂層をはずしながら検出していたところ、方形の暗褐色土のプランを得た。土器の出土はなかったが、古代の竪穴住居跡として登録した。

〔重複・隣接関係〕 遺構の東側が調査区外にある。北側にやや離れては砂が堆積し、南側は旧河道域として落ち込む。

〔埋土・堆積状況〕 最上位に縮まりある褐色または黄褐色のシルトがある。中位には固く縮まった暗褐色土があり、ローム土や炭化物などを含む。最下層の暗褐色土にはやや砂が混じる。全体的に擾乱が多く、自然堆積ではあるが人の操作が何える箇所もある。同じ古代の遺構S I 01やS I 02と比較して粘土質の暗褐色土がやや厚く堆積している様相が見える。また上層に見える黄褐色のシルト層は後述するS I 04の埋土の主体となることも違いとしてあげられる。

〔平面形・規模〕 北東壁は調査区外に伸びて断定できないが、平面形は北東壁が斜めになる略台形状になるとされる。やや北-南軸が長くなり、規模は東壁-西壁径で6.20mを測る。北-南軸は7m前後になろうか。

〔断面形・深さ〕 断面で見る南壁と東壁はやや斜めに立ち上がり、壁高は南壁で28cm、東壁で22cmを測る。概ね20cmで推移するが、カマド状の高まりのある西壁はなだらかで低い数値が与えられる。



第20図 S I 02 積穴住居跡

床面の高さは標高49.40m前後となり、S I 01や02とはほとんど変わらない。

〔カマド状〕 西壁にカマド袖状の高まりと細く延びる煙道状の溝を検出した。袖の幅は、壁間隙が2.24m、末端が1.78mを測り、ハの字状を呈する。煙道部状の溝は長さ2.50m、幅50~80cmを測り、埋土は住居跡下位の暗褐色粘土が主体となるが、一部に焼土と炭化物が混入する黒褐色上層が認められた。燃焼部と想定できる箇所に、焼土や炭化物の広がりは確認できなかった。

〔柱穴〕 全部で7個の検出である。開口部径はP 1が90×52cm、P 2が70×62cmの大型で、深さが24~30cmを測る。他は20~30cmである。

〔出土遺物〕 床面下より繩文土器の溢形土器が1点(46)出土した。その他、繩文・弥生土器と土師器片をあわせて57.8g出土しているが、摩滅していて詳細は分からぬ破片ばかりとなる。

〔時期〕 床下から出土した土器片は基本層序Ⅶ層の出土ととらえ、埋土や平面形などから古代の遺構と考えられる。

S I 04堅穴住居跡(第23図、写真図版20・21)

〔位置・検出状況〕 1A 6・7・8 gグリッドに位置する。D区(調査区最北部)で最初に登録した遺構である。Ⅵ層暗褐色土下(実際は基本層V a層下)を検出面としてクリーニングしたところ、溝状のプランを得て精査を開始した。しかし、その暗褐色土は遺構中心部に潜り込んでいることが判明し、グリッド近くをやや下げた結果、灰褐色のテフラ状のシルトとともに若干の土師器片が出土した。再度検出を試みたところ、褐色土の汚れている方形のプランを得て古代の堅穴住居跡として登録した。壁の立ち上がりなどつかめないところが多かったが、断面を頼りに精査を行っている。

〔重複・隣接関係〕 北西側にS I 08、南東側にS I 07、東壁側にSK 03が隣接する。南東隅に付属の土坑として登録したSK 05は単独の遺構とした。

〔埋土・堆積状況〕 最上位には黄褐色で灰白色のテフラを含んだ砂質シルトがある。この層は遺構の中央部にあり、10cm程度の厚さを持つ。埋土の中心となるのが、黄褐色または褐色の砂質シルトで、非常に締まりよく固い。最下位には水性の粘土を帶状に含む暗褐色のシルトが床面を覆っている。この状況はB区検出のS I 01の状況に似ているが、S I 01がやや粒の粗い砂が混じるのに対し、粘土が主体を成すという違いが見受けられる。全体的に層位にあまり凸凹なく、特に最上位の暗褐色土はほぼ水平に堆積していることから、洪水によって埋まった様相を示す。

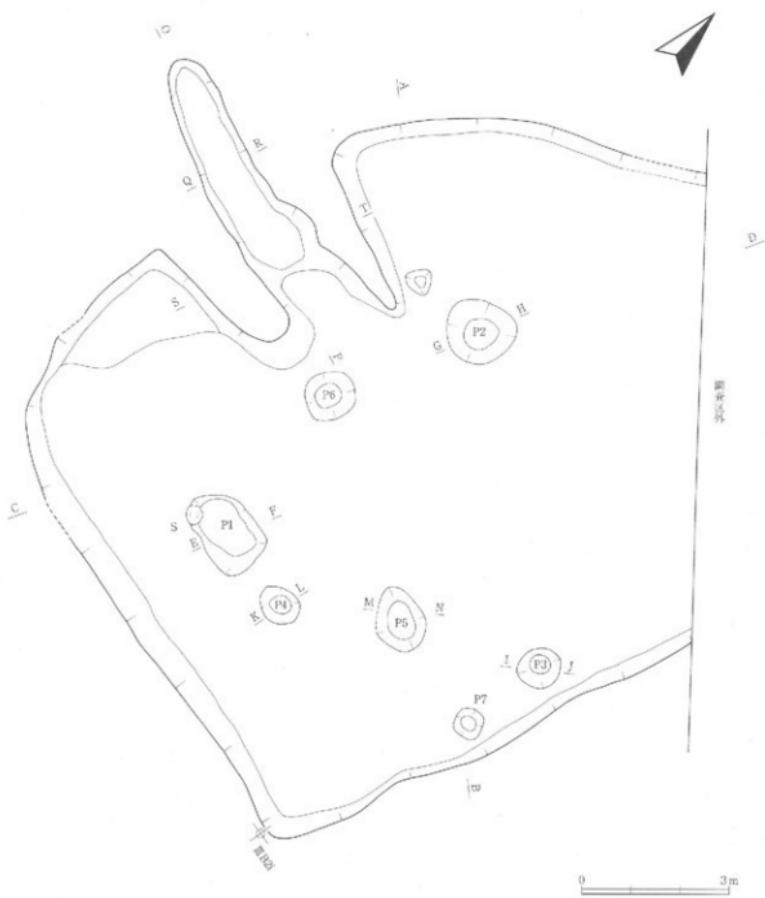
〔平面形・規模〕 平面形は隅丸の方形を呈す。方位輪はN-50°Wで長軸は北西-南東に傾く。開口部径は北西壁から南東壁まで6m、北東壁から南西壁まで5.26mを測る。

〔断面形・深さ〕 壁は全体的になだらかに立ち上がるが、東壁は比較的急である。壁高は、西壁が40cmで最も高く、他は概ね30cm前後となる。床面の標高は48.70mで、B区検出のS I 01や02、また同じ河岸沿いのS I 03の49.40mに比べて70cmも低くなっている。

〔カマド状施設〕 西壁の北寄りにカマド袖状の高まりと煙道状の溝を検出した。その高まりは埋土や床面と土色の上で区別がつかなかったが、明らかに周りより固く締まる感じであった。若干の焼土のような赤褐色のシルトや炭化物が混入していた。煙道状の溝は浅いが、埋土が黒褐色で炭化物も観察できた。カマド袖状の高まりの幅は1.10m、溝の長さは北西壁から80cm延びる。

〔床面施設〕 南側隅に土坑(P 1)を検出した。その大きさや位置などから貯蔵穴のような機能を果たしていた可能性がある。開口部径は1.36m×1.12mで断面形は逆台形状を呈す。深さは北壁で36cmを測る。

〔柱穴〕 全部で9個の検出となった。P 6が最も大きく主柱穴であると考えるが、他の配置に規則



第21図 SI 03 穂穴住居跡①



第22図 S I 03 積穴住居跡②

性なく判然としない。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。検出時テフラ上位で数点の土師器片を得ている。

〔時期〕 埋土の状況はS I 01や02に似る。上位にテフラを含むことや後述するS I 05との関連からS I 01や02より新しい古代の可能性を指摘できる。

S I 05豊穴住居跡(第24・62図、写真図版22・23・63)

〔位置・検出状況〕 IA 8iグリッドに位置する。5号堀(D 1号堀)の埋土となる黒褐色土(IV層?)が広がりを持っており、その黒褐色土下からテフラとともに土師器片が出土し、古代の豊穴住居跡として精査を開始した。北西側に隣接するS I 06との関連や埋土と礫の区別が付きにくかったことから調査は難航した。しかしS I 04と同様の褐色土が埋土として認められ、一部壁の立ち上がりが確認できたことから登録することにした。

〔重複・隣接関係〕 北西側でS I 06と重複する。また、南側は調査区外に延びる。図ではS I 06に切られているように示しているが、埋土の状況から判断したもので、明確に把握できたわけではない。

〔埋土・堆積状況〕 埋土断面(I-J)に見える最上位の黒褐色土は4号堀(D 1号堀)の埋土となるもので、その下に混合土がありテフラを含み、土師器片も出土する。中心となるのが、非常に固く緻まり砂質の黄褐色土層である。S I 04にも認められるが、更に明るさが増し水に濡れると黄色く輝くような色調になる。下位には粘土層あるが、粘土層の上位が床面となるかもしれない。よって掘りすぎている観がある。

〔平面形・規模〕 北壁と東壁のみの検出ではっきりしないが、隅丸の方形を呈する。主軸方位は、ほぼ南北に沿うような形をとる。規模は南北壁で5.50mから6mほどになろうか。

〔断面形・深さ〕 確認できた北壁は斜めに直線的に立ち上がる。その壁高は44~52cmを確認した。床面の標高は48.50mでS I 04よりも尚低い。

〔柱穴〕 検出されていない。

〔出土遺物〕 136.1gの土師器片他、検出時に基1-1グリッドで11.8gの土器片を得ている。これらの土師器はすべて埋土上位、灰褐色シルトを含む層での出土である。31と32は赤焼きの土師器窯でどちらも丸底窯である。32は底部径が4.4cmと比較的小さい割に器高が6.2cm有り、口径も推計15.8cmで大きい。

〔時期〕 出土遺物はS I 01や02よりもやや新しい様相を示すが、テフラの堆積や出土土器が埋土上位であることから判然としない。土坑として良いかも知れない。

S I 06豊穴住居跡(第24図、写真図版22・23)

〔位置・検出状況〕 IA 6・7 h・iグリッドに位置する。北側で他の住居跡と重複した形となっていたが、その住居跡は登録抹消となり新しい遺構として、再登録した。南側の壁はつかめなかつたが、断面による観測で得たラインを推定線で入れている。

〔重複・隣接関係〕 南側でS I 05と重複する。断面の観察からS I 05の埋土となっている黄褐色土を壁としている様子がうかがえた。しかしふルト断面による観察なので、全体像は推定するしかなく、方形のプランを基調に描いた。西壁は調査区外に延びる。北側に主軸方向が同じなS I 04がある。

〔埋土・堆積状況〕 1回目の検出時に認められた遺構上位に載る黒褐色土は、北側で4号堀(D 1号堀)の埋土となっていることが確認された。当遺構を切っているように見えない。遺構の埋土上位は暗褐色土で、その下には灰白色のテフラが混入する。このテフラの混入状況は、他の古代住居跡の

なかで最もまとった形で検出できた。埋土の中心は、他の住居跡と同じ砂質の褐色土となる。色調や縮まり具合で細分できるのも特色の一つとしてあげられる。この褐色土は南側で明黄褐色シルトに変わり、その境目を喫とした。明暗が壁と埋土の違いとなるが、その特色は他の住居跡でも同じである。最下層は暗褐色粘土である。S I 04に見られるような水性堆積物は見受けられない。全体的に自然体積的な状況を示している。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸の方形と推定される。遺構の西側が遺構外に延びるために南西壁は検出できなかった。主軸方位はN-50°-Wで北西側に傾くのはS I 04と同じである。規模は北壁から南壁が6.50m(推定)東壁から西壁が5m以上を測る。

〔断面形・深さ〕 下げきってしまった経緯があり壁の立ち上がりは明確ではない。断面観察では40cmほどの比高を持って斜めにあがるのが見えた。床面の標高は48.70mでS I 04とは同じ高さとなる。

〔柱穴〕 小さな個検出した。開口部径30~40cmの4個の柱穴には配置に規則性がある。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 S I 04と同時期と考えられるが、埋土の違いからやや前後するかも知れない。

S I 07堅穴住居跡(第25図、写真図版24)

〔位置・検出状況〕 IA 8・9 g・hグリッドにまたがって位置する。Va層暗褐色土を除いた面での検出である。灰白色テフラは検出できなかったので安心していたところに、白みがかった方形のプランを得て、断面観察から壁状の立ち上がりを認めて古代住居跡と登録した。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。北側1mでS I 04と隣接する。西にはS I 06、南にはS I 05がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色土主体のテフラを含む層は観察できなかった。主体は砂質の褐色土で、非常に固く縮まり、乾くとコンクリートのように固い。下位には粘土層が認められるがS I 04などのあるような暗褐色粘土ではなく、やや砂質である。全体的に砂が卓越し壁も柔らかい粒の粗い砂となる。

〔平面形・規模〕 平面形は略正方形で、隅も角度を持ち隅丸とはならない。北西壁から南東壁までの開口部径は4.70mを測る。

〔断面形・深さ〕 壁は全体的に直線的に斜めにあがるが、西壁は角度を持つ。また、南壁はややふくらみをもって上がるが、テラス状にはならない。壁高は東壁33.5cmで最も高く、ほかは28~30cm前後である。床面は北床から南床にかけてやや下がり気味であるが、概ね標高48.60mを測る。

〔床面施設〕 床面南側に土坑を検出した。平面形は楕円形で、規模は1.40×1.24mを測る。断面形は逆台形状で、底面が平坦となる。深さは北側壁で24cmを測り、貯蔵穴にしては浅いが、何らかの施設であろう。

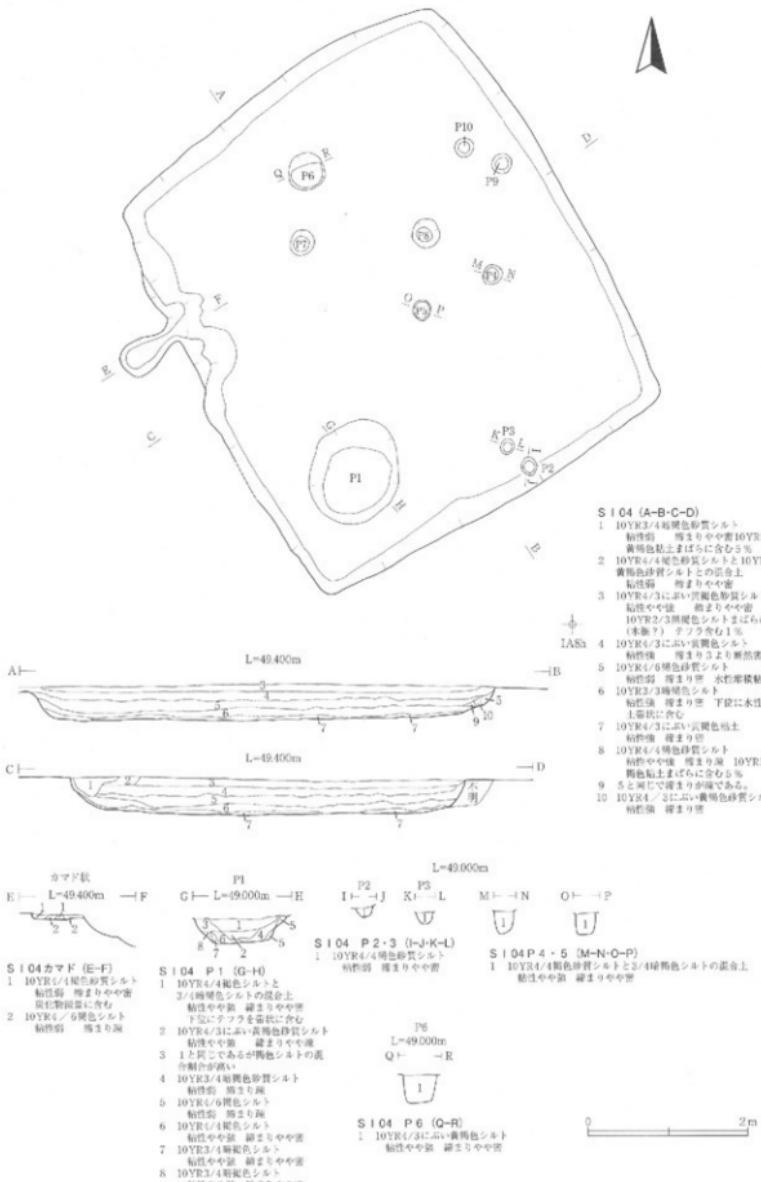
〔柱穴〕 3個検出した。開口部径はP 1が22cm、P 2が28cm、P 3が18cmで、深さは8~10cmと浅い。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

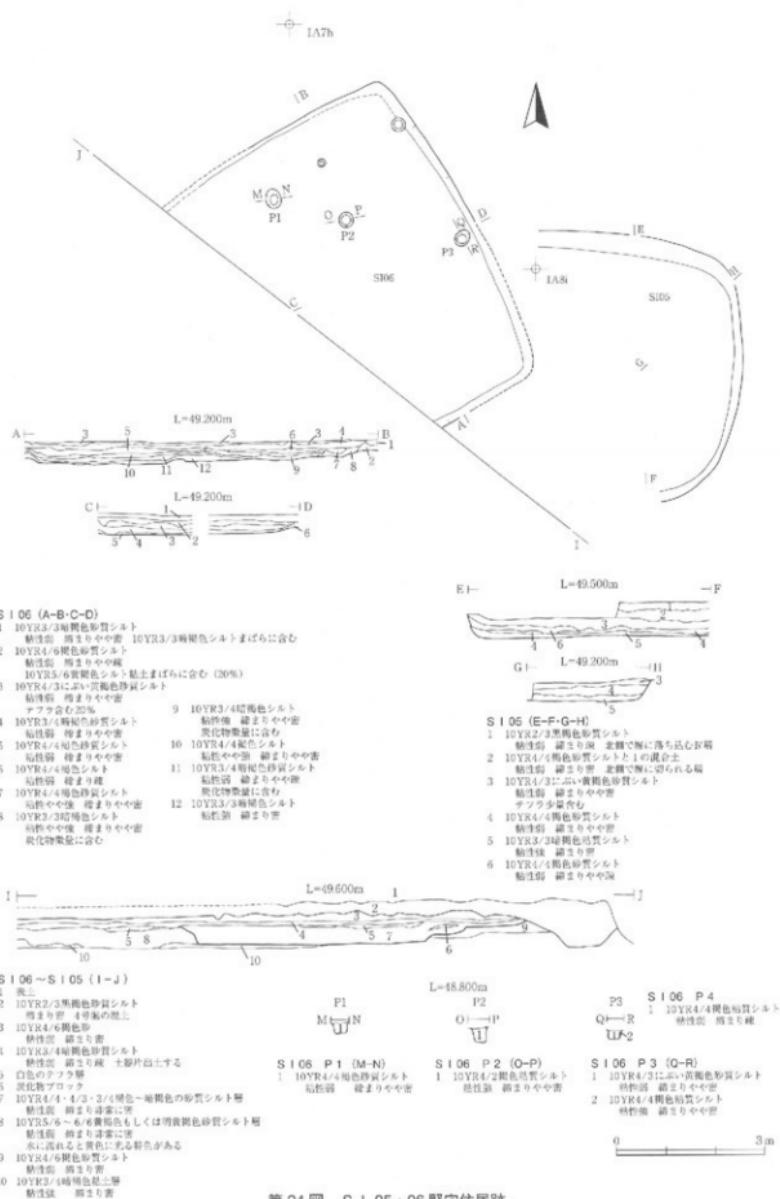
〔時期〕 時期は不明である。堀を埋める黒褐色土も灰白色のテフラも埋土にはない。黒褐色土の下にある黄褐色の砂と埋土の色調が似ており、それらからS I 04や05より新しく4号堀より古い可能性を示唆できる。

S I 08堅穴住居跡(第26図、写真図版25)

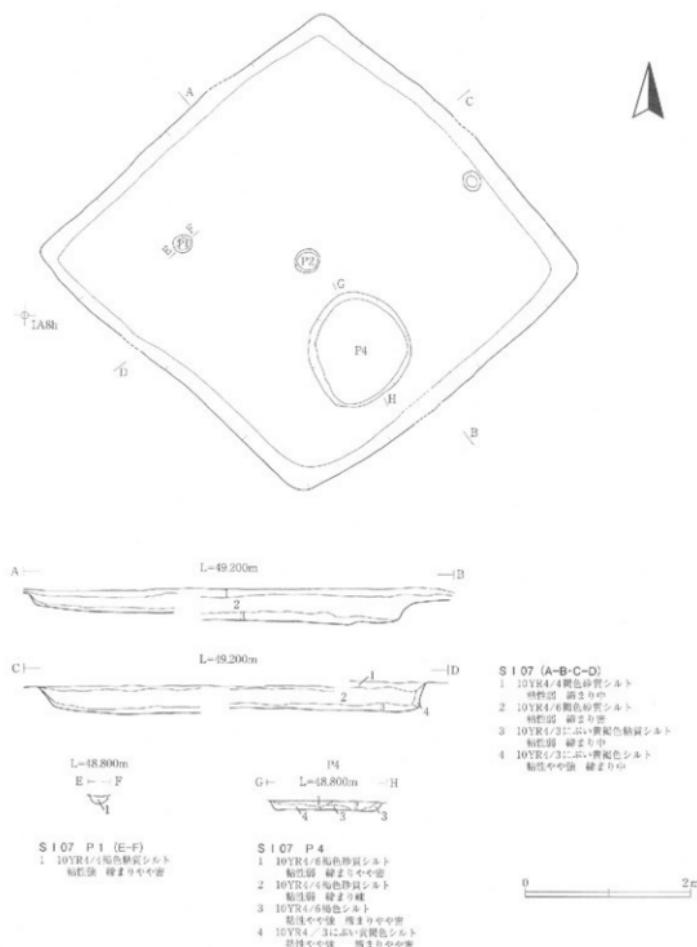
〔位置・検出状況〕 IA 5・6 fグリッドに位置する。調査区北隣に位置する。上面で4号堀と柱



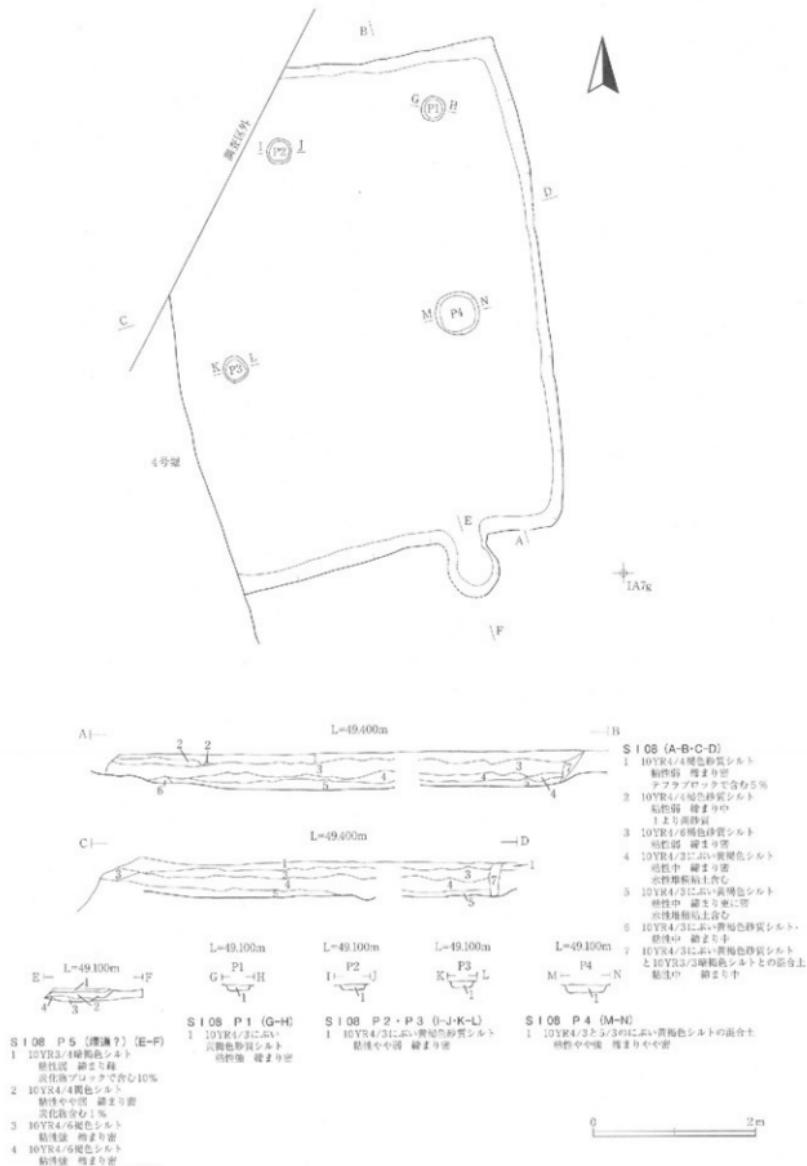
第23図 S I 04 整穴住居跡



第 24 図 S 105・06 穴穴住居跡



第25図 S I 07 穩穴住居跡



第26図 S I 08 竪穴住居跡

穴群（D柱穴状土坑群1）の精査終了後に、テフラの混入する砂質の褐色土のプランから堅穴住居跡と登録した。

〔重複・隣接関係〕 西側を4号堀に切られる。南東でS I 04と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位にテフラを含む褐色シルトがある。主体は他の住居跡と同じ黄褐色や褐色土であるが、やや粘土質で、下位には水性の堆積物（赤褐色粘土）が多く確認できる。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形で、主軸方位はN-80°-Wでは北-南になる。規模は北壁から南壁の長さが6mで東-西は4m以上を測る。

〔断面形・深さ〕 北壁と東壁で立ち上がりを観察できた。東壁はほぼ垂直に上がり壁高は42cmを測る。北壁はややなだらかに上がり壁高は40cmになる。床面の標高は48.70mでS I 04とはほぼ同じになる。

〔床面施設〕 南側壁の東隅に押造状の凸を検出し、精査したがカマド跡にはならなかった。

〔柱穴〕 全部で4個検出した。間口部径は30~60cmで様々であるが、深さは8~10cmで一定している。

〔出土遺物〕 埋土から、S I 05出土類似の摩滅が著しい赤焼きの壺44.8gを得ている。

〔時期〕 埋土などからS I 05と同時期の可能性が高い。

② 繩文・弥生時代

基本的に縄文・弥生上器の出土しているものをあげている。炉跡や焼土が検出されているものは少なく、すべて堅穴住居状造構と一括した。規模が大きくて土器の出土のないものは土坑として、(2)で触れている。

S I 09堅穴住居状造構（第27図・64~67・76・83図、写真図版28・64~66・77~79）

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 6・7 fグリッドに位置する。平成18年度から土器片が集中していた区域で、19年度に登録した。造構内の出土遺物に取り扱いについて述べておく。B区の平成18年度調査は、Ⅲ C 6・7 fグリッドに黒褐色土のプランがあったが、造構外出土遺物としてグリッド名を付して取り上げた。平成19年度ではB2号堅穴住居跡として精査を行っている。出土した土器は、平成18年度出土した造構外土器と接合することが多かった。そこで平成18年度に出土したグリッドVI層出土土器は当造構の出土土器とすることとした。

精査の状況は黒褐色土からは多くの遺物が出土するものの、中位からは出土がほとんどなく、床面として捉えた褐色土面からは1点の土器が出土したが時代に大きな差を生じ、壁の立ち上がりも焼土なども検出できなかった。そこで埋土1・2層を住居跡と捉えた。平面図はその黒褐色土の範囲を示したもので、北側壁の範囲は明確にできなかった。

平面写真はⅦ層まで掘り下げた面での完掘写真であり、上位検出の柱穴状土坑や搅乱も入っているので留意願いたい。

〔重複・隣接関係〕 古代から中世関連であればB柱穴状土坑群1・2やSD 06、SX 01は当造構の検出面上にある。3号堀が北西側に隣接し、東西に走っている。同時期のものとしてはS I 11が北側に隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に弥生土器を包含する黒褐色土が載る。その厚さは確認面から20cm前後である。東側断面に小さく壁が上がるのが観察された。この黒褐色土面で柱穴や溝などの搅乱を受ける。3層目は当造構の床面下になりⅦ層に類似する。最下層からは造構外出土土器198と199が出土している。

〔平面形・規模〕 平面形は北側壁を欠損するが不整な円形を呈する。規模は南西壁と北東壁の開口部径で5.82mを測る。

〔断面形・深さ〕 壁は緩やかに立ち上がり、深さは東側壁比高で18cmである。

〔床面施設・柱穴〕 炉はない。暗褐色土面(床面)からは柱穴は検出できなかった。写真にある柱穴状土坑はすべて搅乱の土坑である。

〔出土遺物〕 前年度に調査したⅢ C 6・7 f グリッドの基本層序VI層、そして S I 09 (B 2号堅穴住居跡) 埋土上位1層出土土器を登録した。平成18年度はⅢ C 6・7 f グリッドから土器片3845g、石器191点(2505g)が出土している。平成19年度で埋土上位としてとりあげたのは、土器片が5002g、石器が剥片・砾石器合わせて138点(17304g)出土となった。2年間のトータルで土器約8.8kg、石器約19.8kgの出土量になる。この出土量は包含層1に次ぐ量となる。遺物各々の詳細はⅦ 出土遺物で後述するとして、ここではその特色についてのみ触れる。(P139～P141参照)

上器は、鉢形土器では浅鉢ではなく小型の鉢が多い。壺形土器が卓越し複合口縁のものが多くなる。中には口縁部が大きく開き深鉢状になるものや、口縁部がながく内湾するものなどがある。壺では長頸壺と思われる大型の土器や、土師器と間違えそうな無文のものもある。またミニチュア土器といわれる小型の土器が出土しており、それらは口縁部が山形もしくは波状となる特色を持つ。これら小型の土器は上層で出土したものも含まれ、時期的に古いものもあるかも知れない。土製品では278の粘土塊が出土したが、古代期(V層出土)の可能性もある。

石器では、剥片は非常に多いが製品は少ない。288の石鏃はアメリカ式で、奥羽山脈産の、めのうを石材としている。289は奥羽山脈産頁岩のものである。290と298は北上山地産の頁岩を石材としているもので未製品かあるいは石鏃ではなく不定形石器とすべきかも知れない。石匙は出土していない。そのかわり石錐が9点と多く、石鏃と比較すれば完形品が多い。完形品はすべて奥羽山脈産頁岩を利用している。石鏃と同じように北上山地産頁岩を石材としているもの(300)は欠損しており詳細は不明である。スクレーパーでは赤色頁岩が卓越する。砾石器では、凹石(310・311)がある。穿孔される小さな石製品(312)も出土している。

〔時期〕 出土遺物から弥生時代後期の可能性が高い。

S I 10堅穴住居状遺構(第28・67図、写真図版29・31・66・80)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 8 d・e グリッドに位置する。当グリッドから北側は18年度に2号堅穴住居状遺構として精査した区域である。18年度にはⅦ層下まで下げた状況で終了し、登録を削除した。

19年度にその上面で違うプランが検出され、B 4号堅穴住居跡とした。検出面はVI層下面である。

〔重複・隣接関係〕 平成18年度検出し削除となった2号堅穴住居状遺構に西側を切られ、欠損する。当遺構はその2号堅穴住居状遺構の埋土上位に広がる遺構である。南西側でS I 11と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土が主体となる。平成18年度の2号堅穴住居状遺構では、暗褐色土層の下の黒褐色土まで下げている。

〔平面形・規模〕 図面に見る東側の落ち込みは、平成18年度の精査分である。断面形は円形を呈すと考えられる。規模はC-D間の開口部径で5.32mであり、円形とすれば5.50m前後となろう。

〔断面形・深さ〕 壁は直線的に斜めに上がる。深さは南壁比高で18cmを測る。底面は平坦で周く繋まる。

〔床面施設・柱穴〕 炉跡はなく、平成18年度でも周辺に焼土などは検出されていない。中央部に、平面形が橈円の柱穴状土坑が1基検出された。規模は1.00m×86cmで深さは最大で26cmを測る。

〔出土遺物〕 土器712g、石器10点(52.5g)が出土した。82は壺の口縁部で複合口縁となる。83と84は山形や小波状の沈線を持つ破片である。埋土から出土した2点の石鏃(313・314)はどちらも奥

羽山脈産の頁岩である。

〔その他〕 18年度2号住居状遺構精査中には900gの土器が出土している。遺構外出土土器241は平成18年に2号住居状遺構埋土上位としてとりあげた甕である。遺構外出土石器323のアメリカ式石鏡も同様の出土である。

柱穴状土坑の埋土出土炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)の結果、曆年較正用年代で2199±32 (Libby Age (yr B.P.)という数値がでた。

〔時期〕 平面形や規模など不明な点が多いが、時期としては出土土器から弥生時代中期～後期の可能性が高い。

S I 11 積穴住居状遺構(第28・67図、写真図版30・31・67・80)

〔位置・検出状況〕 III C 6・7 c・dグリッドに位置する。検出面はVI層下である。S I 09同様の暗褐色土のプランを検出して精査を開始した。遺物の出土量が少なく、埋土断面の横にサブトレンチを入れて床面を探り、黄褐色土面を床面と仮定したものの、壁状の立ち上がりが明確でなかった。しかし暗褐色土を若干下げた面から炉跡が検出され、竪穴住居跡と登録した。写真では床面が下げられている。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。南側にS I 09、南東側にS I 10がある。

〔埋土・堆積状況〕 褐色土が中央部に暗褐色土が壁際に埋まる自然堆積である。床面下の暗褐色土はVII層と考えられる。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な円形を呈す。規模は開口部径で、北-南壁が5.30m、東-西壁が5.40mを測る。

〔断面形・深さ〕 壁は直線的に斜めに上がる。壁のもっとも残りの良い北側壁比高で20cmを測る。床面はほぼ平坦である。固く縮まるような感じではない。

〔床面施設〕 床面北側に地床炉を検出した。平面形は梢円形で、規模は54×40cmを測り大型である。非常に焼成良く固く縮まる。焼成面がやや西側に傾く。土器や礫を埋めたような痕跡はない。また床面南側に柱穴状土坑2基も検出した。

〔出土遺物〕 土器片197g、石器2点(331.8g)が出土した。土器は破片が多く、床面をやや下げていることから、上位(埋土)出土か下位(床下VII層)が不明になってしまった土器もある。85は深鉢の口縁部である。口縁部はほぼ直線的に外傾し、口唇部がやや肥厚する。L-R縄文が施文される。86の鉢は王字文もしくは工字文が施文される。石器315の磨製石斧は炉跡周辺で出土しており、床面出土として断定できる。非常によく磨かれている良品で使用痕はない。埋納品であろうか。

〔その他〕 18年度では周辺から土器は出土していない。19年度はIII C 6 dグリッドVI層から、1361gの土器片が出土している。(遺構外出土土器229・245・258・259)

〔時期〕 時期は不明であるが、床面下の暗褐色土をVII層とし、弥生時代以降と想定する。出土遺物からすれば弥生時代の前期～中期の可能性が高いが、仮定の域をでない。

S I 12 積穴住居状遺構(第29・68図、写真図版32・33・67)

〔位置・検出状況〕 III B 2・3 i・jグリッドに跨って位置する。検出グリッド周辺はVI層下位に黒～暗褐色土が広がっている。その範囲から竪穴住居跡を想定して精査を開始し、壁の立ち上がりを確認、一括で土器が出土したことから登録した。SK 31と重複し、その前後関係は当遺構が新しいという観点で説明する。

〔重複・隣接関係〕 北東側に多くの土坑と隣接(一部重複)している。それらの土坑は壁をはずした面(やや下がった面)からの検出である。東側で大型土坑SK31と重複する。断面観察から当遺構の下として捉え断面図でも示している。しかし土器の様相からSK31が新しい可能性ある。その場合断面図が間違っていることとなるが修正をしていない。

〔埋土・堆積状況〕 埋土の主体は黒みの強い暗褐色土である。床面上や壁際には褐色土や黄褐色土が埋まる。この2つの層をVI層と捉えた。下位の褐色土は、SK31側で落ち込むように厚く堆積する。

〔平面形・規模〕 平面形は不明だが、概ね不整な楕円形を呈すと考えられる。長軸はほぼ北東-南西に延びる。その長さは開口部径で5.00~5.50m前後と予測できる。短軸径は3.70mを測る。

〔断面形・深さ〕 壁は緩やかに立ちあがる。その高さは北西壁が最大で、比高で22cmとなる。

〔床面施設〕 焼土・炭・柱穴などは検出できなかった。

〔その他〕 土器や石器などが出土したことから竪穴住居状遺構としているが、B区で検出した土坑の中でも同規模のものが2基(SK24・25)ある。

〔出土遺物〕 1540gの土器が出土した。87は羽状縄文の深鉢の口縁部で、88はその底部と考えられるものである。89の浅鉢の底部は下位の土坑関連の可能性がある。

〔時期〕 出土土器は床面一括出土であるが浅い面でのものである。この土器を出土させた黒みの強い暗褐色土は、周辺グリッドのみの特色で土器は流れ込みの可能性もある。出土土器の時期は縄文時代後期の特色を示し、遺構の時期は縄文時代後期から弥生時代にかけてと考えられる。

S I 13竪穴住居状遺構(第29・68・86図、写真図版33・67・80)

〔位置・検出状況〕 II C 10 a・b・III C 1 a・bに跨って位置する。河岸段丘北西部の段丘線に近い小高い地形となり、VI層をやや下がった面での検出である。遺構の南側は床面下に同色の土層を埋土とする上坑があり、一部精査を行っている。よって写真や断面図では一部床面がない状況となっている。

〔重複・隣接関係〕 西側約半分が水路に切られる。北側には旧河道が横切り、包含層3Aは北側壁を切る。南側床面下に土坑(SK38)がある

〔埋土・堆積状況〕 埋土は褐色土の単層である。黄褐色土のブロックを含むその特色はVI層よりはV層に類似するが確信を持てない。しかしV層ではない。

〔平面形・規模〕 平面形は不明であるが、隅丸の方形を呈する可能性がある。長軸はほぼ北西から南東に傾く。規模は図C-D断面径で4.75mを測る。

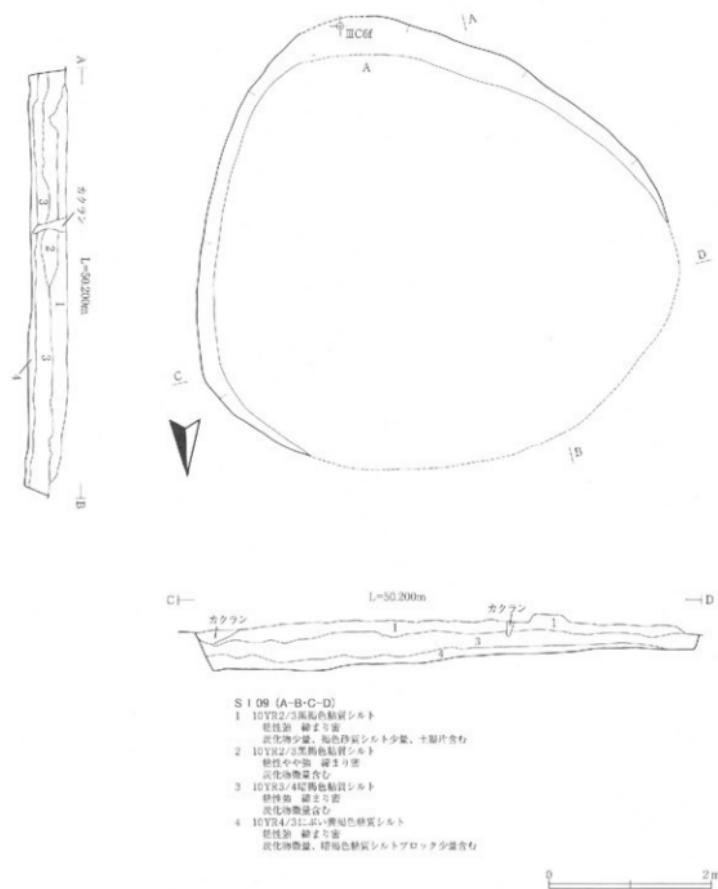
〔断面形・深さ〕 壁は緩やかに立ち上がり、深さは10cm足らずで浅い。上位を削平された結果と予測する。

〔床面施設〕 柱穴や焼土などは検出されなかった。

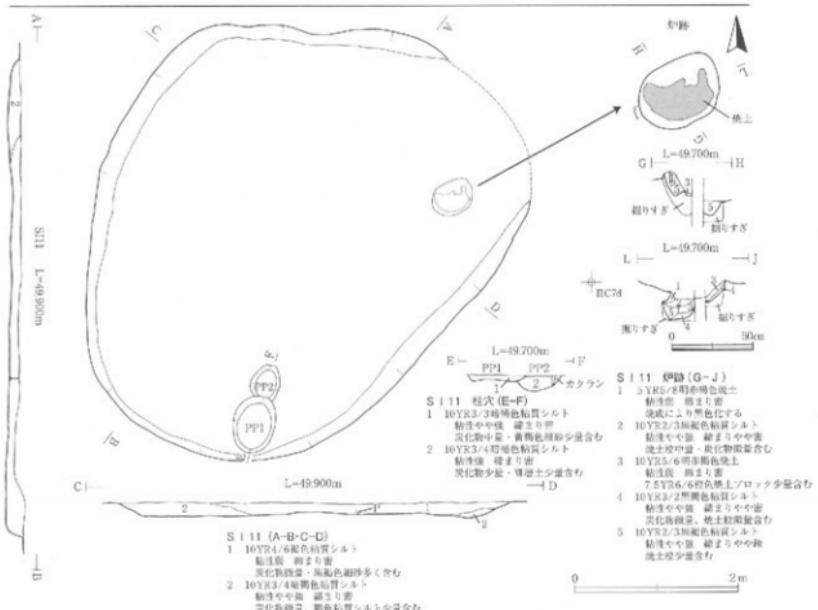
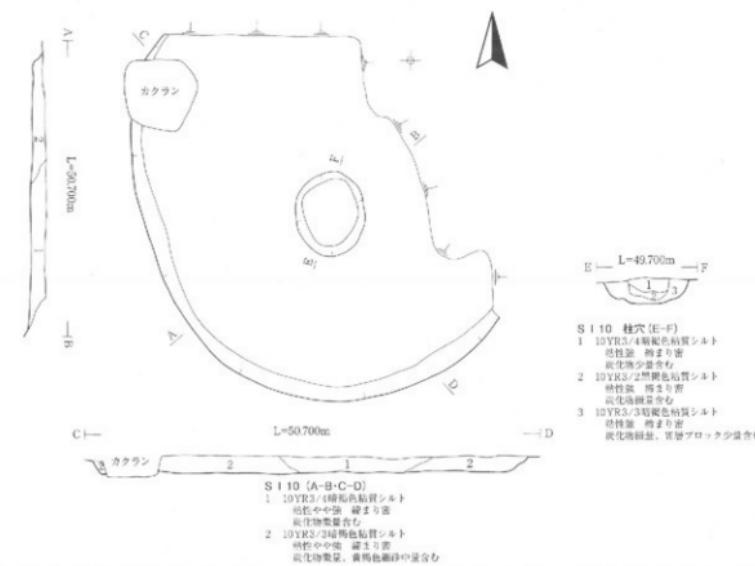
〔出土遺物〕 縄文・弥生土器1360g、石器44点(1295.6g)が出土した。土器は破片が多い。埋土下位であげた90の口縁部や95の底部はSK38の土器の可能性が高い。埋土中で出土した94の浅鉢は摩滅している。石器は石鎚と石錐1点ずつを掲載した。どちらも奥羽山脈産頁岩を石材としている。316は石鎚としたが無茎で、不定形石器とすべきかも知れない。

〔その他〕 出土遺物は弥生土器の様相を色濃くする。しかし下位のSK38や遺構を切る包含層3Aの遺物とを考えることもできる。また水路構築の際の搅乱による流れ込みの可能性も否定できない。

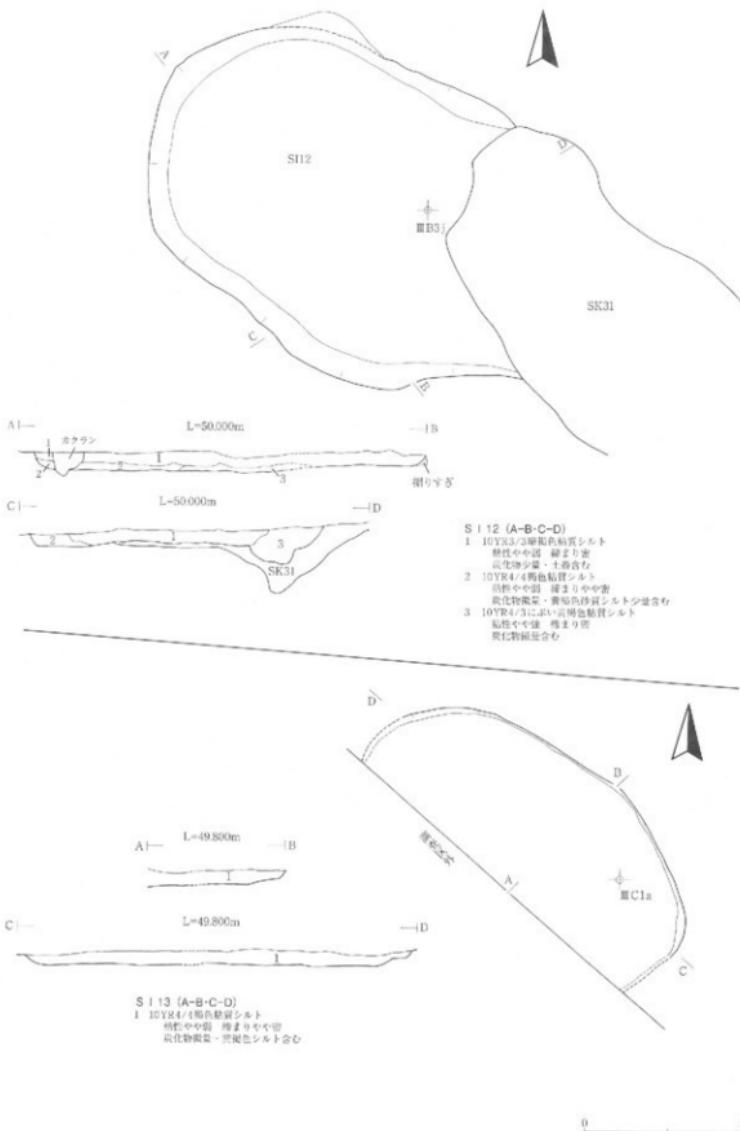
〔時期〕 弥生時代後期の遺物を包含する土坑や包含層の上位にあることから、弥生時代以降で古代の時期を充てることができるが、その性格とともに不明である。



第27図 S I 09 壁穴住居状遺構



第28図 S I 10・11壁穴住居状遺構



第29図 S I 12・13竪穴住居状遺構

(2) 土 坑

① 古代以降

縄文時代や弥生時代の遺物が包含するVI・VII層が存在しないD区で検出した土坑である。遺物は出土していないが、時期を古代以降とした。

S K 03土坑(第30図、写真図版34)

〔位置・検出状況〕 IA 8 g グリッドに位置する。検出面はV層下である。

〔重複・隣接関係〕 西側でSI 04と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 砂質の褐色土が主体の自然堆積である。テフラが混入する。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形状で、規模は152×104cmを測る。

〔断面形・深さ〕 扇形状で、壁はなだらかに立ち上がる。深さは西壁比高で29cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 埋土からSI 04と同時期の古代の造構と考えられる。

S K 04土坑(第30図、写真図版34)

〔位置・検出状況〕 IA 6 h グリッドに位置する。D柱穴状土坑群1の検出中に、柱穴から土坑に登録を変更したものである。検出面はV層上であるが、精査時にVII層面まで下げている。

〔重複・隣接関係〕 4号壙に切られるもしくは隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 砂質の褐色土が主体となる。自然堆積である。下位にテフラを含む黄褐色土が観察できた。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な円形である。規模は東西壁の開口部径で112cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、底面が平らとなる。壁は西側でなだらかに上がるが、東側ではほぼ垂直に上がる。深さは東側壁比高が54cmと深い。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 埋土から古代の造構と考えられる。

S K 05土坑(第30図、写真図版34)

〔位置・検出状況〕 IA 7 g グリッドに位置する。検出面はV層下である。SI 04に付属する造構と考えられたが、単独の造構として登録した。

〔重複・隣接関係〕 SI 04に西壁と隣接するか西壁を切る。

〔埋土・堆積状況〕 埋土上位にSI 04には見られない黒褐色土が確認できる。中央部になにかを埋めたような人为的堆積も認められる。周辺で顕著に見られるテフラを含む砂質の褐色土が存在しない。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な円形で、規模は北東壁-南西壁の開口部径が96cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は碗形状で、壁はなだらかに立ち上がるが、北壁はほぼ垂直に上がる。深さは西壁比高で27cmを測る。

〔その他〕 埋土上位に黒褐色土の溝状のプランが見える。SD 10の関連も推測される。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 埋土から古代より新しい、4号壙と同時期の中世から近世の造構と考えられる。

S K 06土坑(第30図、写真図版34)

- 〔位置・検出状況〕 II B 2 a グリッドに位置する。検出面はV壙面である。
- 〔重複・隣接関係〕 S D 11を切る。周囲にはD柱穴状土坑群2が広がる。
- 〔埋土・堆積状況〕 砂で覆われる。疊は黒褐色土に埋まる。
- 〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で、規模は $108 \times 47\text{cm}$ を測る。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状である。壁は緩やかに上がり深さは最大で 26cm を測る。
- 〔その他〕 疊があることから配石土坑とも呼べる。S D 11を断ち切るかのように並べられている。その性格は分からぬが配石遺構との関連も考えられる。
- 〔出土遺物〕 出土遺物はない。
- 〔時期〕 S D 11と同時期で、古代から近世にかけての遺構と考えられる。

S K 07土坑(第31図、写真図版35)

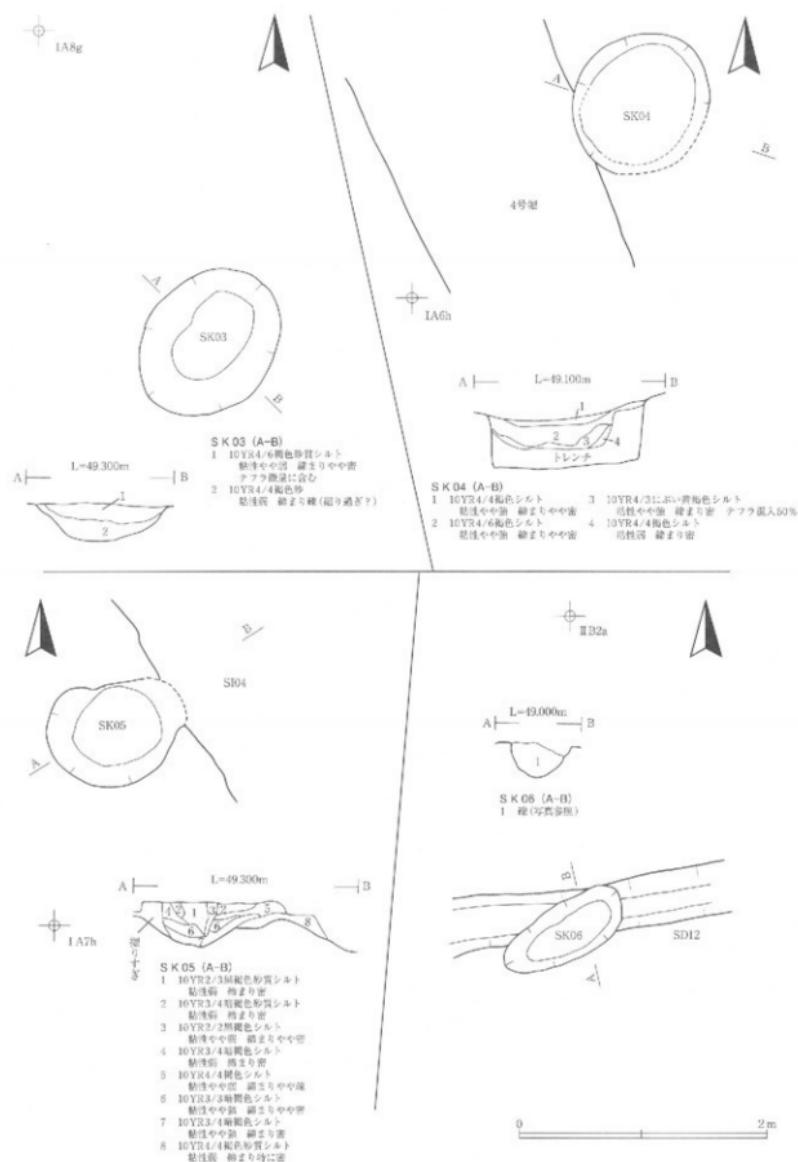
- 〔位置・検出状況〕 I B 10 c と II B 1 c グリッドに跨って位置する。検出面はD区最終面壙層上である。
- 〔重複・隣接関係〕 南西側にS K 08がある。
- 〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色、中位に褐色土が埋まる自然堆積である。
- 〔平面形・規模〕 平面形は不整な梢円形状で、規模は $168 \times 128\text{cm}$ である。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で壁は緩やかに上がる。深さは最大で 38cm を測る。
- 〔出土遺物〕 出土遺物はない。
- 〔時期〕 古代から近世までの遺構である可能性が高い。

S K 08土坑(第31図、写真図版35)

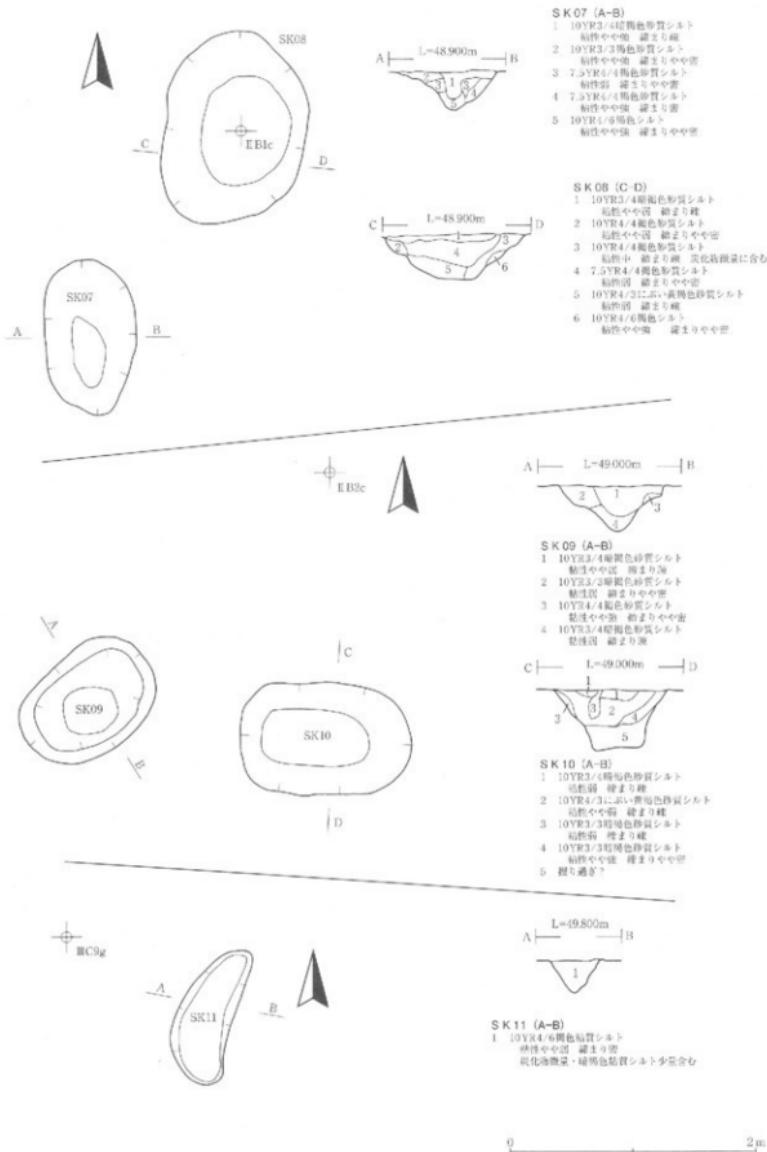
- 〔位置・検出状況〕 I B 10 c グリッドに位置する。検出面はD区最終面の壙層上である。
- 〔重複・隣接関係〕 北西側にS K 07がある。
- 〔埋土・堆積状況〕 上位に柱穴状に暗褐色土が埋まり、下位には褐色シルトが埋まる。自然堆積である。
- 〔平面形・規模〕 平面形は不整な梢円形状で、規模は $142 \times 82\text{cm}$ を測る。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状である。底面が平らで西側は緩く、東側はやや角度を持って立ち上がる。深さは最大で 31.8cm を測る。
- 〔出土遺物〕 出土遺物はない。
- 〔時期〕 古代から近世までの遺構である可能性が高い。

S K 09土坑(第31図、写真図版35)

- 〔位置・検出状況〕 II B 2 c グリッドに位置する。検出面はD区最終面の壙層上である。
- 〔重複・隣接関係〕 東側にS K 10がある。
- 〔埋土・堆積状況〕 やや暗褐色土が厚く埋まる自然堆積である。
- 〔平面形・規模〕 平面形は梢円形状である。規模は $120 \times 96\text{cm}$ である。
- 〔断面形・深さ〕 断面形は中央部がやや窪む柱穴状である。深さは最大で 30.7cm を測る
- 〔出土遺物〕 出土遺物はない。
- 〔時期〕 古代から近世までの遺構である可能性が高い。



第30図 SK 03～06 土坑



第31図 SK 07～11 土坑

S K 10土坑(第31図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕 II B 2・3 c グリッドに位置する。検出面はD区最終面のⅤ層上である。

〔重複・隣接関係〕 西側にS K 09がある。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土を主体とする自然堆積である。木根による搅乱が観察される。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形状である。規模は138×92cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状である。深さは最大で30cmを測る。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 古代から近世まで遺構である可能性が高い。

② 繩文・弥生時代(S K 12・14を除く)

古代の遺物を包含するV層と弥生土器の出土するVI層を除いた最終面で検出された土坑である。

SK 12は埋土から中世以後とした他、古代の可能性もある土坑を含む。

S K 11土坑(第31図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕 III C 8 f グリッド、S I 09の南側に位置する。VI層をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 周辺に遺構はない。

〔埋土・堆積状況〕 褐色土の単層で自然堆積である。Ⅴ層をきつているように観察できた。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形で、規模は114×54cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で27cmを測る。

〔出土遺物〕 3点(20g)の石器の剥片が出土した。

〔時期〕 埋土はV層下位の状況に似るが明確ではない。弥生時代から古代にかけての遺構と考えられる。

S K 12土坑(第32図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕 III C 9 g グリッドに位置する。VI層をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 検出面を異にする土坑(S K 23・27)と南側で隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 砂質の褐色土で埋まる。隣接する2基の土坑とは明らかに違う。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は145×83cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は幅のあるピーカー状で壁はほぼ垂直に上がる。深さは北壁比高で28cmを測る。

〔その他〕 埋土はIV層(3号堀埋土上位)に似る。他の土坑にはない特色である。また周囲には柱穴状土坑が多い。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生面での検出であるが、中世の遺構と考えられる。

S K 13土坑(第32図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕 III C 9 i グリッドに位置する。平成18年度調査では当グリッドで3条の溝(S D 07・08・09)を検出している。溝の検出面はV層を下げた状況であった。その後重機で、剥いだ後のVI層をやや下げた面での検出となる。

〔重複・隣接関係〕 東側でS K 14と隣接する。南側は水路に切られる。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土の単層で自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形が不明だが、不整の楕円形を呈すと考えられ、幅は中心部の開口部径で47cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは北壁比高で21cmを測る。

〔その他〕 上位で検出した3条の溝は古代から中世の遺構としている。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生時代から古代にかけて遺構と考えられる。

S K 14土坑(第32図、写真図版36)

〔位置・検出状況〕 III C 9 i グリッドに位置する。検出面はVI層をやや下げた面である。

〔重複・隣接関係〕 西側でS K 13と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は褐色土主体で、水性の堆積物も含むことから自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は角のある不整な楕円形状で、規模は185×96cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、壁は斜めに直線的に上がる。底面はほぼ平坦となり、深さは北壁比高で27cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生時代から古代にかけて遺構と考えられるが、埋土はS I 01に似ている。よって平安時代の可能性が高い。

S K 15土坑(第32図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕 III C 7 d グリッドに位置する。VI層をやや下げた面での検出となる。

〔重複・隣接関係〕 周囲に他の遺構はない。

〔埋土・堆積状況〕 扰乱の影響を受けているが、主体は暗褐色土の自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は104×53cmである。

〔断面形・深さ〕 断面形はビーカー状で、深さは南西壁比高で23cmを測る。

〔その他〕 検出グリッドではV層下で1点の土器片を出土させたのみである。以下の層VI・VII層でも遺物の出土はない。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生時代の遺構と考えられる。

S K 16土坑(第32図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕 III C 8 d グリッドに位置する。平成18年度に2号竪穴住居状遺構として精査し床とした面での検出となる。検出面としてはVI層下面となる。

〔重複・隣接関係〕 東側でS K 17と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色、下位に黒褐色土が埋まる。自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は152×89cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はビーカー状で、深さは南側壁比高で37cmを測る。

〔その他〕 平成18年度では当グリッドで575gの土器片を得た。検出面上の2号竪穴住居状遺構の埋土下位からは、遺構外石器330の石鎚や374の獨角石が出土している。

〔出土遺物〕 埋土からの出土遺物はない。

〔時期〕 検出面上の遺物出土状況や埋土から、弥生時代の遺構と考えられる。

S K 17土坑(第32図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕 III C 8 d グリッドに位置する。検出状況は S K 16 と同様である。

〔重複・隣接関係〕 西側で S K 18 と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に褐色土、下位に暗褐色土が埋まる自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸の略三角形状で、規模は 163 × 107cm を測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は底面の平坦な皿形で、深さは北壁比高で 17cm を測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 検出面上の遺物出土状況や埋土から、弥生時代の遺構と考えられる。

S K 18土坑(第33図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕 III C 8 g グリッドに位置する。検出面は VI・VII 層を調査終了した最終面(VIII層上)での検出である。

〔重複・隣接関係〕 北側で S K 19、東側で S K 26・28 と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色、下位に褐色土が埋まる自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は略三角形状を呈す。規模は南東から北西壁まで 152cm、北東から南西壁まで 104cm を測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は底面が平坦になる逆台形状で、南東側でやや窪む。深さは北側で 20cm、南側で 30cm を測る。

〔その他〕 当グリッドは、VI・VII 層から 834 g の比較的多めの土器片を出土させている。(遺構外出土器 230・252 など)

〔出土遺物〕 埋土からの出土遺物はない。

〔時期〕 埋土から、縄文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 19土坑(第33図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕 III C 8 f・g グリッドに跨って位置する。最終面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 南側で S K 18 と、東側で S K 26・28 と隣接する。底面を搅乱されている。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土と褐色土の自然堆積である。

〔平面形・規模〕 不整な円形を呈する。規模は 110 × 90cm を測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で窪はだらかに上がる。深さは最大 16cm を測る。

〔その他〕 III C 8 f グリッドからは遺構外出土石器 353 の磨製石斧ほか、7 点の石器 (310 g) が出土している。

〔出土遺物〕 埋土からの出土遺物はない。

〔時期〕 埋土から、縄文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 20土坑(第33図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕 III C 9 h グリッドに位置する。検出グリッドは平成19年度調査の最南端であり、V 層がやや下がり VI 層がなくなる境目となる。遺構は最終面(VIII層面)での検出である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。西南西に 2.20m 離れて、同規模の土坑(S K 22)がある。また南側

の上位面（V層上）には1mほど離れてSK06が東西に走る。

〔埋土・堆積状況〕 上位の黒褐色土は木根の影響をうけた土壤である。主体は褐色土であり自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形を呈す。規模は94×78cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で壁は緩やかに上がる。深さは16～18cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や位置関係から古代の可能性を否定できないが、時期は縄文時代後期から弥生時代と考えている。

SK21土坑(第34図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕 III C 7 g グリッドに位置する。VI層と思われる面をやや下げた面での検出である。周辺は特に上層がつかみにくく、VII層が明確でない。よって検出面はVI層下となる。

〔重複・隣接関係〕 大型土坑SK24と南側で隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は褐色土と黄褐色土が主体となる。下位の黄褐色土はVI層に相当する可能性がある。自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は190×100cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は凹みのある皿形状で、深さは北壁比高で14cm、中央部で最大26cmを測る。

〔その他〕 当遺構検出グリッドはSI09の南側に位置するためか、VI層で土器片185gの他、石器が8点(2937g)出土している。(遺構外石器365)

〔出土遺物〕 埋土からの出土遺物はない。

〔時期〕 埋土から弥生時代の遺構であると考えられる。

SK22土坑(第33図、写真図版38)

〔位置・検出状況〕 III C 8 h グリッドに位置する。最終面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK20と同様である。また、大型の土坑(SK25)を切る。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土主体の自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は略円形を呈す。規模は東内壁径で95cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状である。深さは北西壁比高が18cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土や位置関係から古代の可能性を否定できないが、時期は縄文時代後期から弥生時代と考えている。

SK23土坑(第34図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 III C 9 g グリッドに位置する。検出面はVII層上面である。

〔重複・隣接関係〕 西側でSK27と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 やや黒みの強い暗褐色土が上位に、褐色土が下位に埋まる自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は172×82cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状であるが底面はやや凸凹する。深さは北東壁比高で14cmを測る。

〔その他〕 遺構検出グリッドはVI層で335gの土器片を出土させている。

〔出土遺物〕 埋土からの出土遺物はない。

〔時期〕 縄文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 24土坑(第34図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 III C 7・8 g・hグリッドに跨って位置する。検出面はVI層下である。大きなプランで住居跡とも考えたが、東側半分のみであり、遺物も出土しなかったので土坑とした。

〔重複・隣接関係〕 西側の半分以上が水路下に延びる。北側でS K 22と隣接する。また南東側1m離れてS K 25がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土と褐色土は主体となる。水路を構築する際の土砂が多少含まれているもので、自然堆積かどうかは不明である。

〔平面形・規模〕 平面形は不明だが、円形もしくは楕円形を呈すと考えられる。規模は水路との接点で325cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は、底面が平坦な浅い逆台形状となり、壁は南側でやや緩やかに立ち上がるが、北側はほとんど立ち上がりらず、なだらかな傾斜となる。深さは最大でも15cmで浅い。

〔その他〕 床面に柱穴などの施設を検出できなかったが、隣接するS K 25同類の住居状の遺構である可能性もある。埋土の褐色土がV層かVI層かも定かではない。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 検出面や埋土、あるいは水路に切られていることなどを考えれば、時期を特定することはむずかしい。弥生時代から古代にかけての遺構とする。

S K 25土坑(第35図、写真図版39)

〔位置・検出状況〕 III C 8 hグリッドに位置する。最終面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 22に南東壁を切られるまた、南西側ほぼ半分が水路に壟されている。同様の規模であるS K 24が北側に隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土が主体となる。下位や壁際に褐色土が埋まるのもS K 24と同様である。暗褐色土は若干混合物が多く含まれ、自然堆積かどうかは不明である。

〔平面形・規模〕 平面形は不明だが、楕円形もしくは隅丸の方形を呈すと考えられる。規模は水路との接点、北西壁から南東壁の開口部径が370cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は底面が平坦な浅い逆台形状となり、壁は北側でやや緩やかに立ち上がるが、南側はほとんど立ち上がりらず、なだらかな傾斜となる。深さは北壁高で16cmを測る。

〔その他〕 床面で検出された柱穴状の凹みは新しい遺構である可能性が高い。南側にある柱穴状土坑は当遺構と関連があるかも知れない。また、隣接するS K 25とは規模がほぼ同じで、断面形の壁の立ち上がりが対照的となる。隅丸の方形の平面形も時期を特定する材料となりそうである。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生時代から古代にかけての遺構と考えられる。

S K 26土坑(第33図、写真図版37)

〔位置・検出状況〕 III C 8 gグリッドに位置する。最終面(VII層上)での検出である。

〔重複・隣接関係〕 北にS K 28、西にS K 18が隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土と褐色土の自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形を呈す。規模は80×62cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは最大で40cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 隣接する土坑と同時期の縄文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

SK27土坑(第34図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕 III C 9 g・h グリッドに跨って位置する。最終面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 東側で SK 23 と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色が主体で褐色土が入り込まない自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸の不整な台形状で、規模は開口部径で、北西-南東壁で228cm、北東-南西壁で167cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は幅の広い皿形状で、底面はほぼ平坦になる。壁は緩やかに上がり深さは南壁比高で33cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 縄文時代後期から弥生時代の遺構と考えられる。

SK 28土坑(第33図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕 III C 8 f・g に跨って位置する。検出はⅦ層上である。

〔重複・隣接関係〕 南に SK 26 が隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に褐色土、下位に暗褐色土が埋まる。隣接する土坑と逆の埋まり方をする。自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形状で、規模は150×104cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは最大で36cmを測る。

〔その他〕 埋土状況で基本層序に従えば上位がVI層、下位がⅦ層となる。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土から、隣接する土坑より古い縄文時代後期～弥生時代前半の土坑の可能性が高い。

SK 29土坑(第35・68図、写真図版40・67)

〔位置・検出状況〕 III C 4 d グリッドに位置する。当グリッド付近は河岸段丘の頂部でやや小高くなつておらず、V層以下が薄い状況である。よって検出面はVI層下ではⅦ層面上となる。

〔重複・隣接関係〕 南東部に3号堀が横たわる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は上位に暗褐色土、下位に褐色土が埋まる。上位の暗褐色土はVI層と捉えた。炭化物も多く含み、褐色土はグラウル化する。自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は長軸の長い楕円形で、規模は267×102cmを測る。

〔断面形・深さ〕 短軸の断面形は幅の広いピーカー状で、壁はやや角度を持って上がる。長軸壁はやや傾斜が緩くなる。

〔その他〕 検出グリッドではVI層以下で28gの土器片と2点(40g)の剥片を得ている。

〔出土遺物〕 縄文・弥生土器片221gと礫2点(211g)が出土した。土器片2点を掲載した。96は2列の原体压痕が施され、97は肥厚されている。どちらも甌と考えられる破片となる。礫についての記述は石器かどうか判別できなかった。

〔時期〕 埋土と出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。

SK 30土坑(第36図、写真図版40)

〔位置・検出状況〕 III C 4 b グリッドに位置する。大きな暗褐色土のプランを検出し、トレントを設定して精査を行った。3基の土坑が並んでいる状況となり登録した。

〔重複・隣接関係〕 西側の土坑は SK 32、東側は風倒木となり2つに挟まれた土坑である。

〔埋土・堆積状況〕 中層に帯状に入り込む黒褐色土は、東側にあったと思われる樹木痕と倒れた際の影響と考えられる。その他にもグライ化された箇所などがあり、判別はむずかしいが、下位の褐色土が埋土の主体であると考えられる。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で、規模は216×175cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は不整な逆台形状で、南壁はふくらみながら角度を持って上がるが、北側はマウンド状の高まりを持つ。長軸壁はややなだらかに上がる。深さは、南側壁比高が88cmで深く、後述する SK 31に次ぐ深さとなる。

〔出土遺物〕 埋土上位から43.4g、下位から29.8gの土器片が出土した。時期を特定できるような破片はなかったが、時期が大きくずれるような感じはない。

〔時期〕 埋土から判断すれば弥生時代の可能性が高い。

SK 31土坑(第37・68・86図、写真図版41・67・80)

〔位置・検出状況〕 III B 3 j グリッドに位置する。検出面はVI層をやや下げた面での検出である。S I 12の精査中に埋土暗褐色土が北西側で落ち込むことが分かり、掘り進めた結果、大型の土坑となったものである。断面観察から S I 12床面の下にある土坑とした。

〔重複・隣接関係〕 北側で S I 12と重複する。南に SK 33、西側で SK 40～42と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 遺構が深いことから複雑な埋土状況を示す。北西側(S I 12重複部)は上位に S I 12の埋土が堆まり、その下位は黒褐色土が主体となる。その黒褐色土は下位暗褐色土を壁とするプランが成り立つような堆積の仕方である。少量の炭化物やロームブロックを含む他に混合物は見あたらない。それに比べ南東部は暗褐色土が主体となり、搅乱の影響による粘土や砂質のシルトが混入する。この埋土の層位から2つの土坑の可能性も指摘できるが、判別できなかった。自然堆積であると考えられるが、北西側は人為的な作用が、南西側は木根など自然的な作用が感じられた。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な梢円形状を呈す。長軸はほぼ北西～南東でその規模は開口部径で577cmを測る。短軸径は中央部で252cmを測る。

〔断面形・深さ〕 短軸の断面形は北東壁がほぼ垂直に、南西壁がやや緩やかに上がる逆台形状となるが、底面は凸凹で整形しない。長軸の断面形は皿形状で壁は緩やかに上がる。深さは南東壁比高で124cm、中心部は143cmの深さを持つ。

〔その他〕 土器の出土した埋土7から採集した炭化物を、放射性炭素年代測定(AMS測定)した結果、曆年較正年年代で2224±33(Libby Age (yr BP))という数値となった。

〔出土遺物〕 多くの遺物が出土した。土器片は1097gの出土量で、口縁部に沈線のある浅鉢の口縁部などがある。摩滅が著しい土器片も多かった。揭露は6点。98の浅鉢は摩滅している。99と100は同一個体の可能性のある甕で、やや肥厚されている。101は甕の口縁部片で附加状縄文が観察される。102の壺は炭化物を採取した埋土7から出土したものである。表面色は98と103を除いて褐色となる。石器は剥片を中心に17点(1855g)の出土となった。剥片には製品がなく不定形石器で、ここでは礫石器2点を掲載した。318は石皿と思われる破片、319は凹み石でどちらも石質は同じ奥羽山脈産の安山岩である。

〔時期〕 弥生時代前期から中期の遺構と考えられる。

SK 32 土坑(第38・69図、写真図版42・68)

〔位置・検出状況〕 III C 3 b・4 b グリッドに跨って位置する。C区最初の表土剥ぎを終え、クリーニングした時に検出した遺構で、検出面はVI層をやや下げた面である。

〔重複・隣接関係〕 周囲には搅乱が多く（新しい杭の跡）4本が遺構の床面に突き刺さる。北東側でSK 37、北西側でSK 36を切る。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土を主体とする自然堆積で、下位に褐色土が埋まる。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形状で、主軸方位はほぼ東—西となる。規模は380×180cmを測り、検出した土坑の中でも大きい部類に入る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で床面が平らである。壁はなだらかに直線的に上がり、深さは北壁比高で26cmを測る。

〔出土遺物〕 164gの縄文・弥生土器が出土した。104は表面色が赤褐色の浅鉢の底部、105はSK 31出土99に類似する壺形土器の口縁部である。

〔時期〕 弥生時代前期から中期の遺構と考えられる。

SK 33 土坑(第36図、写真図版43)

〔位置・検出状況〕 III B 3 j と III C 3 a グリッドに跨って位置する。検出面はVI層をやや下げた面で、VII層面に近い。

〔重複・隣接関係〕 北側に大型土坑SK 31がある。

〔埋土・堆積状況〕 下位に褐色土が埋まるが、主体は暗褐色土で自然堆積である。固く締まる暗褐色土の土質はSK 31の状況に似る。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な円形もしくは隅丸の三角形状で、規模は開口部径で、北西—南東壁が228cm、北東—南西壁が192cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は底の浅い逆台形状で、壁は斜めに直線的に上がる。底面は平坦であり、深さは北壁比高で27cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 SI 12とSK 31どちらかと同時期の、縄文時代後期から弥生時代中期までの遺構であると考えられる。

SK34 土坑(第39・69図、写真図版42・68)

〔位置・検出状況〕 III C 1 a グリッドに位置する。検出面はVI層下位であり、ほぼVII層面（最終検出面に相当する）。

〔重複・隣接関係〕 遺構の中央部を木杭が貫く。北側にSK 38がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は褐色土の単層で自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形状で、長軸は東西に延びる。規模は212×148cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿状で、床面中央部がやや窪むがほぼ平坦に近い。壁は直線的に斜めに立ち上がる。深さは南側壁高で17cmを測る。

〔出土遺物〕 土器片1点(9.4g)が出土している。106は表面色が赤褐色で、遺構外出土土器197と同一破片と考えられる。

〔時期〕 出土遺物は流れ込みと判断し、埋土から弥生時代前期から中期の遺構と考えられる。

S K 35土坑(第39図、写真図版42)

〔位置・検出状況〕 III C 3 c グリッドに位置する。検出面はVII層面に近い。

〔重複・隣接関係〕 西側で柱穴状土坑に切られる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は上位に黒・暗褐色土が、下位に褐色土が埋まる自然堆積の様相を示している。

〔平面形・規模〕 平面形は略三角形状である。やや東西に長い形となり、275cmを測る。南北は中央部で150cmを測る。

〔断面形・深さ〕 南北の断面形は中央部でやや窪む皿形状である。壁は直線的に上がり、特に南北の壁で急である。西壁は緩やかになる。深さは南壁比高で最大48cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土から弥生時代の遺構と考えられる。

S K 36土坑(第38図、写真図版43)

〔位置・検出状況〕 III C 3 b グリッドに位置する。SK 32と同様で検出面はVI層をやや下げた面での検出である。

〔重複・隣接関係〕 SK 32と重複するがその新旧についてははっきりとしなかった。北西側を風倒木に搅乱される。

〔埋土・堆積状況〕 炭化物を微量に含む褐色土が埋土の主体となる自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形状で中央部がやや括れる。形状から見た推計で長軸は250cm前後となろうか。短軸は中央部で140～150cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で北壁は緩やかに斜めに上がる。南側にはテラス状の高まりがある。深さは北側壁比高で32cmを測り、南側は12cmと浅い。

〔その他〕 埋土はSK 32と違い、褐色土でVI層に相当する可能性もある。風倒木の影響を受けた自然的な凹みであるかも知れない。

〔その他〕 当遺構検出グリッドはVI層精査中に693gの土器片(遺構外土器211など)と、9点の石器(351・354など)を出土させた。風倒木の影響もあるうが、土器は周辺グリッドではIII C 5 b に次いで多いという結果となった。

〔出土遺物〕 土器片1点(5.9g)が出土した。また礫が2点(799.3g)出土したが、石器ではない。

〔時期〕 時期は弥生時代と考えられるが判然としない。

S K 37土坑(第38図、写真図版43)

〔位置・検出状況〕 III C 4 b グリッドに位置する。SK 32精査中に検出した遺構であり、検出面はVI層をやや下げた面となる。

〔重複・隣接関係〕 SK 32と重複する。そのプランからSK 32に切られると判断した。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土が主体となる自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形はやや角のある不整な円形を呈する。規模は南東壁と北西壁の開口部径で198cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状を呈すると予測される。床面はなだらかとなる。壁はやや直線的に斜めに上がり、深さは北壁比高で25cmを測る。

〔その他〕 床面に柱穴状の凹みが検出された。新しい遺構である可能性が高い。

〔出土遺物〕 23.9gの縄文・弥生土器片が出土している。

〔時期〕 埋土や出土遺物から縄文時代から弥生時代にかけての遺構と考えられ、どちらかというと弥生時代に近い年代が考えられそうである。

S K 38土坑(第39・69・86図、写真図版43・68・80・81)

〔位置・検出状況〕 II C 10 a・b・III C 1 a・bに跨って位置する。

〔重複・隣接関係〕 上位にS I 13がある。南西側は水路下に延びる。北西側は旧河道の落ち込みにあたり、包含層3 Aが隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土の単層である。土器片を多く含む。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形を呈すと予測される。規模は北西壁から南東壁の開口部径で250cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で、壁はなだらかに上がる。しかし水路下は判然としない。急激に落ち込む可能性もある。

〔その他〕 旧河道の南東隅にあり、土器の捨て場としての機能を考えられる。出土遺物も包含層3と大差はない。

〔出土遺物〕 縄文・弥生土器が999.7g出土した。鋸歯状の沈線を持つものや上師器風の薄い土器片などがある。同じような資料が多く掲載は4点とした。その中で107と108はS I 09出土土器と同類のものである。石器は剥片石器を中心に448.9gの出土量となる。2g以下の小さな剥片13点と多い。掲載は3点である。320は包含層3の出土遺物に似る。包含層3やS I 09出土石器にはない、322のノック?が出土している。

〔時期〕 弥生時代後期の遺構である可能性が高い。

S K 39土坑(第39図、写真図版43)

〔位置・検出状況〕 II B 9・10 hに跨って位置する。検出グリッド周辺は調査C区の北側で、旧河道に向かってなだらかに下がるところである。基本層VI・VIIの堆積は薄く、V層の無遺物層が厚く存在する。検出面はV層上である。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。南東側にS I 08の煙道状の凹みがある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は褐色土が主体で、断面図3の不明部分は混合土が埋まっている。

〔平面形・規模〕 平面形は長い楕円形(溝状)で、規模は302×65~90cmを測る。

〔断面形・深さ〕 短軸の断面形は皿状である。深さは最大で23cmを測る。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 縄文時代後期から古代の遺構と考えられ、古代の可能性が高い。

S K 40土坑(第40図、写真図版44)

〔位置・検出状況〕 III B 3・4 i グリッドに位置する。VI層を取り除いている最中に黒みの強い暗褐色土が広がっていた区域である。住居跡の可能性を持って調査したが判別できずに、最終的には最終面まで下げ土坑として登録した。平面形や埋土断面から2つの土坑が重なっている可能性もあるが、1つの遺構として説明する。以下同様の土坑にS K 41~44がある。

〔重複・隣接関係〕 南西側でS K 42と隣接する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土断面から2つの土坑がある可能性がある。埋土上位は濁りを持った混合土である。全体的には主体は褐色土となる。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形で、規模は340×150cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で、底面は凸凹である。深さは最大で28cmを測る。

〔その他〕 埋土上層を埋土主体とする2つの土坑の可能性もある。自然的な凹みの可能性も否定できない。上位の混合土はSK 31の堆土かも知れない。

〔出土遺物〕 繩文が施された土器片1点(13.3g)が出土した。

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけてとの遺構と考えられる。

SK 41 土坑(第40図、写真図版44)

〔位置・検出状況〕 III B 3・4 i グリッドに位置する。検出状況はSK 40と同じである。

〔重複・隣接関係〕 SK 44と南西側で隣接(重複?)する。南東側にはSK 40・42がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に混合土、主体は褐色土という特色はSK 40同様である。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形で、北西部がややすぼむ形となる。規模は長軸の長さが240cmで、短軸では中央部で145cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で、底面は平坦となる。深さは北東壁比高で26cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけてとの遺構と考えられる。

SK 42 土坑(第40図、写真図版44)

〔位置・検出状況〕 III B 3・4 i・j グリッドに跨って位置する。検出状況はSK 40と同じである。

〔重複・隣接関係〕 SK 31と平行するように並ぶ。また東側にはSK 40が隣接する。北東側はSK 44と隣接(重複?)する。

〔埋土・堆積状況〕 埋土上位はにごった暗褐色土で、下位に黒褐色土が筋状に埋まる。この状況は大型土坑SK 31の北西部状況に似る。下位には褐色土が埋まる。南西側は大きく落ち込む部分の上位にはSK 40に見られるような混合土が主体となり、下位には褐色土が埋まる。北西側は自然堆積で、南東部は人為的な堆積の2つの土坑が重複している可能性もある。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形状となり、規模は長軸の推定で430cm前後を測る。北東壁から南西壁の径は概ね165cm前後となる。

〔断面形・深さ〕 断面形は北西側で浅い、南東側で深い皿形状となる。深さは南東側の壁比高で63cmを測る。北西壁は20cm前後で浅い。

〔その他〕 埋土状況から自然的な作用による大きな凹みの可能性もある。また、北東側の大きな落ち込みはSK 31と何らかの関係があるかも知れない。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

SK 43 土坑(第41図、写真図版44)

〔位置・検出状況〕 III B 2 i グリッドに位置する。検出状況はSK 40と同じである。

〔重複・隣接関係〕 東側にSK 44、南側にSK 58がある。南東部にSK 42がある。S I 12の北側に位置する。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色土がある。埋土の主体は褐色土と黄褐色土の混合土である。人為的堆積の可能性もある。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な橢円形状で、規模は長軸推定で260cm、短軸は最大で160cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、北側壁はなだらかであるが南側壁はやや急である。深さは南壁比高で18cmを測る。

〔その他〕 検出グリッドの上層から132gの土器片を得ている。

〔出土遺物〕 埋土からの出土遺物はない。

〔時期〕 グリッド上層で取り上げた土器はVI層としているが、VII層の可能性があり、S I 12や後述するSK 44と同時期である。

SK 44土坑(第42・69図、写真図版45・68)

〔位置・検出状況〕 III B 3 h・iに位置する。検出状況はSK 40と同じである。

〔重複・隣接関係〕 2つの土坑が重複している可能性もある。東側にSK 41、西側にSK 43・58・52、南側にSK 42がある。

〔埋土・堆積状況〕 全体を覆うように上位に暗褐色土が覆う。埋土断面の2・3の黄～褐色土の土坑と、その下に暗褐色土が埋まる土坑があるのかも知れない。遺物は埋土断面2からの出土である。

〔平面形・規模〕 平面形は北側に大きな円形の張り出しを持つ略橢円形状である。長さは推定で350cmを測り、幅は最大で260cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、北側はテラス状、南側はなだらかとなる。

〔その他〕 上質が分からなく掘り過ぎている。写真より規模は大幅に小さい。

〔出土遺物〕 繩文土器178gが出土した。掲載した3点(111～113)は1個体と考えられる。羽状縄文が施される深鉢である。S I 12出土の87と同時期と考えられる。

〔時期〕 出土遺物から縄文時代後期である可能性が高い。

SK 45土坑(第41図、写真図版45)

〔位置・検出状況〕 II A 10 j グリッドの旧河道に向かってなだらかに落ち込むところに位置する。検出面はVII層面である。

〔重複・隣接関係〕 周辺に遺構はない。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は上位に混合土、中位には川原石の混じった混合土が埋まる。最下位は黄褐色土でVII層に当たる。全体的に人為的堆積の可能性が高い。しかし、旧河道の埋土断面に似た様相を示すことから、旧河道とともに埋まつたとも考えられる。断面図上の8は掘りすぎているがVII層に相当する。土器は埋土5から川原石とともに出土した。

〔平面形・規模〕 平面形は、開口部は椭円形状で下部は不整な長方形を呈す。規模は開口部径が175×135cm、下部径が163×62cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、壁はやや角度を持って立ち上がる。深さは北西壁比高で62cmを測り、規模の割に深い。

〔出土遺物〕 小波状の沈縁が観察される縄文・弥生土器の小破片2点(4.9g)が出土した。

〔時期〕 埋土等から弥生時代から古代にかけて遺構と考えられ、弥生時代の可能性の方が高い。

S K 46土坑(第42図、写真図版45)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 4 c グリッドに位置する。Ⅶ層上での検出である。

〔重複・隣接関係〕 東側にS K 50がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色土が柱穴状に入り込む。主体は黄褐色土でVI層に相当する可能性が高い。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は111×74cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は浅い逆台形状で底面が平坦となる。柱穴状に暗褐色土が入り込む西側の壁がほぼ垂直になり、深さは北高で18cmを測る。

〔その他〕 検出グリッドで出土した遺物はない。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土から弥生時代の遺構の可能性が高い。

S K 47土坑(第43図、写真図版45)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 4・5 b グリッドに位置する。C区の南側、3号壙の北側に当たる。検出面は最終面(Ⅶ層上)である。

〔重複・隣接関係〕 南西側にS K 48がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土が主体となる。自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形状で、規模は124×90cmを測る。

〔断面形・深さ〕 底面が平坦な皿形状となり、深さは西壁比高で10cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 48土坑(第44図、写真図版46)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 4 b グリッドに位置する。最終面(Ⅶ層)上の検出である。

〔重複・隣接関係〕 北東側にS K 47がある。

〔埋土・堆積状況〕 上位に炭化物が含まれる黒褐色土があり、主体は水性堆積物を多く含んだ暗褐色土となる。人為的堆積の可能性もある。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な楕円形状で、規模は124×90cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは西壁比高が最大となり、30cmを測り、東側に向かって浅くなる。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる

S K 49土坑(第44図、写真図版46)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 5 d グリッドに位置する。検出面はⅦ層上である。

〔重複・隣接関係〕 重複はなく、近辺に遺構はない。

〔埋土・堆積状況〕 上位に暗褐色土、下位に黄褐色土が埋まる。自然堆積である。黄褐色土はVI層の可能性がある。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は138×102cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は幅のあるピーカー状で、北壁がほぼ垂直に上がる。深さは北壁で25cmを

測る。

〔出土遺物〕 繩文時代土器片12点(48.1g)が出土している。摩滅が著しく無文のために掲載していないが、胎土に石英が多く混入するのかキラキラ光る破片がある。

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構で、埋上や出土遺物から弥生時代の可能性が高い。

S K 50 土坑(第42図、写真図版46)

〔位置・検出状況〕 III C 4 c グリッドに位置する。Ⅶ層上での検出である。

〔重複・隣接関係〕 西側に S K 46 がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は黄褐色土の単層である。

〔平面形・規模〕 平面形は幅の狭い楕円形で、規模は134×53cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で、深さは西壁比高で11cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋上から弥生時代の遺構の可能性が高い。

S K 51 土坑(第43図、写真図版46)

〔位置・検出状況〕 III C 5 b グリッドに位置する。Ⅶ層上での検出である。

〔重複・隣接関係〕 北側に1m離れて S K 53 がある。また南西側には S K 47・48 がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土が出体となる自然堆積である。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な円形で、規模は65cm前後を測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は深さのある皿形状で、深さは最大で35cmを測る。

〔その他〕 検出グリッドではVI層で1362gの土器を出土させており、包含層出土土器を除いて、比較的多い。233の壺の口縁部や262の壺の底部が出土している。

〔出土遺物〕 埋土から出土遺物はない。

〔時期〕 上位出土土器は弥生時代の様相を示す。繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられるが、弥生時代の可能性が高い。

S K 52 土坑(第41図、写真図版47)

〔位置・検出状況〕 III B 3 i グリッドに位置する。最終面(Ⅷ層上)での検出である。S I 12の壁をはずした状況での検出である。

〔重複・隣接関係〕 北西に S K 58 が、南には S I 12 がある。S I 12 の北東壁と重複する。新旧関係は定かではない。

〔埋土・堆積状況〕 埋土全体が混合土を主体とする。この特色は隣接する他の土坑と同様である。人為的かどうかは判別できない。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、規模は154×122cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは北西側壁比高で21cmあるが、南東壁側は浅くなる。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 53土坑(第43図、写真図版47)

〔位置・検出状況〕 III C 5 a グリッドに位置する。VII層上での検出である。

〔重複・隣接関係〕 西側にS K 54・56がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土と褐色土の混合土である。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は137×108cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは南壁比高で10cmと浅い。

〔その他〕 検出グリッドのVI～VII層で200gの土器片を得ている。

〔出土遺物〕 埋土からの遺物はない。

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 54土坑(第44図、写真図版47)

〔位置・検出状況〕 III C 4 a グリッドに位置する。VII層上での検出である。

〔重複・隣接関係〕 南西側にS K 56、西側にS K 57がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土と褐色土の混合土で人為的堆積か。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で、規模は82×53cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは北壁比高で9cmを測る

〔その他〕 検出グリッドVI層出土土器は29gで少ない。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 55土坑(第44図、写真図版47)

〔位置・検出状況〕 III C 4 d グリッドに位置する。VII層上での検出である。

〔重複・隣接関係〕 周囲に遺構はない。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土と褐色土の混合土で人為的堆積か。

〔平面形・規模〕 平面形は円形で、北一南壁開口部径で71cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は底面の平坦な皿形状で、深さは最大で8cmと浅い。

〔その他〕 検出グリッドVI層から28gの土器片を得た。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 56土坑(第44図、写真図版48)

〔位置・検出状況〕 III C 4 a グリッドに位置する。検出面はVII層上である。

〔重複・隣接関係〕 北西にS K 54がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土と褐色土の混合土で人為的堆積か。

〔平面形・規模〕 平面形は不整な梢円形状で、規模は長軸が280cmを測る。短軸は北東側で134cm、南西側で98cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状で、深さは南壁比高で8cmを測る。

〔出土遺物〕 摩滅している1点(10g)の土器片が出土している。表面の色調が橙色である。

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 57土坑(第44図、写真図版48)

〔位置・検出状況〕 III C 4 a グリッドに位置する。検出面はⅦ層上である。

〔重複・隣接関係〕 東側に S K 54・56がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は暗褐色土と褐色土の混合土で人為的堆積か。

〔平面形・規模〕 平面形は円形で、規模は開口部径が84cmを測る。底面は梢円形に凹み、規模が67×34cmとなる。

〔断面形・深さ〕 東側がテラス状に平坦になり、西よりはビーカー状になる。西壁は角度を持って立ち上がる。西壁の比高は34cmとなる。

〔その他〕 柱穴状土坑としても良いかもしれない。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 繩文時代後期から弥生時代にかけての遺構と考えられる。

S K 58土坑(第41図、写真図版48)

〔位置・検出状況〕 III B 2・3 i グリッドに跨って位置する。VII層上の検出である。

〔重複・隣接関係〕 S K 43と52に挟まれている。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はS K 43と違い、褐色土が出土となる。V層かVI層の判断はむずかしい。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で、規模は185×135cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形状を呈すと予測される。深さは北壁比高で27cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 埋土から弥生時代から古代にかけての遺構と考えられる。

(3) 焼土および炭化物

S X 01焼土(第45図、写真図版49・63)

〔位置・検出状況〕 III C 7 e グリッドに位置する。検出面はV層下で、鍛冶で検出中に濁った赤褐色のプランが見え、住居跡の煙だし状の遺構と考えたが、周りに住居跡は検出されないことから焼土と登録した。

〔重複・隣接関係〕 重複はないと思われる。南側1m離れたところにS D 06がある。遺構の西側はV層面が削平され、旧耕作土下にVI層が現れ、周辺には繩文土器(弥生土器)の包含層を確認している。住居跡があったとしても、すでに消滅していたであろうことが予想される。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形(溝状)で、ほぼ西一東に延びる。長さは78cm、幅は概ね22cmを測る。

〔断面・深さ〕 断面で観察すると、基本層VI層を掘り込んでいたように見られ、上位に赤褐色焼土の混じる混合土が薄く堆積する。可能性としては埋土断面で見る3が焼道であったことが挙げられる。

〔出土遺物〕 土器片が3点出土した。壺とおもわれる体部破片(33・34)で、表面をヘラケズリ調整されている。34は焼土内から出土している。(写真掲載)

〔時期〕 出土土器や検出状況また遺構の性格から古代の遺構と考えられる。

S X 02炭化物範囲(第45図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 III C 10 h に位置する。検出面はVI層下とするが、ややV層を下げきっていない状況となる。

〔重複・隣接関係〕 S K 14が南西側にある。

〔平面形・規模〕 焼土や炭の混入する範囲の平面形は楕円形状で、規模は128×65cmを測る。炭化物は、中心部に帯状に広がり、その周間に微細な炭化物が点在する。

〔断面・深さ〕 南側上位にブロックで炭化物があり、他は細粒である。その深さは5cm足らずとなる。炭化物は暗褐色土に埋まる。

〔その他〕 検出グリッド周辺はV層が落ち込む河岸段丘の北西縁に当たるために、古代面の可能性もある。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生時代から古代にかけての遺構と考えられる。

S X 03 炭化物範囲(第45図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 III C 9 d グリッドに位置する。暗褐色土面(VI層上面)の検出である。

〔平面形・規模〕 炭化物は南東側にブロック状に広がる。図面は微細な炭化物を含めての範囲を示している。その平面形は楕円形状で、規模は155×65cmである。

〔断面・深さ〕 断面で見ると炭化物は南東側に限られるようである。炭化物ブロックの断面形は皿状で、幅30cm、深さは10cmである。暗褐色土に埋まる。

〔その他〕 当グリッドでは18年度に、溝(S D 07)を検出したが、その時には炭化物は確認していない。

〔時期〕 弥生時代から古代の遺構と考えられるが、検出状況から古代の可能性が高い。

S X 04 炭化物範囲(第45図、写真図版49)

〔位置・検出状況〕 III B 4 j グリッドに位置する。検出面はVI層をやや下げた面である。

〔平面形・規模〕 炭化物範囲は隅丸の三角形状に広がる。規模は北西-南東で132cm、北東-南西で85cmを測る。

〔断面・深さ〕 断面で観察すると皿状の断面形を呈する掘り方が確認できる。炭化物は暗褐色土とともに埋まる。深さは最大で26cmを測る。

〔出土遺物〕 ない

〔時期〕 弥生時代の遺構と考えられる。

(4) 溝 跡

検出面はそれぞれ違うので遺構毎に記す。

S D 10 溝跡(第47図、写真図版50)

〔位置・検出状況〕 調査区最南端E区VF5eからVF7gグリッドに跨って位置する。5号堀(E1号堀)の埋土上に検出したものである。

〔重複・隣接関係〕 北側と南側が消失する。底面は5号堀の埋土上位となる。

〔埋土・堆積状況〕 黒褐色土と褐色砂が重なり合う。下位には暗褐色土がある。

〔延長・幅〕 やや蛇行しながら北北西から南南東に延びる。確認された延長は下場推定で19.60mである。幅は開口部径で60~80cmを測る。

〔断面形・深さ〕 皿形状で壁はなだらかに上がる。底面はやや水平となる。深さは中央部で20cm前後を測る他は、浅く南北側で上面を削平されている。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 近世以降の新しい遺構と考えられる。

SD 11溝跡(第46図、写真図版50)

〔位置・検出状況〕 I A 5・6 g グリッドに跨って位置する。S I 04の検出時に薄くプランは見えていたが、喪失してしまった。4号堀の精査と調査区域を広げた関係で再度検出を試み得た結果であり、大半が推定線となってしまった。検出面はV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 4号堀と重複する。新旧関係は明らかでない。また東側でS I 04方向に延びるがS I 04検出時には見えなかった。西側は調査区外になる。

〔埋土・堆積状況〕 黒褐色土の単層である。周辺の柱穴状上坑と同じ土質である。

〔平面形・規模〕 検出したのは西側の1.80mと東側の1.10mで、推定ラインでは総延長が7mとなる。幅は開口部径が24~30cmで推移する。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で、壁はなだらかに上がる。深さは10cm足らずで浅い。

〔その他〕 埋土断面は黒褐色土であるが、断面の床面に灰白色のテフラが観察された。明らかにテフラ上位の遺構であることが確認できた。

〔出土遺物〕 埋土から5.9gの土師器片が出土したが流れ込みと判断した。

〔時期〕 時期は中世から近世の可能性が高い。

SD 12溝跡(第46図、写真図版50)

〔位置・検出状況〕 位置はII B 1aから2aに延びる。D区の耕土置き場としていた区域で、調査は後回しになった。周囲は生活道路が走り、北側で排水管、東側で用水路などが巡り、制約のある中の精査となつた。検出面はV層面である。

〔重複・隣接関係〕 S K 06に切られる。周りには柱穴状上坑群がある。西側は調査区外に延びる。東側は水路下に延びるであろうが確認できなかった。その東側の北には3号配石遺構、その南には2号配石遺構があり、その間を貫くような位置関係となる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は黒褐色土の単層。周辺の柱穴状上坑と同じ土質である。

〔平面形・規模〕 確認した総延長は9mを測る。東側でやや南側に屈曲する。幅は広いところで50~60cm、S K 06との交点は40cmと狭くなる。

〔断面形・深さ〕 断面形は皿形で壁はなだらかに立ち上がる。深さは南側で20cmを測り、SD 10よりは深い。

〔その他〕 S K 06に切られる形ではあるが、1つの遺構として捉えられるかもしれない。S K 06が配石土坑の可能性もあり、とすれば隣接する2基の配石遺構との関わりも考えなければいけないであろう。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 不明であるが、古代から中世の遺構の可能性が高い。

SD 13溝跡(第47図、写真図版50)

〔位置・検出状況〕 II B 10 i・III B 1 iに跨って位置する。旧河道検出時のクリーニングでプランを得た。当初は旧河道の縁と捉えたが、断面観察で立ち上がりを確認したことからと登録した。検出面はV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 重複はないが、北側で消失する。

〔堆上・堆積状況〕 暗褐色土の単層と推定する。断面に見る2は包含層3を形成する層で遺物はこの3と4から出土している。1の堆積は自然堆積と考えられる。

〔平面形・規模〕 旧河道縁を南東から北西に延びる。図面では蛇行しているが、掘り過ぎの影響で本来は直線的である可能性が高い。検出した延長は6.20mである。幅は、断面実測付近で40cmほどである。

〔断面形・深さ〕 断面形は逆台形状で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。深さは12cm前後で浅い。

〔その他〕 当初は弥生土器が出土することや検出面がV層であると考えたことから、弥生時代もしくは古代の遺構と捉えたが、旧河道断面観察(第57図参照)から当遺構はV層古代面を切っており、検出面はVではなくV層上となることが判明した。よって出土遺物は、流れ込みの可能性もあるが掘りすぎで得られたものとした。

〔出土遺物〕 弥生土器が458g、石器が20点(280.1g)出土したが、すべて掘りすぎで出土した遺物である。

〔時期〕 中世以降の時期鍾が与えられる。

(5) 堀 跡

検出は全て古代V層面での検出である。大きな溝(開口部径が150cm前後~それ以上)を堀跡と統一した。

4号堀跡(第48図、写真図版51)

〔位置・検出状況〕 IA 5 fからIA 6 hに跨って位置する。当初調査区最北部は安全のために法面を大きめに取り調査を開始した。結果、当遺構やSI 04などが検出され、法面を調査区ぎりぎりまで広げて精査を進めている。検出面はV層上面である。

〔重複・隣接関係〕 北側と南側で調査区外に延びる。また搅乱でところどころ削られている。

東壁の南側でSK 04と隣接する。北側でSI 08の西側を切る。中央部をSD 10が横切ると推定するが新旧関係は定かではない。

〔堆上・堆積状況〕 SI 06埋土上位(暗褐色土)の上に褐色土層があり、その上に載る砂質の黒~暗褐色土が当遺構の埋土の主体となる。色調や縮まりなどによって細分される。上位には砂質の暗褐色土浅く、中位には黒褐色土が深く入り込む。壁際や下位には褐色土(壁の崩落土か)が埋まっている。自然堆積である。断面図に見える搅乱は、2回目の精査時に取り除いている。

〔平面形・規模〕 ほぼ北から南に延びる。北方向には直線的に延びそうであるが、南方向でやや西側に屈曲する感じである。検出された延長は11.50mで、開口部径は搅乱の影響が少ない中央部で1.50~1.60mを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はV字状ではあるが底が平らになる、いわゆる逆台形状で壁はなだらかに直線的に立ち上がる。深さは搅乱の影響の少ない東側北部で最大72.2cmを測る。検出面の標高は49.10mで、底面の標高は48.40m前後である。底面はほぼ平坦で南北の標高差はない。

〔その他〕 深さはあるが幅は他の堀より狭く、断面形でも下位の方で溝に近い形をしている。遺物も出土していないことから、溝に分類できるかも知れない。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 埋土から中世から近世にかけての遺構と考えられる。

5号壙跡(第48・62・69・90、写真図版52・63・68)

〔位置・検出状況〕 調査E区ほぼ全域に跨り、VF5hグリッドからVG10gグリッドに延びる。検出状況は先に述べたとおりで、検出面はV層をやや下げた状況での確認となった。最北部は県教育委員会の試掘トレンドが深く、再現したが湧水がひどく断念した。また、南北2回の検出精査となつたためにその交点に若干の未調査区域が生じた。それらの部分は推定線となっている。

〔重複・隣接関係〕 墓土上位にSD13がある。南北それぞれ調査区外に延びる。

〔埋土・堆積状況〕 南北に長いためにそれぞれ堆積状況に多少の違いが見られる。南北2箇所計4箇所の壙土断面を精査実測した。北側では暗褐色土と深いところで下位に黒褐色土が堆積する。また浅くなる中央部には混合土も確認できる。南側では黒みの強い黒褐色土が炭を伴って埋まる状況を確認している。これらのことから、ほとんどが自然堆積であるが、一部に人為的な堆積があると考えられる。

〔平面形・規模〕 小さく蛇行しながらほぼ北から南に延びる。北側は大きく方向が変わらないようである。南側は西側に屈曲しそうであるが蛇行しているだけかも知れない。検出した総延長は75m、幅は北側で開口部径170～190cm、南側でやや狭く140cm前後となる。

〔断面形・深さ〕 断面形は深いところではV字型で直線的に傾斜するが、中央部の浅い箇所では碗形でゆるやかに立ち上がる。最南端は底面が平坦となる。検出面の標高は南側の東壁上で49.10～49.50mで推移する。深さは一定せず、南側では浅いところで16.8cm、深いところで60.2cm、中央部では30～62.5cm、北側では28～49cmという数値なる。蛇行している区域で浅くなる傾向がある。底面の標高は北側で48.60～48.80m、南側で48.70～49.00mとなり、最大で40cmほどの標高差がある。

〔その他〕 北側の方向は屈曲しない限り1号壙の南側に接続するように走る。墓土の状況、幅や底面の標高も1号壙と5号壙はほぼ同じとなる。同一造構とは言えないが、関連する可能性が高い。

〔出土遺物〕 繩文土器や弥生土器、土師器や須恵器を合わせて1635gの出土量となった。壙と関わりがありそうな中世遺物は出土していない。内訳は圧倒的に土師器や須恵器が多い。内黒坏の小破片もあるが、須恵器の破片が多い様相が観察できた。また深鉢と思われる小破片や、甕の口縁部の破片なども出土する。ここでは古代土器は3点(36～38)と、繩文・弥生土器3点(123～125)を掲載した。石器は23点(1226g)の出土で1点(造構外355)を実測掲載した。

〔時期〕 1号壙と同時期で古代から中世にかけての造構と考えられる。

(6) 柱穴状土坑

B・D区検出の柱穴群はIV層下面またはV層下面でのものである。C区のものは最終面での検出である。

B柱穴状土坑群1《PP13～39》(第49図、写真図版53)

〔位置・検出状況〕 III C 6・7 f・gグリッドに跨って位置する。平成18年度に検出したPP01～12は木痕と判断して登録なしとし、平成18年度分と19年度検出分を合成したものである。検出面はV層上面(IV層下面)である。

〔重複・隣接関係〕 同一面では重複はない。

〔埋土・堆積状況〕 やや砂質の黒褐色土が主体となる。

〔平面形・規模〕 平面形は一部梢円形状となるが概ね円形となる。規模は表通りで、開口部径の小型のもので20cm、大きいもので48cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形は全て柱穴状で、深さは浅いもので12cm、深いもので40cmを越えるものもあるが、掘りすぎの可能性もある。

〔その他〕 建物跡の配列は判別しがたい。

〔出土遺物〕 P P 18から古鏡が一枚出土した。(380)

〔時期〕 墓土や出土遺物から中世末期の可能性が高い。

B柱穴状土坑群2《P P 40～48》(第49図、写真図版53)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 6・7 f グリッドに跨って位置する。検出面は S I 09 墓土上位となる。精査中に黒褐色土の柱穴状のプランを確認していた。検出面としては上記土坑群1とはほぼ同じである。平面形や断面精査は S I 09 床面で行っている。

〔重複・隣接関係〕 S I 09 床面を切る。柱穴状土坑群1と重複する。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色土が主体となるものや、やや褐色に近い土質のものがある。

〔平面形・規模〕 平面形は大型のものは不整の楕円形状になるものが多い。小型のものは円形となる。規模は表の通りであるが、柱穴状土坑群1より大型である。

〔断面形・深さ〕 断面形は大型のものは皿状や逆台形状を呈すものもある。小型のものはビーカー状である。深さは P P 45 が断然深く、次いで P P 41 となる。

〔その他〕 S I 09 の床面下での検出であるが、上位VI層上面での遺構と捉えた。ただし P P 40・45・48には褐色土が入り込む形となり、住居跡に関わる柱穴である可能性も否定できない。

〔出土遺物〕 墓土からの出土はない。

〔時期〕 弥生時代から古代にかけての遺構と考えられる。

B柱穴状土坑群3《P P 70～96》(第50図、写真図版53)

〔位置・検出状況〕 Ⅲ C 8・9・10 f と 10 g グリッドに跨って位置する。V層古代と思われる面を下げた段階で検出したものを集めた

〔重複・隣接関係〕 柱穴状土坑群1・2と上層で重複する。また北側には S D 06 や S I 01 がある。Ⅲ C 8 f 付近は下面に弥生土器を出土させるVI層が厚い。逆にⅢ C 10 f グリッド付近はVI層が薄くVII層面が現れている。

〔埋土・堆積状況〕 暗褐色シルトが主体の単層となる。

〔平面形・規模〕 平面形が不整の楕円形状になるものが多い。規模は表の通りであるが、柱穴群1より大型である。

〔断面形・深さ〕 断面形は大型のものは皿状を呈すものもある。小型のものはビーカー状である。深さは 12～48cm とまちまちである。深いものは掘りすぎている可能性もある。

〔その他〕 Ⅲ C 10 g グリッド杭を中心に楕円形状に配置されている様相が見える。Ⅲ C 9 f で 1040g、Ⅲ C 9 g で 335g の土器がVI層で出土している。検出面はVII層に近い面であることから弥生時代の竪穴住居跡があった可能性がある。

〔出土遺物〕 墓土からの出土はない。

〔時期〕 弥生時代から古代にかけての遺構と考えられる。

C柱穴状土坑群《P P 55～64》(第49・69図、写真図版53・68)

〔位置・検出状況〕 Ⅱ B 9 g・Ⅱ B 9 h・Ⅲ C 2 b・Ⅲ C 1・2 c グリッドに跨って位置する。こ

のグリッド付近はVI層が薄くVII層が確認できなかったところで、ややマウンド状に高くなっている。検出は最終面VII層上となる。

〔重複・隣接関係〕 重複はない。北側にS I 13やSK 33がある。

〔埋土・堆積状況〕 埋土は周辺の土坑と同じにぶい黄褐色土の単層で、やや粘りがある。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形状のものが多い。規模は図に示した通りで大型である。

〔断面形・深さ〕 断面形はビーカー形から逆台形状となる。

〔その他〕 規則的な配置は判然としない。遺構のあるIII C 2 b グリッドで196 g の土器が出土している。

〔出土遺物〕 PP 55・56・59・64から土器片が出土した。全部で64 g となる。PP 64から出土した114は壺形土器の体部片とみられ、沈線が観察できる。

〔時期〕 弥生時代の可能性が高い。

D柱穴状土坑群1 《PP 201～238》(第46図、写真図版53)

〔位置・検出状況〕 調査区最北部IA 4・5 g 5 f・6 gに跨って位置する。検出面はV層上面である。

S I 04の精査後に、調査区ぎりぎりまで表土を剥いで検出したものである。S I 04の埋土上面にも同様の小柱穴があった可能性がある。1個土坑に登録を変更した。

〔重複・隣接関係〕 4号堀と重複する。SD 11を切る。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はS I 06の埋土断面の上位に見えた黒褐色土の単層で、4号堀の埋土上位と同様である。

〔平面形・規模〕 平面形は真円を呈す。規模は表の通りで、開口部径の小さいもので18cm、大きいものでは36cmを測る。

〔断面形・深さ〕 断面形はほとんどがビーカー形状となるが、浅いものは皿形状となる。深さは8.8～33.3cmとまちまちで、これは掘りすぎの可能性もあり、4号堀の中に入るものを除いた深さの平均値は15.1cmとなる。

〔その他〕 埋土の状況や大きさ、また堀と溝との関わりから平成18年度調査のA柱穴状土坑群と性格が似ている。堀と溝との交点周囲で掘り方の向きが斜めになるのが特色である。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 4号堀やSD 10、A区検出の1号堀や2号堀とも同時期の、中世から近世の遺構である可能性が高い。

D柱穴状土坑群2 《PP 101～109》(第46図、写真図版53)

〔位置・検出状況〕 II B 1・2aに跨って位置する。検出面はV層下面である。

〔重複・隣接関係〕 SD 11とSK 06が中央部にある。

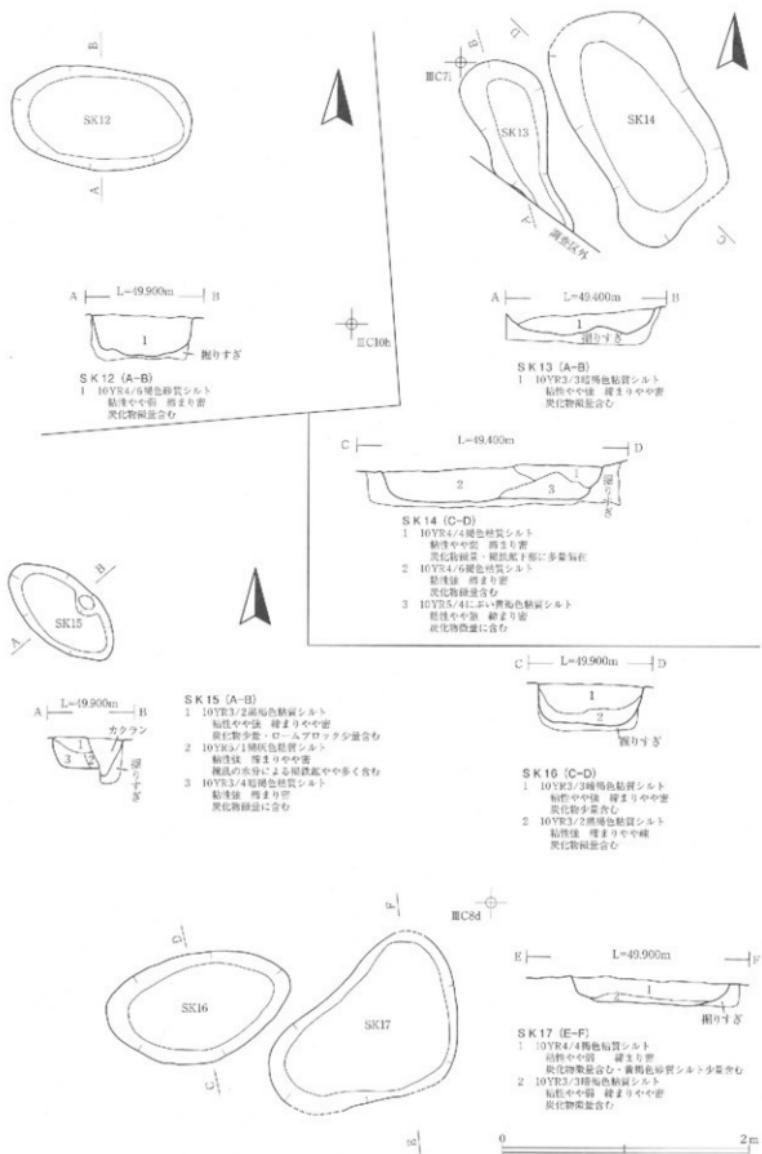
〔埋土・堆積状況〕 黒褐色土の単層である。

〔平面形・規模〕 平面形は円形で規模は表の通りである。22～44cmで統一性がない。

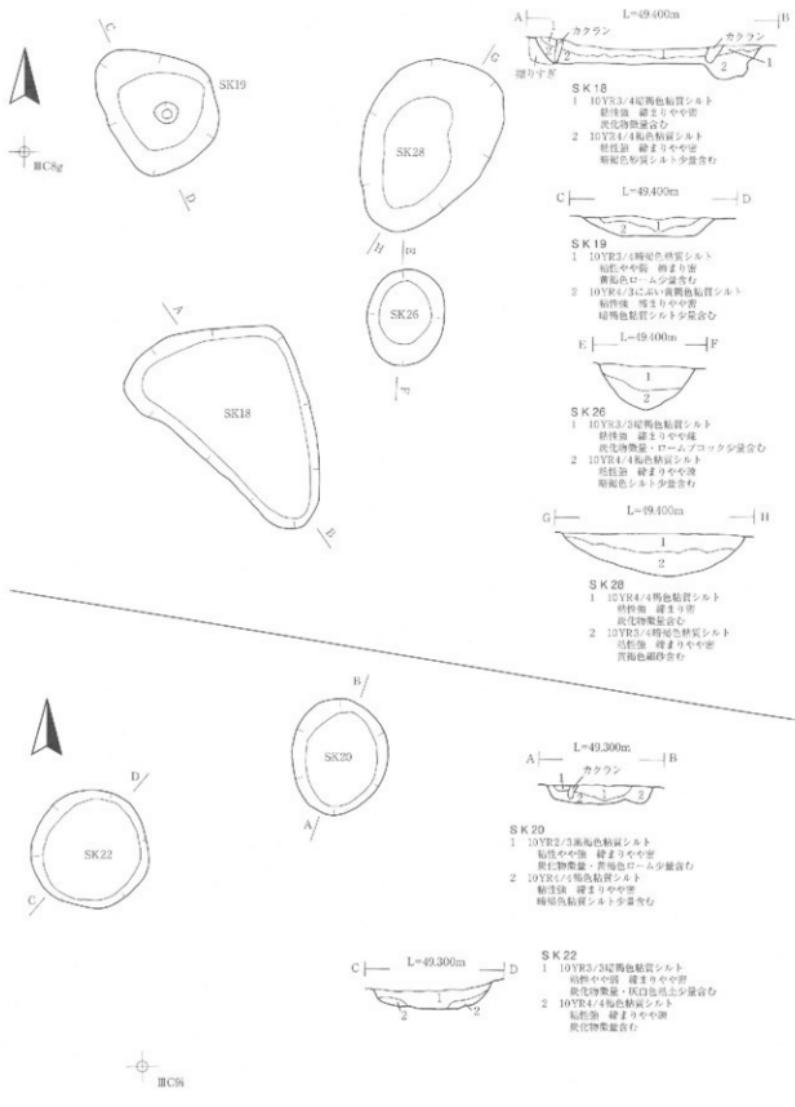
〔断面形・深さ〕 ビーカー形を確認した。深さは11～26cmである。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

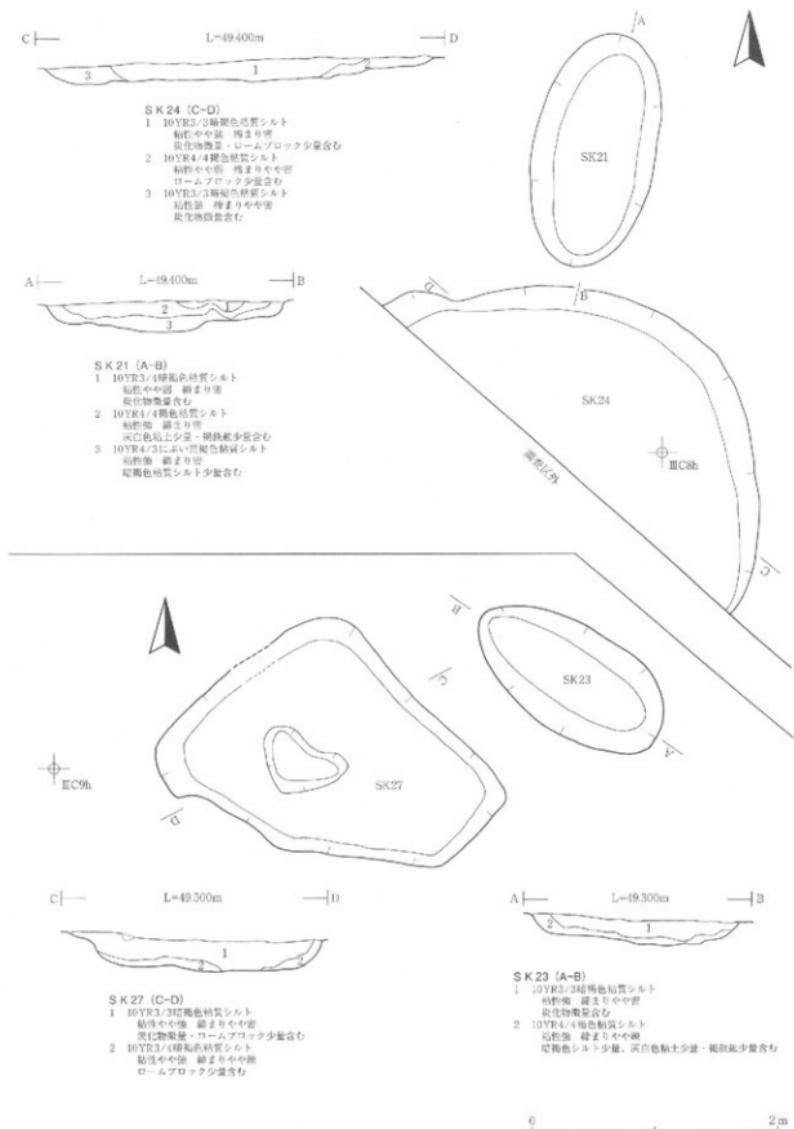
〔時期〕 不明である。



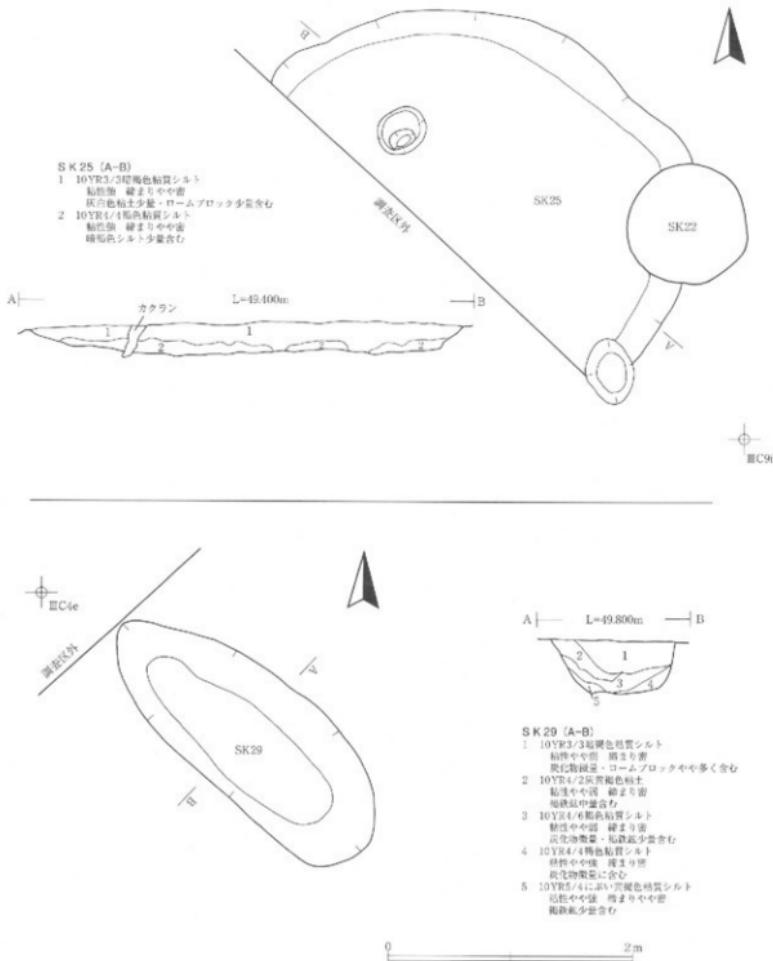
第32図 SK12~17土坑



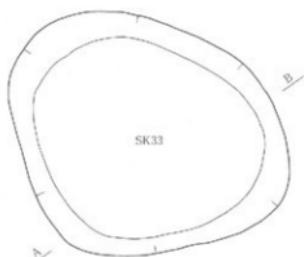
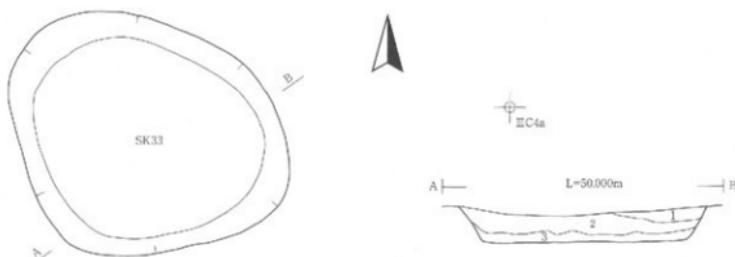
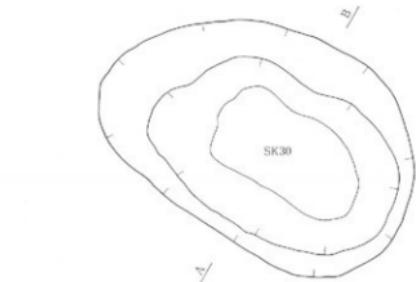
第33図 SK18・19・20・22・26・28 土坑



第 34 図 SK 21・23・24・27 土坑

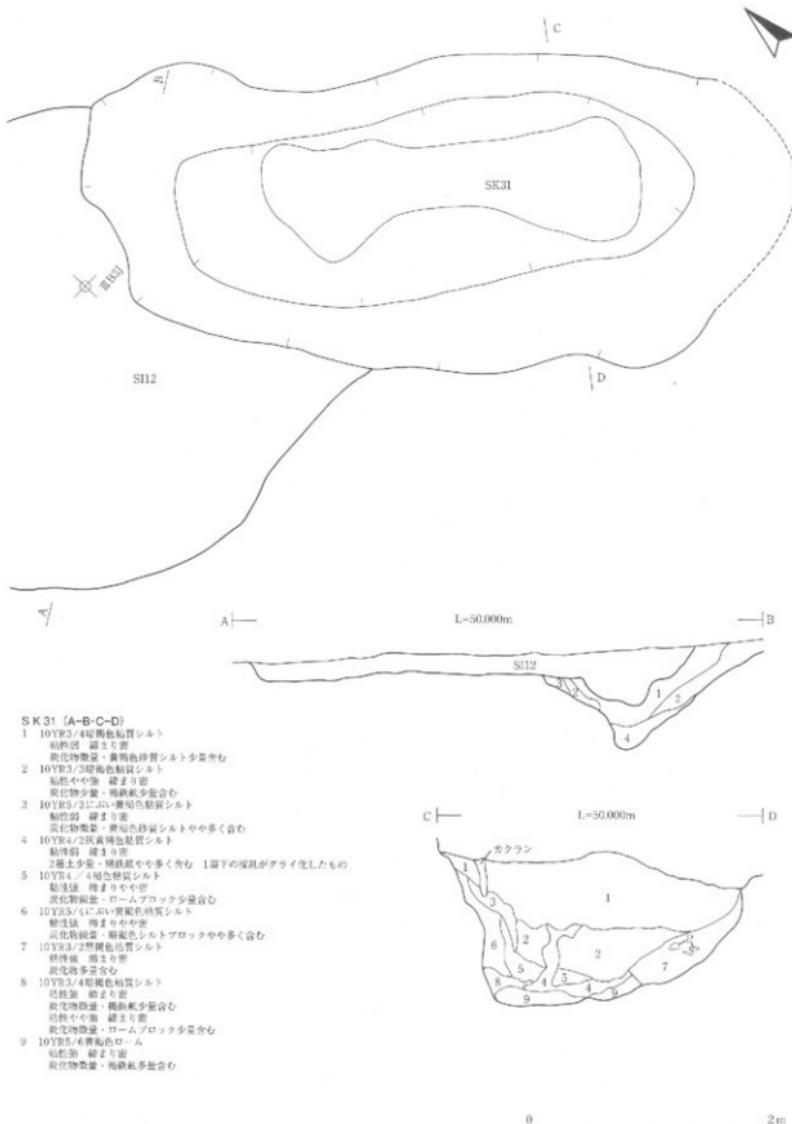


第35図 SK 25・29 土坑

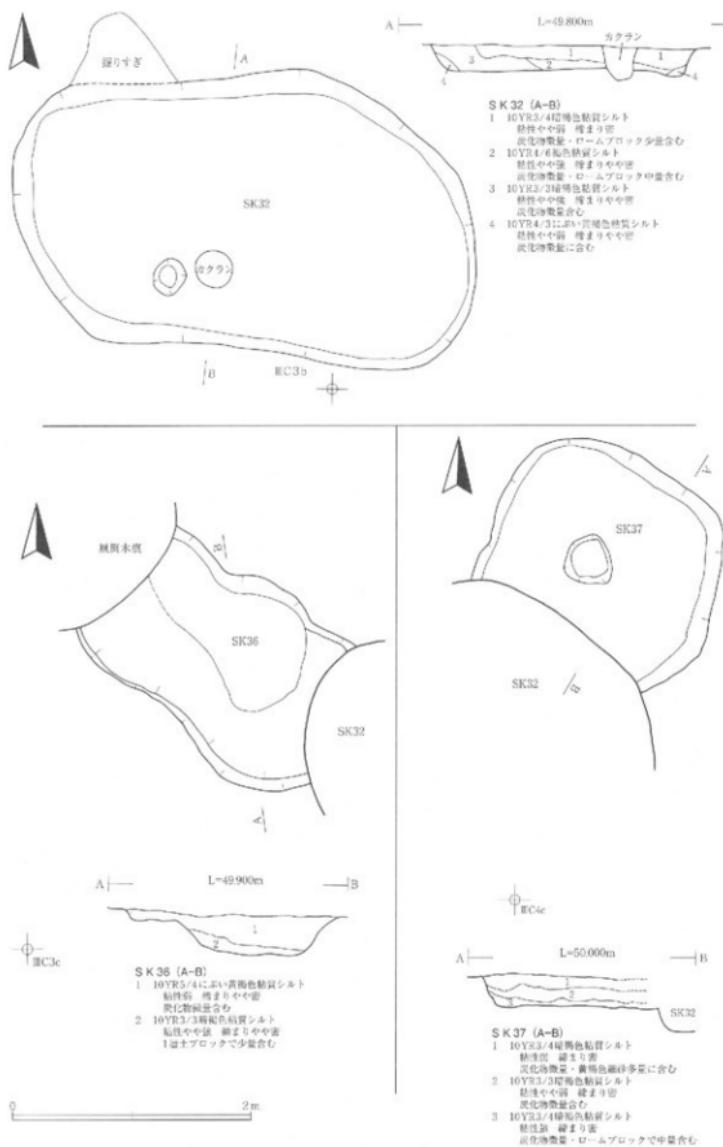


0 2m

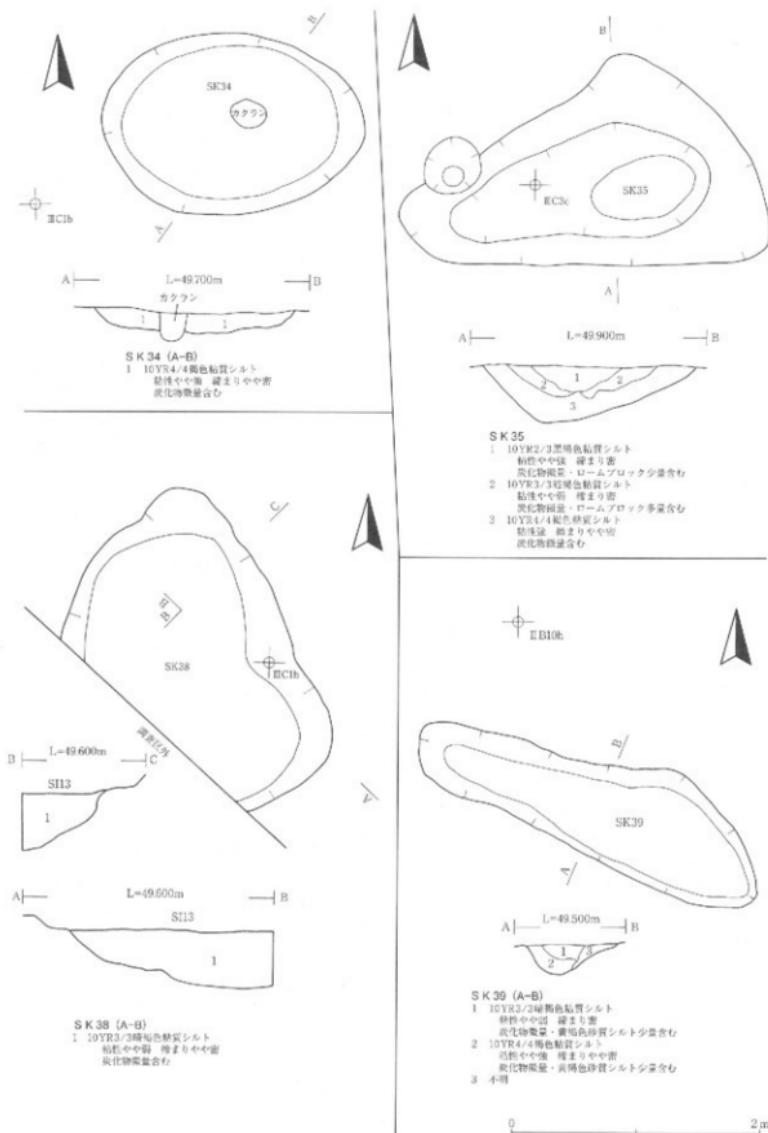
第36図 SK 30・33土坑



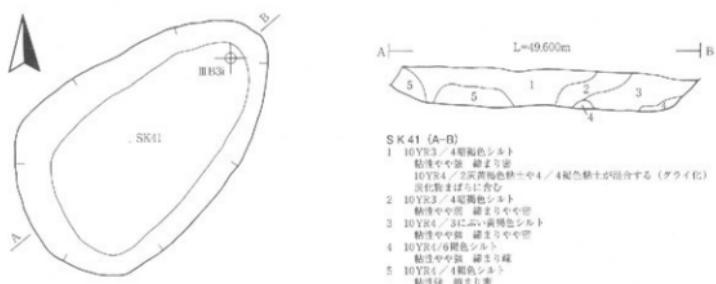
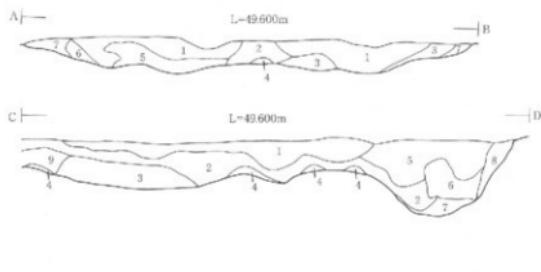
第37図 SK 31 土坑



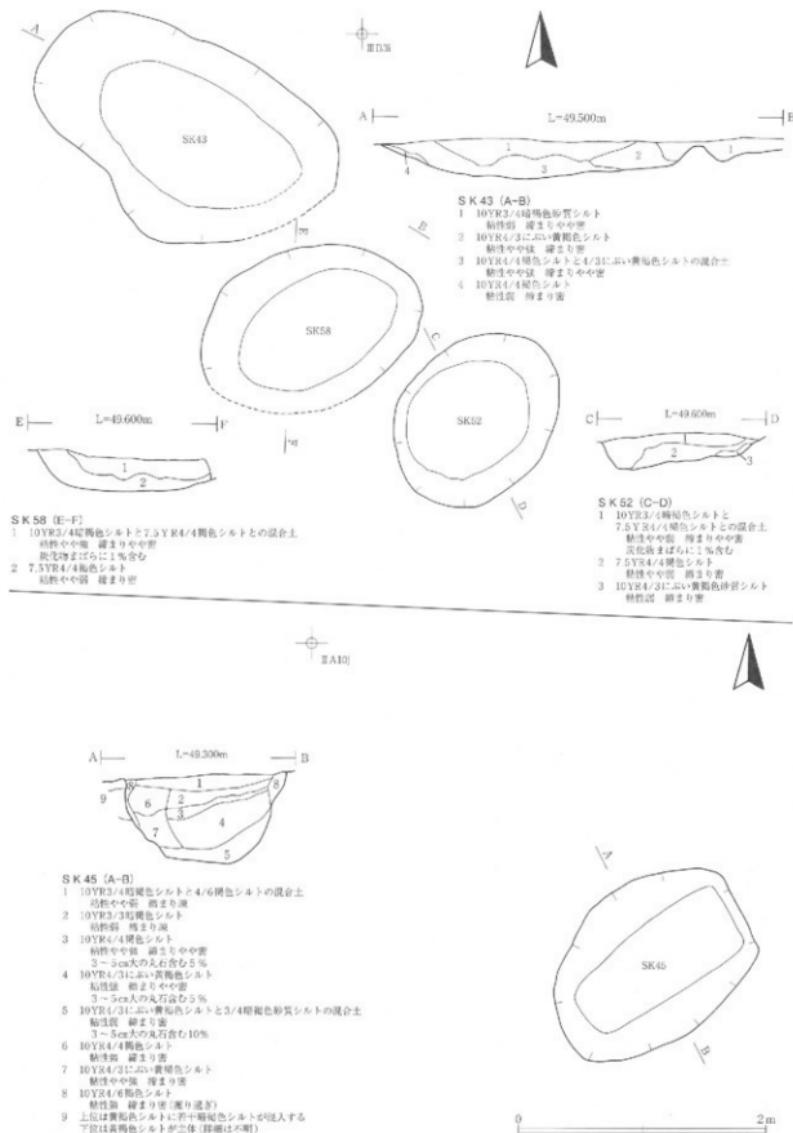
第38図 SK 32・36・37 土坑



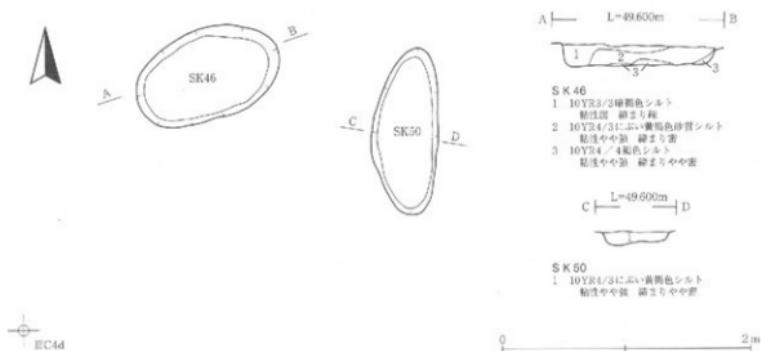
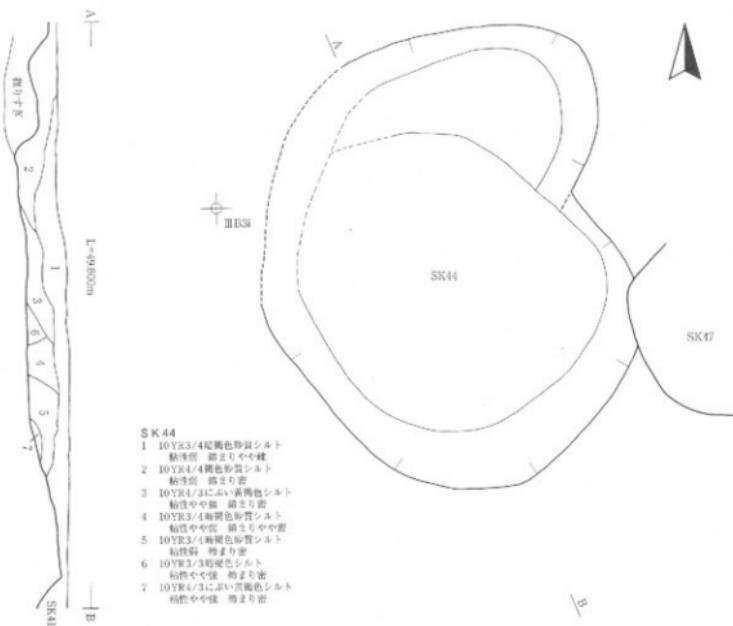
第39図 SK34・35・38・39土坑



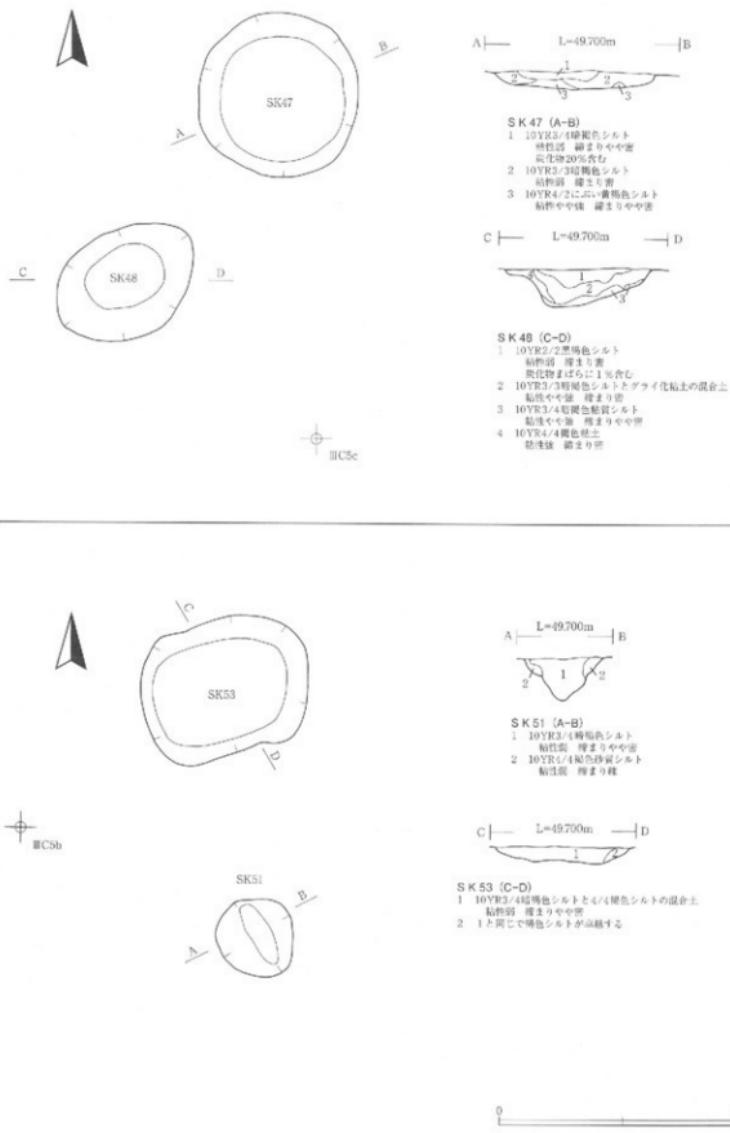
第40図 SK 40・41・42 土壌



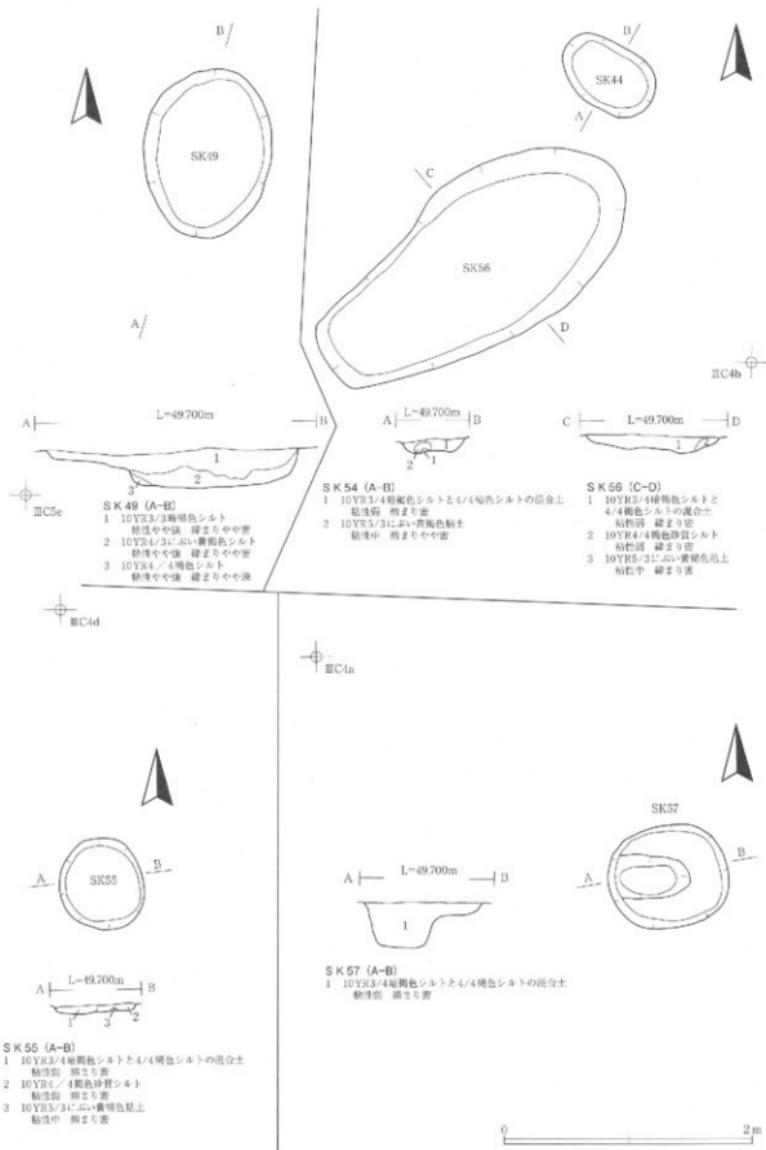
第41図 SK 43・45・52・58 土坑



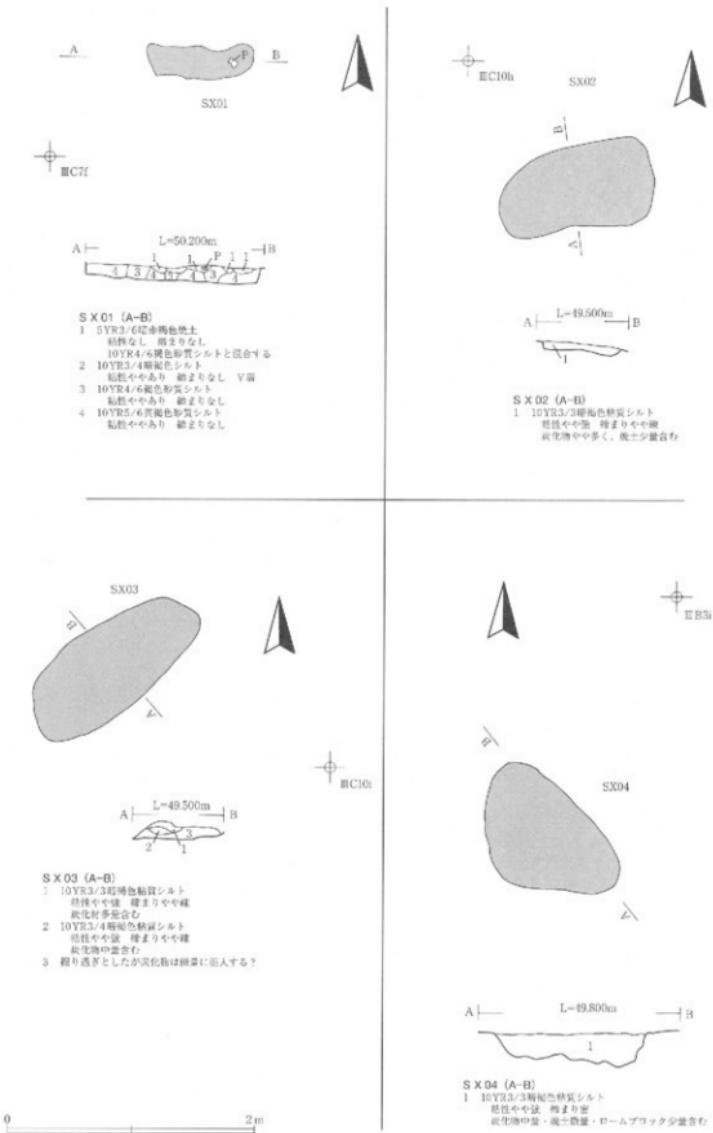
第 42 図 SK 44・46・50 土坑



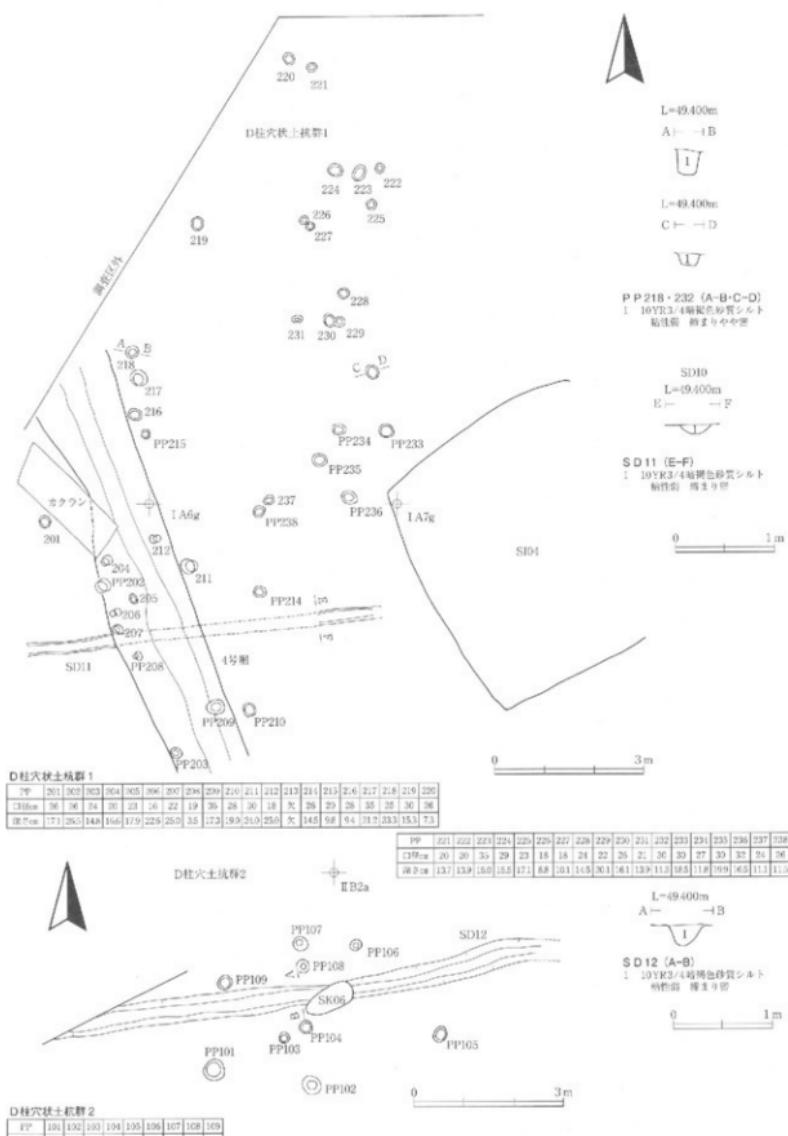
第43図 SK 47・48・51・53土坑



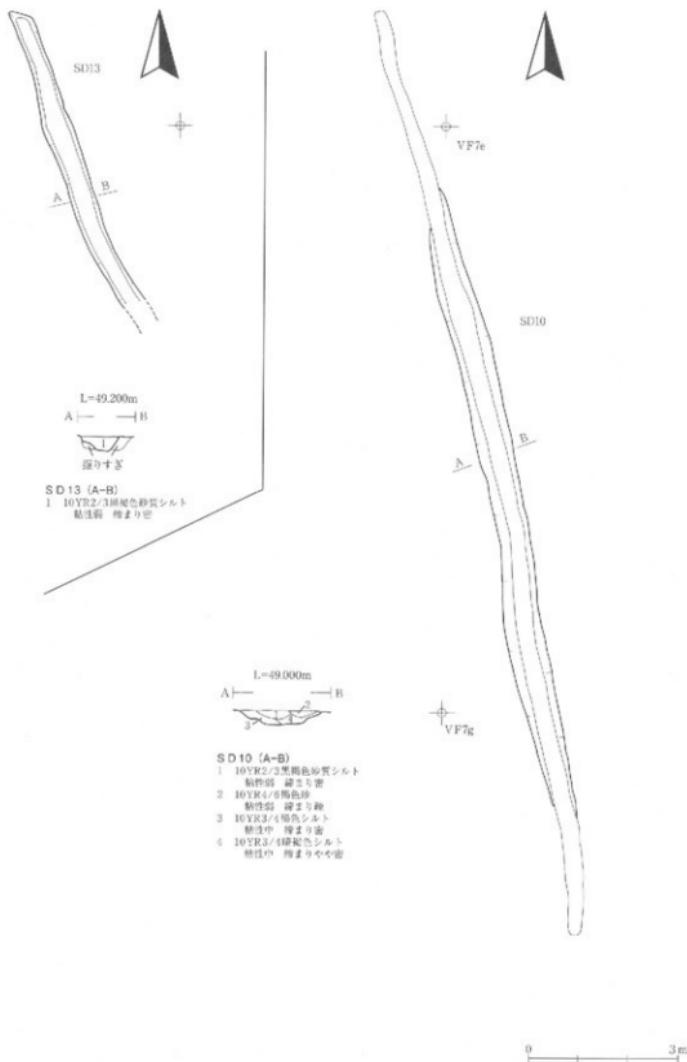
第 44 図 SK 49・54・55・56・57 土坑



第45図 S X 01～04 焼土・炭化物範囲

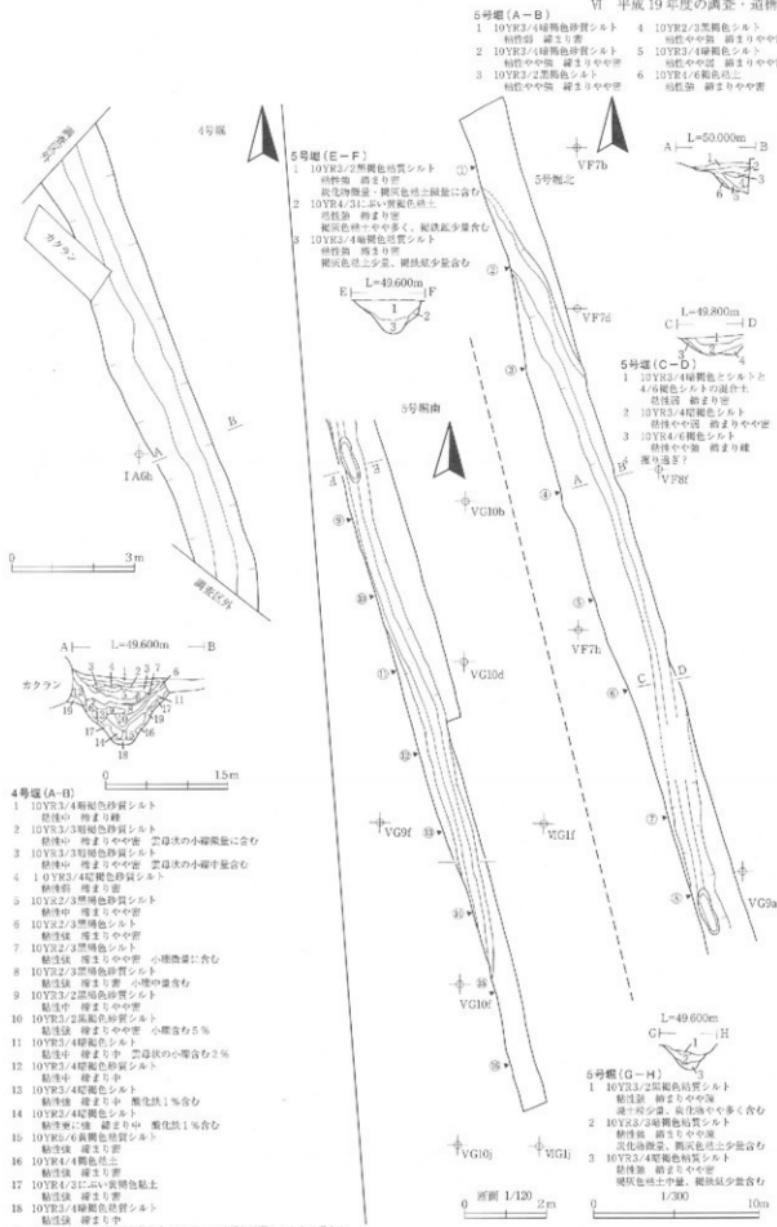


第 46 図 SD 11・12 溝跡、D 柱穴状土坑群 1・2

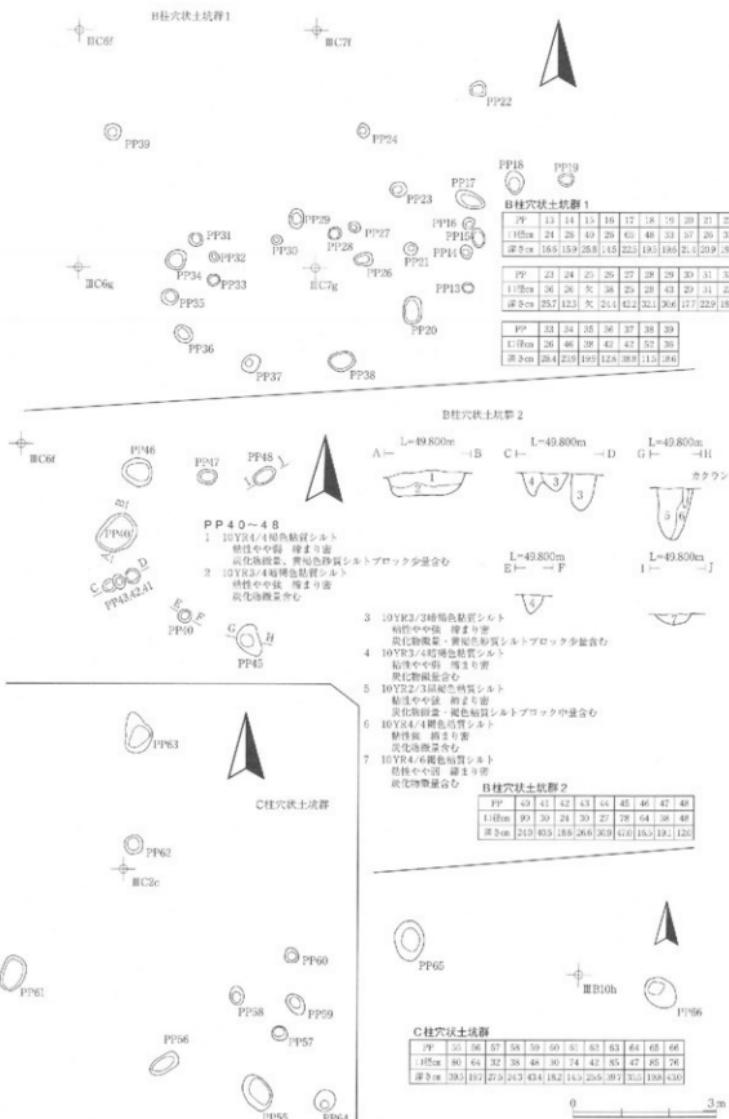


第47図 SD 10・13溝跡

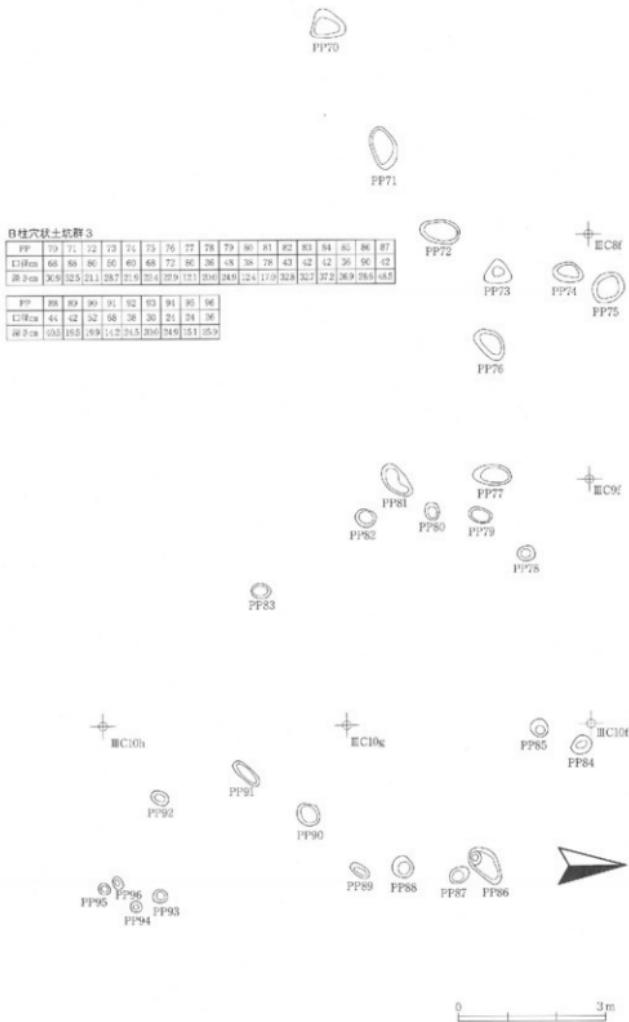
VI 平成19年度の調査・造標



第48図 4・5号堤跡



第49図 B柱穴状土坑群1・2、C柱穴状土坑群



第50図 B柱穴状土坑群3

(7) 配石遺構

平成18年度調査では石の集積されている遺構を敷石遺構として1基検出した。平成19年度では4箇所の礫集中区を検出している。この礫には意図的な配置が成されていることから配石遺構とした。性格ははっきりしないが縄文時代後期のストーンサークルを代表とするいわゆる祭祀的遺構ではない。4基ともすべてVI・VII層のない旧河道北側の古代面での検出である。

1号配石遺構(第51・52図、写真図版54・56)

[位置・検出状況] I A10 h・II A 1 iに跨って位置する。D区表土剥ぎ後の最初の検出(IV層下)の際に、小さな礫が散在する緒円形のプランを確認して精査を開始した。小礫を取り除いたところ、西側の高い位置に礫の配列を検出し、東側に向かうほど礫が多くなり、最終的には南北に4列、東西に2列の配列を認めて、配石遺構として登録した。精査の際、その性格をつかむために上位に載る小礫(1cm程度未溝)は取り除いている。

[重複・隣接関係] 配石の東側は水路下に延びる。ぎりぎりまで調査を進めたが、水路崩落の危険があり取りやめた。北西側にS 1 07がある。また南側は旧河道縁でなだらかに落ち込み、そのラインの一部を図示した。(第51図下)

[埋土・堆積状況] 最上位に暗褐色の砂礫層が載る。この砂礫層はIV層の可能性がある。中層は褐色土層で、S 1 04の埋土の主体となる層と同色であるが、小礫を多く含み、また黄褐色土の粘土粒などが含まれる違いがある。この層は旧河道断面に見えるV層下VI層上の濁りのある礫層に似ている。礫は暗褐色土層に埋まる。

[配石検出プラン・深さ] 緒円形状の凹みの底面に礫が配置されるが、その凹みは東西に6m、南北に4.30mを測る。壁はなだらかに落ち込み、北側壁で14.2~16.5cm、南壁で13.2~15.1cmを測る。礫のある底面は半坦となるが東南側に向かってやや下がり気味である。主軸方位はほぼ東西となる。礫は溝状に掘られた土坑に埋めて配置されている。

[溝の配置・規模・深さ] 溝はやや弧を描く形で南北4列、最も東にある4列目に直交する形で東西2列ある。南北に並ぶ4列の長さは、短い最西のもので2.50m、最東部で2.78mを測り、他の2列はその範囲内に納まる。幅は最西で36cm、他は42~43cmではほぼ一定している。溝断面形はビーカー状では直角に上がる。間隔は狭いところで5cm足らずであるが、概ね10cmで統一されているようである。深さは13~20cmで様々であるが、底はほぼ平坦である。東西の2列は、北側のものが長さ120cm、幅25cmで、95cm離れてある南のものが、長さ130cm、幅50cmを測り、深さはどちらも13.5cmとなる。明確ではないが、北側のものは4列目のものとほぼ同じ掘り方となり、南側のものは単独で掘られている印象を受けた。その2列の東隅から130cm離れて1列の溝がある。実際は2列まで確認したが、調査後に水路表面が崩壊し実測できなかった。よって溝の規模は不明であるが、上記の6列よりは長さや幅および深さとともに大きく深い様子がみえた。検出面の標高を東西で見ると、4列の最西が48.86m、最東が48.82mではほぼ水平になり、やや離れてある溝の壁上は48.73mで10cmほど下がる。

[配石状況] それぞれの溝に大小様々な礫が埋め込まれる。大きいもので20cm前後、小さい礫では1cm足らずのものまであり、その埋め方は大型の礫を小型のもので固定するような形状となる。ただし、最東部のものは、大型の礫はあまり使わずに、10cm程のものを隙間のないようにしっかりと埋め込まれており、性格を異にする。「暗渠水路」に似た構築方法である。

礫はほとんどが丸石(川原石)で特別に加工されている様子はない。配置された礫上面は、多少凸

凹があるものの、概ね標高48.50～48.70mの範囲に収まる。地形が南東方向にやや傾く状況に逆らうような数値がでた。

〔遺構の性格〕 平成18年度検出の敷石遺構ではあきらかに、上面に平らの石を配置して上を歩く様な設定に見えたが、当遺構はほぼ水平ではあるものの比較的凸凹する。歩くというより、滑り止めといったような感じがした。また神社の鳥居のような形をしており、その方向が西側を向いているのも何らかの意味合いがあるかも知れない。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 埋土からS I 04など同時期あるいはやや新しい時期観が与えられる。古代～中世の遺構であると予測される。

2号配石遺構(第53・54図、写真図版55・56・63)

〔位置・検出状況〕 II B 4 bに位置する。配石遺構としては3号配石(C 1号配石)の次で3番目の検出となったものである。旧河道の調査中に一部礫を検出し、当初は旧河道と思われる範囲内の黒褐色土中なので大規模になると予想されたが、下ていく内に大規模な礫の配列が認められ登録した。1号配石遺構で検出した埋土プランは明確にできなかった。写真では不整の楕円形状に崖んでいるようになっているが、配石の範囲を捉えただけで掘り方ではない。1号配石遺構よりは礫の配置がややまだらになっているが、比較的小さな礫が多く精査中に崩れたことが原因で、必ずしも遺構の性格的なものではない。

〔重複・隣接関係〕 北西約24mの旧河道西岸に1号配石遺構が、同じく西岸の南南東24m離れた位置に4号配石遺構がある。北西8m離れて3号配石遺構が、3号配石遺構と当遺構と挟まれた形でSD 11が走っていると予測する。

〔埋土・堆積状況〕 矮面上での検出で、上位の埋土は明確にできなかったが、1号配石遺構に見られた小礫を含む黒褐色土や褐色の混合土は確認できなかった。礫は暗褐色土に埋まる。

〔溝の配置・規模・深さ〕 北西から南東に延びる(北西溝と仮称)7列と北東から南西に延びる(北東溝と仮称)8列で構成される。北西溝2列目と北東溝3列目は重なり、「くの字型」を呈す。その新旧は北東溝3(西から3列目)と北西溝2(西から2列目)の交点観測で北西溝が切っているように見えた。しかし明確でなく図では新旧を示していない。よって「くの字型」を他と区別することも可能であるが、ここでは前者で説明する。北西溝7列は、形状は直線的で、長さは北西溝1で2.40m、北西溝3で推定2.90mを測る。幅は30～40cm内に納まる。北東溝8列は平面形がやや弧を描き、北東溝3の長さが推定300cm、幅が38cm、北東溝8の長さが推定210cm、幅が30cmとなる。深さは壁の崩壊の少なかった北東溝の北壁側比高で2が17.5cm、7が29.3cmとなり、3～7で深くなる傾向がある。断面形状はビーカー状ではほぼ垂直にあがる。それぞれの間隔は北西溝の1～2でやや広く40cmあるが、他は5～10cm足らずで、狭いところでは1cmほどである。

底はほぼ平坦である。底面が北東溝1の一部と北西溝1の全部が褐色砂であるが、他は黒褐色土である。

検出面(各溝の壁上面)の標高を北西壁で見ると2の西壁が48.85m、5の西壁が48.67m、6の東壁が48.58mとやや東に向かって下がっている。

〔配石状況〕 矮の埋め込まれている状況は、大型の礫が少なく、中型(10cm前後)の石を隙間なく丁寧に埋め込んでいる様子が伺え、1号配石遺構の最東溝の状況に似る。なかには扁平の石を並べて、その上に中型の礫を置いたような状況も観察できた。

疊はほとんどが丸石(川原石)で特別に加工されている様子はない。配置された疊上面は1号配石遺構に比べれば凹凸は少なく、概ね水平で標高48.80～49.00mの範囲に収まる。地形が南東方向にやや傾く状況に逆らい、東に向かうほど疊を厚く積んでいる。

〔遺構の性格〕 溝は東側で非常に深く、間隔が狭くなる。上から掘削して石を埋めるのはやや困難に感じた。そこで疊を取り除き、その下を確認した。北東溝1は褐色土が底になることが確認できたが、溝2・3は暗褐色土が、溝4～北西塁8までは黒褐色土が底になり、黒褐色土の下に褐色砂があり、その下に暗褐色土が沈み込むことが分かった。下の暗褐色土が、旧河道の沈み込みになる可能性も指摘できる。それらのことを考慮すれば、斜面になっている区域が砂で埋まり(埋めて?)、整地してから一部は先に疊を積み上げ、隙間に土(木?)を埋めたことが想定できる。出土遺物はその埋めた土に入り込んでいたものであるか、疊の代わりに使ったものであるかは判別できない。

〔出土遺物〕 疊検出手面黒褐色土から66gの土師器・須恵器片が、疊の下から39(写真掲載)などの須恵器片他67gの破片が出土した。

〔時期〕 埋土は暗褐色土であるが、それを覆う黒褐色土の相互関係が把握できない。遺物はあるが流れ込みの可能性もある。したがって不明とならざるを得ないが、1号配石遺構と同時期と考え、古代～中世の遺構であると予測される。

3号配石遺構(第55図、写真図版57)

〔位置・検出状況〕 II A 3 j グリッドに位置する。周囲には用水路、排水管などの施設があり、検出面も深いために調査に制約があった区域で、検出も南隅だけとなつた。排水管のある区域を1mほどベルトに残して、北側を調査したが配石は認められなかつた。

〔重複・隣接関係〕 排水管があり中央部を精査できなかつた。また東側は水路近くで精査していない。南側にS D 11があり、その南6m離れて2号配石遺構がある。

〔埋土・堆積状況〕 実測していないが、1号配石遺構に似ており、埋土上位に小疊が混入する。

〔溝の配置・規模・深さ〕 溝は2号配石遺構の北東溝と平行する1列と、やや離れた1列を検出した。前述したように幅1mのベルトの北側ではなく、他の配石遺構のようには長い溝ではない様子である。確認された長さは、離れた桝円形状土坑で120cm、幅は40cmで、深さは計測していないが浅い。この規模の土坑が並べられている可能性が高い。溝の断面形は皿状である。溝の間隔は10～20cmであるが中心部は分からぬ。

〔配石状況〕 それぞれの溝に疊が埋め込まれる。疊はほとんどが小型の10cm以下の丸石(川原石)で構成されている。配置された疊上面の標高は、概ね標高48.70～48.90mの範囲に収まる。

〔遺構の性格〕 配石遺構としたが、他の配石とは性格がやや異なるかも知れない。平面形や規模、断面形はSK 06に似る。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔時期〕 不明であるが他の配石遺構と同時期であろう。

4号配石遺構(第56図、写真図版58)

〔位置・検出状況〕 II B 5 f・g グリッドに跨って位置する。調査区を横切る市道と大型用水路の間で検出したもので、他の配石遺構と同じ旧河道北岸にある。検出面はⅢ層褐色土面で、それより上位にV～VI層はなく遺物も出土しない。

〔重複・隣接関係〕 近隣に遺構はないが北東24m離れて2号配石遺構がある。

〔埋土・堆積状況〕 5列の溝に礫が埋まる。埋土は暗褐色土であり、自然堆積であろう。

〔溝の配置・規模・深さ〕 ほぼ南北に延びる4列と北東から南西に延びる1列で構成される。南北に延びる4列は1号配石遺構のものと軸線がほぼ同じとなる。形状は直線的であるが、比較的不整な橢円形となる。長さは165～190cm、幅は35～45cmで、深さはそれぞれの溝の東壁の比高を見れば、最小11.3cm、最大で17.2cmを測る。断面形状は皿形状で、東側ではほぼ垂直にあがる。中央部で2cm足らずであるが他は10～15cmを測る。底はやや内凹しており、礫の影響を受けている。検出面(各溝の壁上面)の標高を西壁で見ると、多少前後するが概ね48.70mと数値がでた。もう1条は軸をずらしてやや弧を描く。長さは150cm、幅は25cmで比較的狭い。深さは東壁高が9cmで浅い。底面の標高が他の4列よりも高い特色がある。

〔配石状況〕 磨りぬけ込まれている状況は、20cm大の大型の礫、また中型(10cm前後)小型もあるが、隙間になく埋め込んでいる様子が見えず散漫である。どちらかというと3号配石遺構の状況に似る。丸石(川原石)を利用しておらず、配置された礫上面の凸凹は少なく、概ね水平で標高48.70mの前後で推移する。

〔遺構の性格〕 断面で見る限り2号配石遺構のような人為的操作は見られない。削平されたのか上位に礫が少ないのも特色である。

〔出土遺物〕 ない。

〔時期〕 埋土から1号配石遺構と同時期と考えれば、古代～中世の遺構であると予測される。

(8) 旧河道と包含層

平成19年度の調査区C区は、北側で段丘縁となり大きく下がる。そこにはほぼ南北に流れる川(旧河道)があった可能性がある。その東岸の南東隔離崖縁から土器や石器がまとまって出土した。それを包含層3と登録した。

旧河道(第57図、写真図版59)

調査区北側をほぼ南北に縱走する。図は旧河道上位の覆土である黒褐色土の範囲を表している。実線は黒褐色土の範囲を確認したところで、波線は推定線となる。北側は1号配石遺構の南側で落ち込むラインが見えたが、方向が定かでないために線を入れてない。水路の東側トレンチで黒褐色土の落ち込みを確認し推定ラインの参考とした。また黒褐色土は西岸に薄く広がっていて、2号・4号配石遺構もその土を被っている。よってそのラインは、やや下がり始めた地点を境として引いた。

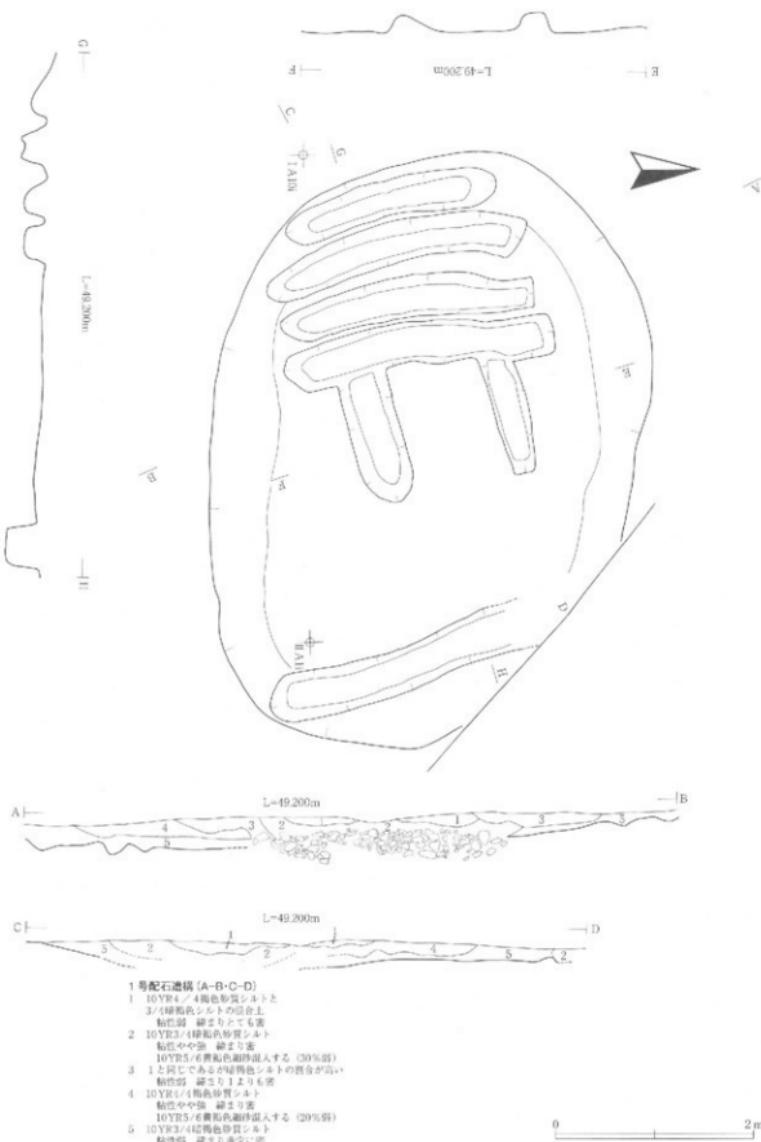
概観すると、西岸はなだらかな傾斜となっており、東岸は小さな断崖が形成されているように観察されることから、この旧河道は調査区北側より東側から緩やかに弧を描きながら南南西方向(北上市立照岡小学校方面)に流れていったであろうことが予測される。

小さな断崖を形成する東岸の一部を調査し、その結果を「旧河道東岸おちこみ」として図示した。その区域は、遺物が出土し特に南側に多く、遺物包含層3としている。遺物包含層からは北側でも土器片423g、石器14点(64g)が出土した。旧河道の覆土上位である黒褐色土からは試掘トレンチの結果、遺物は出土しなかった。

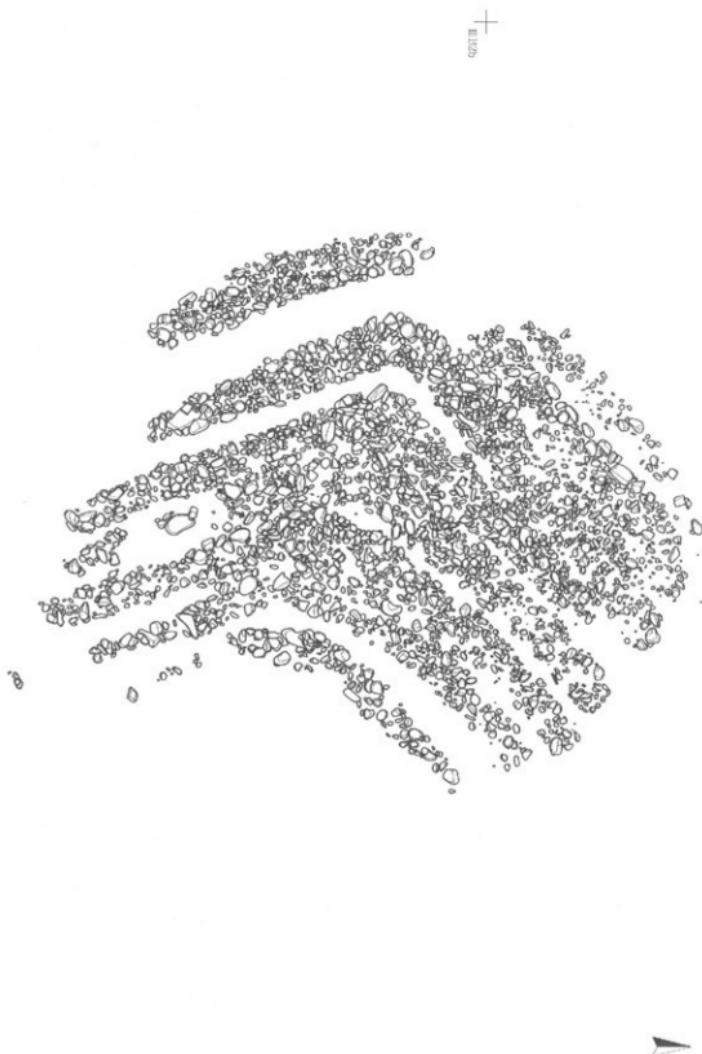
東岸落ち込み区域で土層断面を精査実測した。土層断面図の1はSD12(C1号溝)の埋土である。2・3は黄褐色～褐色土で中位に黄褐色のシルトを含んでいる。その下に混合土4・5と続き、遺物が出土する。包含層3は4の混合土のうち暗褐色土の卓越する層となり土器を出土させる。その特色



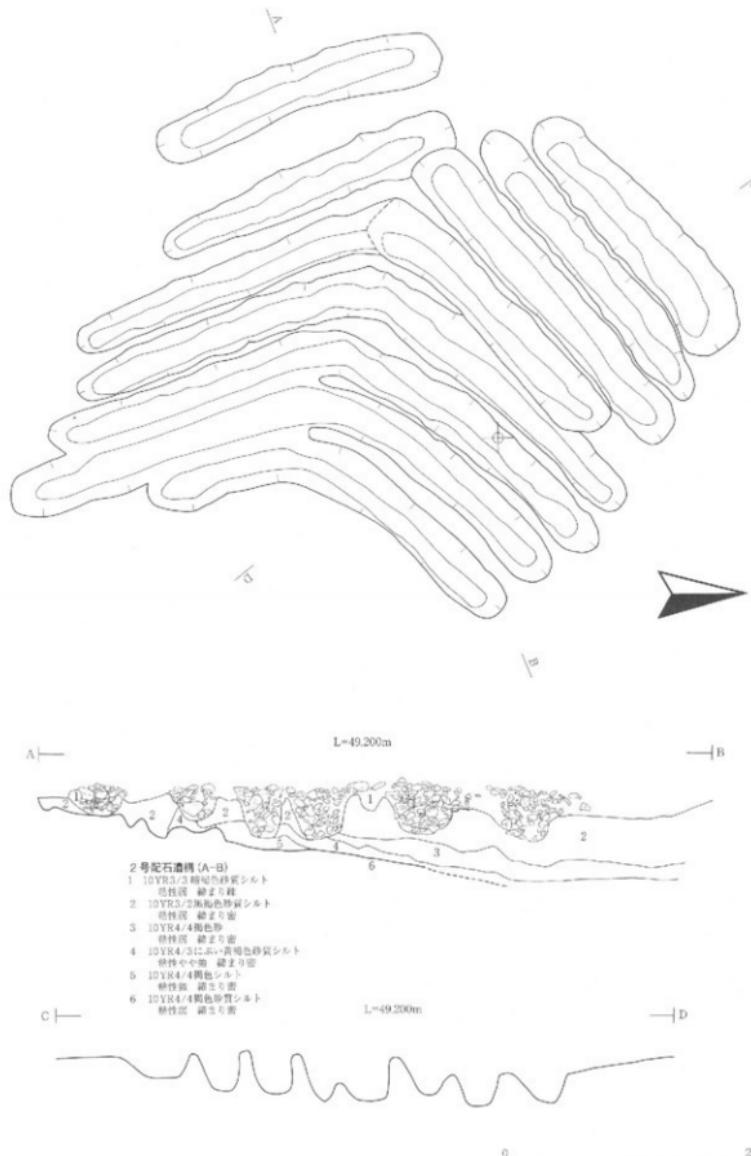
第51図 1号配石遺構①



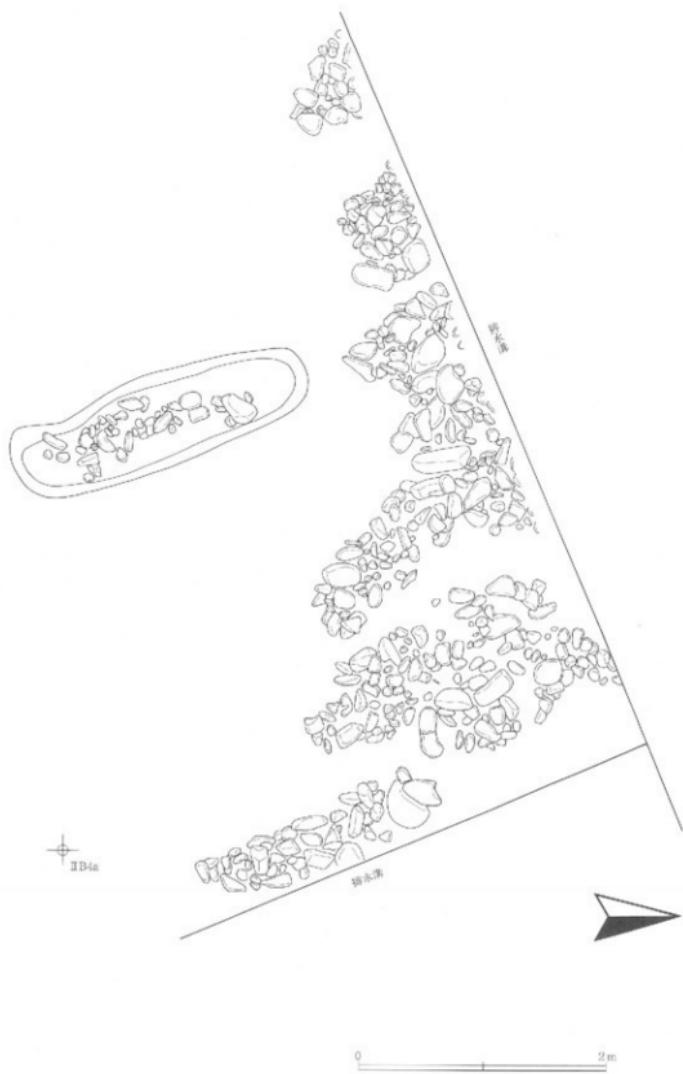
第52図 1号配石造構②



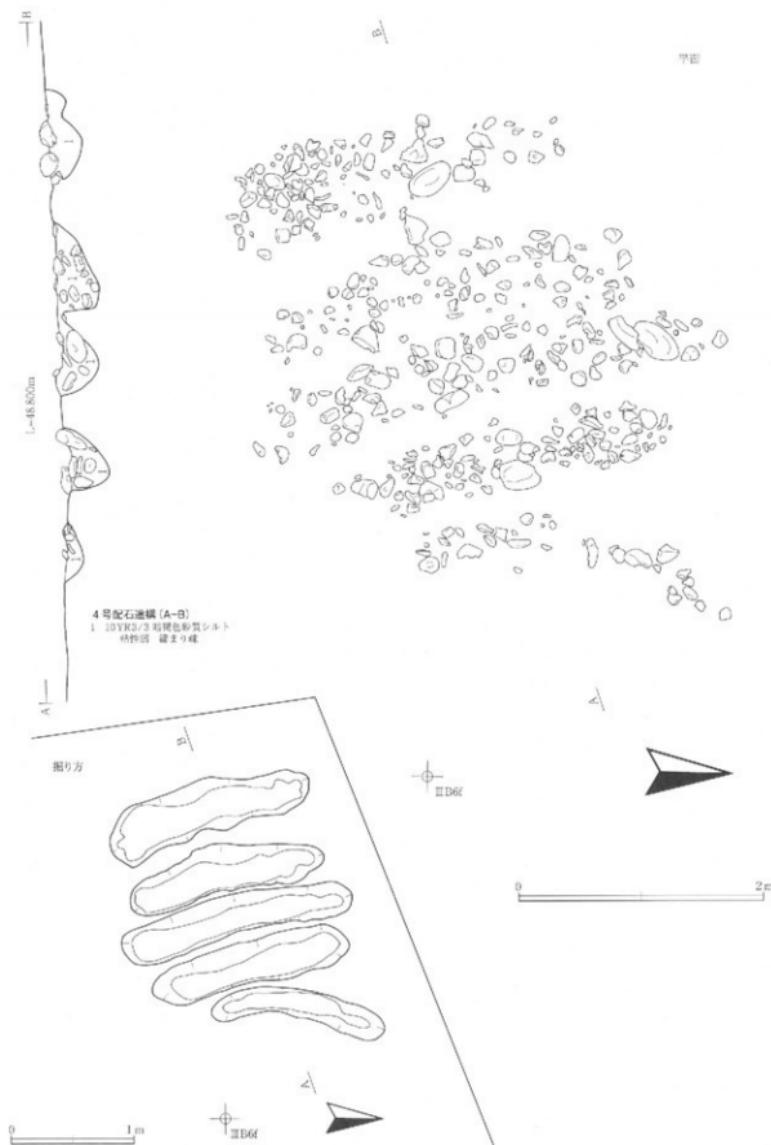
第53図 2号配石遺構① (縮尺1:40)



第 54 図 2号配石遺構②



第55図 3号配石遺構



第 56 図 4号配石造構

は特に包含層3Bに顕著となる。包含層3出土土器のうち最下層砂で取り上げた土器は、上層断面の5に当たる。6は黄褐色の粘土層。7以下からは無遺物層となる。5から上位がなだらかに斜面を形成する。これらの上に旧河道の中心となっている黒褐色土が載る。その厚さは調査中に取り除いたので不明だが、検出面とはほぼ水平に堆積していた。その堆積状況は断崖隅で薄く、中心部で厚い。その深さは不明だがトレンチ観察から、中心部でも断面図土層3の下位面(標高48.40m)までは下がらないと予測する。

この堆積状況を、基本層序に従えば、2・3はV層古代の遺物を含む層で、S I 04堅穴住居跡などの遺構の埋土となる層、4・5はVI層の弥生時代後期の包含層、6はVII層となる。調査区の南側に見えるVII層暗褐色土は見当たらない。また、6の下にある層は疊の混入する層(X層)で、近隣に見える細かい砂層(IX層)がないことが分かる。

これらのことから推測すれば、流路をかえながら河岸段丘を形成し、東岸側は縄文時代からの生活の場となっていた。その時代は土器の出土状況から、縄文時代中期後葉から前期前葉ごろと予測される。VII層が見えないということは、当時は大きな川であったのかもしれない。その河道は弥生時代後半ごろには、川として機能していなかった可能性があり、その窪みは深い状況であり土器の捨て場となった。

古代期のS I 01堅穴住居跡があった時代でも、沢としてまだ残っていたと推測する。そしてその後に、その沢を利用して、なんらかの施設として配石遺構が作られたと考えられる。再び川となつたのか、もしくは道となつたのかもしれない。埋まりきったのが黒褐色土の堆積した時期で、中世から近世にかけてと考えられる。

包含層3(第57・75図、写真図版59・72)

グリッドではII B 9・10 j・II C 10 aに跨る。旧河道範囲の南端で調査区外とぶつかる周辺である。南東側にS I 13堅穴住居跡遺構とSK 33土坑がある。

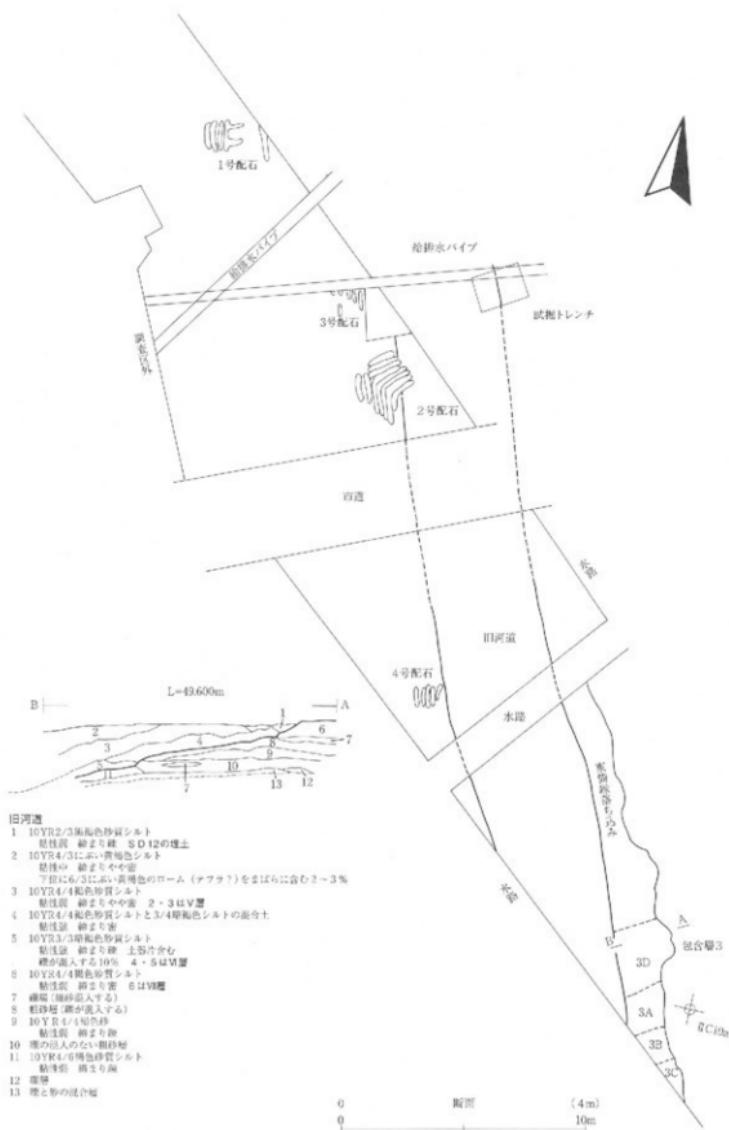
検出状況は旧河道東端で土坑状のプラン(C 32号土坑)とSD 12溝跡(C 1号溝)を検出し、精査したところ土器が出土した。その埋土は旧河道にむかって潜り込んでいることが分かり、改めて検出順にC 34～C 37号土坑として調査を開始した。しかし遺物は出土するものの、西側壁が明確にならず、土器を出土させる層の落ち込みとし、すべてまとめて包含層3とした。土層の特色は旧河道で示したとおりである。遺物は各々の土坑の埋土巾として取り上げたが、その特色には違いはなく、よって包含層3 A～3 Dは1つの包含層として捉えている。出土土器はほとんどが破片であり、遺物の捨て場であった可能性が高い。

それぞれの出土遺物量は以下の通りで、その位置は図に示している。重量は剥片を含む。

包含層3 A (C 36号土坑区)	土器	936 g	石器	12点 (138 g)
包含層3 B (C 34号土坑区)	土器	2452 g	石器	99点 (1960.7 g)
包含層3 C (C 35号土坑区)	土器	1012 g	石器	29点 (286.6 g)
包含層3 D (C 37号土坑区)	土器	203 g	石器	3点 (27.9 g)
	総量	4603 g		143点 (2419.5 g)

詳細はV 出土遺物で述べ、ここでは簡略する。

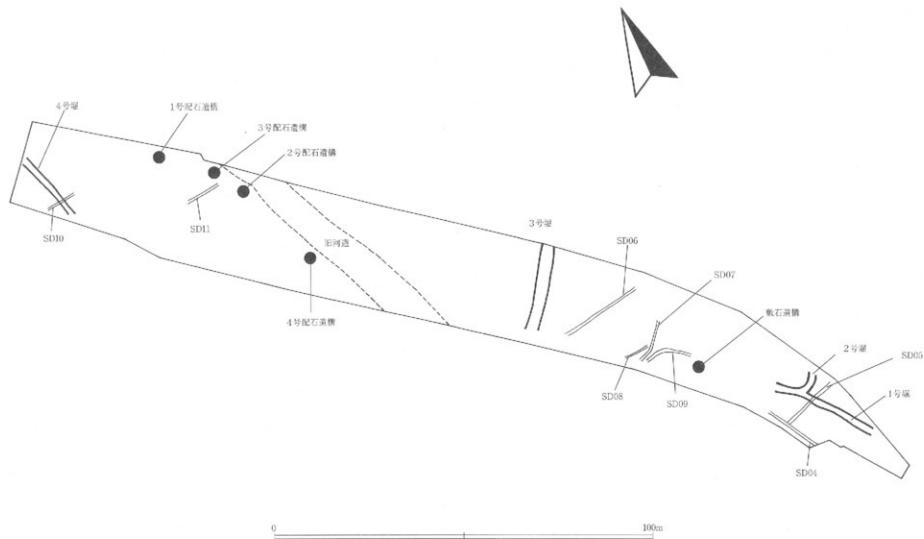
土器は小型の鉢と壺がほとんどで、浅鉢は見つかなかった。1点のみ蓋と思われるものがあるが



第 57 図 旧河道、配石遺構位置図

小型窓かもしれない。甕のほとんどが複合口縁になるか肥厚される。半口縁であるが、小さく波打つ感じで、内側が削がれたように薄くなる傾向が見える。地文が撚糸文のものもある。全体的に薄い小型の土器がほとんどで、S I 09 堪穴住居状遺構埋土出土土器のような大型の破片は見つからなかつた。

石器は、剥片石器では石鎌・石錐・スクレーパーが出土している。石鎌の割合が高いのは S I 09 堪穴住居状遺構出土石器と同様の特色である。また石核や剥片の出土も多く、石質は奥羽山脈産の頁岩が卓越し、北上山地産の頁岩は 1 点もなく、同じような捨て場遺構である包含層 1 と違う結果となつた。



第58図 古代～中世墓・溝全図

VII 出土遺物

1 遺物出土概要

(1) 平成18年度出土概要

A区とB区全体で縄文土器、土製品、土師器・須恵器類は大コンテナ(40ℓ)約3箱が出土している。内訳は土師器・須恵器が中コンテナ1箱弱で総重量は約4,105g、他は縄文もしくは弥生土器となり総重量は約23,150gとなる(土器重量数値には一部接合の際の石膏や袋分が含まれるので概数とした)。石器は石製品や石核、不明のものを含めて総数20,698.5gが出土した。内訳は、石鎌や不定形石器などの剥片石器(石核や剥片を含める)が4,437.8g、石製品が902.9g、礫石器(不明なものを含める)が15,237.8g、その他丸石(ただの石と認定できるもの) 120gとなる。その他では土偶や土錐などの土製品、中世から近世の陶磁器片、中世の古錢が出土している。

前項でも度々述べているが、本調査区は色調の似た土が幾層にも堆積しているため、その把握に時間を取りっている。そうした間にも遺物は出土しており、出土状況の記名に迷った部分があり、実際、後に変更した経緯がある。そうした部分も含めて各調査区に分けて概要を説明する。

A区は検出面が3面あるが、1面もしくは2面上に遺物は少なく、担当調査員(木戸口)が早めに層を把握できたために、大きな混乱はなかった。最も多く遺物が出土したのは第3検出面(VII層)で、プライマリーな状況で出土している。2面(古代面)を剥がし終えたVI層下からVII層中の出土で搅乱等の影響はない。2つの遺物包含層は土器では縄文時代晚期末葉から弥生時代初頭のものが中心となる。特に包含層2では完形に近い深鉢と壺が2点つぶされたような状況で出土している。石器では包含層1で石鎌や礫石器と共に石核や剥片を比較的多く出土させており、それらの石核の石質に似たものが北側調査区でも出土している。土製品では結髪土偶や土偶の足が出土した。

一方、B区ではI・II層の堆積が薄く、3つ目の層となる暗褐色土層の下は色調の似た粘土層が厚く堆積している。また、現代の搅乱(ゴミ捨て場など)が非常に多く、層位の把握に時間がかかり、調査初段階で得た遺物は曖昧なものが多い。実際トレンチで出土した土器や、調査初段階で出土した土器は、III層出土と記名した。当初、III層下が最終確認面と考えていたからである。その後、遺構の確認面は3面あることやVII層(弥生時代の遺物を出土させる層)の確認などにより間違いであることが分かり、隨時変更していった。主な変更内容は以下の通りである。

・トレンチや初段階で出土した土器でIII層と記名したものは、第2検出面V層と第3検出面の暗褐色土VII層である可能性が高い。

・検出面として取り上げた遺物はV層で出土したものである。

・検出面下と記名した土器は、弥生時代の遺物包含層VI層である。

・平成18年度2号住居状遺構の埋土上層はVI層、埋土下層黒褐色土はVII層と判断できる。

出土量は各層に少量であるが出土している。III~IV層では古錢や陶磁器、V層や検出面では土師器や須恵器が出土している。また、古代の土製品である土錐も検出面出土である。V層下VI層からVII層にかけては弥生時代中期から後期の土器が中心となる。A区ではVII層暗褐色土は縄文時代晚期の土器が出土するが、B区では見られない。

石器はアメリカ式石鎌やスクレーパーなどが出土した。剥片石器の中では不定形石器が比較的多く、石製品では破損品の独鉛石や小玉が出土している。

以上概観したが平成18年度にはB区は全体を調査しておらず、19年度調査によって資料は増加した。

(2) 平成19年度出土概要

調査区全体の出土量は、土器は、縄文・弥生土器や古代土器が大コンテナ約7箱出土している。内訳は土師器・須恵器がコンテナ1箱で他は縄文・弥生土器となり総重量は約44,800 gとなる（土器重量数値には一部接合の際の石膏や袋分が含まれるので概数とした）。石器は石製品や石核、不明のものを含めて総数71,850 gが出土した。その他では土偶や土鍾などの土製品、近世以降の陶磁器片が出土している。

出土の状況を区域ごとに見ていく。

B区は前年度からの継続区域である。ある程度VI層を下げている状況であるために、土器出土層位の信頼度は高い。早い段階で遺構を掌握できたので、遺構名を付して取り上げているものがほとんどである。平成18年度Ⅲ C 6・7 f グリッド区域での出土量が最も多く、S I 09出土遺物として取り上げている。ほとんど破片の状況で出土したが前年度に出土した破片と接合する例が多くあった。Ⅲ C 6 d・e グリッド付近で出土した土器はS I 11に関連する可能性もある。

また、前年度調査した古代の堅穴住居跡のだめ押で東側壁を押したところ、カマドが検出され、その中からほぼ完形の土師器壺や壺、須恵器の壺と土鍾が2点出土している。

C区はV層上位が削平されている区域で、土師器・須恵器などの古代の遺物はほとんど出土しない。しかし、深い土坑の埋土や住居状遺構から、弥生土器が出土している。また、旧河道の東側は急激に落ち込んでおり、土坑として精査したところ弥生土器が多く出土した。石器も多くアメリカ式石鏃が1点出土している。まとまって出土するのはB区のⅢ C 6・7 f グリッドに次ぐ量となる。

D区では、土師器片や須恵器片が数点出土したのみで、他は石製品1点のみである。しかし、土師器片を1個体とはいえ復元できたこと、須恵器片が配石遺構の石組の下から出土したことは遺構の性格を知る上で大きい。また、縄文・弥生土器が1片たりとも出土しなかったこともこの区域の特色をとらえている。

E区では、堀の埋土から土師器片や須恵器片が出土したほか、埋土下位や周辺のVI層から弥生土器が出土している。出土の仕方は平成18年度南側調査区（A区）に似て、堀の西側の出土が主であるが、前者が明確に縄文晩期末の特徴を持つものに対し、E区では弥生時代前期の土器が多い特色がある。

(3) 2年間の出土総重量

2年間で得られた遺物の総量は縄文・弥生土器64,374g、古代の土師器・須恵器7,681g、石器は剥片や不明の礫石器を含めて92,548gとなる。18年度出土土器は復元できた個体が多いことから比較的掲載の割合が高い。19年度出土土器は同様の破片が多く、抽出しての掲載となつたために割合としては低い。石器は石鏃や磨製石斧などの製品は全て掲載しているが、遺構外での礫石器などは代表的なものの掲載となった。

2 出 土 遺 物

(1) 土器・土製品

古代の土器については、壺・竈形土器・壺の順で記す。縄文・弥生時代の土器については、時期差があることから類別し、時代の古い順に記す。土製品は種類毎にまとめた。

① 古代の土器(第59~63図、写真図版60~64)

ア：壺・壺形土器

器形が分かるほどに復元できたのは、S I 01のカマドから出土した土師器の9・10の2個体とS I 02の焼土内から出土した27の1個体のみである。口径はS I 01のものは15~16cmで、27は推定17.4cmでやや大きい。9は器高が15.8cm有り、口径と器高がほぼ同じになるのに対し、27は底部は大きいが器高は低くなり、すんぐりとした形となる。口縁部の形状は口唇部が上方向に引き出され、やや外反するのは同じであるが、27のほうがやや大きく外反する。S I 01出土の壺は22を含めた3個体ともロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切りである。底部から体下部にかけて緩やかに上がり、外面はロクロを使ったヘラ状工具でのケズリ調整が施され、9は調整痕が残となる。一方27は体下部がやや凹み、丸みを持って上がり、外面が比較的明瞭な段となる。外面調整は明確ではない。

須恵器は大型の壺と壺がある。4はS I 01埋上位から出土した大壺の破片。36と37は5号堀埋土から、40は包含層1の上位から出土したものである。古代の住居跡が検出されていない調査区の南側(A・E区)からの出土が多い。2は須恵器の短頸壺で、住居跡炭化物集中区から出土した土器である。口縁部は緩い稜を持ちながらほぼ垂直にあがり口唇部で外反し、引き出された口唇部の断面形はハート形で、土師器の壺と同じ形状となる。口縁部推定径は15.8cmで、復元できなかったが、同一個体と推定される上げ底風の底部径は11.5cm程度であり、あまり大型のものではなさそうである。38は形状から長頸壺としたが、小型のものである。

イ：壺形土器

壺は土師器・須恵器あわせて25点を掲載した。内黒処理を施すものはそのうち3点のみである。S I 01では床面炭化物下から出土した5(写真掲載)同様の破片が、あわせて2点出土しており、口縁部はどれも外反しない。7は底部が回転糸切りで切り離され、再調整される。底部径は推計5.6cmで底部からふくらみをもって上がる。口縁部は不明である。

赤内黒の壺で口径と器高が判別する(推定できる)資料は、土師器が5点、須恵器が10点ある。赤焼きの壺1点を除けば、全てS I 01と02からの出土である。ここでは口径の大きさで特色を見てみる。口径部径が14cm未満、14.0~15.0cm未満、15cm以上の3つに分ける。

14cm未満のものは土師器では28のみで、須恵器では18と20の2個体ある。口径に比較して器高があるのは須恵器の20で5.0cmの高さを持つ。口縁部は少し外反し、口唇部がやや丸みを帯びる。土師器の28は底部上位に明瞭な段があり、口径の大きな土師器の特色を持つ。

15cm未満のものは土師器2点と須恵器6点の計8点で、全体に占める割合は高い。土師器の12と14は、法量はほぼ同じである。器形もさほど変わりはない。口縁部は外反するが、口唇部がやや内側が薄くなり先細りする特徴がある。須恵器の壺6点は、口径は様々であるが器高は4.5cm~5.1cm内に収まる。口縁部は30がやや内湾気味で外反しない。他はすべて外反するが、口唇部が先細りするもの(19・21・30)とやや肥厚され丸みを持つもの(22・23・29)に分かれる。

15cm以上のものは土師器では13と31、須恵器では3と26の4個体となる。最も大きな口径を持つ31は赤焼きの土器で、器高は4.4cmと低く、須恵器の3も同様の特色を持つ。13と26は法量的(口径と器高の割合)には変わらない。口縁部形状は土師器の13がやや外反し、先細るのに対して、須恵器の2個体は外傾するのみで、口唇部が肥厚され丸くなる。

これら壺のすべて底部切り離しが回転糸切りとなる。赤焼きの30と31は、底部の内面にロクロを

つかったナデが明確に確認された。

ウ：古墳時代の土器

45はS I 09埋土から出土し、当初は弥生土器として登録したが、観察の結果、土師器としたものである。体中央部が最大径となり、頸部が窪むことから球腹甕とした。表面色は褐色系で無文である。口縁部は大きく外反する。口唇部は緩やかな小波状となり、内側が内そぎされ外側でやや厚くなる。内部の形状で口縁部と頸部、また頸部と体部の境が角度を持つ。外側頸部に横位のヘラナデによる調整がなされる。全体的にナデ（ケズリ？）調整される。（実測図では無文となっている）

時期は5～6世紀と推定する。境遺跡の弥生時代と平安時代を埋める貴重な資料となる。

② 繩文・弥生土器

縩文・弥生土器は出土量で全体重量の90%以上を占める。出土量の多い区域はIVD 7 g グリッド付近（包含層1）が10,180g（全体の15.8%）、S I 09埋土出土（平成18年度Ⅲ C 6・7 f グリッド出土を含む）で8,847g（全体の13.7%）、次いでC区包含層3の5,497g（8.5%）、IVD 4・5 d グリッド（包含層2）の3,855g（6%）となる。この4区域で総出土量の44.1%を占める。この4区域のうち、包含層1と2、そしてS I 09埋土出土と包含層3はそれぞれ出土土器の時期が一定している様相を示す。そこでこの2つの時期を基準として土器を分類した。

包含層1・2（Ⅶ層）出土土器はB、S I 09埋土出土土器と包含層3で出土している土器はDにまとめた。また、Bより古い様相を示す土器をA、BとDと同時期もしくは間に挟まる時期のものをCとした。遺構内の土器は極力、上記のA～Dに当てはめたが、不明の時期のものをEと分類し、そちらに組み入れたものも多い。また、器種については器高と口径の関係から、口径が勝るとおもわれる土器を浅鉢（a）、ほぼ同等と思われる土器を鉢（b）とした。器高が勝るものではA・B・Eは深鉢、C・Dは甕（c）としている。壺形土器を（d）、蓋や台付き浅鉢などを（e）、底部資料を（f）と小分類する。表で、？は調査初期段階で出土した土器で層位を変更したものや明確でないものを示す。胎土は砂が混入している土器がほとんどのため特に多いものについてだけ砂としている。小環の場合でも同じである。内外面や胎土観察で金色に光っているものについては雲母、ガラスのように光っているものは石英と明記した。表面色は黒色と黄色を基準として考え、黒色のものを黒褐色、より薄いものを褐色、黄色のものを黄褐色、より赤みがかったりを赤褐色とした。壺のような黄色と赤色の中間色を赤黄褐色とした。なお特色的な土器についてはそのままの色を明記している。

本文ではA・C・E・Fは遺構外出土土器を中心に、BとDは、それぞれに当てはまりそうな土器を、後半に「類似土器」として取り上げている。

A：Bより古い様相を示す土器（第76図他、写真図版72他）

遺構外195・196は調査B区の耕作土や搅乱から出土した深鉢の破片で、縩文時代中期中葉のものである。摩滅されている。197はC区出土で縩文時代中期後葉か？遺構内では、46が古代住居跡の床下から出土した壺で、出土層位はⅦ層となる。渦巻き文や半裁竹管による刺突文が施文される。羽状縩文の深鉢87・111・113も46の出土地に近い住居跡や土坑から出土している。遺構外の198や199はS I 09の床下Ⅸ層からの出土で同一破片と想われる。山形口縁で、頂部に円形のドーナツ状の突起を持ち、竹管文が施文される。地文は編み目状撚糸文である。以上6点は縩文時代後期初頭～前葉の土器と考えられる。203・204はS I 09上位の耕作土から出土した土器である。縩文時代晚期前葉のいわゆる亀ヶ岡式土器で、赤色の顔料がぬられる。

205はB区南端のVI層～VII層にかけて出土した土器である。出土グリッドの18年度調査区の北側微高地が沢状に落ち込む場所で出土した。19年度調査では同一破片と思われる206が出土した。大型の浅鉢で口径の推定値が31.4cmを測る。平口縁ではあるが緩く波打っており、口唇部をヘラ状工具で丁寧になでている。幅広くひかれた2本の沈線内に繩文を充填している。摩滅したのかあるいは磨消しを施されたのか定かではないがなんらかの(山形状?)のモチーフを描いているように見える。縄文時代後期前葉に属すると考えられるが、やや疑問の残る土器である。

B 包含層1・2(VII層)出土土器(第70～74図他、写真図版68～71他)

平成18年度調査した区域である。2つの包含層合わせて14.035gの土器片が出土した。掲載は7,340gでその割合は53%と高くなっている。これは、大型の土器を復元でいたことと、底部資料が多いことからによる。それぞれの土器には、包含層の性格の違いからか、多少の相違点がある。

a：浅鉢

包含層1出土のものは平口縁、小波状か山形口縁、突起をもつものがある。口縁形状はすべて内湾するが、平口縁でないものは上部で短く外反する。大型のものは表面色が赤褐色のものが多く、黄褐色や白色を呈す土器には小型のものが多い。粘土粒の貼瘤は127と132、小型の129のみがない。平口縁でないものは貼瘤が大型で2つの貼瘤間が離れている。口唇部内面に沈線が施されているものがほとんどであるが、130が簡略されているかのようにはっきりしない。器表面色が赤褐色の土器には胎土に雲母が混入されているようである。山形口縁や突起等は破片のためはっきりしないものがほとんどだが、133は貼瘤にあわせたかのようや大きめの2個1対の山形突起で沈線が施される。135も貼瘤に合わせた形になると予想される。逆に134は小さな突起が貼瘤とずらした形で載っている。

包含層2では高台鉢もしくは高壺の脚部と考えられる165と浅鉢の体部166のみの出土である。165は胎土に雲母を含み脚部が開いた形で上げ底となり、底部径の推定値は8.5cmで、後述する壺173の口縁部径の推定値8cmに合う。蓋として転用したかもしれない。

以上の浅鉢形土器は、表面の色が赤褐色か黄褐色系のみで構成される特色がある。

b・c：鉢および深鉢

鉢とした中には浅鉢も含まれている可能性もある。

包含層1出土土器では、器形は短く外傾もしくは外反するものがほとんどで、山形口縁となる136と144がやや大きく外側に開く器形となる。内湾するのは141と148で口縁部を上方に引き出した感じで薄くなる特色を持つ。貼瘤のある136は鉢としたが浅鉢となる可能性も否定できない。小型土器である140と142は沈線の途中に貼瘤状の粘土の塊を確認できる。142は無文の頸部下にしっかりと3本の沈線を施し、体上部に最大径をもち、器形では甌形である。ヘラ状工具でなんらかのモチーフを描いている。頸部に沈線を施すのは139・143・144・145も同類である。ただし145はヘラ状工具で沈線風になでている。139は口縁下から沈線がめぐる。

器表面色が赤褐色を呈すものは145のみで、大型の土器は黄褐色か褐色のものが多い。ただし黄褐色の土器は胎土がガラス質で非常にもろいものがある。胎土で明らかに雲母を含むものは139のみとなる。

包含層2では、167は口縁部がほぼ垂直に短く外傾する。口唇部に原体圧痕状の凸凹が観察されるが明確ではない。肩部の張り出しあは小さい。内外ともに煤が付着し口縁部において顕著になる。168は口縁部が外側に開く形となる。小波状口縁で口唇部をヘラ状工具でナデ整形している。最大径は肩

部にあり、底部からの立ち上がりが直線的である。底部径は小さく、底部を穿孔している可能性が高い。169・170は頸部に無文帯を持つもので、169は口唇部内部に沈線を施し、頸部下に縦状体圧痕文らしきものが観察される。170は頸部下部にヘラ状工具で沈線風に描くところは包含層1出土の145の形状に似る。171は無文帯を挟んで口縁部と頸部下にそれぞれ変形工字文を施している。172は満巻き状の突起を持つもので凹字文が施される。

包含層2の鉢の特色は、資料は少ないが、全般に器表面色が黒褐色から濃い褐色のもので構成され、雲母や石英を多く含む特色がある。

d : 壺

包含層1では、全て表面色が黄赤褐色で胎土に雲母を含む。確認された口縁部には全て口唇内部に沈線を施している。貼瘤はつぶされて1つとなるようだ。

包含層2では173の1点のみの出土であるが、ほぼ完形の土器である。2本の粘土紐が口縁上部を巡り、大きめの2個1対の粘土瘤が張られている。口唇部内には沈線がめぐる。器面が丁寧に磨かれている。

f : 底部資料

直線的に大きく外傾する154は浅鉢の底部で、蓋に転用した可能性もある。緩やかにふくらみを持つものの中には外側に張り出しを持つものもある。全般に厚みのあるものが多く小穂を含む。155は表面色が赤褐色のもので、体下部に穿孔しようとした痕跡が認められる。

《B類似土器》

包含層1・2で出土する土器に類似するものは、遺構内では多くはない。しかし、大きな遺構の埋七やIV～V層内に混入する形で出土することがある。遺構内の浅鉢ではSK31の98、3号壙出土の119がある。いずれも破片で摩滅が著しい。また底部資料であるがSK32の104はBに属する可能性がある。遺構外では包含層1から近いE区出土の207～209がある。いずれも表面色が赤褐色系で、胎土なども変わらないが包含層出土の土器よりやや摩滅する。また口縁部が外傾するという特色がある。C区では210・211・213、B区では212が出土している。210の口縁部が外反する以外、他3点は内湾する特色がある。これらの土器は摩滅が少ない。

鉢形土器でBに類似する資料を探すのはむずかしい。E区の215は四脚付浅鉢の脚と考えたが、鉢形土器の突起かも知れない。

C BとDに跨る（挟まる）土器（第77～79図他、写真図版73～75他）

VI層出土土器のうち、Dより古くBより新しいと思われる土器である。

a : 浅鉢

変形工字文を持つ土器のうち、Bより新しいと考えられるものを載せた。216以外は明確な差はむずかしく表面色が褐色系のものという基準となった。

216は遺構外出土土器である。表面色が褐色系を呈するもので、山型突起となる。口縁部形状は外反せず直線的に外傾するのみで、B群の浅鉢と対照的なのは体下部まで施文されるところである。217は褐色系の表面色で、包含層1出土のものと区別した。218と219は正字（工字）文の施文される浅鉢の体部片と思われる。

遺構内出土ではS I 13出土の93・94がある。93は平行沈線内に繩文を充填している。

b・c : 鉢・壺

複合口縁や肥厚された口縁とならず、弥生土器の可能性が高いものの集めた。不明なものはEの中に入れた。

造構外出土鉢では、220がある。小型で胎土に雲母や石英が多く混入し、焼成が悪い。無文である。壺ではE区出土の221がある。Bの深鉢と類似するが、口縁部がやや長く外傾する。口唇部が深く刻まれ小波状口縁となり、器形は肩部より口縁の方が最大径となる。222と223は同一個体である。口縁部は無文で外傾し口縁部は小波状口縁となる。最大径は体部中央になり壺形である。地文は焼けただれよく分からぬがL-Rの様子である。224はほぼ垂直に上がるも肩部の方が最大径となりそうな壺である。口唇部に原体圧痕が施文される。同じような口唇部の形態を持つ225は、口縁部がやや外反する。以上のものは平口縁に近い綫やかな波状口縁となる。山形口縁となるものは226で、口縁はやや長くなる。ヘラ状工具で口唇部を抉る227は口唇部前面を指頭圧痕する。附加状繩文らしき痕跡が確認できる。同じように228は口唇部を表裏交互にえぐり取る。口縁部が繩文となるものは、他に229があり口唇部前面に沈線と連続刺突が巡る。

230と231は口縁部が聞く形のものである。そのうち230は小波状口縁となる。

口縁部が長く延びるD群に近いものでは、232がある。うねりを持ちながらゆるやかに外傾し、口唇部は先細りする。233も無文で長い口縁部で口唇部に沈線を持つ他には見られない特色がある。

造構内ではS I 10出土の84、S I 11出土の86、S K 29の96、S K 31出土の99・100・101、S K 32出土の105、5号堀出土の123・124がある。S I 10の84は輻の広い波状沈線が施文される壺の頭部。86は小型鉢の体部片で工字文もしくは王字文となる破片であろうか。96は原体圧痕が口縁部と頭部に施文される壺であろうか。99・100と105は無文の壺の口縁部片である。101の壺の体部片には附加状繩文らしき2条の施文間を磨り消している。123は沈線と山形沈線が施される。

d : 壺

S K 31出土のものを基準とした。

造構外では、234がある。赤褐色の壺でBに分類できる可能性も否定できない。236は褐色系で口縁部上位に平行沈線が巡るものである。

造構内の102はS K 31出土の小型の壺である。口縁部はなだらかに外反しやや聞く。小波状で口唇部は薄くなる。平行沈線・山形～波状沈線で工字文を施文する。頭部は無文となる。表面色は褐色系で浅鉢の216と同様である。同じくS K 31の103は赤褐色系で造構外の235同様にB類に分類できるかも知れない。

e : その他

237は台付鉢の台部であろうか。蓋としたものには238がある。239はいわゆる高壺の台部破片と考えた。摩滅していて、完かではない。

D SI09埋土中・包含層3出土土器(第65～67・75図他、写真図版64～66・72他)

a : 浅鉢

出土していない。

b : 鉢

口径がちいさい土器を集めた。

口径が小さくなる小型の土器を集めた。壺となる可能性もある。

S I 09出土は3点である。47は山形口縁で刻みのあるハート型のボタン状突起を持ち迷弧文が施文される。48はいわゆる複合口縁の交互刺突文の破片で、壺形になるかも知れない。口縁は程やかな小波状となる。49はやや内湾する小型の鉢で、繩文充填と撲糸文に特色を持つ。

包含層3では、174はいわゆる複合口縁の交互刺突文の破片で、壺形になるかも知れない。口縁は

穂やかな小波状となる。175は肥厚された口縁部に沈線がめぐり、穿孔される。

c : 壺

極端に口径が小さくならない様相を示すものを登録した。D類の主体となる。

S I 09出土の50・51は大型の土器で、多くの破片が出土したが、接点がわからず破片資料となった。壺としたが、器形は深鉢形となる。口縁部が大きくほぼ垂直に開く。口縁部は小波状となり口唇部に粘土紐が貼り付けられる。施文は連弧文を主として渦巻き文などが描かれる。地文はL-Rで磨消が確認できる。内面は丁寧にみがかれる。表面色は赤黄褐色で、胎土に小礫が多く混入する。

壺形土器には口縁部が厚くなる傾向のものが比較的多い。ここでは明らかに意図的に文様などを施すものを複合口縁とし、やや厚くなっているだけのものを肥厚された口縁とする。52は大きく外反する無文の頸部を持つ複合口縁の壺である。刻み目を持つ粘土紐が貼り付けられる。肩部がやや張るが口縁部が最大径となる可能性が高い。前年度に出土した53も同一個体と考えられる。同じく複合口縁となるのは54～56である。54は肥厚された口縁部下に垂下文が巡る。56は幅のある粘土紐を貼り付け、つまみ状に引き出している。54のような粘土紐に刻みを入れ波状文をつくるのは上記鉢類に入れた48と同じであるがこちらがやや細かい。55はふくらみを持った口縁部に撚糸文が充填され、口唇部には原体圧痕が施される。

包含層3で複合口縁となるものは多い。178・179・180・181は、口縁部形状がほぼ平口縁に近い非常に緩やかに波状となるものである。178は垂下文と連続刺突文、179は細い粘土紐上に連続刺突文を施文する。180は粘土紐の上部をえぐり下部を指頭圧痕する。181は縦位の連続短沈線が観察される。口縁部が山形口縁となるものも1点(182)ある。口唇部がやや内そぎ風に薄くなる特色は179～181に例える。また178のみ口縁部が内湾する。

複合口縁とならないものには、SI09では58～60、包含層3では183で、簡易な沈線や連弧文が巡る。山形口縁となるものが58と183である。

頸部から体上部資料のS I 09出土61は口縁部が欠損しているが、小さく外反する(やや聞く形になる)と予測される。垂直に延びる頸部に不連続な連弧文を上下に有し、間に脊状のモチーフを描く。頸部下位には2本の平行沈線が、肩部には波状風の小さな連弧文がめぐるようである。最大径は肩部もしくは口縁部になりそうで壺としたが口縁部形状により壺となる可能性もある。同じように頸部から肩部に波状沈線が巡る例が62と63で、62は61と同一個体であろう。

包含層3出土頸部資料の185は無文で、肩部に横位の沈線と縦位の短沈線で王字文状の施文となる。186は平行沈線で区画された内部に連弧文が巡るもの。187と188には撚糸文が施文されているようである。

d : 壺

数は多くない。S I 09出土が主体で、包含層3からは191の1点のみの出土である。

67は体中央部が最大径となりそうで、頸がやや伸びる形の長頸壺としたが壺の可能性もある頸部の破片である。器表面色は橙色である。頸部は長く内湾するが上位で少し聞くような様相を示す。同一工具による山形もしくは波状沈線と平行沈線が肩部を巡る。表面は縦位のヘラナデ(ケズリ?)で調整される。地文は原体の細いL-Rで撚糸文かも知れない。口唇部に隆起が欠落したかのような痕跡が観察される。

69は壺の肩部の資料で、長頸となるかどうかは定かではない。67と同じように表面色が橙色であるが、より鮮やかな色をしている。交互刺突文が施文される。弧を描く平行沈線と横位と斜位の三角形のモチーフを描くが渦巻き状になるかも知れない。縦位の短沈線は工字文となる。縄文が充填され

る様相が見える。遺構外出土253は同一破片の可能性がある。

68は頸部が長く口縁部の小さい壺と思われる。穿孔が施される。包含層3出土の191は壺形土器の破片としたが詳細は不明である。

e：その他

小型土器やミニチュア土器を集めた。土製品の可能性もある。

小型土器は波状もしくは山形口縁となるものが殆どである。70はいわゆるミニチュアの土器。71は波状を呈す折り返し（複合？）口縁の破片で、鋭利な工具で沈線が施文され工字文となる。72と73は山形口縁となる。75と76は突起を持つ山形口縁の小型土器である。78は赤色付着物のある小型土器で横位と斜位の沈線が施される。口縁部の欠損の状況が意図的に見える。半裁されているが、上方から見て六角形に整形しているかのようである。であれば蓋として転用された可能性もある。

以上体部片を含めての9点はSI09の出土で、包含層3からは194の資料が出土した。194は小さな刺突が特色的なもので、非常にうすい。

《D類似土器》

鉢ではSK38出土の109、SD12出土の115・116が類似する。SI10の83は小型で鉢とした。波状沈線が巡る。遺構外ではC区出土の240がある。

壺では遺構内外で多くの出土を見る。口縁部資料では、複合口縁となり、垂下文があるものはSI10出土の82、SI13出土の90・91、SK38の107・108がある。SD12の118は179と同様の形態を示す。同じく117は内そぎするところが似る。3号壺出土資料の120は複合口縁といえるであろうか。SK29の97は肥厚された口縁部である。遺構外では244～248（246除く）が複合口縁となり、249は肥厚された口縁である。244は赤褐色を呈し、口縁部が直線的に外傾する器形となる。小波状沈線と粘土紐上の交互刺突文が施文される。また逆続の刺突文が施文される特色は、包含層3から出土している土器と類似する。249のように口縁部を肥厚にする土器もある。

頸部から体部では、遺構外251と252がある。251は連弧文の破片で沿うような押引き文が観察できる。252の大破片は浅鉢もしくは蓋、または壺かも知れないと悩んだが壺の頸部とした。大波状沈線と連弧文との組み合わせによる文様を描く。すべて同一器具（半裁竹管）によるもので乱雜である。胎土に小礫が多量に混入され、表面がボロボロであり、SI09出土の52に似る。

241は当初、平成18年度に2号住居状遺構として精査した際に、埋土の上位から出土した土器で、検出面下VI層出土したものである。長い頸部を持ち口縁部で大きく開く。繩文が施文されるが薄く、体下部にはうっすらとハケメ状の調整がなされていることから土器師の壺と思ったほどである。口縁部上部で肥厚されているかのようにふくらみを持つ特色がある。この特色は246にも見える。

壺はSI09と包含層3以外では出土していない。ただし69の大型壺は、SI09埋土範囲外のグリッド出土土器と接合している。

E 時期不明の遺構外出土土器（第81図、写真図版71・75）

255は浅鉢と思われる口縁部片である。口唇部内面に沈線が巡る。胎土に礫や雲母などの混入が少なく、焼成も良い。天地が逆になり蓋もしくは高杯の台部の可能性もある。256は鉢と思われ、平行沈線や波状沈線内を刺突される。出土層位からいえば弥生土器となるが、平成18年度出土で、近隣からは繩文時代晚期の土器なども出土している。257は粗製土器で口縁部が先細りする。Bの土器出土時期に属するかもしれない。258は櫛目状の文様が施文される小土器片で薄い。259は磨消しから繩文時代後期に属するかもしれない。260は深鉢もしくは壺の体部片で捺糸文が施文される。上位が

無文の頸部となればCに属するかも知れない。

261は小型深鉢の体部から底部の資料である。無文で器厚が薄い。口縁部は欠損しているが、やや内湾する様子がうかがえ、弥生土器の可能性が高い。262は後期の粗製土器かも知れない。

F 遺構外出土底部(第81・82図、写真図版76)

263は浅鉢の底部であろう。時期はC群期に属する可能性が高い。摩滅している。264はE区出土で胎土や表裏面の色がC eに分類した239と似る。265は深鉢と思われる体下部の資料である。最下部まで縄文が施文される。赤い顔料が観察される。266は大柄な径のある底部で深鉢となる可能性が高い。網代痕が観察される。267～270は壺の底部と考えられる。267は上げ底の底部で体部中央部がふくらむ器形となりそうである。268は木葉痕のあるもので、267に比較すれば、やや斜めに直線的に立ち上がる。体上部の肩部が張る壺の可能性がある。269は張り出しのあるものである。大型の底部でやや膨らみを持って上がる。表面色が赤褐色系で、S I 09出土の67長頭壺に似る。67は近隣のグリッド出土土器の破片も接合していることから当底部も同一個体の可能性もある。270は鉢系土器の底部で高さは1cm程であり、高壺とは考えにくく、台付き鉢の可能性が高い。271は壺形土器の体下部の資料である。ほぼ無文で、一部L-R縄文が施文された後磨り消されている。Bに分類した壺に似る。

③ 土製品(第83図、写真図版77)

全部で14点の出土である。

遺構内では古代の住居跡S I 01から2点の土錐(273・274)が出土している。また遺構外出土(V層)で出土した275もS I 01出土の2点と同時期と考えられる。S I 01では床面や炭化物層から2点の粘土塊(276・277)が出土している。用途性格とともに不明である。S I 09で出土している同類の278も古代期に当たる可能性を持つ。

他はすべてVI層もしくはVII層出土のものである。279は包含層1出土である。浅鉢の突起の部分とも考えられたが、出土土器の特色から結髪土偶の一部とした。表面色は黄褐色で、胎土に石英・雲母を含む。外面をヘラケズリ調整されている。包含層1では他に280・281の土偶と思われる破片も出土している。280は土偶の足で黄褐色であり、胎土も小礫および石英を多く含む。281は薄い沈線と刺突文で構成するモチーフを持つ土製品で土偶の胴体であろうか。同類の土偶はE区でも出土している。(282)これらの時期は包含層1出土土器と同時期の縄文時代晩期末から弥生時代初頭に位置づけられる。

283の円盤状土製品や284のスタンプ型土製品はVII層出土となる。283は表面色が茶褐色、胎土に小礫とともに石英を非常に多く含みきらきら輝く。284は表面色が白色で、底面を鋭利な棒状工具で刺突している。これら2点の出土地点は、S I 09出土類似土器は多くはない。不明ではあるが弥生時代前期から中期に属する可能性がある。

その他では包含層1と3から粘土塊が1点ずつ出土している。

(2) 石器・石製品(第84～94図、写真図版78～91)

石器の出土量は多いが、定形石器は少ない。特に剥片石器については、器種が限られており、剥離・調整を持たない不定型石器が多数を占める。定形石器は未製品や欠損品を含めて、すべて登録した。石核は代表的なものを測定したが、写真掲載のみのものもある。礫石器や石製品については遺構外

上では明確なもの掲載しており、とくに磨石においては自然的現象である可能性が高いものは不掲載としている。表では遺構内出土と遺構外出土で分けているがここでは器種毎に特色を探りたい。

① 剥片石器

石鏃と思われるものは16点の出土である。遺構内出土はS I 09の288～291の4点、S I 10では313と314、S I 13では316が出土しており、他は包含層もしくは遺構外出土となる。ここでは形態で分けたい。

アメリカ式石鏃は3点(288・323・324)ある。石質は288が瑪瑙で323が赤色真岩、324が真岩で3点とも奥羽山脈産の石材を使用している。3点ともに抉入部の剥離が左右対称とはならず、基部のどちらかがやや長くなる特色を持つ。非常に小型で288は0.5gの重さでしかない。長さは2.0cm～2.7cm、幅は1.7cmが最大となる。

平基有茎となるものは2点。S I 10出土の313とS I 01の埋土上位で出土した325である。凸基有茎はS I 09出土の289とS I 10出土の313、そして包含層1出土の326、C区出土の327となる。凹基で茎のあるものは包含層1出土の2点(328と329)。またS I 09やS I 13から円基(291)、平基(290・316)となるものが出土している。また包含層3からは平基の石鏃の可能性のある331が出土し、遺構外出土の330は作りかけであるため詳細は不明でアメリカ式石鏃の可能性もある。

以上15点を土器の出土状況で見ると、アメリカ式の3点は弥生時代後期の土器出土区域に限られるようである。同じように丸基および平基となるものもも弥生時代後期の土器が卓越する区域に重なる。円基有茎のものは包含層1のみからの出土で、石材は北上山地産となる。これらは縄文時代晩期末から弥生時代初頭期の特色であろうか。比較的基部がなだらかで凸基になるものは弥生時代前期から中期の土器が出土する区域に分けられるかも知れない。

石錐は遺構内ではS I 09から10点、S I 13から1点、SK 38から1点の出土で、他に包含層3から3点の登録であり、他からは出土していない。上記の遺構および包含層3は弥生時代後期の土器が卓越する区域となる。石質はすべて奥羽山脈産の真岩を利用している。

つまみ部が円形基調で横長になるものは、S I 09出土の292・293・294・295、S I 13出土の317、包含層3出土の332・333がある。そのうち332・333は刃部とつまみがやや明瞭となり、刃部の長さは、332で1.5cm、333で最大2.3cmを測る。他はいずれも刃部の先端が欠損するが、菱形の断面形をしており刃部は長くなると予測する。また333はつまみ部が台形状で自然面を残したものとなる。つまみ部が大きく円形となるのがS I 09出土の294と295である。これらは基部がなだらかで刃部との境界がやや不明瞭となる。刃部の長さは、294は欠損しているが295では短くなっている。どちらも自然面を残す特色がある。

つまみ部が綫長になるものにはS I 09出土の296と包含層3出土の334がある。296は刃部と基部以外は2次調整せずに粗雑である。破損断面から、刃部は短くなりそうである。334の刃部は先端が欠損するが、全体的に他のものより太い。

S I 09出土の297は小型でさらに短い刃部となるもので、298も同種類のものかもしれない。その他では全体の形状が棒状になるものがある。S I 09出土の299やSK 38出土の320は両端が尖るものである。また300と301は一端のみ尖る小型のもので、他の欠損品の可能性もある。

石匙について1点(335)のみの登録となった。長さが7.1cmある綫長のもので、出土地点はⅢ C 2aである。このグリッド付近は、縄文時代後期の土器が出土しているところである。他の区域でⅥ層～Ⅶ層では右匙は出土していない。これらのことから335は縄文時代後期前葉に属するといえるか

もしれない。

石箇の3点はすべて包含層1からの出土である。336・337は頭部がやや尖り刃部に向けて大きく開く形に整形されているが、336は両面に片面の細部調整を施すが、337はほとんど整形加工のままであり、原右面を残す。どちらも石質は北上山地産の頁岩である。338は笠状石器で木葉型の尖頭器状を呈す。石箇は他のVI層から出土していない。縄文時代晩期末から弥生時代初頭期に限られる。

スクレーパー類は14点。不定形石器が多い中で、2次的な剥離が見られるものを登録した。

S I 09出土は6点登録した。302と303の石質は頁岩で304～306は赤色頁岩製である。いずれも円形を基調として縁辺に微細な剥離調整が確認される。307は珪質頁岩製で石鎌の未成品かもしれない。S K 38からは1点。322は抉入石器で縁辺が抉られている。片方の抉りがやや大きくなり石質が赤色頁岩であること、S K 38の出土土器が弥生時代後期に属することなどからアメリカ式石鎌の未成品である可能性が高い。包含層3出土は2点。339は石鎌と思われたが、刃部の断面形が菱形とならないことからスクレーパーとした。石質が頁岩で、色調は上記の296に似ており、石鎌の未製品の可能性もある。340は小型の原石の縁辺を表裏から剥離され刃部状の形態を作り出す。このような自然面が多く残るつくりは造構外出土にもみられる。造構外出土341はバルブを持つ大型の剥片の自然面の一部を剥離し、そのうち1/2だけに刃部を作り出している。342も341と同様の特色を持つ青龍刀形のものである。これらはすべて頁岩を石材としている。

包含層1出土に346の赤色頁岩のものがある。バルブを持つ大型の剥片であるが、縁片に鋸歯状の調整を施しているようである。このような不明確な鋸歯状の微調整はS I 09出土の小剥片にも多くみられたが、掲載していないことを断っておく。

② 石核・剥片

平成18年検出の包含層1は、V 平成18年度検出遺構で述べたとおり石器製作址の様相を示すところから、出土した剥片や石器はすべて石質鑑定している。石核や破片はその種類ごとに分けて接合を試みている。そしていくらかの特色を捉えることができた。そこでここでは包含層1出土1とその他で分けて述べる。

ア 包含層1出土

石核は剥片とともに出土しており、接合できたものもある。ここでは石質毎に分ける。

北上山地産の頁岩を母岩としているのは343の石核である。横長不整片石核で少なくとも9回の剥離が観察される複複雑面打面である。剥離面が一部翼状剥片状になる。包含層1出土の337の石箇を含め同一の石質をしている大小含めて剥片を12点出土させているが接合はできなかった。同石質はA区出土頁岩のうち40.59%だが、製品・未製品を含めA区出土の84.6%を占め、△包含層1（土器類B）の石器は北上山地産の頁岩を主流としているようである。

344～346の石質は頁岩（新世代 新第三紀 奥羽山脈）である。344は小型の石核である。自然面の推定から直径4cm程の丸石が原石であると予測される。1面のみ原石面を残して3面のほぼ全域剥離される。剥離されるというより表面が剥げ落ちるといった感じで、一部に押圧剥離らしき痕跡が認められる。多面体石器の形態に似るが手持ちにはやや小さい感じがする。345は自然面を残すもので2点接合する。残存する原石面から推定して長さ9cm、高さ5cmほどの石を打ち欠いているようである。包含層1には似た石質を持った剥片石器は見あたらないが、3号堀跡の埋土から同一個体と思われる剥片が出土している。346も接合はしており、原石は7cm四方の角石と思われる。横長不整片石

核であるが、343と比較して剥離面が凸凹しており、剥片石器製作には不適に見える。事実同質同色の石器は出土していない。

頁岩(新世代 新第三紀 奥羽山脈)の石質をもつ石核剥片は、A区包含層1において全体の46.72%を占め最もも多い。包含層1では製品はないが、S I 09や包含層3で出土する石錐や石錐は奥羽山脈産の頁岩が主流を占め、特に石錐は限定されている。

包含層1では、他に赤色頁岩や珪質頁岩の剥片があり、頁岩系における赤色頁岩の占める重量割合は10.03%、珪質頁岩の剥片は少なく重量割合は2.62%である。赤色頁岩の石器は包含層1では石錐1点、スクレーパー1点の出土であるが、S I 09を中心にアメリカ式を含む石錐2点と搔削器5点が出土している。

イ その他出土

S I 09では308の石核が出土している。同様の剥片もあるが接合できなかった。5cm前後の原石の片面だけが剥離され、原石面が多く残る。同じような剥離の状況を示すものが3号掘で出土した349である。348や350は様々な方向からの剥離がなされている。

以上概観すると、包含層1出土のものは石器を製造する際の原石となるものが中心となるようである。弥生時代の土器が出土するB区出土のものには、手持ちには丁度良い大きさのものがあり、石器(ハンマー)として使われたものもある様相を示している。

③ 磨石器

磨製石斧の完形品はS I 11で出土した315のみで、他は破損品や未成品のものばかりとなる。総数は6点。石質は315が砂岩で、遺構外出土の351が玢岩となり、北上山地産の石を利用している特色がある。

315は長さ14.2cm、重さ329gの製品で、基部から刃部にむけて末広がりとなる撥形を呈する。基部の形態は、断面形はほぼ方形になり側刃が平らに加工される。前面が丁寧に磨かれ、表面がツルツルとする。破損はなく明確な使用痕も観察できない。

未製品は北上山地産のホルンフェルスを石材として利用しているものがほとんどである。351は破損品である。製作工程の研磨調整段階で破損している。胴部中位付近に最大幅をもつものである可能性が高い。刃部は側面がやすらぎ形となる。352は撥形を呈するもので、片面と両側面は敲打調整されているが、片面は調整されずに自然面が残る。一方353の形態は胴部中位付近に最大幅をもち、刃部がすらぎ形となるとみられる。敲打調整段階での未製品である。354は斧状であり、石質も同じことから未製品とした。355も同様に未製品であり、撥形の石斧を製作しようとしたのかもしれない。要約するとホルンフェルスを石材とするものには、製品がなく、敲打段階で製作をやめている。よって磨製石斧にはならない可能性もある。354はハンマーかもしれない。同石材を利用した中には371の独鉛石がある。上記の未製品の中に石製品となるものも存在する可能性を残す。

356は他の未製品と石質が違うために悩んだが、形態から磨製石斧の未製品としたものである。奥羽山脈産の鞍山岩を利用していている。形や調整段階は352に似るが、やや厚い。刃部もやや角度があり、基部断面形は不正な椿円形となる。

敲石としたものは5点。S I 09からは1点出土した。309は細長い頁岩標の先端に殴打痕を観察できる。包含層1出土の357は石質が片岩で非常に重く、固い。敲痕状の凹みが認められるが自然作用の可能性もある。358は扁平な蝶の側面が剥離している。ハンマーであろうか。以上3点は鞍山岩を

石材とする。磨石は9点を登録している。287は古代S I 01堅穴住居跡の床面から出土したもので凹みもあり、様々な用途に使用されていたものであろう。359・360は3号掘埋土からの出土で、先端に殴打痕が認められるが、全体的に磨かれている。361は包含層1で出土したもので、頁岩製の板状の礫のサイドに磨り痕が認められるもので、摩製石斧製造で使用したものであろうか。362・363は小型で同グリッドの出土である。石質は362がホルンフェルスで、363は安山岩となる。他磨石は弥生時代の住居状遺構の集中するグリッドでの出土で、すべて石質は安山岩となる。

砥石は2点の出土のみとなる。367の石質は花崗岩で、板状の礫表面に研磨に使用したと思われる溝砥痕が3条ほど認められる。368はD区出土である。出土層位はV層中で古代の遺物とした。分銅形をしており、全体がよく磨かれているが先端中央部が穿坑される。底部は凸凹して微細な線刻が観察される。砥石として使われ何かに転用した可能性が高く、鍾であろうか。重さは86.7g、約23匁となる。

凹石は遺構内外で比較的多い8点の登録となった。遺構内ではS I 09から2点(310・311)、SK 31から1点(319)が出土した。包含層1からは369・370の2点、遺構外ではC調査区から3点(371・372・373)が出土している。石質はバラエティに富み、安山岩が3点、砂岩、デイサイト、花崗閃綠岩、ホルンフェルス、珪岩がそれぞれ1点ずつとなる。

310は小型で表面が磨かれ、礫表面の中心部に対照的にくぼみが観察される。311は礫の中央部に全般的にくぼみが観察される。これらの2点は他の石器もしくは石製品の製作途中であった可能性もある。310は環状石斧、311は独鉛石になるかもしれない。これらの例は金附遺跡でもみられる。319は大型で表面の中央部にくぼみが認められる。一部磨痕や敲痕があり併用していたと考えられる。369は明確な凹みが観察され、非常に重量感がある。370は表面も認められるが、凹みが最も特色的なことから凹み石とした。輪円形の2点、371は3か所に凹み痕が372には表面対称面に凹みがある。372は310同様に環状石斧の可能性もある。373は370と似た細長い礫を利用している。

石皿は1点。370は磨りが認められる。

④ 石製品

遺構内ではS I 09から小玉(312)が出土している。石質は奥羽山脈山地産のデイサイトを使用している。他は遺構外での出土である。374は独鉛石の未製品で壊れて出土したものを接合したものである。分銅形の打製石斧の可能性もある。375も割れて出土したものを接合したもの。376は包含層2で出土したもので石劍としたが定かではない。先端がよく磨かれている。377はC調査区での出土である。

(3) その他の出土遺物

B区のⅢ～Ⅳ層から3個体の古銭が出土している。378と379は2枚密着した状況で出土したもので、378は宣德通寶と読め、379も同じものであろう。380も同じく明錢で永樂通寶である。柱穴状土坑の埋土から出土した。

その他、16世紀の瀬戸・美濃産の陶器片と思われるものや、近現代のものと推定される高台のある碗や壺鉢、陶器のなどの小破片も出土している。

第4表 土器觀察表(1) 古代①

番号	仮番号	地区	出土地点	出土層位	土器類	器種	部位	形状等観察	口径	底径	高さ	外面色調	内面色調	備考
1	47	B	SD05	埋土中	須恵器	环	底部	圓軸系切り直 細体下部に明瞭な段を持ちふくらみをもつて上がる	—	(6.0)	(1.9)	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
2	1	B	SI01	床 面	須恵器	壺	口縁	口唇部が上方に引き出される	15.8	—	(10.6)	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	酸化物付着
3	2	B	SI01	床 面	須恵器	壺	完形	圓軸系切り直 細体下部でややくびれ、外傾する。口唇部は丸みを持つ	15.1	5.2	4.6	上位N 4/ 中下位 N 7/灰白	N7/灰白	残存90
4	3	B	SI01	床 面	須恵器	壺	体部	タタキ目痕	—	—	(31.0)	2.5Y5/2 淡黄褐	2.5Y5/2 淡黄褐	酸化物 (銀)が付着
5	16	B	SI01	床 面	土師器	环	口縁	外傾する。口唇部は丸みを持つ	—	—	—	10YR5/1 鷺灰	内黒	写真掲載
6	15	B	SI01	床 面	土師器	环	底部	圓軸系切り直 やや膨らむ	—	(5.0)	(2.0)	7.5YR8/3 淡黄褐	7.5YR8/3 淡黄褐	
7	36	B	SI01	試掘トレーナー	土師器	环	底部	圓軸系切り直 細体下部でくびれる 流部再調整	—	(5.6)	(3.0)	7.5YR8/4 淡黄褐	内黒	
8	37	B	SI01	埋土1層	土師器	壺	底部	圓軸系切り直 細体下部でくびれる 丸みをもつて上がる	—	5.0	(1.8)	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	
9	1022	B	SI01	カマド内 埋土下位	土師器	壺	完形	圓軸系切り直 細体下部に丸みを持つ、やや内側する。口唇部が外反、口唇部が下方に引き出される。底部再調整	16.5	6.8	15.8	10YR7/2 に 5Y8/1 灰白	10YR8/3 淡黄褐	他の辺が見える とある。まさに字書きされている。
10	1023	B	SI01	カマド一 括	土師器	壺	完形	圓軸系切り直 細体下部に丸みを持つ、やや内側する。口唇部が外反、口唇部が上方に引き出される。底部再調整	15.2	6.1	14.6	10YR7/2 に 5Y8/1 灰白	10YR8/3 淡黄褐	表面に黒斑、裏面 うつあわせがある。字 のよう
11	1024	B	SI01	カマド一 括	土師器	壺	体+底部	圓軸系切り直 細体下部に膨らみを持ち、やや内側する。	—	5.7	11.35	2.5YR5/3 青 2.5YR5/1 黑	SYR6/6 青	表面に黒斑、裏面 うつあわせがある。 灰に上位に灰
12	1027	B	SI01	カマド	土師器	环	半完形	圓軸系切り直 くびれを持たず、外傾。口唇部が内側に引き出される。先端	(14.6)	(6.0)	5.0	7.5YR6/2 灰 ~ 3 淡黄褐	7.5YR8/2 灰	黒画(本) 残存70
13	1029	B	S I 01	床 直	土師器	环	半完形	圓軸系切り直 くびれを持たず、やや内側する。底部に暗斑を持つ	(15.0)	5.4	5.5	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/2 灰白	残存50
14	1033	B	SI01	床 直	土師器	环	半完形	圓軸系切り直 くびれを持たず、外傾し強く外反。口唇部が内側に引き出される。	14.5	5.3	4.9	上位10YR6/4 淡黄褐 中位 7/灰白	上位10YR6/4 淡黄褐 中位 7/灰白	残存40
15	1065	B	SI01	床 直	土師器	环	口縁	口縁部が外反する。	(13.0)	—	(3.4)	7.5YR8/3 淡黄褐	7.5YR8/3 淡黄褐	底部欠 残存20
16	1030	B	SI01	カマド袖 縫	土師器	环	底部	圓軸系切り直 やや膨らむ	—	—	(2.3)	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	墨書き(不明) 残存20
17	1061	B	SI01	埋土上位	土師器	高环	底部	やや膨らむ	—	5.6	(2.3)	5YR5/8 明赤褐	内黒	赤絞き風
18	1028	B	SI01	カマド	須恵器	环	半完形	圓軸系切り直 くびれを持たず、やや内側する。口唇部が丸みを持つ	13.4	5.3	4.3	N5/灰	N7/灰白	残存50
19	1031	B	SI01	カマド	須恵器	壺	半完形	圓軸系切り直 くびれを持たず、やや内側する。口唇部が丸みを持つ	(14.1)	(6.2)	4.6	上位10YR7/2 5Y7/1 灰白 下位 7/灰白	上位10YR7/1 5Y7/1 灰白 下位 7/灰白	墨書き(不明) 残存20
20	1032	B	SI01	カマド	須恵器	环	半完形	圓軸系切り直 くびれを持たず、やや内側する。口唇部が丸みを持つ	13.35	4.55	5.0	N5/灰	N5/灰	残存40
21	1034	B	SI01	カマド袖 縫	須恵器	环	半完形	圓軸系切り直 体下部がややくびれ、内側しややか外反。口唇部が内側に引き出され、体部に暗斑を持つ	(14.0)	(6.0)	5.0	10YR6/4 6位上 7位~7灰	明オリーブ 灰	残存40
22	1025	B	SI01	カマド	須恵器	环	半完形	圓軸系切り直 やや膨らみながら上上がり、外傾して外反する。口唇部が丸みを持つ	14.3	5.4	4.45	N6/灰	N5/灰	底部粘土貼 り付け調整 残存60
23	1026	B	SI01	カマド	須恵器	环	略完形	圓軸系切り直 体下部がややくびれ、内側しややか外反。口唇部が丸みを持つ	14.35	5.25	4.75	N6/灰	N5/灰	残存80
24	1063	B	SI01	埋土中	須恵器	环	口縁	外反する 口唇部は丸みを持つ	(14.1)	—	(4.5)	5Y7/1 灰白	5Y8/2 灰白	底部欠 残存20

第4表 土器觀察表(1) 古代②

番号	伝番号	地区	出土地点	出土層位	土器類	器種	部位	形狀等観察	口径	底径	高さ	外面色調	内面色調	備考
25	1064	B	S101	カマド袖 脇	須恵器	环	口縁	外反りする 口西部は丸みを持つ	(14.0)	—	(3.9)	5Y6/1灰	5Y6/1灰	底部欠損 残存20
26	1035	B	S101	床 痛	須恵器	环	口縁	外縁する。口西部は丸みを持つ。	15.4	—	6.0	N/7灰	N/7灰	底部欠損 残存30
27	1039	B	S102	埴土内一 括	土器器	口縁～ 体部	体下部でややくぼみ認め るも上部がやがんこ	口縁部で外反する。 口底部が丸みを持つ。	(17.4)	(6.0)	(12.7)	7.5YR8/2 灰白～8/3 淡黄橙	7.5YR8/2 灰白～8/3 淡黄橙	墨唐?
28	1038	B	S102	カマド煙 土	土器器	环	半完形	口底部がややくぼみ認め るも上部がやがんこ	13.8	5.6	4.95	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	内外に朱運り? 蓋、外縁下部に 墨唐? 残存20
29	1036	B	S102	カマド煙 土	須恵器	环	半完形	口底部がややくぼみ認め るも上部がやがんこ	(14.4)	5.6	4.8	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	内部底に 墨唐? 残 存30
30	1037	B	S102	埴土内一 括	須恵器	环	半完形	口底部がややくぼみ認め るも上部がやがんこ	14.6	4.7	5.1	N/7灰	N/7灰	残存30
31	1006	D	S105	埋土上位 ・TA 2 V層	土器器	环	半完形	口縁系切り度 丸みを持って て上がり外縁する。口縁部は丸 みを持つ。	(15.0)	5.4	4.4	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 在	丸底 表燒 き 残存50
32	1079	D	S105	埋土上位	土器器	环	底部	口縁系切り度 丸みを持って て上がり外縁しやや外反 口縁 部が内にさまれ先端り	(15.8)	(6.2)	(4.4)	7.5YR8/4 淡黄橙	7.5YR8/4 淡黄橙	丸底 焼 き 残存50
33	45	B	SX01	埋土中	土器器	縫	体部	外 ケズリ調整	—	—	—	5YR5/6 明宗壺	5YR7/4 在	写真掲載
34	46	B	SX01	埋土中	土器器	縫	体部	外 ケズリ調整	—	—	—	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	写真掲載
35	58	A	1号塙	埋土中位	土器器	不明	体部	口クロ 一	—	—	—	10YR7/4 にぶい黃 橙	内黒	写真掲載
36	1159	E	5号塙	④区埋土	須恵器	縫	体部	タタキ目痕	—	—	—	10YR5/3 にぶい黃 橙	7.5YR6/6 橙	
37	1228	E	5号塙	④区埋土 上位	須恵器	縫	体部片	タタキ目痕	—	—	—	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	
38	1229	E	5号塙	④区埋土 下位	須恵器	長錐 豆?	口縁	口クロ 一	—	—	—	7.5Y4/1 灰	7.5Y5/1 灰	表裏面に自 然釉
39	1234	D	2号配 石	石の下	須恵器	縫	体部	外面 ナデ ヘラケズリ 内面	—	—	—	5Y6/2灰 オリーブ	5Y6/1 灰	写真掲載
40	130	A	包含 層1	V 層	須恵器	大鉢	体部	タタキ目痕	—	—	—	N2/黒	N4/灰	
41	1230	C	包含 層3	埋土上位	須恵器	縫	体部片	タタキ目痕	—	—	—	7.5YR4/1 褐色	2.5YH4/3 にぶい赤 褐	
42	1231	B	Ⅲ C 8 d	V 下	須恵器	縫	体部片	タタキ目痕 ケズリ	—	—	—	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	赤鉄鉻分付 着
43	168	B	Ⅲ C 10 g	Ⅲ 層	土器器	縫?	底部	口縁系切り度 直線的に外 傾 内面ミガキ	—	—	—	7.5YR8/3 淡黄橙	内黒	赤焼き
44	1232	E	④区	V 下	須恵器	縫	体部片	タタキ目痕	—	—	—	5Y6/1灰	N5/灰	表面にさ び?
45	1008	B	S109	Ⅲ C7/ VI	土器器	縫	略完形	大きく外反りする。丸みを帯びて口縁部が強く なる。口縁部と脚部の度がまくならず角 度を持つ。外縁ケズリ?ミガキ? 内面ナデ	16.4	—	(19.3)	7.5YR4/3 褐色	10YR4/4 褐色	

第5表 土器観察表(2) 括弧・弥生土器①

番号	登場号	地区	出土地点	出土位置	器種	部 位	胎 土	灌入物	去面色	地 文	口 横・口 部 形 状	外 面 (文様・装飾・など)	分類	
46	1056	C	S103	Q 3 床下	甕	体部	小標	黄褐色	白L	口横口	平口横・外腹・口部斜面	平口横・斜面に沿う状況 滴落き文 竹籠による 束縛文	Ad	
47	136	B	S109	SD61 丁付	鉢	口横	砂	石英	茶褐色	一	口横	口横・外腹・ネラン研磨	口横・外腹・口部斜面	Db
48	153	B	S109	BC61 1 下	鉢	口横	砂	石英	茶褐色	口横・複合口縁・直線紋に 対称	口横・複合口縁・直線紋に 対称	口横・複合口縁・直線紋に 対称	Db	
49	143	B	S109	BC61 1 下	鉢	口横・1付	小標	石英	茶褐色	口横・内面凹する・穿孔?	口横・内面凹する・穿孔?	口横・内面凹する・穿孔?	Dc	
50	1013	B	S109	SD61 1 下 土上付	甕	口横形	小標	石英	茶褐色	L-R	ナホ・開口・口部斜面・口部斜面・ 胎土斜面付付	ナホ・開口・口部斜面・ 胎土斜面付付	ナホ・開口・口部斜面・ 胎土斜面付付	Dc
51	1081	B	S109	輪出面	甕	胚	小標	石英	赤褐色	L-R	—	50と同・瓶形、内面にケリ瓦のし跡	50と同・瓶形、内面にケリ瓦のし跡	Dc
52	1068	B	S109	埋土上付	甕	口横部	小標	石英少	砂灰土	平口横・やや内凹・複合口縁	平口横・やや内凹・複合口縁	平口横・やや内凹・複合口縁	Dc	
53	1060	B	BC61g	BC61 1	甕	口横部	小標	石英少	赤褐色	口横・やや内凹・複合口縁	口横・やや内凹・複合口縁	口横・やや内凹・複合口縁	Dc	
54	154	B	S109	SD61 1 下	甕	口横部	小標	石英少	黑褐色	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	Dc	
55	157	B	S109	SD61 1 下	甕	口横部	小標	石英少	黒褐色	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	Dc	
56	151	B	S109	SD61 1 下 土上付	甕	口横部	小標	石英中	茶褐色	平口横・やや内凹・複合口縁	平口横・やや内凹・複合口縁	平口横・やや内凹・複合口縁	Dc	
57	1094	B	S109	Q 3 連土上付	甕	口横部	小標	石英	茶褐色	平口横・口部斜面に上るが、 口部斜面に上るが、口部斜面に上るが	平口横・口部斜面に上るが、 口部斜面に上るが、口部斜面に上るが	平口横・口部斜面に上るが、 口部斜面に上るが、口部斜面に上るが	Dc	
58	1100	B	S109	Q 3 連土上付	甕	口横部	小標	石英	茶褐色	山形文・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	山形文・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	山形文・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	Dc	
59	1097	B	S109	Aベルト形	甕	口横部	小標	石英少	茶褐色	L-R	平口横・やや内凹・直線文	一本辺彌	一本辺彌	Dc
60	1092	B	S109	Q 2 連土上付	甕	口横下	小標	石英	茶褐色	L-R	平口横・ならかに外斜	一本辺彌	一本辺彌	Dc
61	66	B	S109	SD61 1 下 種子島東	甕	頭削	砂多い	石英少	茶褐色	L-R	—	安波山系・山形文以下要文カラマツをく研究会 提出物に記載。頭削に上るが、胎土に直状文・外斜等 の特徴を示す。	安波山系・山形文以下要文カラマツをく研究会 提出物に記載。頭削に上るが、胎土に直状文・外斜等 の特徴を示す。	Dc
62	1098	B	S109	Q 5 墓土上付	甕	体部	小標	石英多	茶褐色	—	直状文	直状文	直状文	Dc
63	1062	B	S109	輪出面	甕	肩削	小標	石英多	茶褐色	—	半屏・直線文でくらみを持つ (要)	半屏・直線文でくらみを持つ (要)	半屏・直線文でくらみを持つ (要)	Dc
64	1063	B	S109	輪出面	甕	肩削	小標	石英	茶褐色	L-R	直状文	直状文	直状文	Dc
65	1087	B	S109	Q 2 連土上付	甕	体部	砂	石英	茶褐色	L-R	—	直状文	直状文	Dc
66	1088	B	S109	Q 2 連土上付	甕	体部	砂	石英	茶褐色	—	2本の幅広い平行辺形底面内斜強文	2本の幅広い平行辺形底面内斜強文	Dc	
67	1195	B	S109	SD61 1 下	直頭壺	頭削	砂多い	石英少	茶褐色	—	小やけりバッハ式に上るが、胎土に直状文・外斜等 の特徴を示す。	小やけりバッハ式に上るが、胎土に直状文・外斜等 の特徴を示す。	小やけりバッハ式に上るが、胎土に直状文・外斜等 の特徴を示す。	Dd
68	1090	B	S109	Aベルト形	甕	口横部	小標	石英少	茶褐色	—	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	口横・直線文に上るが、 直線文に上るが、直線文に上るが	Dd
69	1010	B	S109	SD61 1 下	甕	肩削	小標	石英少	茶褐色	L-R	直状文	直状文	直状文	Dd
70	181	B	S109	SD61 1 下	小型土器	平完形	砂	石英中	白色	小標込に縫・内面して外縫	小標込に縫・内面して外縫	小標込に縫・内面して外縫	Dd	
71	148	B	S109	EC61 1 下	小型土器	口縫	小標	石英中	白色	小標込・縫合口縫・牙里	小標込・縫合口縫・牙里	小標込・縫合口縫・牙里	Dd	
72	146	B	S109	SD61 1 下	小型土器	口縫	砂	石英少	赤褐色	口横・縫・脇縫に外縫?	口横・縫・脇縫に外縫?	口横・縫・脇縫に外縫?	Dd	
73	144	B	S109	SD61 1 下	小型土器	口縫	砂	石英少	茶褐色	小標状または山形文	小標状または山形文	小標状または山形文	Dd	
74	1069	B	S109	Q 5 墓土上付	小型土器	口縫	砂	石英少	茶褐色	口横・縫・脇縫に外縫・外縫・外縫	口横・縫・脇縫に外縫・外縫・外縫	口横・縫・脇縫に外縫・外縫・外縫	Dd	
75	1190	B	S109	EC61 1 下	小型土器	口縫	砂	石英少	茶褐色	—	彙算している? 奈佐の櫻文	彙算している? 奈佐の櫻文	彙算している? 奈佐の櫻文	Dd
76	1191	B	S109	EC61 1 下	小型土器	口縫	砂	石英少	墨褐色	無文	川口縫	クタシ取縫?	クタシ取縫?	Dd
77	1085	B	S109	Q 3 墓土上付	小型土器	体部	小標	石英	白色	—	尾縫	尾縫?	尾縫?	Dd
78	180	B	S109	EC61 1 下	小型土器	伴形	砂	骨質	黑褐色	—	縫付文?	縫付文?	縫付文?	Dd
79	1070	B	S109	Bベルト形	小型土器	直縫?	砂	石英	茶褐色	—	上げ縫でくらみを持てどがアガリ付下巻くもの	上げ縫でくらみを持てどがアガリ付下巻くもの	上げ縫でくらみを持てどがアガリ付下巻くもの	Dd
80	1017	B	S109	EC61 1 下	甕	直縫?	砂	石英	黄褐色	—	注江原山形文にあがる 意匠たどれる 内 張付・縫付	注江原山形文にあがる 意匠たどれる 内 張付・縫付	注江原山形文にあがる 意匠たどれる 内 張付・縫付	Dd
81	1084	B	S109	Q 1 輪出面	甕	直縫	砂	—	—	—	—	—	—	Dd
82	1197	B	S110	Q 2 連土上付	甕	口縫	砂	石英	墨褐色	白L	口横・復合口縫・外縫	新・絞り文・刻文・曲文?	新・絞り文・刻文・曲文?	Dd
83	1105	B	S110	Q 2 連土上付	甕	口縫下	砂	—	—	—	一本辺縫と山形文	一本辺縫と山形文	一本辺縫と山形文	Dd
84	1109	B	S110	直縫	他	体部	小標	—	—	—	梅の花文	梅の花文	梅の花文	Cc
85	1110	B	S111	Q 2 底直	深縫?	口縫部	小標	石英少	茶褐色	白L-R	口横・外縫	口横・外縫	口横・外縫	Ee
86	1111	B	S111	底下直?	他	体部	小標	—	—	—	二字文または三字文	二字文または三字文	二字文または三字文	Cb
87	1007	C	S112	Q 3 墓土上付	深縫?	口縫部	小標	—	—	平口縫・外縫・口部斜面が平口 に接する	平口縫・外縫・口部斜面が平口 に接する	平口縫・外縫・口部斜面が平口 に接する	Ac	
88	1011	C	S112	Q 3 墓土上付	深縫?	他	—	石英少	茶褐色	—	直縫の間にあがる。1007の底?	直縫の間にあがる。1007の底?	直縫の間にあがる。1007の底?	Af
89	1002	C	S112	Q 3 墓土上付	深縫?	底部	砂	—	—	縫やかに丸みを持ってある。	縫やかに丸みを持ってある。	縫やかに丸みを持ってある。	Ca	
90	1104	C	S113	Q 3 墓土下付	甕	口縫	砂	雪母	茶褐色	平口縫・復合口縫	平口縫・復合口縫	平口縫・復合口縫	Dc	
91	1103	C	S113	埋土上位	甕	口縫下	砂	雪母	茶褐色	L-R	成吉思汗	成吉思汗	成吉思汗	Dc
92	1101	C	S113	埋土上位	甕	他	砂	—	—	ラブリ	—	—	Dd	
93	1102	C	S113	埋土上位	深縫?	他	小標	石英	赤褐色	—	2本の平行沈透光縫?	—	—	Ca
94	1105	C	S113	埋土	深縫?	他	砂	—	—	变形工字文	变形工字文	变形工字文	Ca	
95	1051	C	S113	土坑内	甕	直縫	小標	石英少	茶褐色	—	ほぼ規則的に丸みがある。頭縫割・内方に丁字 に接する	ほぼ規則的に丸みがある。頭縫割・内方に丁字 に接する	ほぼ規則的に丸みがある。頭縫割・内方に丁字 に接する	Dd

第5表 土器観察表(2) 捷文・弥生土器②

番号	留号	地区	出土地点	出土層位	器種	部 位	胎 土	裏面物	表面色	地文	口縁・口部形状	外面(文様・装飾など)	合類
96	1114	C	SK29	埋土中	壺	体部	小嘴	石英少	白赤褐色	L-R	—	2脚の脚全体延長	Cc
97	1115	C	SK29	埋土中	壺	口縁部	小嘴	石英少	赤褐色	平口縁	脚厚きでいる	Dc	
98	1119	C	SK31	埋土下位	浅鉢	口縁下	砂	雲母	赤褐色	—	貼り縁 花文 延長無し	Ba	
99	1117	C	SK31	埋土中位	甕	口縁部	小嘴	石英少	茶褐色	小面口(口幅狭くは直直上がる) 口縁法子形	脚厚きで花文	Cc	
100	1122	C	SK31	埋土上位	甕	口縁部	小嘴	石英少	茶褐色	無文	平口縁 やや外反	脚厚きでいる	Cc
101	1118	C	SK31	埋土下位	甕	口縁部	小嘴	石英少	茶褐色	—	無文肩割の上下に筋出立ちで脚全体延長	Cc	
102	1005	C	SK31	埋土下位 中位	壺	晚完成	小嘴	茶褐色	無文	小面口(口幅狭くは直直上がる) 口縁法子形	上位の2脚の平行足延長無し 贝足付及底付 王字形	Cd	
103	1045	C	SK31	埋土中位	壺	口縁	砂	雲母	赤褐色	無文	平口縁 やや外反	貼り縁 つ 法縁 内反縁	Cd
104	1072	C	SK32	埋土上位 底部	甕	底部	砂	石英少	赤褐色	L-R	—	1本脚が後上位を支持して底に高さつき 世界的で珍れどあるが	Ba
105	1120	C	SK32	埋土上位	甕	口縁部	小嘴	石英少	黑褐色	—	口縁大 大きく肩割内反縁 上がる	ハタクシ 肩大型は口縁にあり	Cc
106	1121	C	SK34	埋土上位 鉢?豆?	口縁部	小嘴	石英少	赤褐色	無文	平口縁 やや外反	3本の平行足延長無文透	A	
107	1125	C	SK38	Q2埋土下位	壺	口縁部	砂	茶褐色	無文	—	脚全体上位に筋出立ちで脚全体延長	粘土上 爪付茎型束文 口唇に由る連続刺繡	Dc
108	1126	C	SK38	Q2埋土下位	壺	口縁部	砂	白色	無文	L-R	口縁付 保命口輪 ロゴ形透	3本の平行足延長無文透	Dc
109	1124	C	SK38	O2埋土上位	体側片	砂	石英少	赤褐色	—	—	手握竹節による変形底紋	Db	
110	1236	C	SK38	埋土下位	浅鉢?	口縁下	砂	茶褐色	—	—	波板 山形透	Ea	
111	1129	C	SK44	埋土上位	深鉢	体側片	砂	茶褐色	—	—	波状網文	Aa	
112	1127	C	SK44	埋土上位	深鉢	体側片	砂	茶褐色	—	—	波状網文	Aa	
113	1128	C	SK44	埋土上位	深鉢	体側片	砂	茶褐色	—	—	波状網文	Aa	
114	1162	C	SK48	埋土中	甕	体部	小嘴	石英少	黄褐色	L-R	—	2本の波板	Eo
115	1163	C	SD12	埋土中	甕?	口縁部	小嘴	石英少	黄褐色	L-R	平口縁 外縁	2本の波板が注記ある王字彌 文足刺突文	Ub
116	1155	C	SD12	埋土中	甕?	体部	小嘴	石英少	黄褐色	L-R	—	王字彌	Ob
117	1154	C	SD12	埋土中	甕	口縁部	小嘴	石英少	黑褐色	—	小面口(口幅狭くは直直上がる)	ヘラ形と真での調整曲	Ob
118	1156	C	SD12	埋土中	甕?	口縁部	小嘴	石英少	黄褐色	L-R	小面口(口幅狭くは直直上がる)	王字彌 黒土延長付付へ4本足共の連続刺	Ob
119	1226	B	3号窯	埋土3層	浅鉢	口縁	砂	茶褐色	—	正面口縁 やや西向 口輪付	变形工字文 内反縁	Ba	
120	54	B	3号窯	埋土3層	甕	口縁部	小嘴	石英中	茶褐色	—	平口縁 花文口縁 やや外反	連續波紋直徑	Ob
121	55	B	3号窯	埋土中	甕	口縁	砂	石英中	黑褐色	L-R	平口縁 外縁	小型	Eb
122	56	B	3号窯	埋土中	甕?	体部	小嘴	石英少	茶褐色	—	厚底が蓋無い	—	Eb
123	1157	E	5号窯	柱区土上位	甕?	体部	砂	—	黄褐色	—	2本の波	山形透	Cb
124	1002	E	5号窯	埋土中	甕?	口縁-底	砂	石英少	茶褐色	L-R	—	たたらにめに立て上がる	Co
125	1158	E	5号窯	埋土中	甕?	体部	小嘴	白色	—	—	波紋 縫渦者らしい	Eb	
126	74	A	食合屋?	甕	口縁	口縁	砂	なし	波紋	—	豊富な口縁付	豊富な口縁付	Ba
127	69	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	小嘴	雲母	茶褐色	—	内反縁 内反縁	内反縁 豊富な口縁付(口縁付2段)	Ba
128	90	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	石英少	黄褐色	—	—	内反縁 内反縁	Ba
129	94	A	食合屋?	V-1	浅鉢	口縁	砂	石英少	黄褐色	—	—	内反縁 亂縫立	Ba
130	79	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	石英少	茶褐色	—	平口縁 やや内凹 口縁付	豊富な口縁付 反対側	Ba
131	76	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	石英少	茶褐色	—	平口縁 外凹し脚付	豊富な口縁付	Ba
132	87	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	なし	茶褐色	—	内反縁 内凹し脚付	内反縁 互字文	Ba
133	76	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	石英少	白色	—	互字文の口縁付 互字文	互字文の口縁付 互字文	Ba
134	82	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	石英少	茶褐色	—	内反縁もしくは直直の口縁付	内反縁 互字文	Ba
135	84	A	食合屋?	甕	浅鉢	口縁	砂	雲母	茶褐色	L-R	互字文もしくは直直の口縁付	互字文の口縁付 互字文	Ba
136	75	A	食合屋?	甕	口縁	砂	石英少	茶褐色	—	平口縁 外凹し脚付	豊富な口縁付	Ba	
137	99	A	食合屋?	甕	口縁	砂	石英中	黒褐色	—	山形口縁 外凹し外縁 薄雲母	口縁付の丸縫が深い 内反縁 外縁	Ba	
138	80	A	食合屋?	甕	口縁	口縁下	砂	石英中	黒褐色	—	—	内反縁 口縁付の深縮がヘラナジされる	Ba
139	100	A	食合屋?	甕	口縁	口縁	砂	雲母	茶褐色	—	—	内反縁 口縁付の深縮がヘラナジされる	Ba
140	95	A	食合屋?	甕	口縁-底	砂	石英少	茶褐色	—	—	—	内反縁 口縁付の深縮がヘラナジされる	Ba
141	113	A	食合屋?	甕	口縁	砂	石英少	赤褐色	—	—	内反縁 やや内凹?	内反縁	Ba
142	108	A	食合屋?	甕	深鉢	口縁-底	小嘴	石英少	茶褐色	L-R	長い縫	長い縫	Ba
143	110	A	食合屋?	甕	深鉢	口縁-底	砂	石英少	黃褐色	L-R	長い縫	長い縫	Ba
144	101	A	食合屋?	甕	深鉢	口縁	砂	雲母	茶褐色	L-R	山形口縁 大きく外反	口縁付の丸縫が深い 内反縁 外縁	Ba
145	105	A	食合屋?	甕	深鉢	口縁-底	砂	石英少	茶褐色	L-R	山形口縁 外凹し脚付	内反縁	Ba
146	112	A	食合屋?	甕	深鉢	口縁	砂	石英少	赤褐色	—	—	横縫が複数で口縁の強度が図抜	Ba

第5表 土器觀察表(2) 摺文・彌生土器③

番号	伝番号	地区	出土土地点	出土層位	器種	部 位	施 土	混入物	表面色	地 台	口縁・口部部形状	外側(文様・装飾・など)	分類
147	103	A	岱合層1	VII	深鉢	口~底	小塗	石灰中	茶褐色		小口縁・斜口縁・口唇 施厚・引込式	頭顱軸文	Bc
148	111	A	岱合層1	VII	深鉢	口~中頸	砂・小塗	石灰少	黄褐色	L~R 直	小口縁口縁・中や内済	前頭骨がない。上方にちりばめられた感じで薄くなる。頭面ももう少し複雑な骨頭	Bc
149	123	A	岱合層1	VII	深鉢	部 体	小塗	石灰少	黑褐色	L~R	斜の大きさの頭蓋	Bc	
150	63	A	岱合層1	VII	壺	輪形	砂多い	石灰少?	黄褐色	口口沿・はす痕面に上クリヤ 中内反	斜の大きさの頭蓋	Bd	
151	97	A	岱合層1	VII	壺	口縁	小塗	雲母	黃褐色	リロ口・残・外反	開口された1つの跡の上に 内底部 ナデ	Bd	
152	92	A	岱合層1	VII	壺	口~底	砂	雲母	黃褐色	リロ口・外傾し外傾	上附と下附の間に瓦絆 跡内底壁	Bd	
153	64	A	岱合層1	VII	壺	底~全体	砂多い	雲母	赤褐色	—	底からややくらみを持ててある。ナズノ足 付近アーチ脚	Bd	
154	120	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	小塗	石灰少	赤褐色	—	大きさ持続しながらある。やや中腹	Bf	
155	114	A	岱合層1	VII	深鉢	部 体	砂	雲母	赤褐色	—	輪形的にならぬので、頭蓋に円形の 内凹入りの頭蓋 等	Bf	
156	117	A	岱合層1	VII	鉢	石灰少	茶褐色	—	輪形的に薄く立し。頭やかなくくらみを持て る。	Bf			
157	70	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	砂多い	石灰少	茶褐色	—	なだらかに輪形的である。下添ヘラナテ	Bf	
158	71	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	小塗	石灰少	白色	L~R 直	なだらかに輪形的である。上部でややくらみ	Bf	
159	67	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	小塗多い	石灰少	茶褐色	L~R	頭やかにややくらみを持ててある。	Bf	
160	69	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	小塗多い	石灰少	茶褐色	—	頭やかにややくらみを持ててある。	Bf	
161	116	A	岱合層1	VII	深鉢	部 体	砂	雲母	赤褐色	—	輪形的にならぬのである。ミガキ	Bf	
162	118	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	小塗	石灰中	茶褐色	—	輪形的にならぬのである。後頭小さい	Bf	
163	115	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	小塗	石灰少	赤褐色	—	中央をもってややくらみを持てて斜めに 傾いてある。頭蓋ハチズテ	Bf	
164	119	A	岱合層1	VII	深鉢	底部	砂少	石灰少	赤褐色	—	大きく外傾し傾きながらくらみを持て る。下添ヘラナテ	Bf	
165	66	A	岱合層2	VII	深鉢	輪形	砂	雲母	黃褐色	L~I 平	半口縁・内溝し外傾	半身平行沈み 壁面洗浄 頭部丸頭丸	Ba
166	57	A	岱合層2	S D S 505号土	浅鉢?	部 体	砂	なし	赤褐色	—	短い眉 平行沈み 実形工字文	Ba	
167	102	A	岱合層2	VII	深鉢	口~底	小塗	石灰	黑褐色	L~I 直	半口縁・斜外傾・口唇刮削 あもしろいはす痕	頭部丸頭丸	Ba
168	60	A	岱合層2	VII	深鉢	完全	小塗多い	石灰周囲	茶褐色	L~R 直	小口縁・直・外傾・腰面外 小口縁・腰面外	頭部丸頭丸	Bc
169	98	A	岱合層2	VII	深鉢	口縁	小塗	石灰少	茶褐色	—	小丸口縁・直・外傾・腰面外 腰面外	Bc	
170	106	A	岱合層2	VII	深鉢	口~底	小塗	石灰少	茶褐色	L~H 直	小口縁・直・外傾・腰面外 腰面外	頭部丸頭丸	Bc
171	85	A	岱合層2	VII	深鉢	口縁	小塗	石炭質	茶褐色	—	上部横洗・下部ヘラナテ	Bc	
172	90	A	岱合層2	VII	深鉢	口縁	小塗	石灰周囲	黑褐色	—	上部横洗・下部ヘラナテ	Bc	
173	62	A	岱合層2	VII	壺	輪形	砂多い	雲母	赤褐色	—	半口縁・ほび痕面上に上クリヤ 中内反	Bd	
174	1161	C	岱合層3C	埋土中	鉢	口縁部	砂	—	—	—	淀文 滴文	Dc	
175	1161	C	岱合層3C	埋土中	鉢?	口縁部	砂	—	—	—	淀文 滴文 墓上縁刷り付付上瓦刷文	Dc	
176	1136	C	岱合層3A	埋土下位	鉢	部 体	小塗	石英	茶褐色	—	小さな淀文	Dc	
177	1137	C	岱合層3A	埋土下位	鉢	部 体	小塗	石英	茶褐色	—	淀文 滴文	Dc	
178	1134	C	岱合層3A	埋土上位	鉢	口縁部	小塗	石英	黄褐色	—	半口縁・直・外傾・腰面外 腰面外	Dc	
179	1140	C	岱合層3A	埋土上位	鉢	口縁部	小塗	石英	黄褐色	—	腰面外・腰面外・腰面外 腰面外	Dc	
180	1136	C	岱合層3A	埋土上位	鉢?	口縁部	小塗	石英	白色	—	腰面外・腰面外・腰面外 腰面外	Dc	
181	1160	C	岱合層3A	埋土中	鉢	口縁部	小塗	石英	茶褐色	—	口縁・腰面外・腰面外付付上クリヤ 腰面外	Dc	
182	1133	C	岱合層3A	埋土中	壺	口縁部	砂	石灰少	茶褐色	—	山口縁・複合口縁	Dc	
183	1043	C	岱合層3C	埋土中	壺	口縁部	小塗	石灰少	茶褐色	GJH口縁・外縁	腰下に一ホジ縫	Dc	
184	1132	C	岱合層3A	埋土中	壺	口縁部	砂	—	—	腰下に一ホジ縫	腰下に一ホジ縫	Dc	
185	1145	C	岱合層3C	埋土中	壺	口縁部	小塗	石英	白色	—	腰面外	Dc	
186	1135	C	岱合層3A	埋土中位	壺	口縁部	小塗	石英	黄褐色	—	平行沈み内側 大きな淀文と小さな淀文	Dc	
187	1131	C	岱合層3A	埋土中	壺	口縁部	砂	石英	茶褐色	—	口縁部に多く複数有	Dc	
188	1130	C	岱合層3A	埋土中	鉢?	体部斜	砂	石英	白茶褐色	—	淀文?	Dc	
189	1144	C	岱合層3A	埋土中	鉢?	体部斜	砂	石英	茶褐色	—	2本の淀文による淀文	Dc	
190	1142	C	岱合層3A	埋土中位下層	鉢?	体部	小塗	石英	茶褐色	L~R	帯地が交叉する	Dc	
191	1147	C	岱合層3A	埋土中位下層	鉢?	体部	小塗	石英	黄褐色	—	何れ淀文?	Dd	
192	1047	C	岱合層3C	埋土中	笠?	範定形	砂	石英	茶褐色	無文	腰口縁・腰内反	Db	
193	1049	C	岱合層3A	埋土下位	壺	口縁部	小塗	石英	茶褐色	—	腰やかに内済到達にめがる	Df	
194	1160	C	岱合層3C	埋土中	小土呂呂	口縁部	砂	白茶褐色	—	腰やかに内済到達にめがる	Df		
195	132	E	E1-T1	?	?	体部	土呂呂	砂少	茶褐色	L~R	腰面外	Df	
196	1166	B	B 046-1	?(瓦乱?)	?	?	?	—	—	—	淀文?	A	
197	1175	C	B 07-T1	VII	?	?	?	?	—	—	淀文?	A	
											区间内淀文充	A	

第5表 土器觀察表(2) 繩文・弥生土器④

番号	伝番号	地区	出土地点	出土層位	器種	部 位	胎 土	温 ト物	表面色	地文	口縁・口唇部形状	外面(文様・装飾・など)		分類
												口縁	口唇部形状	
198	1099	B	EC01	VII	深鉢	口縁	小縁	石英多い	白色	研目付	直口縁・切妻口縁	円形斜面貼り付け 竹筋による連絡斜面 ドーナツ状	A	
199	1188	B	EC01	VII	深鉢?	体部片	小縁	石英多い	白色	研目付	—	1頭と同一	A	
200	1053	B	EC01e	VII	深鉢?	口縁	小縁	研磨付	茶黃色	L-R	平口縁・外側・口唇部へ少々 工事の跡ナラ	口縁or口唇部にならか	A	
201	1170	C	EC2b	VII	深鉢	体部	小縁	石英	黒褐色	—	—	標準あり (D 8mm)	A	
202	1177	C	EC4e	VII	深鉢?	体部	小縁	石英	黒褐色	—	—	201と同一	A	
203	134	B	EC4-7I	II下	深鉢?	口縁	砂	なし	黒褐色	平口縁・底脚部が広く内凹	半圓底	赤色付植物	A	
204	135	B	EC4-7I	II下	浅鉢	口縁	砂	なし	黒褐色	実物	泥器 茶褐色	赤色付植物	A	
205	65	B	MIC1	VII-VIII	盤形	半円形	小縁少い	雲母	赤褐色	L-片	平口縁・外側や中内凹	軸のある2つの平行汎縫内に透空穿孔 通り消し	A	
206	1224	B	MIC1	VII	浅鉢	口縁	小縁少い	雲母	赤褐色	L-片	平口縁・外側や中内凹	軸のある2つの平行汎縫内に透空穿孔 通り消し	A	
207	1212	E	②区	VII	浅鉢	口縁	砂	雲母	赤褐色	—	—	標準あり (D 8mm)	Ba	
208	1216	E	②区	VII	浅鉢	口縁	砂	雲母	赤褐色	—	—	標準あり (D 8mm)	Ba	
209	1214	E	②区	VII	浅鉢	口縁	小縁	石英	青褐色	—	平口縁+外斜	実物	Ba	
210	1179	C	EC4J	VII	浅鉢	口縁	砂	雲母?	赤	—	平口縁・外側して外反	泥器 内底面	Ba	
211	1176	C	EC3b	VII	浅鉢	口縁部	砂	雲母?	赤色	—	平口縁・中や内	軸らむ 内底面 実形工字文	Ba	
212	1192	B	EC4g	VII	浅鉢	口縁	砂	雲母?	赤色	—	平口縁・中や内	実形工字文 貼り墨がぶるれ 内底面	Ba	
213	1166	C	EC3a	VII	浅鉢	口縁部	砂	石英少	赤褐色	—	山形口縁・西向・口唇部が削断	貼り墨 内底面 実形工字文	Ba	
214	1217	E	②区	VII	浅鉢	口縁	砂	雲母?	赤褐色	—	平口縁・中や内	貼り墨 内底面 実形工字文	Ba	
215	1075	E	②区	VII	浅鉢	口縁	砂	石英	白色	—	—	圓周凹溝跡?	Ba	
216	1001	B	EC01	VII	深鉢?	半円形	砂	雲母少	黃褐色	無文	2頭一對の平行口縁・外縁	貼り墨 内底面 実形工字文上下2種 伴証量付	Ca	
217	1213	E	②区	VII	浅鉢	口縁	砂	石英少	黃褐色	—	平行口縁・外縫	工字文内底面	Ca	
218	1162	C	EC1a	VII	浅鉢	体部片	砂	雲母	赤褐色	—	—	工(三)字文?	Ca	
219	1206	B	EC6h	VII	浅鉢	体部片	砂	雲母	黃褐色	L-R	—	平行口縁 工字(三字)文 黑斑若しい	Ca	
220	1221	E	②区	VII	浅鉢	口縁	小縁	雲母?	茶褐色	無文	平口縁・外側して内凹	—	Cb	
221	1040	E	②区	VII	浅鉢	口縁	小縁	石英	褐色	L-R	小底凹溝跡・近く外斜・口縁 附近は紅褐色	謙部と筒部の後に想い瓦器があでる 質押付く	Cc	
222	1018	C	EC3b	VII	實	口縁部	小縁	石英	黒褐色	—	平口縁・無外斜	最大限は口縁部	Cc	
223	1016	C	EC3b	VII	實	作・左也	小縁	石英	黒褐色	—	底部から腰突きにあがり斜井手舟がふくらむ	実物	Cc	
224	1021	B	EC9f	VII	實	口縁部	小縁	石英	褐色	R-L	小底凹溝跡・外縫・口唇部が 削り取れ	高い削除 腹壁が大根太 並り消し?	Cc	
225	1207	B	EC9f	VII	實	口縁+縫	小縁	石英	茶褐色	R-L	平口縁・外縫	腹壁不直 近い縫跡 口縫と脇部が大根太 並り	Cc	
226	1055	E	②区	VII	實	口縁	小縁	研磨付	茶褐色	L-R	平行口縁・外縫	口縫無文	Cc	
227	1220	E	②区	VII	實	口縁	砂	雲母?	赤褐色	—	小底凹溝跡・研ぐ外斜・口縫 附近は紅褐色	貼れ?	Cc	
228	1069	B	EC7d	VII	鉢	口縁	砂	石英少	黃褐色	—	上部斜縫・腰突	上部斜縫 腰突	Cc	
229	1184	B	EC6d	VII	實	口縁	砂	雲母?	茶褐色	—	口縫に斜井が入りヘタ就工具より多く洗い剥 皮付	口縫に斜井が入りヘタ就工具より多く洗い剥 皮付	Cc	
230	1203	B	EC6g	VII	實	口・縫	小縁	石英少	黃褐色	—	小底凹溝跡・外縫・口唇部へ 少しあざけた跡	腰部が父通す?	Cc	
231	1227	E	②区	VII	實	口縁	砂	石英	黒褐色	—	口口縫・無外縫	—	Cc	
232	1222	E	②区	VII	實	口縁	砂	石英	茶褐色	L-R	—	付跡は真正二切形かやくげい体形のあいに際 り直角の腰突か	Cc	
233	1181	C	EC5b	VII	實	口縁部	小縁	石英	黒褐色	—	前面に腰突	前面に腰突	Cc	
234	1012	C	EC5b	VII	實	勧完形	砂	石英少	黒褐色	無文	平口縁・外縫・口唇部が削 除	前面に腰突	Cc	
235	1173	C	EC3a	VII	實	口縁	砂	雲母	赤褐色	—	—	實が工字文?	Cc	
236	1019	E	②区	VII	實	口縁部	砂	石英少	茶褐色	無文	平口縁・蓋の上に外縫	内底面	Cc	
237	183	B	EC7e	VIII上	附鉢?	台盤?	砂	なし	赤褐色	—	2頭の次第葉茎葉文 下ない(未文) 高級土器 (未 洗) 1頭は平行口縫 並孔(みぞ) 1頭は(未文) 並 孔文	—	Cc	
238	1123	B	EC	VII	不明	實	体部片	小縁	石英	赤褐色	—	つまみ足文	経江郡太陽 深縫 磨り酒	Cc
239	1211	E	②区	VII	高坏?	台盤?	小縁	白	—	—	平行沈跡と土形	—	Cc	
240	1163	C	EC10	VII	鉢?	体部	小縁	石英少	黒褐色	—	平行沈跡 内底面	立形斜面	Cc	
241	61	B	EC6d	VII	實	半円形	小縁含む	石英多い	黒褐色	L-R	山形口縁・底やかに長い外縫し 横縫的	再び口縫・底部分が大きめでよくも見え大根太子 をも。複数の外縫、不規則な凹凸をも。磨り酒。	Dc	
242	1172	C	EC3a	VII	實	口縁	小縁	石英少	黄褐色	—	—	同上文	同上文	Dc
243	1164	C	EC10a	VII	鉢?	体部	小縁	石英少	茶褐色	—	平口縁・蓋の上に外縫	口縫に沿うる実文	Dc	
244	1169	C	EC5k	VII	實	口縫部	小縁	石英少	赤褐色	L-R	研目付・體合口縫・外縫	少底凹溝跡 実形工字文	Dc	
245	1194	B	EC6d	VII	實	口縫部	小縁	石英多い	黃褐色	—	—	遺迹跡(未文?)	—	Dc
246	1015	B	EC7e	VIII下	残出下	實	口縫部	小縁	石英	黄褐色	—	口縫に縫合に大きく外縫し 内縫も	口縫に縫合に大きく外縫し 内縫も	Dc
247	1197	B	EC7g	VII	實	口縫部	小縁	石英少	黄褐色	—	平行口縫・蓋合口縫・ササ内凹	遺跡痕跡(未文?)	Dc	
248	1192	B	EC6d	VII	實	口縫部	小縁	石英少	黒褐色	—	平行口縫・底口縫・ササ内凹	遺跡痕跡(未文?) 壁根痕	Dc	

第5表 土器観察表(2) 繩文・弥生土器⑤

番号	伝番号	地区	出土地点	出土層位	器種	部 位	胎 土	混入物	表面色	地 文	口 線・口部部形状	外 面(文様・装飾・など)	分類
249	160	B	EC8e	VII	甕	口縁部	小標	なし	透赤色	平口縁・外側に内済・内を大く抉る	折り出た口唇部斜面と傾斜に施文	Dc	
250	1202	B	EC8f	VII	甕	口縁部	小標	石英少	黒褐色	施文	平口縁・やや外反	既施されている 施文?	Dc
251	142	B	EC6f	130-140	甕	体部	砂	石英少	黒褐色	L-R	-	墨文と沿うような神し引け跡文	Dc
252	1205	B	EC8g	VII	甕	腹部下	小標多	砂+鈍	茶褐色	-	白・工具(打削等)、その他の文 大波状立筋(浅弘文・小波状立筋)、底部に施文がもぐらき口縁	Dc	
253	1208	B	EC9g	VII	鉢?	体部片	砂	-	赤褐色	施文系	-	僅かな焼成跡	Dd
254	1168	C	EB4j	VII	甕	体部	小標	石英少	赤褐色	施文系	-	無文の文底	Dd
255	1201	B	EC8e	VII	浅鉢?	口縁	砂	鈍母	茶褐色	平口縁・外傾	立筋・内済・山形状跡・承筋・底底(くびい)、周(く)	Ea	
256	179	B	EC7d	VII	鉢?	口縁?	砂	なし	赤褐色	小波状口縁・外傾	小波状口縁 平行立縫 施文文底	Eb	
257	1209	E	②K	VII	鉢?	口縁部	小標	石英	白色	R-L	平口縁・外傾	施文かもしれない	Eb
258	1182	B	EC6d	VII	鉢?	体部	小標	-	黒褐色	-	都日本の施文比較	Eb	
259	1183	B	EC6d	VII	鉢?	体部	砂	雲母	黒褐色	-	波板・被絵の複合性質? 未確認?	Eb	
260	1174	C	EC3b	VII	甕	体部	小標	石英	白色	L-R	-	無解	Ec
261	1020	E	④E区	VII	深鉢	砂~底部	小標	-	黒褐色	-	小型	Ec	
262	1004	C	EC5b	VII	鉢?	完形	小標多	-	黒褐色	R-L	平口縁・ほぼ直立	口縁部や先頭りする。底厚張りだし、裏やびん丸みを持った施文がある。	Eb
263	1196	B	EC7g	VII	深鉢	底部	-	-	-	-	豊富な施文	F	
264	1073	E	④E区	VII	鉢?	底部	砂	-	赤褐色	-	底やかに丸みを持ってあがる 従小さい。 内外無	F	
265	1200	B	EC8e	VII	深鉢	底~体	砂	鈍母	集褐色	R-L	-	下位さき文、朱墨り	F
266	1050	B	EC8g	VII	深鉢	底部	小標	石英	白色	-	立ち上がり等は不明 施文底?	F	
267	1044	C	EB2f	VII	甕	底部	小標	石英少	茶褐色	-	中央丸みを持ってなだらかにあがる 上げ底	F	
268	1078	C	④E6c	VII	甕	底部	小標	石英	黄色	-	直線的に斜めにあがる 大字底	F	
269	1046	B	EC8e	VII	甕	底部	小標	石英・云母	赤褐色	-	仙り出しが持てやや外反しながらあがる 上げ底	F	
270	1077	B	EC9f	VII	台付鉢	底部	小標	石英	白色	-	-	F	
271	1074	B	EC8g	VII	甕	底部	-	-	-	-	直線的に斜めに立ち上げる	F	
272	1003	B	EC9g	VII	小型壺	#7II-23	砂	-	赤褐色	なし	-	などしかに新しく立ち上がり、途中尖端でくらむ	F

第6表 土製品

番号	伝番号	地 区	出土地点	出土層位	器種	量 量	備 考
273	1067	B	SII	許窓穴埋土中	土偶	-	
274	1068	B	SII	カマド内	土偶	-	
275	181001	B	III C10i	V下	土偶	15.2	写真なし
276	181002	B	SII	炭化物下	粘土偶	25.1	写真掲載
277	1066	B	SII	許窓穴埋土中	粘土偶	-	
278	1071	B	SII	Q 2埋土上位	粘土偶	-	
279	181004	A	包含層1	VII	粘土偶	37.1	
280	181005	A	包含層1	VII	土偶	5.4	
281	181006	A	包含層1	VII	土偶	8.4	
282	1076	E	④E区	VII	土偶	-	
283	181003	B	III C9d	検出面	円盤状土製品	9.5	
284	1233	B	III C8g	VII	スタンプ型	-	
285	181007	A	包含層1	VII	不明	7.7	写真掲載
286	1240	C	包含層3	埋土下位	不明	-	写真掲載

第7表 石器・石製品観察表①

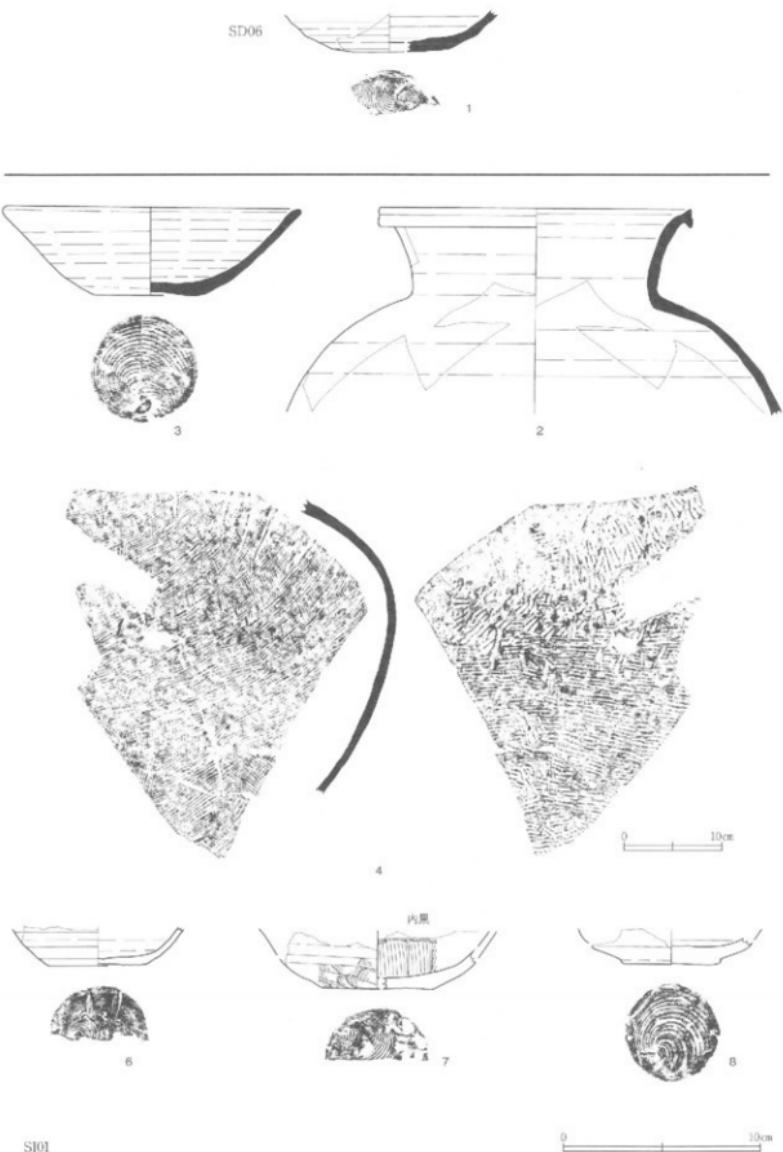
番号	伝番号	地区	出土場所	出土層位	種類	石 質	最大測定値			備考
							長さcm	幅cm	厚さcm	
287	56 B	S01	床面	磨石	安山岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	9.3	7.7	5.5	546.6 タタキ底
288	4 B	S09	壁上=倒上	石錐	めのう	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.0	1.2	0.3	0.5 アメリカ式
289	1330 B	S09	Q1壁土下	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(3.2)	1.4	0.5	0.6
290	7 B	S09	縫出面下付	石錐?	頁岩	古生代 北上山地	2.4	1.5	0.8	2.5 未製品?
291	356 B	S09	Q2壁土上	石錐?	赤色頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.5	1.4	0.4	1.3
292	357 B	S09	B-11壁土上	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.6	2.65	0.8	4.2
293	19 B	S09	壁面剥離付	石錐	頁岩	古生代 北上山地	(2.4)	1.8	0.9	1.9 未調査矢印後再調査?
294	1338 B	S09	アベニーポート	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(4.26)	3.5	1.2	12.1
295	86 B	S09	V下=倒上	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.3	3.0	1.0	9.3
296	358 B	S09	Q1壁土上付	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	5.8	(3.6)	0.85	12.8
297	366 B	S09	Q5壁土下付	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.2	1.5	0.5	1.0
298	6 B	S09	壁上=倒上	石錐	頁岩	古生代 北上山地	(1.6)	1.3	0.5	0.6 先端部欠損 未製品? 石錐?
299	343 B	S09	横出面	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.4	8.5	0.4	1.2
300	18 B	S09	横出面下付	石錐	頁岩	古生代 北上山地	2.2	0.8	0.5	0.2 基部破損? 石錐?
301	355 B	S09	Q2壁土上	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(1.6)	0.5	0.4	0.1
302	22 B	S09	壁出面下付	スルーホル	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	5.2	3.9	1.3	14.0 写真なし
303	344 B	S09	Q5壁土上付	スルーホル	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.4	2.8	1.0	7.9
304	345 B	S09	Q5壁土上付	スルーホル	赤色頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	4.8	3.7	0.8	17.9
305	20 B	S09	壁上=倒上	スルーホル	赤色頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.2	2.9	1.2	11.0
306	21 B	S09	壁上=倒上	スルーホル	赤色頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	4.1	3.4	1.2	14.5
307	25 B	S09	壁上=倒上	スルーホル	赤色頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(2.2)	(1.5)	(0.9)	2.0 右側の矢印筋?
308	348 B	S09	V1	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	5.9	6.7	5.0	191.2
309	354 B	S09	V1	詰石	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	14.85	6.75	4.45	540.0
310	349 B	S09	V1	四み石	砂岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	7.3	5.6	3.7	216.4
311	352 B	S09	V1	四み石	デイサイト	新生代 新第三紀 真羽山脈	12.0	9.2	5.7	802.4
312	55 B	S09	横出面下V1	小石	デイサイト	新生代 新第三紀 真羽山脈	1.7	1.3	0.5	1.3
313	367 B	S09	Q1壁土下付	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(2.8)	1.3	0.5	1.0
314	359 B	S09	横出面	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(2.35)	1.4	0.4	0.8
315	1337 B	S11	Q1壁土付近	墨駒石	砂岩	古生代 北上山地	14.2	5.2	2.65	329.1
316	369 C	S13	埋土上位	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.0	1.2	0.3	0.9
317	368 C	S13	Q2壁土上	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(2.5)	2.6	0.85	5.2
318	370 C	S3K1	煙土下位	石錐	安山岩	新生代第四期 真羽山脈	5.0	4.9	1.5	38.9
319	1287 C	S3K1	煙土上位	四み石	安山岩	新生代第四期 真羽山脈	19.9	10.5	8.7	125.2
320	1042 C	S3K3B	Q2壁土上位	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.8	0.8	0.4	1.3
321	1206 C	S3K3B	煙土下位	スルーホル	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	5.8	3.5	1.7	21.9
322	168 C	S3K3B	Q2壁土上位	ノッチ	赤色頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.7	2.1	0.65	3.6
323	2 B	III-C7d	V1	石錐	赤色頁岩	新生代新第三紀 真羽山脈	2.4	1.7	0.4	1.2 アメリカ式
324	1094 C	II-C7d	煙土上位	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.05	1.1	0.4	0.8 アメリカ式
325	1 B	III-C7d	SI01煙土上位	石錐	頁岩	古生代 北上山地	(3.0)	1.8	0.5	1.5 基部欠損 同質同色の石なし
326	9 A	II-C7d	V1	石錐	赤色頁岩	新生代新第三紀 真羽山脈	3.1	1.3	0.4	1.4
327	1274 C	BB1	V1	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.7	1.7	0.5	2.5
328	10 A	II-C7d	V1	石錐	頁岩	古生代 北上山地	3.3	1.2	0.4	1.0
329	11 A	II-C7d	V1	石錐	頁岩	古生代 北上山地	3.2	1.4	0.5	1.3
330	3 D	III-C7d	V1	石錐	頁岩	古生代 北上山地	(2.6)	2.0	0.5	1.9 未製品 四角凹葉なし?
331	1205 C	II-C7d	煙土下	石錐?	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.55	1.95	0.5	1.9
332	1210 C	II-C7d	煙土下位	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	2.6	3.15	5.5	2.0
333	1168 C	II-C7d	煙土下位	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	(4.2)	(2.2)	1.0	3.1
334	1156 C	II-C7d	煙土下位(?)	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	3.15	2.6	0.55	6.9
335	1340 C	II-C7d	V1	石錐	頁岩	新生代 新第三紀 真羽山脈	7.1	2.75	1.05	15.6

第7表 石器・石製品観察表②

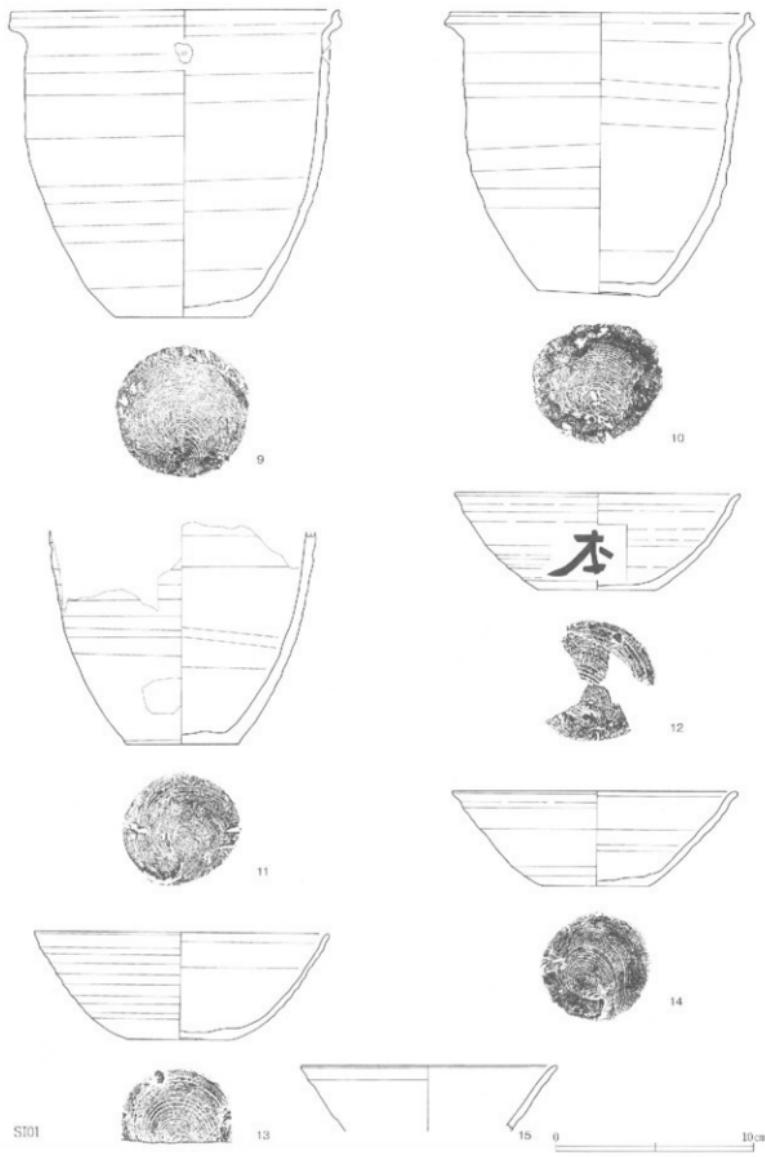
番号	当番号	地区	出土地点	出土層位	種類	石 質	最大計測値			備 考	
							長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
336	15	A	瓦合層1	VII	石斧	頁岩 古生代 北上山地	8.1	4.7	2.0	61.8	
337	16	A	瓦合層1	VII	石斧	頁岩 古生代 北上山地	8.6	4.4	2.2	73.8	
338	14	A	瓦合層1	VII	石斧?	頁岩 古生代 北上山地	(4.2)	2.4	0.6	5.1	尖鋸器の未製品の可能性 接面
339	1160	C	瓦合層3	堆土中	フリーハンド	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	4.5	3.25	1.0	9.0	石錐の可能性有り
340	1139	C	瓦合層3	堆土下位	フリーハンド	頁岩 新世代 第二紀 鳥羽山脈	5.1	3.5	1.8	46.7	
341	1282	B	ⅢC6e	VII	フリーハンド	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	6.6	7.0	2.1	92.3	
342	346	B	ⅢC6e	VII	フリーハンド	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	8.4	(4.06)	1.65	50.2	
343	57	A	瓦合層1	VII	石核-矛頭	頁岩 古生代 北上山地	7.3	8.3	3.6	376.0	自然面あり 振片大 2 小 9 32件の振石か
344	69	A	瓦合層1	VII	石核-矛頭	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	-	-	-	-	多面体石器に似るが小型
345	68	A	瓦合層1	VII	石核-矛頭	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	-	-	-	130.0	自然面あり 四盤底? 接合する 振片4点
346	60	A	瓦合層1	VII	石核-矛頭	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	-	-	-	185.0	BB面あり 鋼口丸 石器ダメリカガホ320-158。
347	59	A	瓦合層1	VII	石砍-削	赤色頁岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	8.4	5.5	1.5	175.0	写真掲載
348	1220	C	瓦合層2	堆土保和山	石核	頁岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	5.5	4.1	5.0	151.0	
349	1231	B	Ⅲ号塙	埋土下位	石核	頁岩 新世代 第三紀 鳥羽山脈	7.7	7.7	4.3	232.0	
350	347	B	ⅢC6d	VII	石核	頁岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	4.6	4.5	2.7	64.7	
351	362	C	ⅢC6b	VII	石核	ひん石 中生代白堊紀 北上山地	(9.0)	8.0	3.5	315.7	
352	353	B	ⅢC6f	VII	石核	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	13.2	5.9	2.5	221.1	未製品
353	32	B	Ⅲ号塙	埋土中	磨石	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	(11.0)	6.4	4.1	302.1	未製品
354	371	C	ⅢC6b	VII	石核	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	13.5	6.4	4.6	461.2	未製品
355	361	E	Ⅲ号塙	埋土上位	磨石	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	5.9	6.9	1.9	99.3	歟歟作
356	17	A	瓦合層1	VII	石核?	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	13.0	8.3	3.9	341.8	打製石所? 写真なし
357	46	A	瓦合層1	VII	融石?	片岩 古生代に変成? 北上山地(堆土伴生岩)	15.2	5.6	4.6	635.6	ハンマー?
358	44	B	N/C11	VII	敲石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	13.4	9.0	2.8	496.8	ハンマー?
359	41	B	Ⅲ号塙	埋土中1層	敲石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	(6.0)	7.5	4.0	205.2	
360	42	B	Ⅲ号塙	埋土中2層	敲石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	(5.0)	(8.0)	5.4	256.9	
361	33	A	瓦合層1	VII	磨石	黄碧玉 新世代 第二期 鳥羽山脈	10.5	5.4	1.4	143.7	片面サイドすり溝!! 写真なし
362	40	B	N/C11	VII	磨石	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	7.0	6.1	2.4	168.9	ただの石?
363	34	B	N/C11	VII	磨石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	6.2	6.8	2.7	127.5	全面削り ただの石? 写真なし
364	350	B	ⅢC6d	VII	磨石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	11.0	9.0	6.7	745.5	凹あり
365	351	B	ⅢC7e	VII	磨石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	12.9	10.3	7.9	147.3	
366	1300	B	Ⅲ号塙	埋土下位	磨石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	16.15	18.05	6.05	2006.0	
367	363	B	Ⅲ号塙	埋土上位	砾石	花崗岩 中生代白堊紀 北上山地	(9.2)	(5.7)	2.6	84.9	
368	1336	D	ⅢB1b	V	砾石	デイサイト 新世代 第二期 鳥羽山脈	7.6	3.3	3.6	86.7	
369	39	A	瓦合層1	VII	凹み石	在来門絆剥 中世代 白堊紀 北上山地	14.0	10.3	9.4	1670.3	台石
370	43	A	瓦合層1	VII	凹み石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	(11.8)	6.2	3.6	398.4	離き面 壁面直角
371	1307	C	ⅢC10e	VII	凹み石	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	12.95	7.1	4.3	633.5	離き版
372	364	C	ⅢC5e	VII	凹み石	安山岩 新世代 第二期 鳥羽山脈	9.8	7.0	4.4	250.4	離き版
373	365	C	ⅢC5e	VII	凹み石	園岩 新生代 第二期 鳥羽山脈	15.5	5.3	5.0	628.2	離き版
374	49	B	E/C7de	VII	独立石	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	9.0	18.6	2.6	491.5	未製品 総合
375	52	A	瓦合層1	VII	石棒	頁岩 古生代 北上山地	(8.3)	(1.5)	1.7	30.4	接合 写真複数
376	37	A	瓦合層2	VII	石棒?	ホルンフェルス 中世代白亜紀後期 北上山地	15.6	3.2	2.0	142.6	磁石? 先端に縫跡
377	360	C	ⅢB4	VII	石劍?	鈍板岩 古生代 北上山地	(16.7)	(3.3)	(1.4)	122.1	

第8表 その他観察表

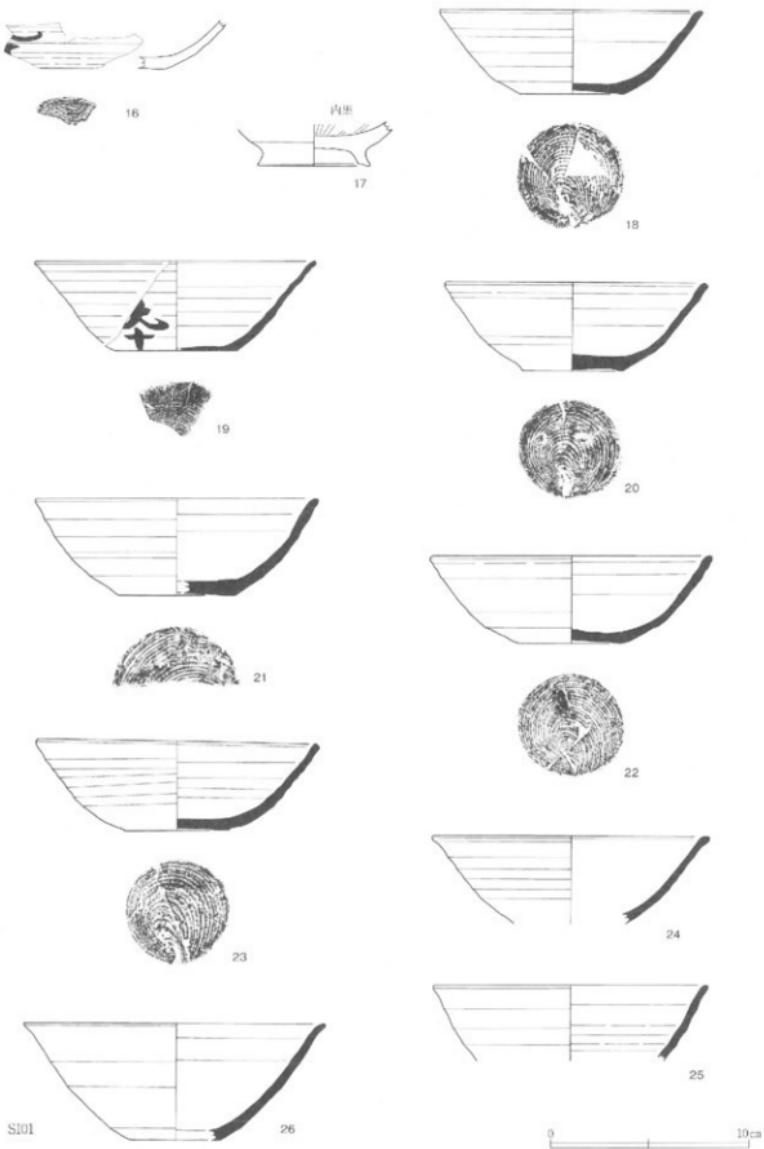
番号	番号	地 区	出土地点	出土層位	分類	種 類	部 位	重量g	備 考
378	181014	B	ⅢC9d付近	II	古鉄	宣德盃寶	宋形	2.8	精緻
379	181015	B	ⅢC9d付近	II	古鉄	不明	宋形		不明
380	181016	B	鈍板岩付近	埋土中	古鉄	永樂盃寶	宋形	3.1	明鑄



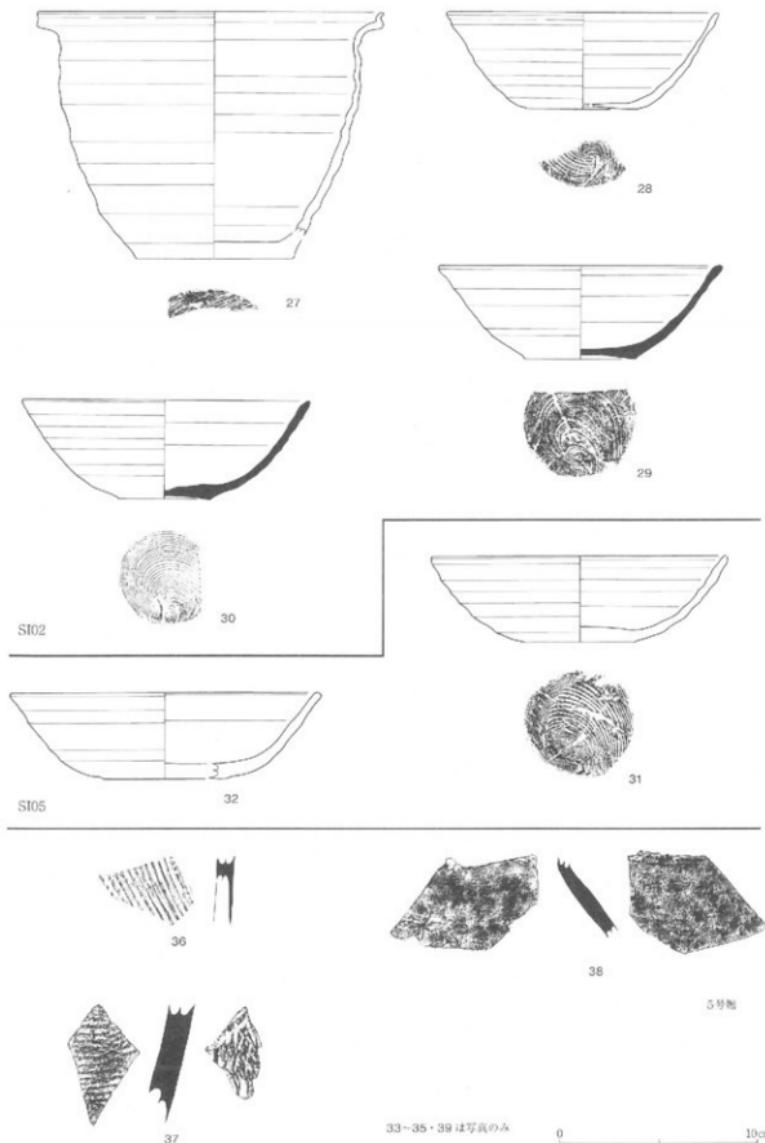
第59図 古代土器1 (SD 06・SI 01出土)



第 60 図 古代土器 2 (S I 01 出土)



第 61 図 古代土器 3 (S I 01 出土)



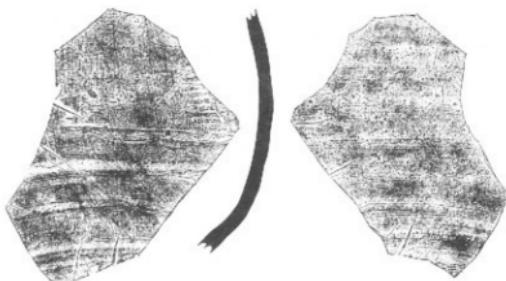
第62図 古代土器4 (S I 02・S I 05 5号塚出土)



40



41



42



43



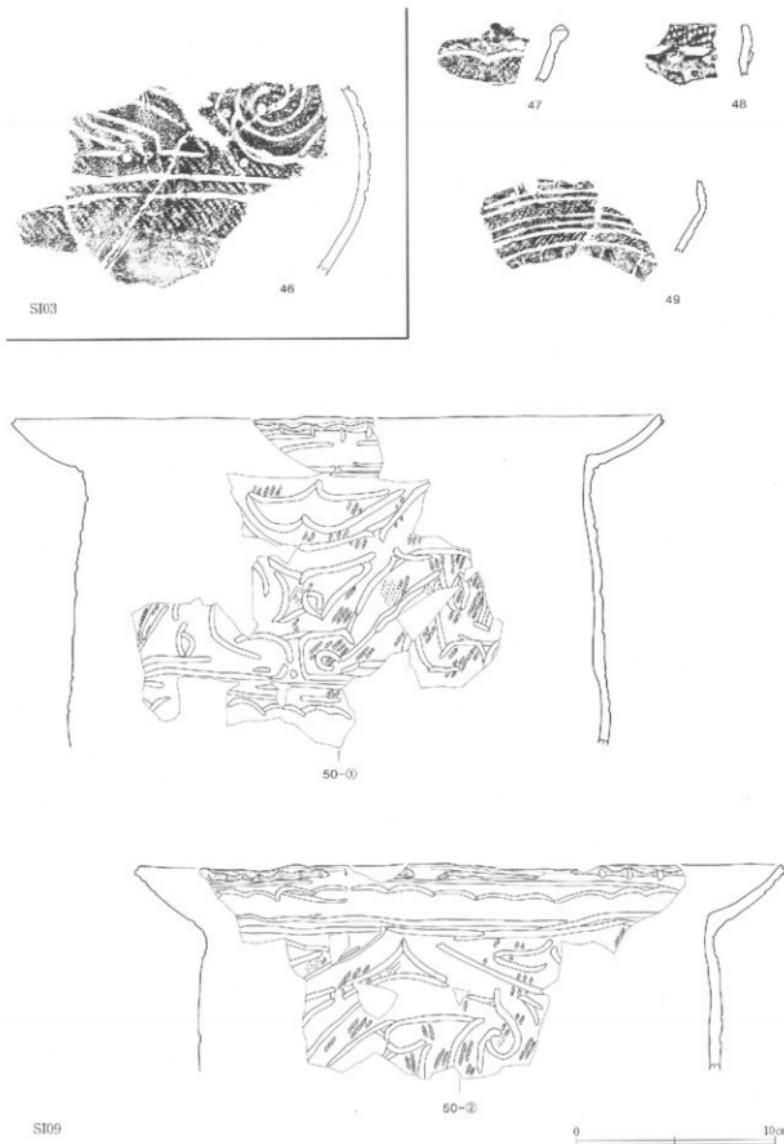
44



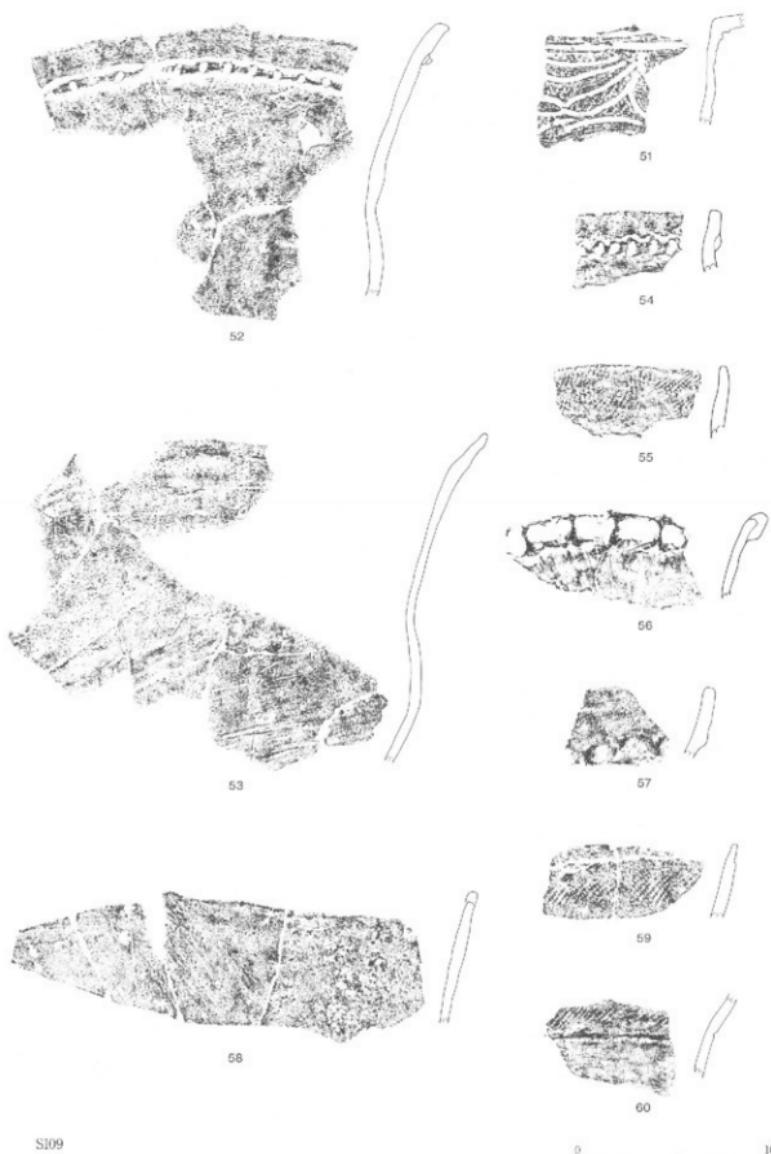
45



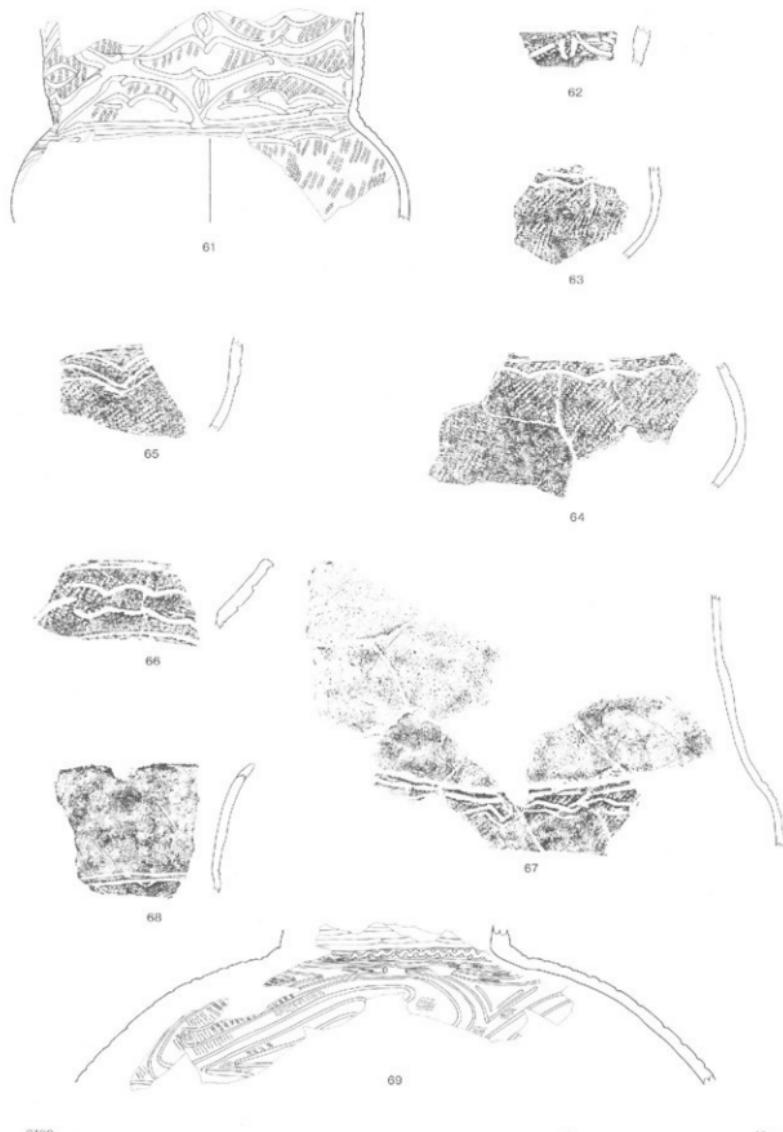
第 63 図 古代土器 5 (遺構外出土)



第 64 図 繩文・弥生土器 1 (S II 03・S II 09 出土)



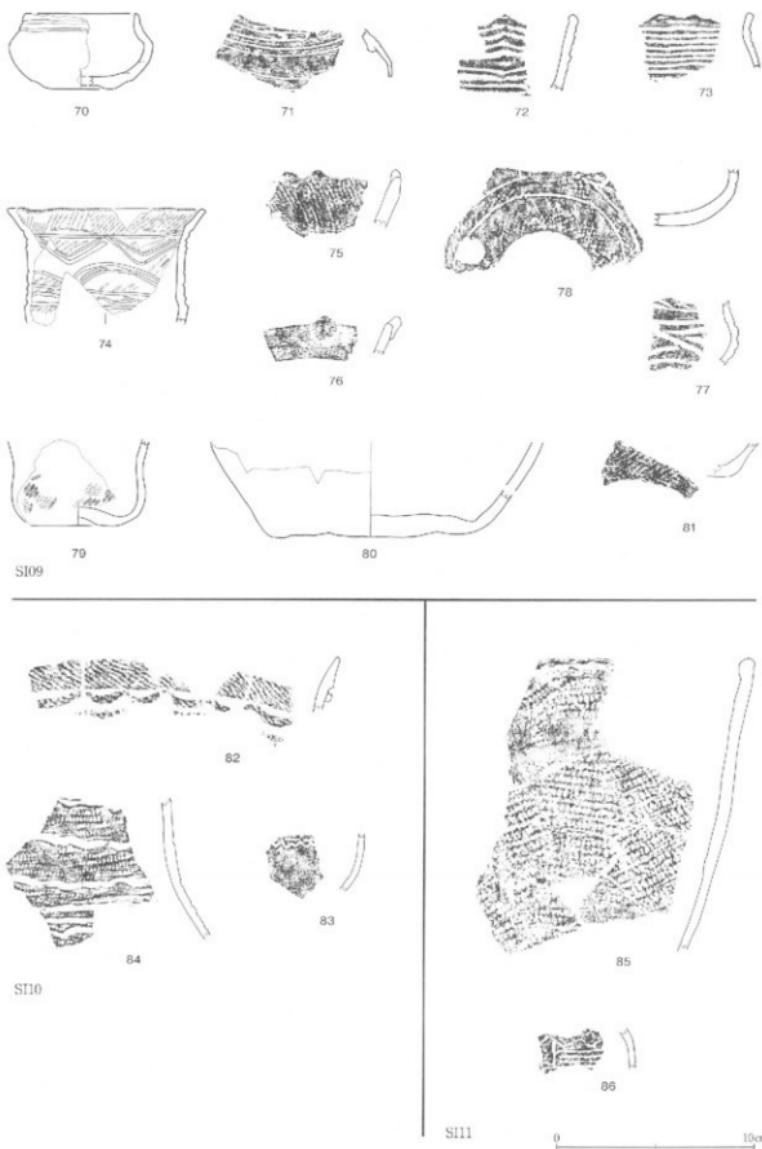
第65図 繩文・弥生土器2 (S I 09出土)



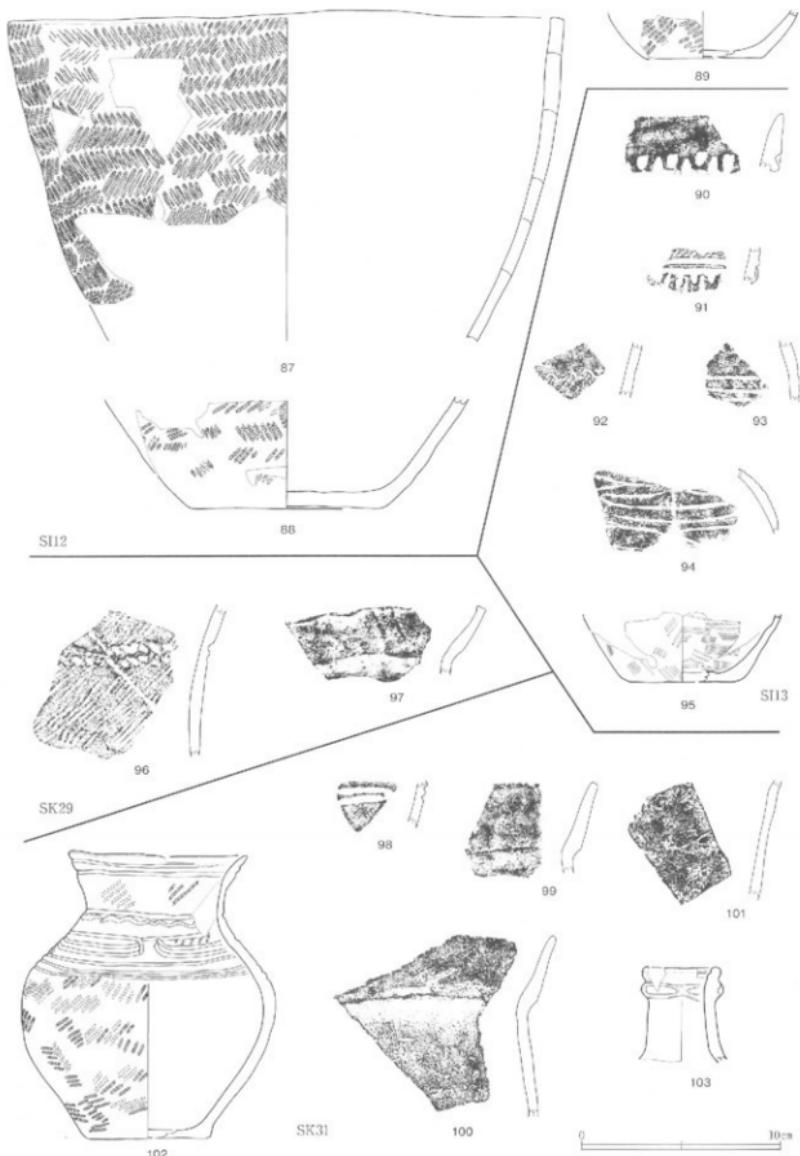
第66図 繩文・弥生土器3 (S I 09出土)

SI09

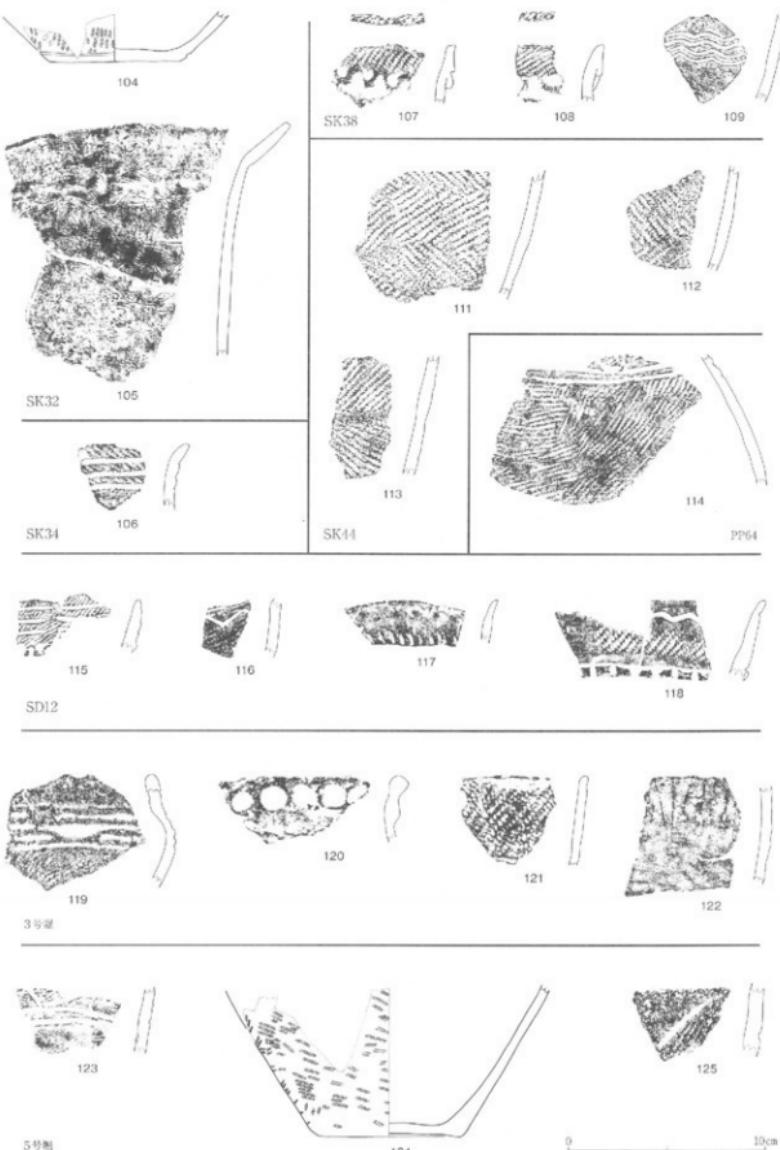
0 10cm



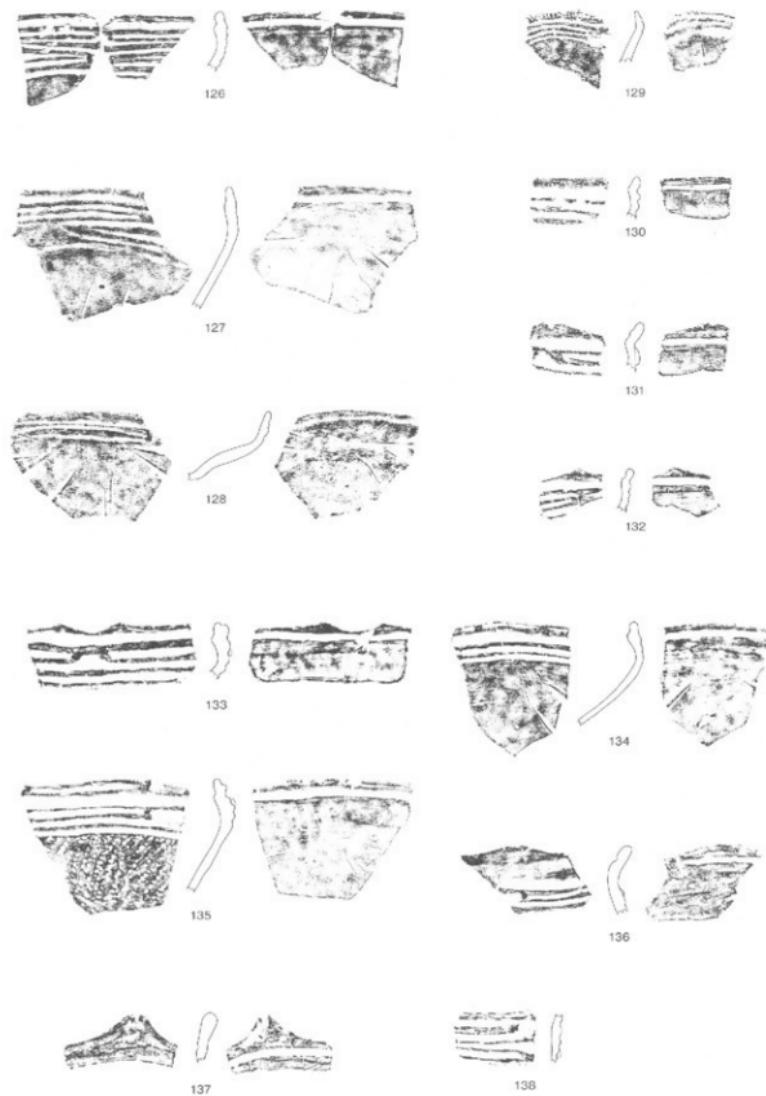
第67図 捕文・弥生土器4（遺構内出土）



第68図 繩文・弥生土器5(遺構内出土)



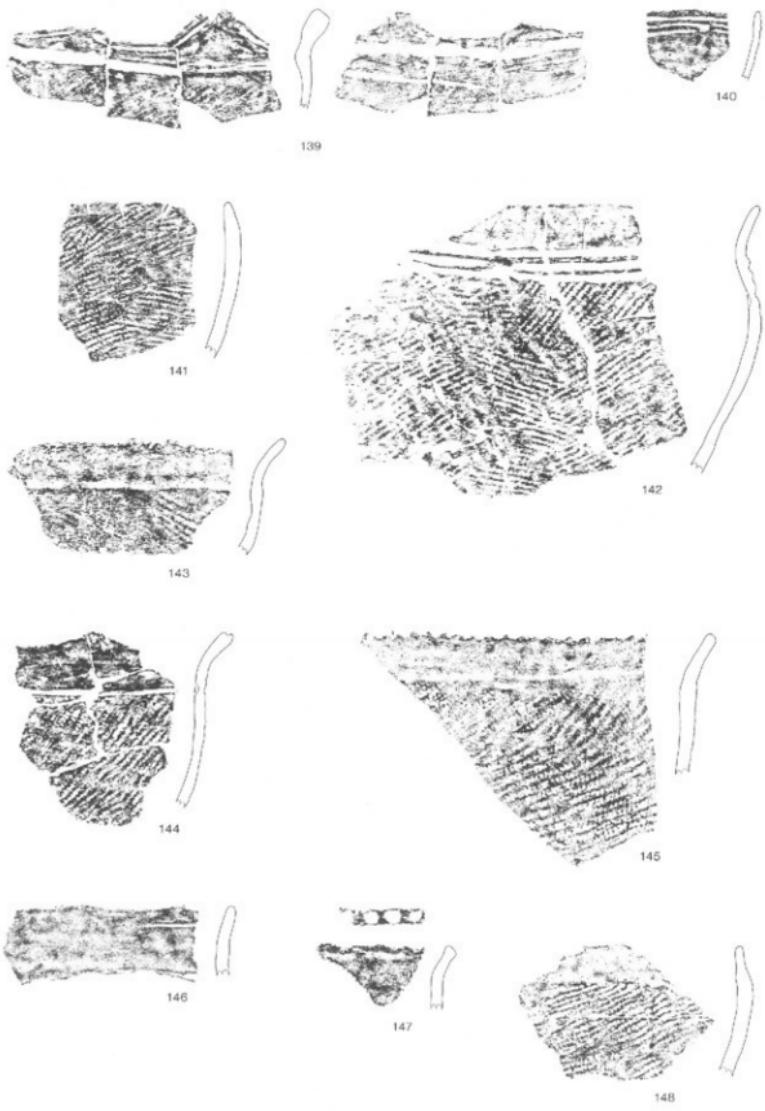
第69図 條文・弥生土器6(遺構内出土)



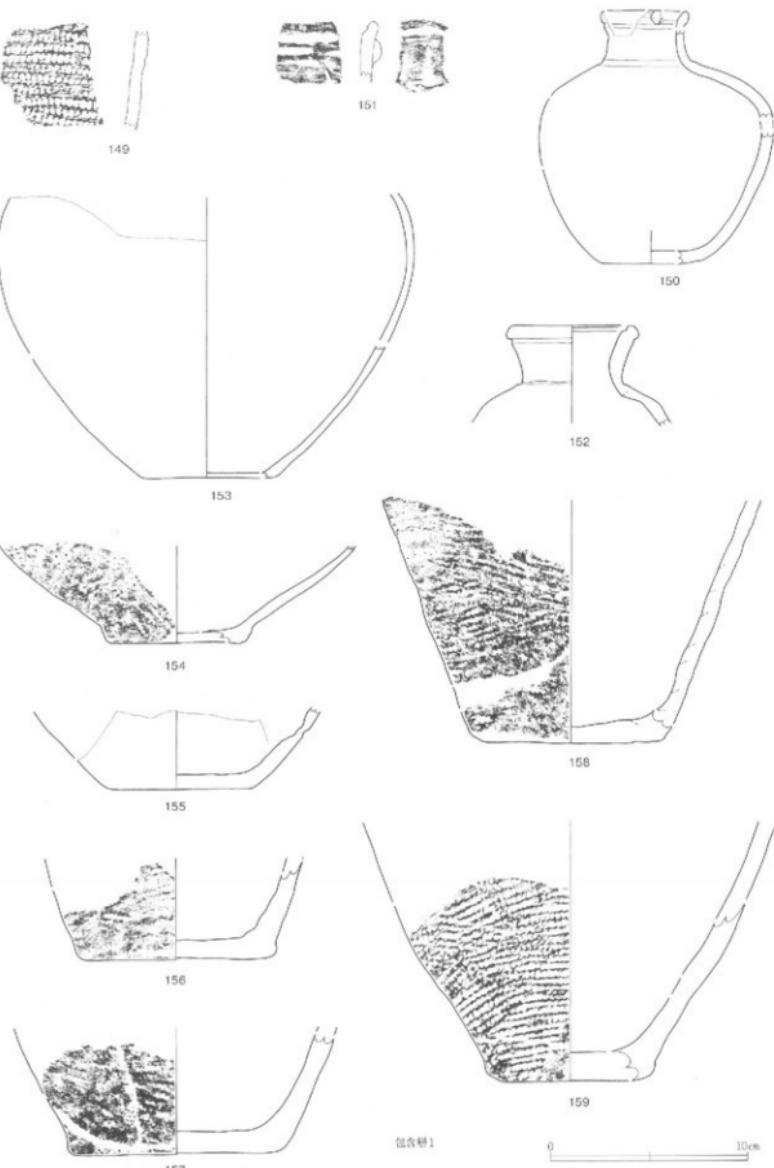
包含層1

0 10cm

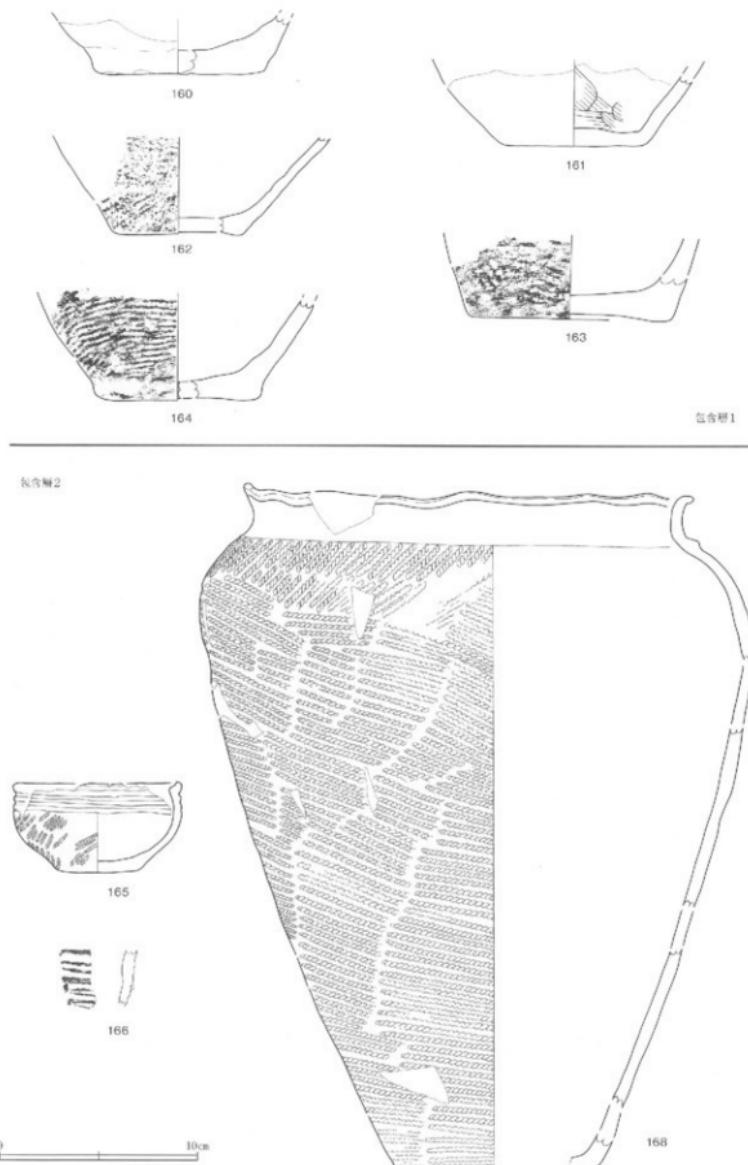
第70図 繩文・弥生土器7(包含層1)



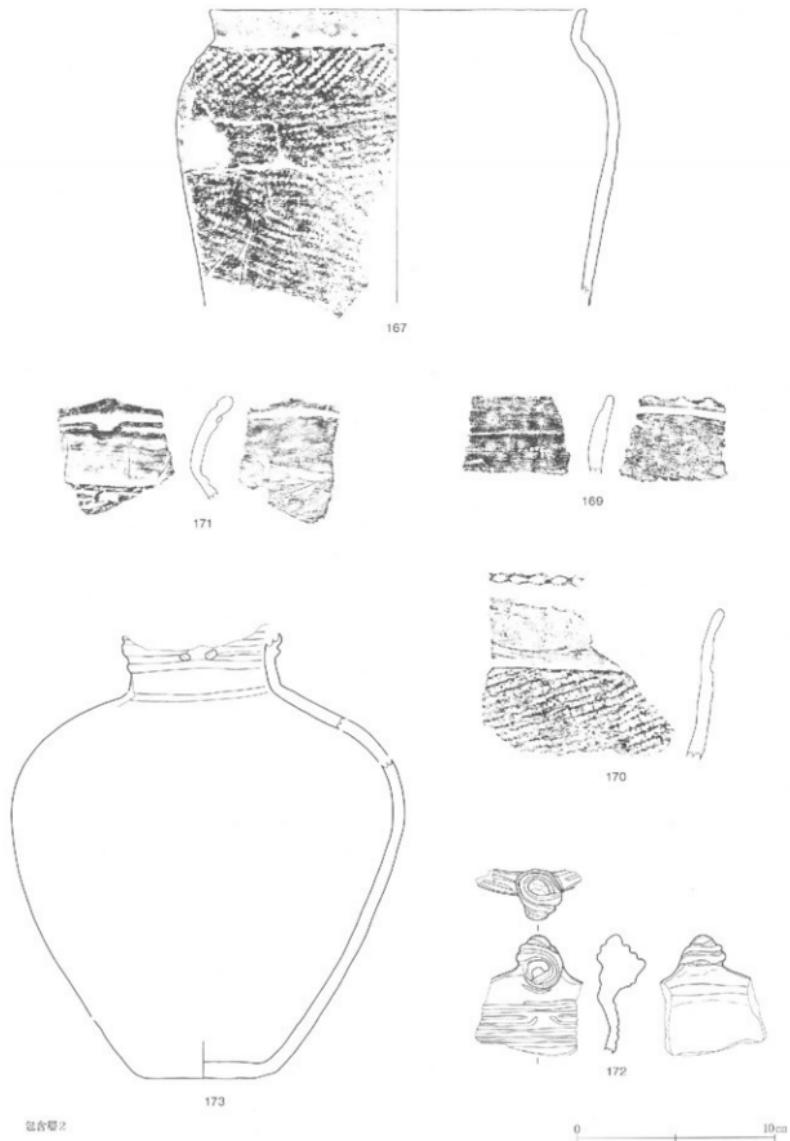
第71図 繪文・彌生土器8（包含層1）



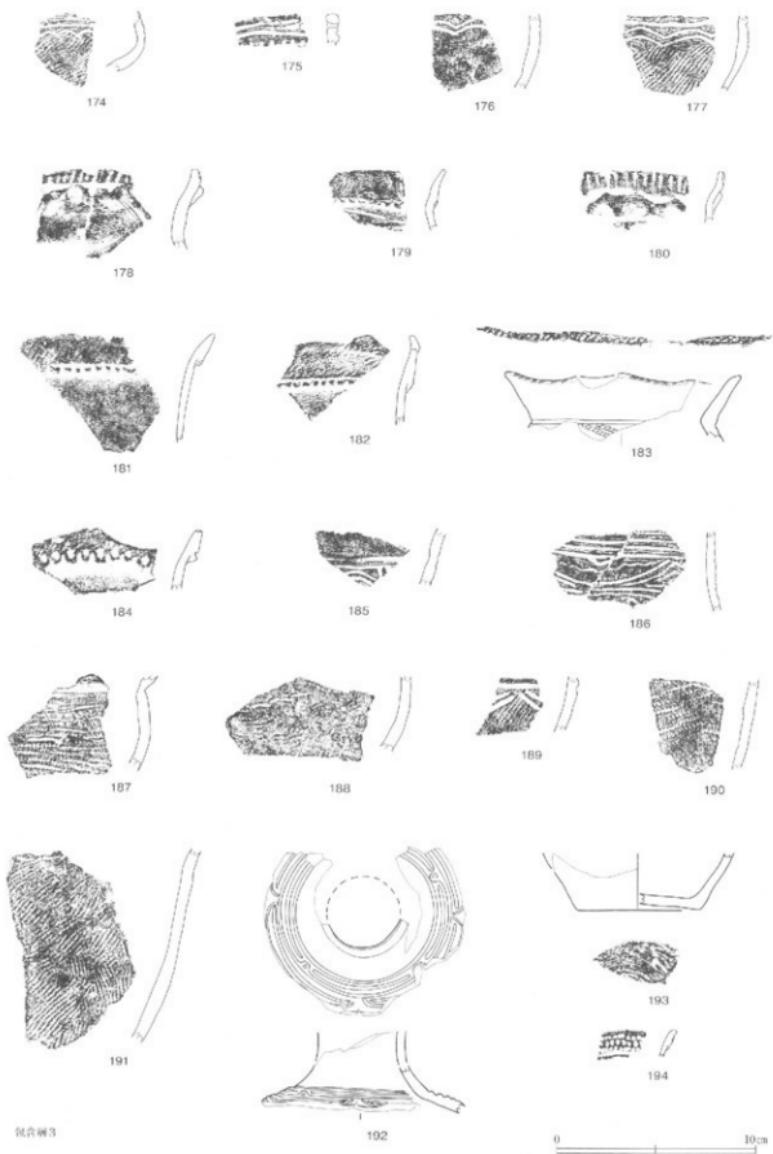
第72図 繩文・弥生土器9（包含層1）



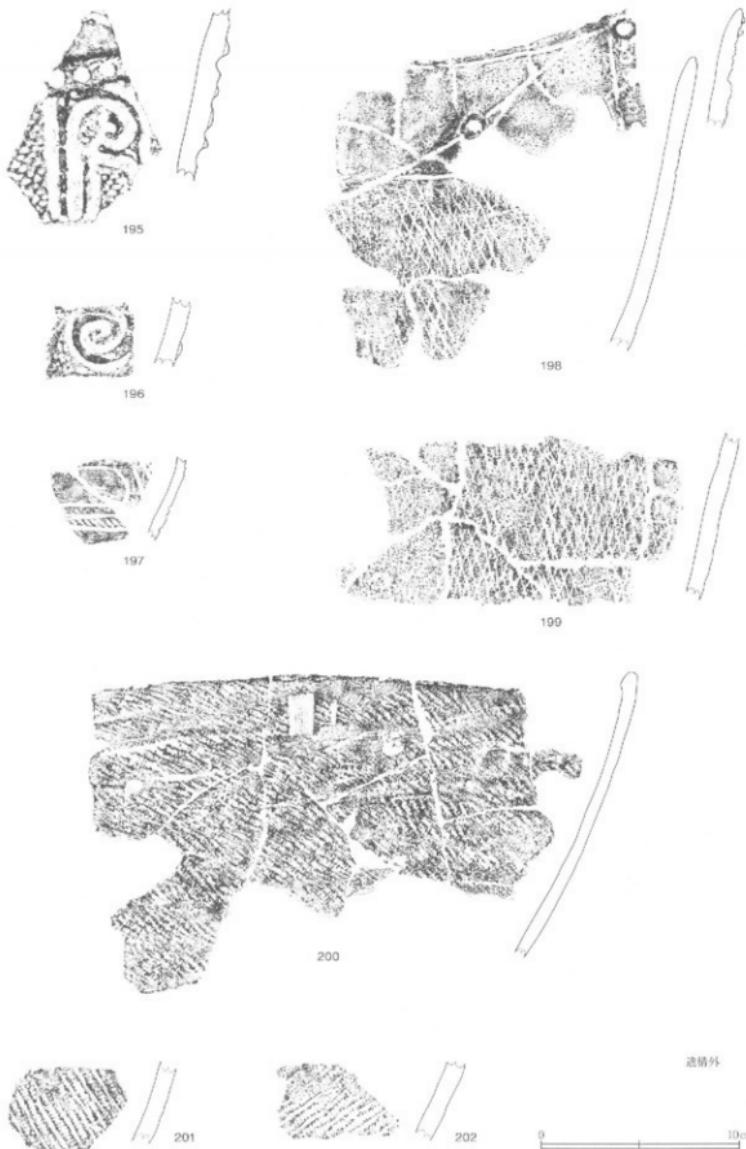
第73図 繩文・弥生土器10(包含層1・2)



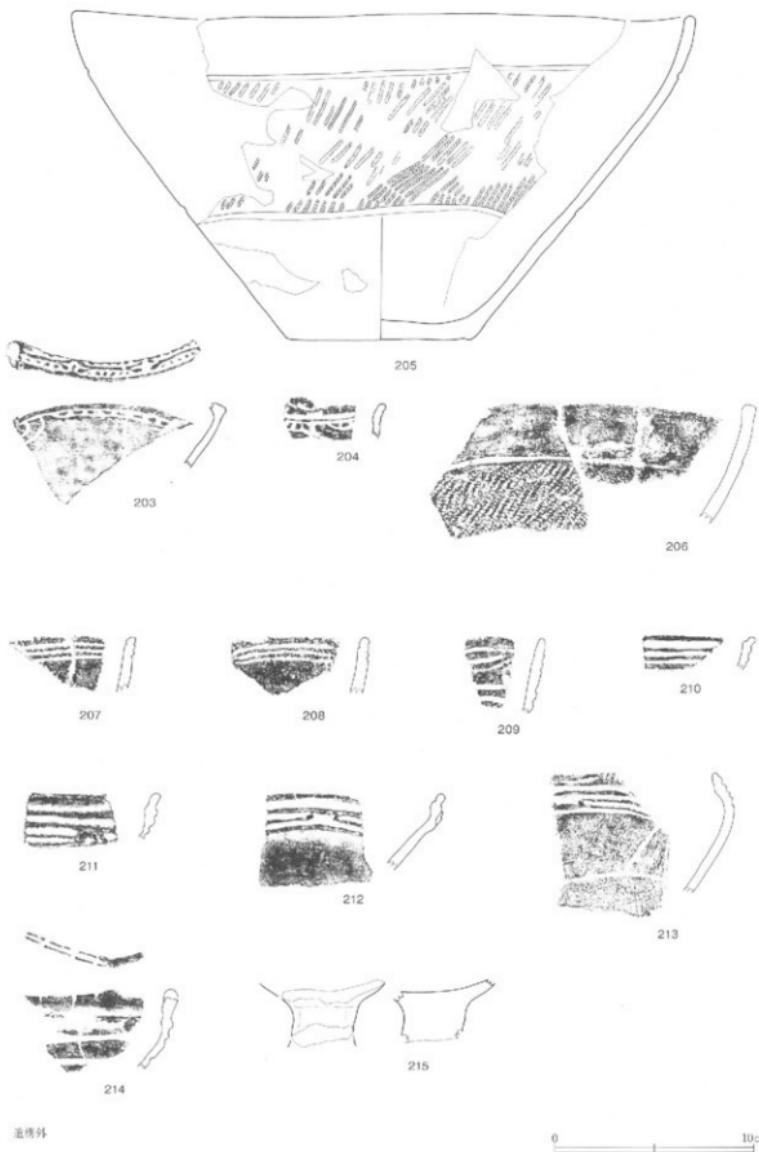
第74図 繩文・弥生土器 11 (包含層2)



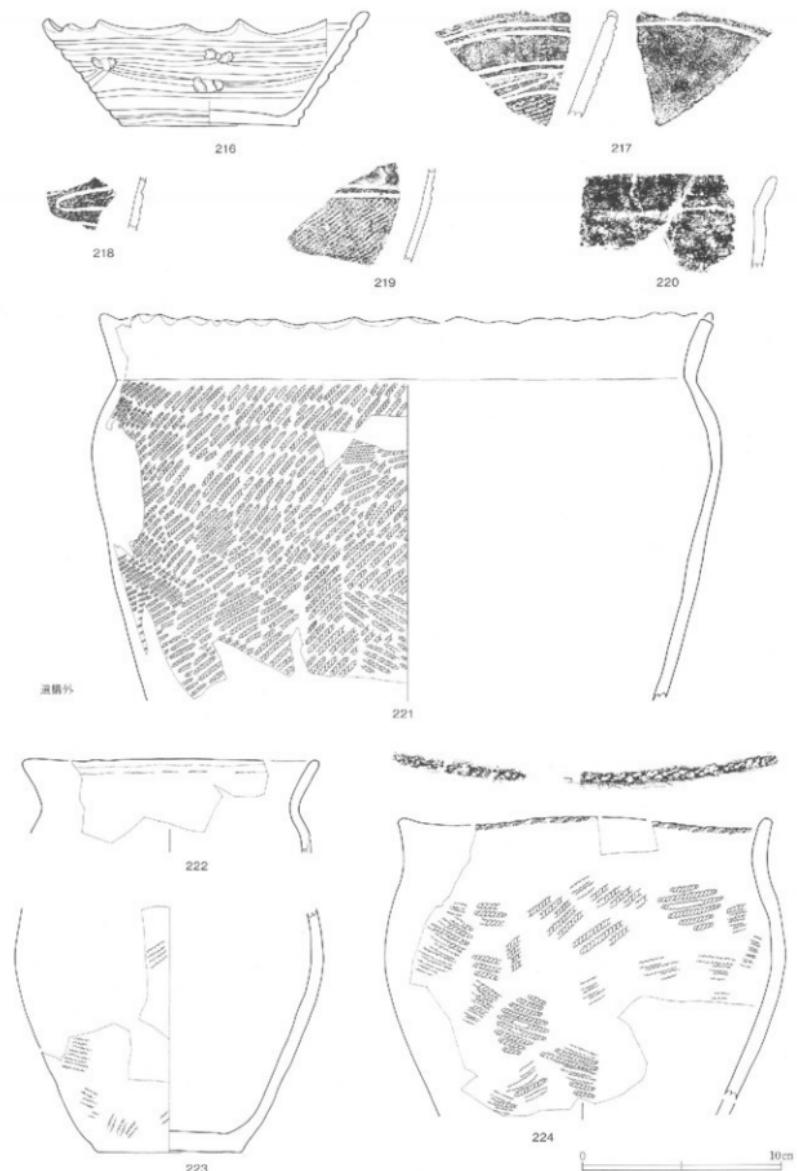
第75図 捺文・弥生土器 12 (包含層3)



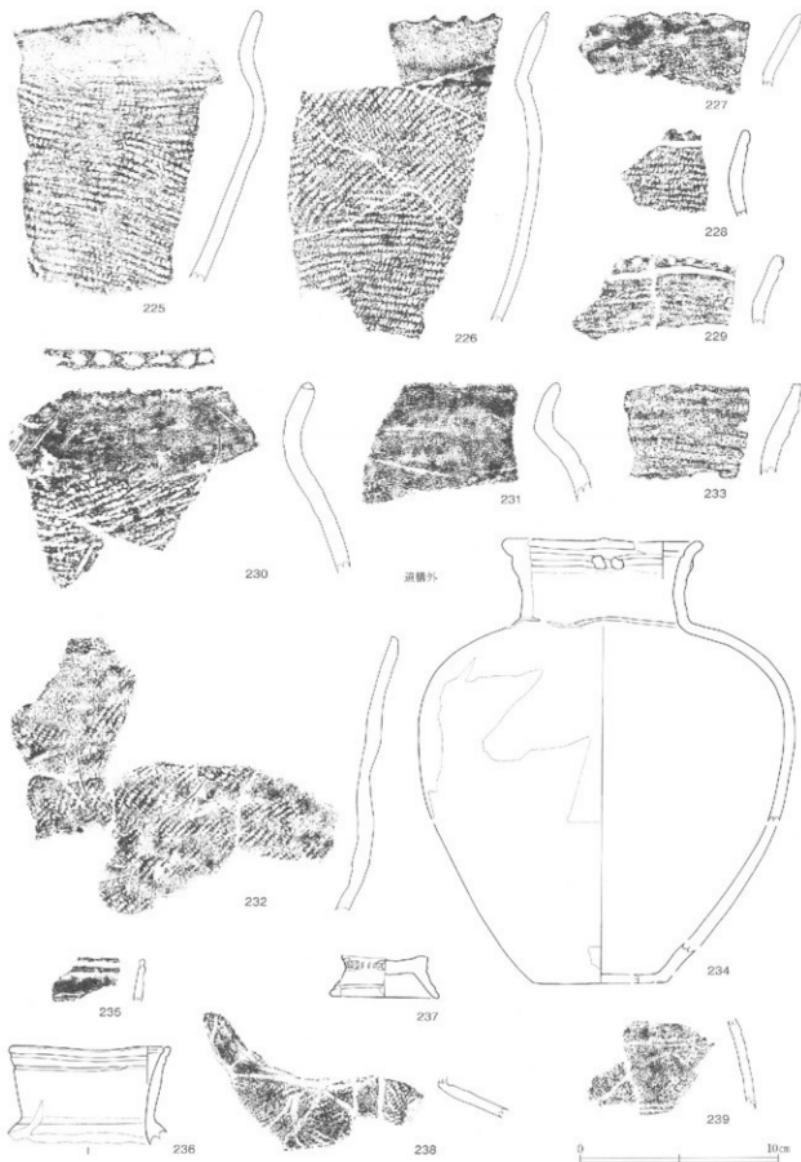
第76図 繩文・弥生土器 13 (遺構外出土)



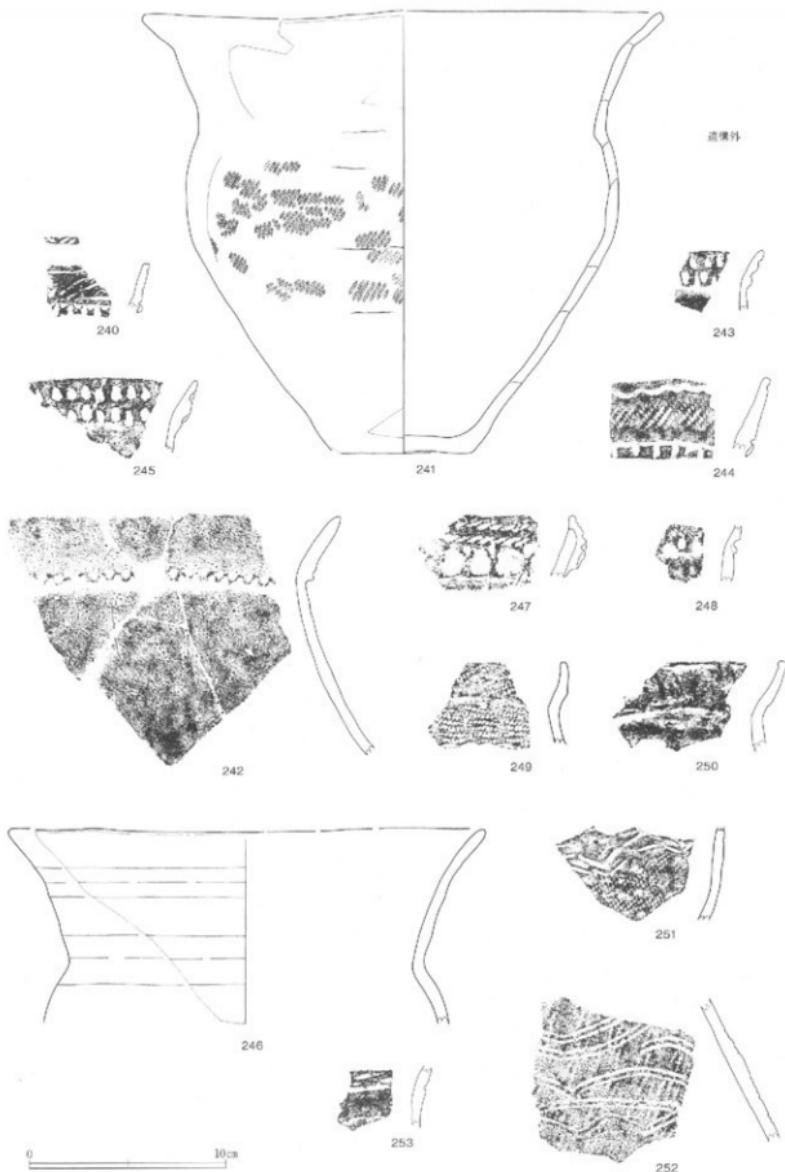
第 77 図 繩文・弥生土器 14 (遺構外出土)



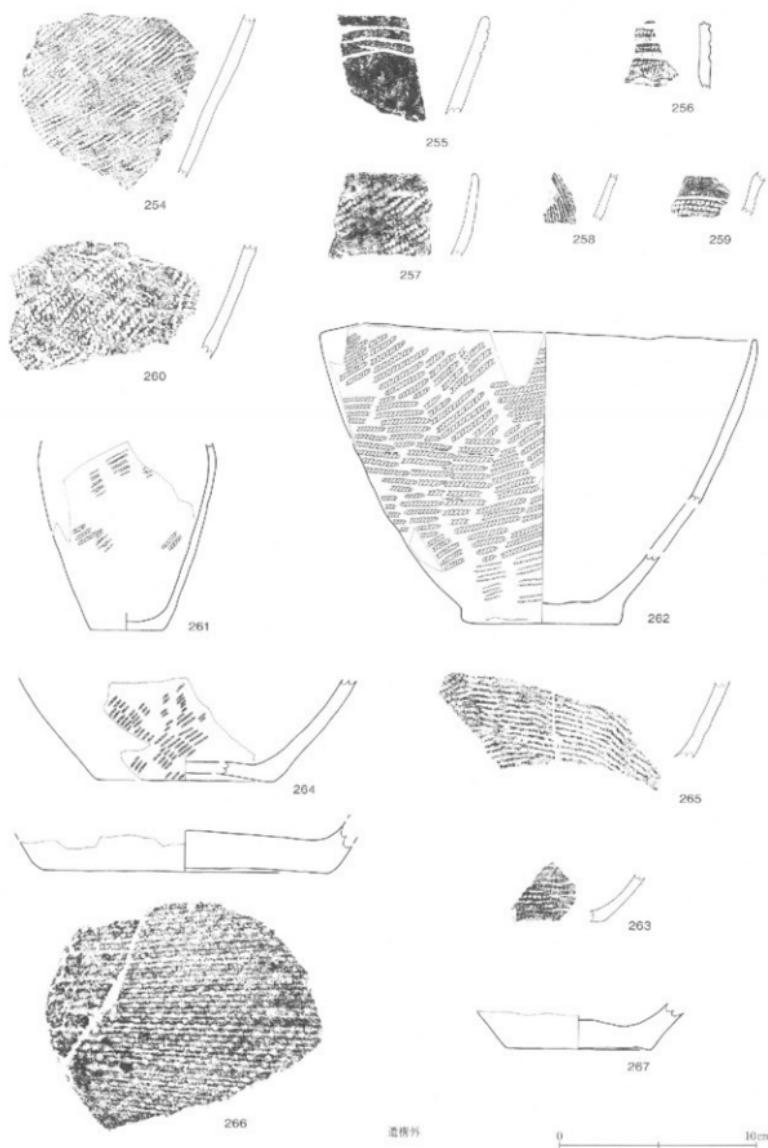
第78図 繪文・弥生土器15(遺構外出土)



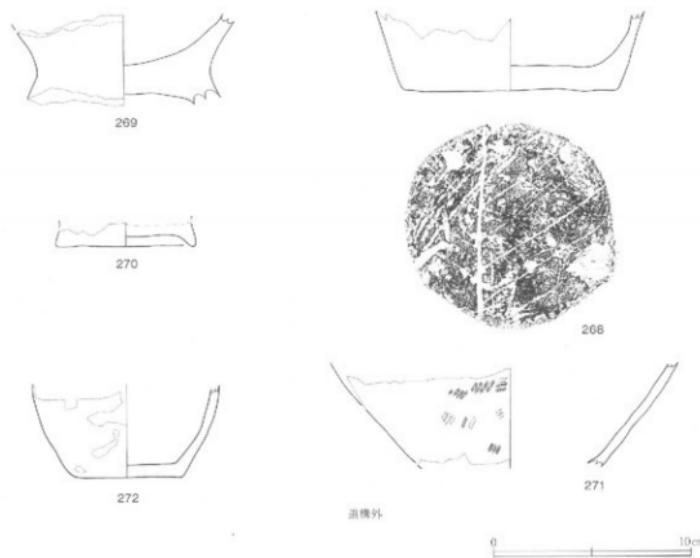
第79図 繩文・弥生土器16(遺構外出土)



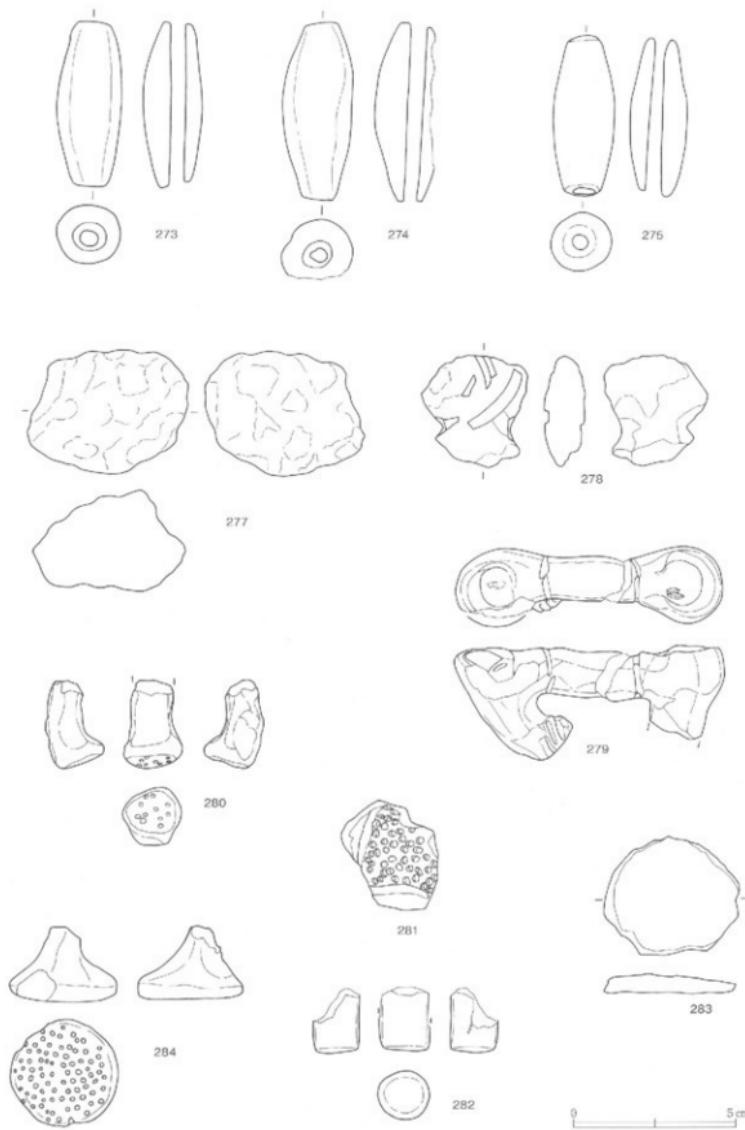
第 80 図 繩文・弥生土器 17 (遺構外出土)



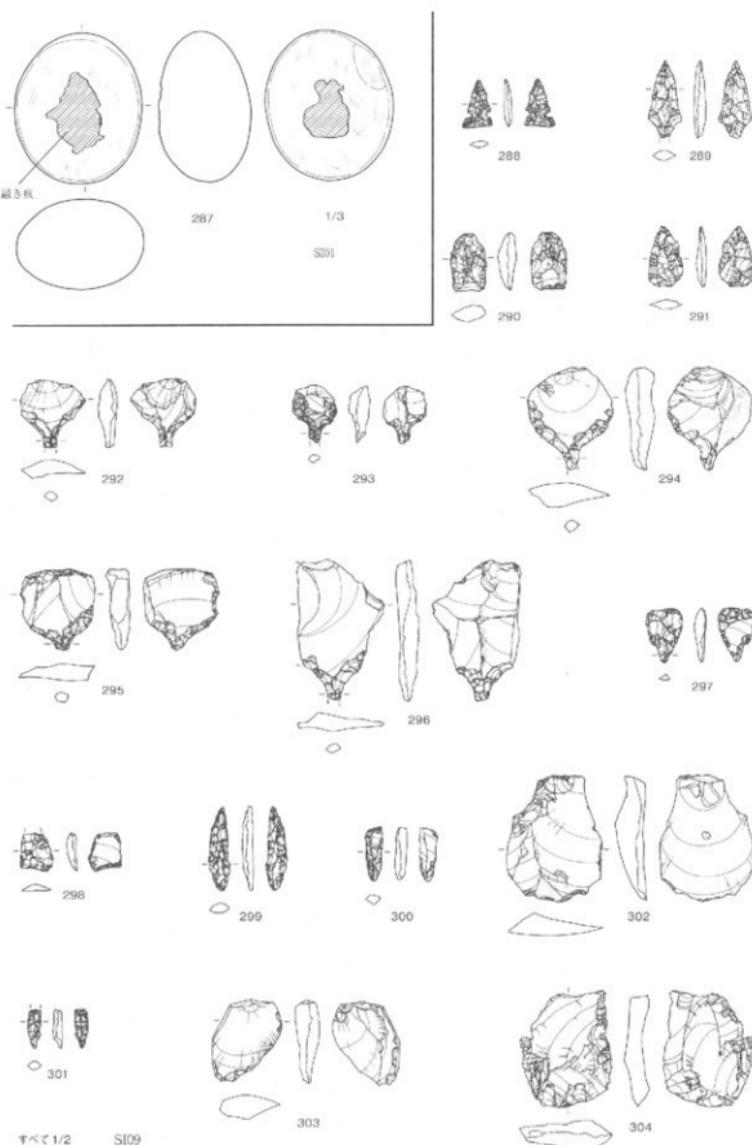
第 81 図 繩文・弥生土器 18 (遺構外出土)



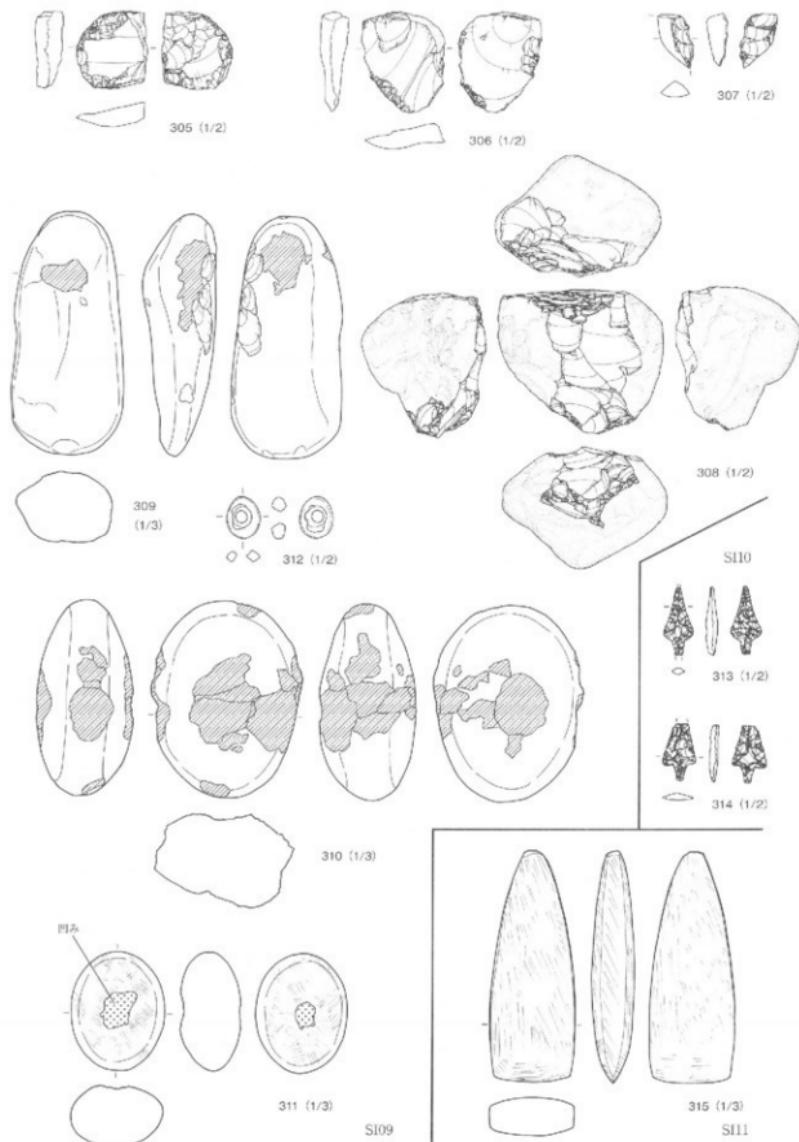
第 82 圖 繩文・弥生土器 19 (遺構外出土)



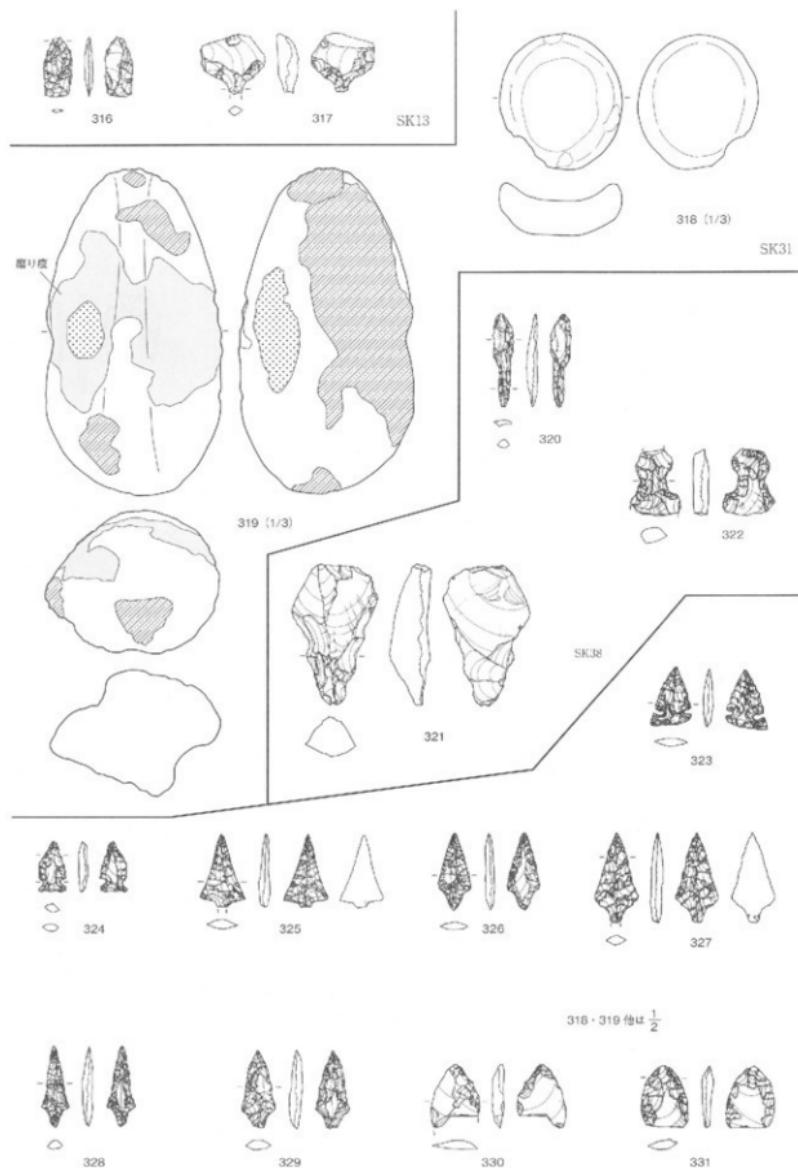
第83図 土製品



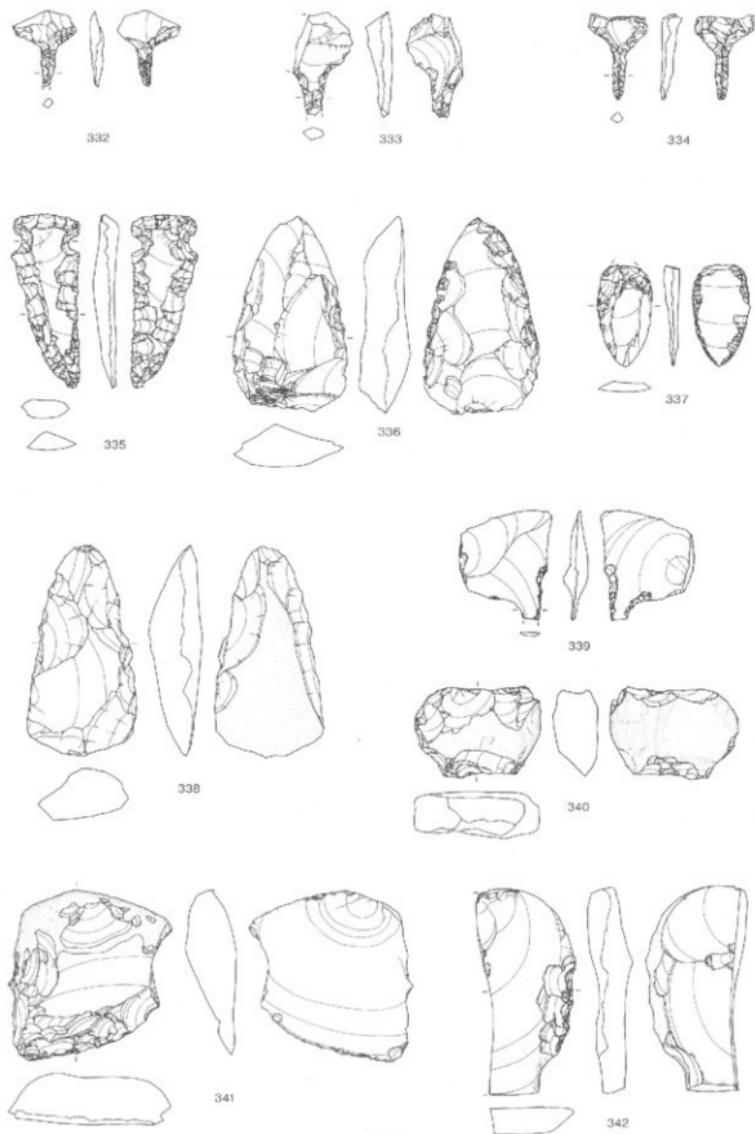
第84図 石器・石製品1 (S101・S109出土)



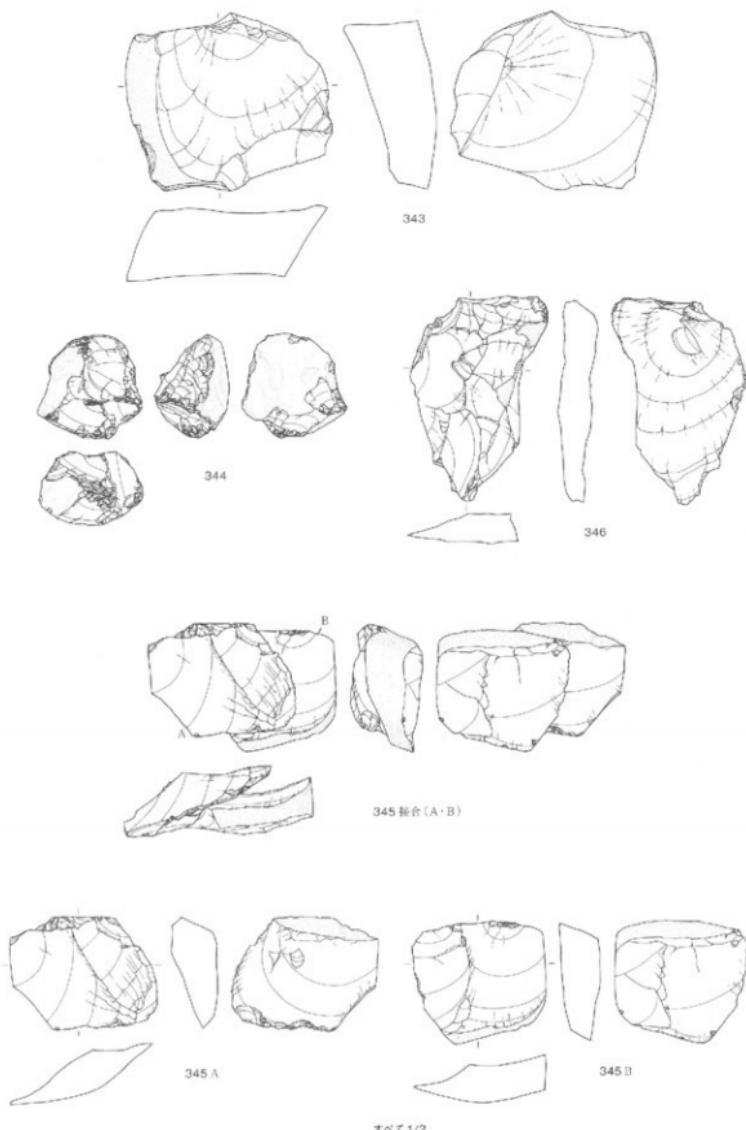
第85図 石器・石製品2 (S109, 10, 11出土)



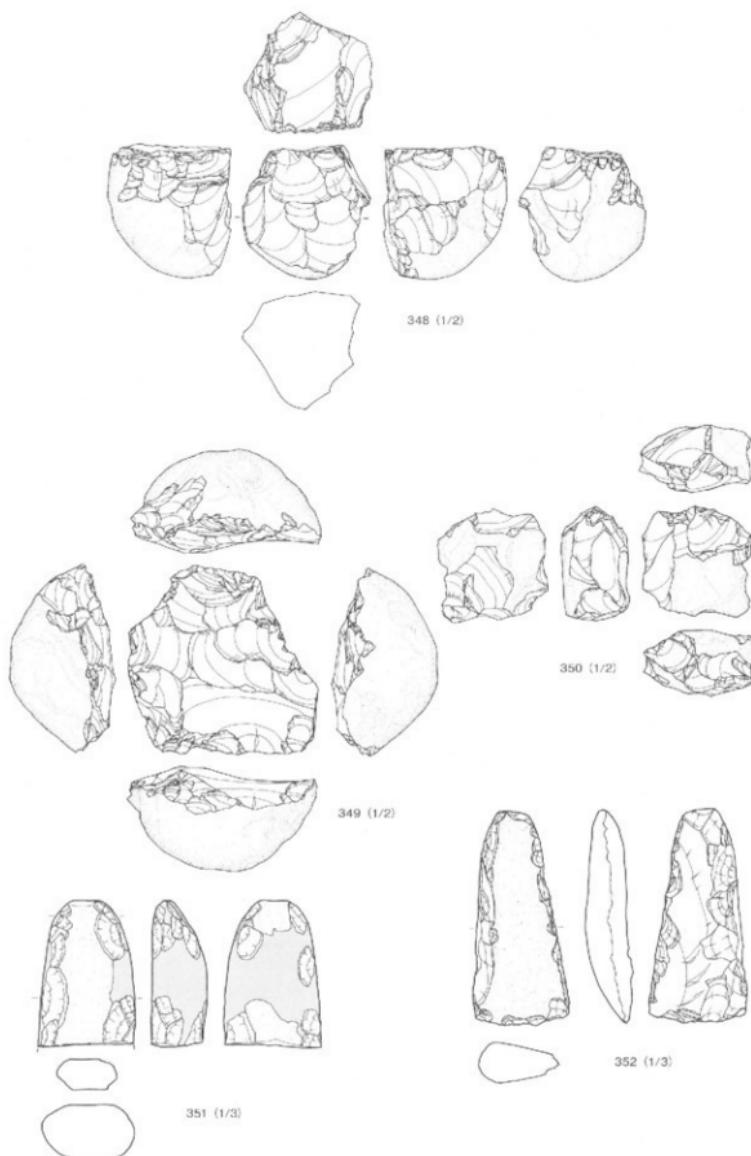
第 86 図 石器・石製品 3 (S I 13・SK 31・38 遺構外)



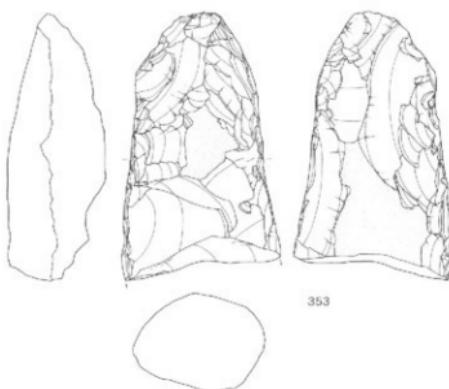
第 87 図 石器・石製品 4 (遺構外出土)



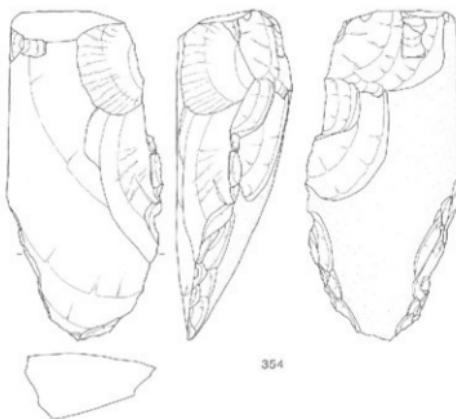
第88図 石器・石製品5（遺構外出土）



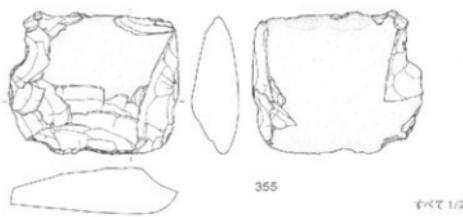
第89図 石器・石製品6（遺構外出土）



353



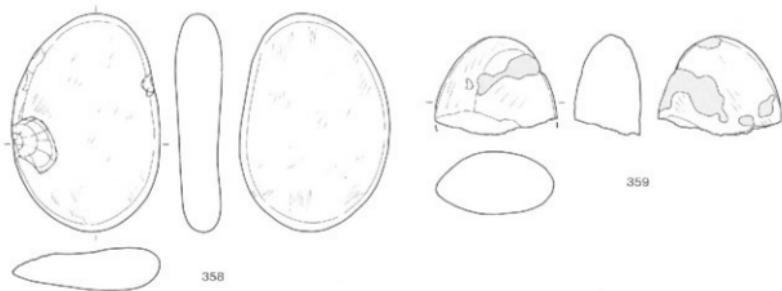
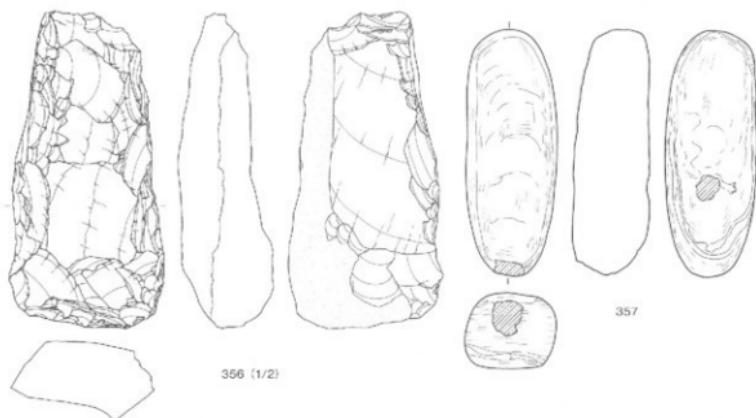
354



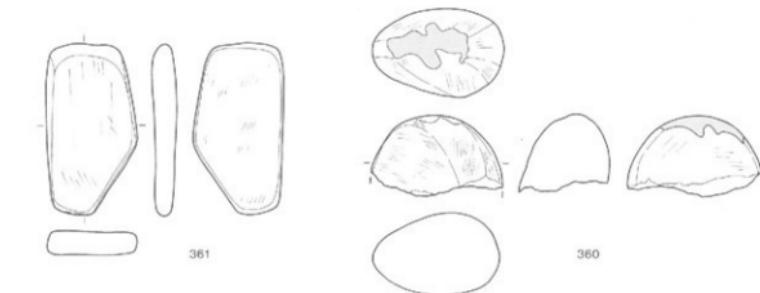
355

すべて 1/2

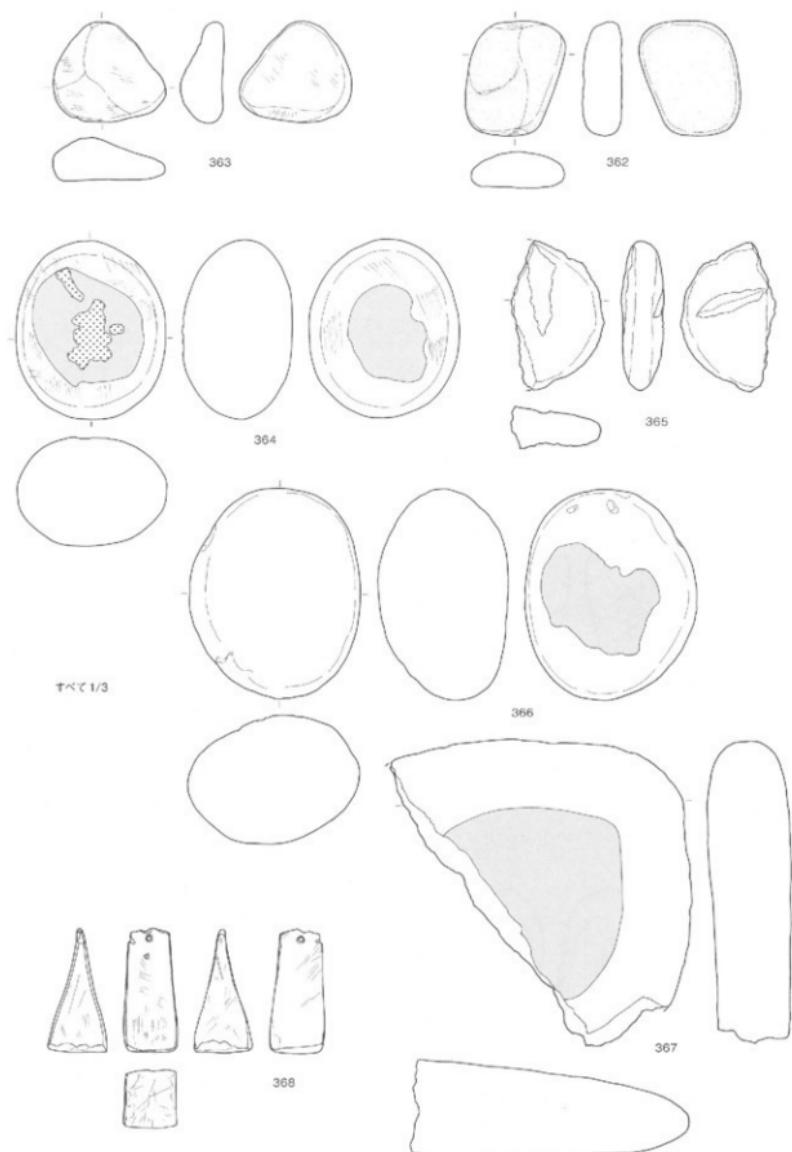
第 90 図 石器・石製品 7 (遺構外出土)



倍はすべて1/3



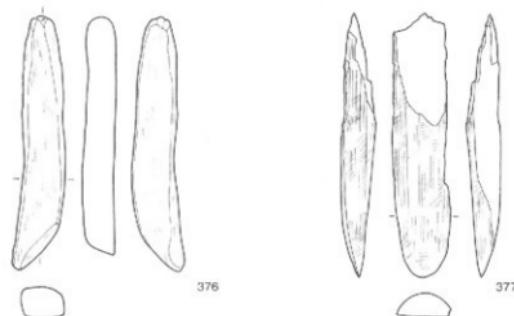
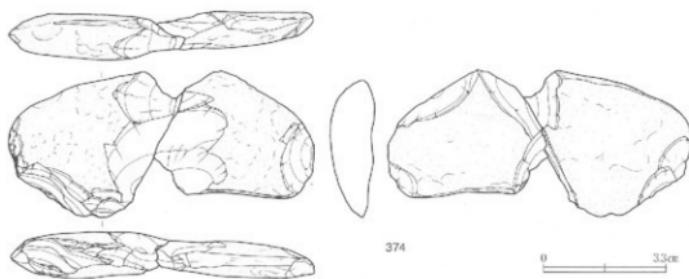
第 91 図 石器・石製品 8



第92図 石器・石製品9



第 93 図 石器・石製品 10



第94図 石器・石製品11・古錢

VIII まとめ

1 遺構

遺構を新しいものから順に整理し、若干の考察を加える。不明なものも極力時期ごとに分けているが限定されたものではないことをことわっておく。

(1) 近世以降

第1次検出面は旧耕作下層に埋もれているもので、時代は近世以降の近代に近い時期観が与えられる。土坑1基、溝3条、窓の跡とおもわれる竪間状遺構2ヶ所を確認した。A調査区で検出した溝跡SD01と02は北に並行して走っており、その間隔は4mほどになる。溝と溝の合間は固く締まる様には何えなかったが、道路状遺構の可能性もある。これらの遺構は1mほどの厚い粗い砂層に覆われており、洪水によって埋もったとも考えられる。

(2) 中世(第58図参照)

第2次検出面の時代は中世から古代までの遺構となる。中世と思われる遺構は堀跡5条や同時期と考えられる各区域に広がる柱穴状土坑群がある。5条検出された大型の溝を堀跡とした理由は、断面形がV字状を呈す薬研壺状となることを理由としている。調査D区で検出された4号堀については現状では溝と捉えることが妥当かも知れないが、上位が削平されての検出で、断面形がV字状を呈すと判断してあえて堀としている。堀には、その延長から3つの種類に分けることができる。

一つはほぼ直線的に延びるもので、3号堀がそれに当たる。3号堀は北東方向から南西方面に延び、幅が350~450cmあり、大型である。深さは最大100cm以上を測る。埋土下位が水性堆積状を示し、水が蓄えられていた可能性を示す。埋土上からは弥生土器や石器・土師器・須恵器とともに16世紀の陶磁器片が出土している。区画溝としては大きすぎ、やはり防御施設として良いと思われる。

二つ目は、幅をほぼ一定にして小さなうねりを持ちながら長く延長するものである。A区検出の1号堀とD区検出4号堀、そしてE区検出の5号堀が当たる。1号堀と5号堀は接続する可能性を持つ。幅は開口部径で150~170cm前後に収まる。幅が狭くなっているところは上位が削平された結果と見ることもできる。深さ(高さ)は上位の面によってそれぞれ違うので、底面の標高で比較する。1号堀と5号堀が48.60~48.80mで、5号堀の南側から1号堀の北側にかけて少しづつ低くなっている兆候が見えた。やや離れた4号堀が若干低く48.40mとなる。これらの堀は遺跡全体に広がっている可能性が高い。3号堀を中心として1・5号堀の1群と4号堀に接続する1群とに分かれる可能性がある。

最後に周溝状を呈する2号堀である。1号堀の北側で接続する2号堀は円形状に屈曲すると想定できる。大きな時期差は見られないが、埋土状況や切り合い関係から1号堀より若干新しいものと考えている。上述している4条の堀とは区別して考えなければならないかも知れない。

その他中世に属するものとして溝跡がある。2次面で検出した溝跡は11条ある。S I 01付近で検出されたSD06は古代に属すると考えられるが、他は不明となる。その中で1号堀を横切るように走るSD05と、4号堀を横切るSD11は堀との関連性があり中世期に属する可能性がある。この2条の溝は同機能を持つと考える。跡跡なのかもしれない。また、SD09は屈曲する溝で、南側の先

端は不明であるが1・2号堀との関連が考えられ、やはり中世であろう。その場合、2号堀と同様の機能を持つものと推測される。

ほか中世の遺構としては柱穴状土坑群がある。大きさや深さなどから2つに大分される。一つは3号堀周辺、特に堀の南側に多く検出されたものである。本文ではB柱穴状土坑群として報告しており75個検出しているが、S I 09～11を精査中に損失したものや、検出できなかったものもあると考え、実際は更に多くなり掘立て柱建物跡があった可能性を示唆する。

もう一つは、1号堀や4号堀周囲に検出された20cm前後を開口部径とする小さな柱穴群である。小柱穴で深さもなく、3号堀周辺と状況を異にする。建物跡としてもあまり大型ではないと推測される。また1号堀に隣接する連続して並ぶ柱穴列や、4号堀の壁面に、斜めの掘り方を持つ柱穴があることなどから、橋や板附のような、建物ではない施設が存在していたのではなかろうか。

堀とかかわりを持ちそうな遺構に敷石遺構がある。1号堀の北側の延長にあるもので、関連は市道に横切られ不明であるが、堀の検出面とほぼ標高を同じくする。大型の石はほぼ平坦であるが、斜めに敷かれており上面を歩いても崩れることなくしっかりととしていた。「水場」もしくは「小道」的な施設かもしれない。

まとめると、中世では、3号堀の南側に小規模な館のような居住地があったと考えられ、そこを中心として堀や溝が巡らし、洪水などの自然災害や外敵から防衛していたのではないかと推測される。類例を探すと江刺平野には標高50m以下の低地に沼館や天間館があり、詳細は不明で堀があるかは分からぬが、北上川に近いところに立地している。境遺跡も沼館などと同様に城館跡の一部が存在しているのかもしれない。

補足であるが、A調査区の南隅道路脇に板碑があつたらしい。道路工事の際に除かれ、現在は北上市稻瀬町押切11-11及川諒氏宅に安置されているが、この板碑は地権者によると現位置の西側300m先の段丘上にあったとされるものである。刻まれている年号は「正和三年(1314)大戈四月五日」とあり、鎌倉時代になる。境遺跡周辺では、中世期には鎌倉時代から戦国時代にかけて人々の活動が盛んだったことが伺われる。

(3) 古代

古代では平安時代の堅穴住居跡(住居状を含む)8棟が検出された。当時まだ埋まりきっていないと考えられる旧河道の北側と南側で大きく様相を変える。

旧河道の南側で検出された堅穴住居跡は3棟である。そのうちS I 01は東側壁の南寄りにカマドが付設されている。その住居は南壁の東寄りに焼土と炭化物の広がりがあり、カマド状の痕跡を残す。S I 02は、東側壁は調査区外となり、詳細は不明だがやはり南壁東寄りに土器とともに焼土が検出された。そして、S I 03は北壁側にカマド状の袖の高まりと煙道状の溝が検出された。

「後半期の集落」『岩手考古学』第10号(伊藤博幸 1998)によると、北上川中流域の平安時代のカマドの位置は、前半期は北カマドが多かったようだが、9世紀ごろからは南もしくは東壁にあり中央ではなくどちらかに寄って設置されることが多いようである。また、当時期の集落の構成は基本的に2棟から3棟が1組となっているようで、住居の規模は床面積20m²台を核に10m²台を割る小規模住宅とその中間の10m²台の3種の住居跡から構成されるようである。

S I 01は推定で床面積20m²は超えると考えられ、中核的なものとなり、S I 02はやや小型になることから、2棟は同時期と考えられ、出土土器も時期差はなく上記の説を後押しする。西壁側にカマド(状)のあるS I 03は、判出遺物はないが、上記2棟より古い平安時代の前半期に属する可能性も

ある。

北側で検出されたのは5棟である。これらは旧河道の西岸に分布する。いずれも堅穴住居跡としているが、南側で検出された3棟と比較して土器の出土が少ないことや焼土・炭化物がないこと、また埋土上位にテフラを観察できることが特色となる。出土遺物は少ないが赤焼きの坏があり、これらのことから南側で検出されたものより新しい遺構である可能性が高い。これらを埋める黄褐色のシルトは旧河道埋土上位に見える。そのことからの集落が形成されていた頃の旧河道は、埋まりきっていないと想定され、旧河道とこの集落は何らかのかかわりを持っていたのではないかと考える。その集落は4基検出された配石遺構を伴う可能性を持つ。(第57図参照)

規模の不明な3号配石遺構を除く3基は一定の間隔を持って旧河道沿いに並んでいる。平面状況はそれぞれ違うが、その構築方法は、旧河道と並行もしくは直行するような形で何条かの短い溝状のくぼみに礫を埋めるという共通性がみられる。前述した通り暗渠的な構築方法である。暗渠は排水のために作られるもので一般に長い溝になる。当遺構が排水施設だとすると2つの疑問が残る。川の縁にあることと溝状のくぼみが短く列を成して神社の鳥居状だったり、テの字状、くの字状だったりすることである。

その疑問を解くために参考になりそうな遺構が配石土坑(S K 06)である。2号配石遺構の西側にある小さな橋円形の土坑で、溝(S D 12)を堰き止めるかのように礫が並べられる。その礫の状況から配石遺構と同時期と思われる。土坑は溝に関連すると考えているが、この土坑が排水を目的にしているのであれば水が流れる溝とかかわるはずがない。可能性の1つとして溝は区画溝で土坑は礎石という考え方ができる。水があることを前提として、礫を埋めるその部分だけ排水させる目的で作られているという捉え方である。

同じような形態を持つ配石遺構は、排水を目的としながら、様々な形を作り上げている。そして、その形に意味があるのでないであろうか。

配石の形態はそれぞれ違うが唯一の類似点は、溝1つ1つの掘方の長さと間隔がほぼ統一されているということである。長さ250cm、幅40cm前後で、間隔は20cm前後となる。1号配石遺構であれば、並行に伸びる4列の占有総面積は約5.5m²である。その面積を排水させるために溝を掘って間隔をあける必要性はないようと思える。あるとすれば間隔である部分に何かが敷設されていた場合である。それは丸太(木)ではないかと考える。配石は排水と同時に丸太を抑える機能も果たしたのではないか。

配石遺構が意味するものを推測すれば、その形態と旧河道沿岸に並ぶ配置から船着場の跡かもしれない。当時の船の大きさを知らないが、小型船を据えるには十分の面積を持つと考える。また、鳥居状だったりテ状だったりするのは船を動かそうとする方向によるものではないかというとらえ方である。そして西岸に広がる住居状の遺構は作業場(番屋)という考え方もある。これらの推測はすべて旧河道が水を蓄えていた状況でのものである。いずれにせよ類例はなく、想像の域を出ない。

(4) 古 墓 時 代

遺構は検出されていないがほぼ完形の土師器が出土している。磨滅しておらず流れ込みの可能性は低い。平安時代の土器を出土させる基本層V層と、弥生時代後期の土器を出土させるVI層を挟んだ面があったのかもしれない。土器が出土した近隣には、住居状遺構といってもよい大型の土坑が検出されている。それらの埋土は、古代に近いものもある。当時期に属するであろうか。

(5) 弥生時代

弥生時代では住居状遺構3基を検出した。いずれも住居状としたのは、壁状の立ち上がりは認められるが床面としてとらえきれなかったからである。柱穴も検出できず配置も不明確となる。平面形は不整な橢円形状である。そのうち1棟は地床炉が検出されている。その炉は長軸の北寄りにある。時期は弥生時代の前期から中期とみている。S I 09は後期の住居状遺構であるが、土器の捨て場の可能性もある。同時期の土器が、旧河道の東岸でもまとまって出土（包含層3）しており、弥生時代後期の集落は近隣に存在し、それは平安時代の住居跡のある調査区東側にあるのかもしれない。

弥生時代に属すると思われる土坑はいくつかあるが、土器が出土するものは限られている。それらは住居状遺構から北側に20mほど離れた位置にまとめて検出されている。弥生時代中期～後期の土器が出土したが、出土状況から時期は中期に属する可能性が高い。平面形が橢円形で大型である場合が多くSK 31に至っては、長軸が約580cm、深さが140cmを測る。貯蔵穴なのであろうか。これらの大型の土坑が弥生時代の特色なのか地域性なのかは興味深い疑問である。

弥生時代の遺構が検出された区域は、北端から西側にかけて旧河道が横切り、南から東側は自然な落ち込み（段丘線）があるために、狭い範囲となる。この範囲の中で、土器の出土状況から、縄文時代晩期末から弥生時代前期・中期そして後期へと、南から北側に居住地が変遷する様相も見えた。当時の人々にとっては住みやすい土地だったのであろうか。

(6) 縄文時代晩期末から弥生時代前期

明確な遺構はないが、調査A区で包含層が確認された。土器や石器の捨て場的遺構（包含層1）と埋設土器の遺構（包含層2）である。これらから、近隣に当期の居住区が存在するのではないかと推測される。包含層1からは石核が多く出土しており石器制作址の状況を示す。また、包含層2は墓域の可能性も考えられる。これらの特色は金附遺跡にもみられ、当期において人々が広範囲に活動していた証となった。

平成20年度に、調査区A区西側を調査する機会を得た。予測通り、縄文時代晩期末から弥生時代初頭期の堅穴住居跡が検出された。

(7) 縄文時代晩期以前

S I 12は縄文時代後期前葉の土器を出土させた堅穴住居状遺構である。同様の土器が近隣の土坑からも出土している。当期の土器は調査区全体から散在的に出土する。出土層位はⅦ層とした黒褐色土である。最終検出面でとらえた土坑を当期の可能性を持つものとしたが明確なものではない。しかし、出土土器は磨滅が少なく、完形に近いものもあることが特色である。縄文時代後期前半ごろは、居住地として選ばれていた可能性がある。

調査区内では基本層Ⅷ層以下は無遺物層となり、遺構は確認できない。Ⅸ層は砂が厚く層をなして確認でき、以前は川であったことを示唆する。出土土器のうち、中期中葉の土器は磨滅がひどく、それ以前の土器は見当たらない。これらのことから中期中葉以前は川であったと推定する。

2 遺 物

詳細はVI出土遺物で述べているので、ここでは縄文・弥生土器についてのみ補足する。

縄文・弥生土器は出土した地点で分類しているが、A群は調査区全体のVI層で出土したものうち古い様相を示すもの、また流れ込みの可能性のある土器を集めたものである。縄文時代中期中葉や後期前葉また晩期前葉の土器がある。205(第77図)の大型の浅鉢は台形状で沈線区画内に縄文充填しているもので縄文時代後期前葉とした。出土層位はVI～Ⅶ層となっており、曖昧である。出土層位に確信が持てないため、弥生時代中期に盛行する縄文充填という特色から、当初はC群に属すると考えた土器である。しかし、やや離れてはいるが、S I 09の床下で198・199(第76図)を出土させたことから、同時期と捉えた。縄文時代中期中葉の土器に比べ、磨滅されておらず、遺構内出土の87(第68図)を含めた4点の資料は、遺跡の上部を語る上で好資料となった。

B群は包含層1・2から出土した土器である。縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭に属する。大半が金附遺跡II群土器(大洞A式古段階)に相当し、一部I群土器が混入する。浅鉢の口縁部破片が多くなったが、他は粗製土器が卓越する。浅鉢のなかには工字文のものがあり、金附遺跡I群b類(大洞A式)に相当するかもしれない。

B群のうち包含層2から出土した土器は、包含層1出土土器と大きな違いは見あたらないが、褐色の土器ばかりで、胎上に雲母の混入が多いという特色を持つ。また、包含層1には深鉢と思われる土器が存在するが、包含層2では壺形土器のみである。壺形土器は包含層1と比較すれば平行沈線がめぐる丁寧な作りである。単なる出土量の相違または使用目的の違いなのかもしれないが、若干新しい様相を示す。

C群は引き算式(Bより新しくDには当てはまらない)に集めた土器群であやふやな面が多い。時期としては弥生時代前期から中期にわたることができる。金附遺跡II群土器、小田野編年I・II期・谷起島式、川岸場II式や橋本式に当たる。

浅鉢では、216(第78図)の略完形品が砂沢式に相当する土器である。表面色が茶褐色で、他の土器と差別化できる。やや厚みがあり、柔らかい感じがする。鉢形土器ではやや幅のある分類となった。小田野編年III～IV期の口縁部の特色に当てはまらず、B群の土器が出土していないグリッドから抽出したものであるが、他の時期に相当する可能性もある。遺構外では221～233(第78・79図)が該当する。221は、浅鉢の217の出土状況からC群としたもので、B群深鉢と大きな差はないが、あえて比較するとあまり肩が張らず、口縁部がやや長い特色がある。225や226などでも、B群に比べると口縁部の無文体が長くなる特色があるようだ。230や231のように体部が膨らむ形をするものもある。壺形土器はSK 31出土の102以外の抽出は難しかった。234(第79図)はB群173(第74図)と比較して、頸部がやや長い特色を持つ。貼彫がやや大きめで、表面色も茶褐色で前期の特色を持つ。

D群は弥生時代後期に属する。小田野編年III～IV期、滝沢村の湯舟沢式土器、奥州市常磐広町遺跡出土の常磐式に比定する。中心はS I 09出土のものであるが、検出グリッドは上層に古代や中世の遺構も多いことや、流れ込みと思われるA群の土器や土師器が出土することから明確な包含層としてとらえていない。しかし、あきらかに弥生土器ではないものを削除すると一つの傾向がみえてきた。壺形土器が卓越するという器種構成や複合口縁が多いという特色である。アメリカ式石錐も当遺構と包含層3から出土している。

小田野編年を見れば、Ⅲ期は磨消縄文や充填縄文がほとんど姿を消し壺が器種の主体となり、立浪状などの独特なモチーフができる。そしてIV期は、器種が大型の壺や鉢主体で蓋や高杯はまれとなり、

複合口縁が多く頸部に無文帯を持つものも多いということである。以上の特色を充てれば、境遺跡D群土器はⅣ期に近いが、個を見ればⅢ期に当たるはまりそうな土器片もあり、細分できる可能性もある。

浅鉢はない。甕形上器が卓越し、バラエティに富む。S I 09で見てみると、50(第64図)は口縁部が大きく開いた深鉢である。この深鉢は弥生時代後期の特徴的な土器で、湯舟沢Ⅲ群(湯舟沢式土器)に類例がある。61は甕形土器で、口縁部が欠損しており不明であるが、上位に無文帯を持ち、口縁部が大きく開く形になると予想される。弧文が施文され、肩部には小さな連弧文が施文される例は常盤遺跡出土土器に似る。同じように69の蓋も常盤式土器に類例があるが、連弧文は見当たらず、渦巻き状の施文に特色を持つ。小田野の言う「Ⅳ期に展開するモチーフ」いわゆるⅢ期の上器群にあたるのであろうか。前後するが67は非常に長い口縁部を持つ甕で、肩部に連弧文を施文する。大型の土器の刺には薄く、隆帶が欠損したかのような跡はあるが、大きな複合口縁とはならないようである。これも前述した「Ⅲ期からⅣ期に展開する」形なのであろうか。

包含層3では、小さな破片が多い。その中で異質のが192(第75図)の蓋としたものである。蓋ではなく、頸部が長く延びる小型壺の可能性もある。変形工字文を施すその特色は、B~C類に入れるべきかもしれない。その場合は流れ込みとなる。

以上、S I 09・包含層3出土土器は、小さな破片には疑問点もあり、古い様相を示す土器もあるが、小田野Ⅳ期、常盤式土器、湯舟沢式土器に比定して差支えないだろう。

遺構外では240~254(第80・81図)をD群とした。241は粗製の甕で、頸部が長く延び、口縁部が大きく開く形となる。内面の屈曲(口縁上部と下部)が銳角である特色を持つ。D群としたのは、アメリカ式石器と同グリッドの同層位出土であり、S I 09の近隣であることが大きな理由である。同じような理由で246もD群に入れている。小田野Ⅲ期としても差し支えないが、D類からは、はみ出ないのであろう。252は厚みのある破片で、文様からはC群の特色を持つものであるが、表面色や胎土などからS I 09の69と同類のものと判断した。しかし、その出土状況からは断定できない。

以上、縄文・弥生土器を概観したが、弥生土器は中期・後期が中心となる。特に後期が卓越し、その時期を知る上で貴重な資料となるであろう。金附遺跡が弥生時代前期を中心にしてすることを考慮すると、弥生時代中期の土器を多く出土させる遺跡が、当遺跡と金附遺跡を結ぶ線上に眠っているという推測も成り立ち、今後の発掘調査に期待したい。

引用参考・文献

- 石川口出志 2005 岩手考古学第17号「岩手の弥生文化研究の諸問題」
- 伊藤 博幸 1998 岩手考古学会第10号「後半期の集落」
- 井上 雅孝 2006 岩手県における時宗板碑の基礎的研究 坂詰秀一先生古希記念論文集 考古学の研究II(抜粋)
- 岩手県教育委員会 1979 岩手県文化財報告書第33集 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I」
- 岩手県教育委員会 1980 岩手県文化財報告書第48集 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書IV」
- 岩手県教育委員会 1982 岩手県文化財報告書第72集 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XVII」
- 岩手県教育委員会 1986 岩手県中世城館跡分布調査報告書
- 江刺市教育委員会 1983 「江刺市史第一巻 通史篇 古代」
- 江刺市教育委員会 2002 江刺市埋蔵文化財調査報告書第30集 「反町遺跡」
- 江刺市教育委員会 2000 岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第17集 「平成12年度市内遺跡発掘調査報告書」
- 小田野哲憲 1987 岩手県立博物館研究報告5号 「岩手県の弥生土器縄年試論」
- 佐藤嘉広他 1992 岩手県立博物館研究報告10号 「岩手県水沢市橋本遺跡出土資料について」
- 高瀬 克範 2004 本州島東北部の弥生社会誌(六一書房)
- 満沢村教育委員会 1986 満沢村文化財調査報告書2集「湯舟沢遺跡」
- 羽柴 直人 1994 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要XIV 「東北地方北部における近世陶磁器の様相」
- (財)岩埋文 1977 岩手県埋文センター文化財調査報告書第5集 「沼の上遺跡」
- (財)岩埋文 1979 岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集 「力石Ⅱ・兎Ⅱ遺跡」
- (財)岩埋文 2005 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集「金附遺跡」

IX 自然化学分析

1 放射性炭素年代測定結果報告書(AMS測定) 境遺跡

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

境遺跡は、岩手県北上市稻瀬町地蔵堂3-1（北緯 $39^{\circ} 14' 08''$ 、東経 $141^{\circ} 06' 59''$ ）に所在する。

(2) 測定の意義

住居跡や土坑から出土した土器の時期を明らかにする。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、B-4号住居跡の柱穴埋土2層から出土した木炭(NO 1 : IAAA-72411)とC-3号土坑の埋土中位から出土した木炭(NO 2 : IAAA-72412)である。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA(Acid Alkali Acid)処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3 MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9 SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。
- 3) 付記した誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰; パーミル)で表した。

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_S$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{S}}$

$^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に(加速器)と注記する。

- 5) $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ^{13}C 濃度($^{13}\text{A}_N$)に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

- 6) pMC(percent Modern Carbon)は、現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合を示す表記であり、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、 ^{14}C 年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC} / 100)$$

- 7) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

- 8) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代の計算では、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。

(7) 測定結果

¹⁴C年代は、B4号住居跡出土の木炭(NO 1)が 2200 ± 30 yrBP、C-3号土坑出土の木炭(NO 2)が 2220 ± 30 yrBPである。曆年較正年代($1\sigma = 68.2\%$)は、NO 1が360～280BC(44.0%)・260～200BC(24.2%)、NO 2が370～340BC(9.7%)・310～200BC(58.5%)である。化学処理および測定内容に問題はなく、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
 Reimer P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA

IAA Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-72411 #2088-1	試料採取場所: 岩手県北上市稻瀬町地蔵堂3-1 境遺跡 試料形態: 木炭 試料名(番号): NO 1 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 2200 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -27.33 ± 0.70 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -239.6 ± 3.1 $p\text{MC}(\%)$ = 76.04 ± 0.31 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -243.2 ± 2.9 $p\text{MC}(\%)$ = 75.68 ± 0.29 Age(yrBP) : 2240 ± 30
IAAA-72412 #2088-2	試料採取場所: 岩手県北上市稻瀬町地蔵堂3-1 境遺跡 試料形態: 木炭 試料名(番号): NO 2 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 2220 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -30.98 ± 0.88 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -241.9 ± 3.2 $p\text{MC}(\%)$ = 75.81 ± 0.32 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -251.2 ± 2.8 $p\text{MC}(\%)$ = 74.88 ± 0.28 Age(yrBP) : 2320 ± 30

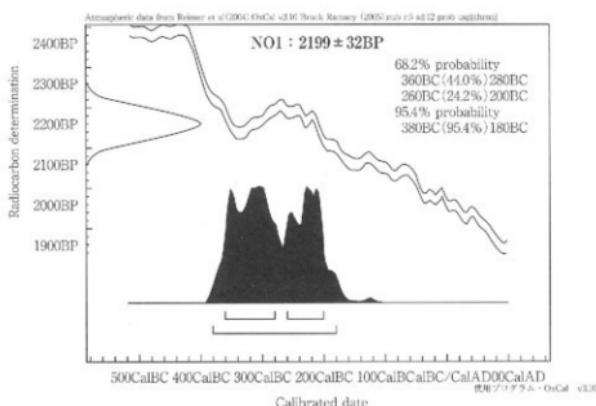
参考資料：歴年較正用年代

IAA

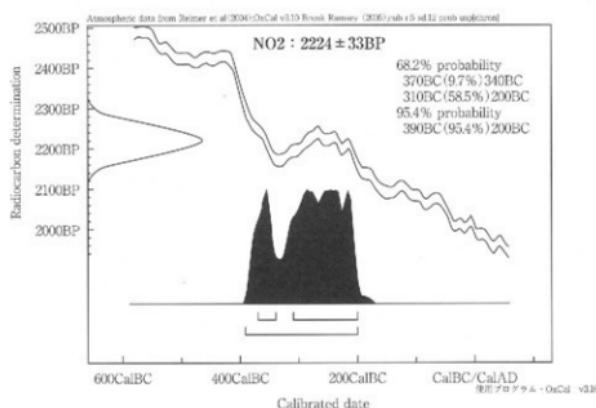
IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-72411	NO 1	2199 ± 32
IAAA-72412	NO 2	2224 ± 33

ここに記載する Libby Age(年代値)と誤差は下1桁を丸めない値です。

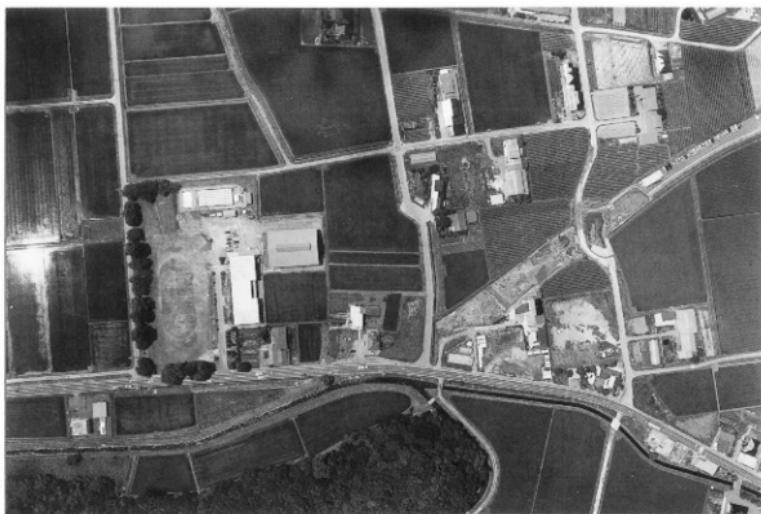
【参考値 歴年較正 Radiocarbon determination】



【参考値 歴年較正 Radiocarbon determination】



写 真 図 版



境遺跡遠景



調査区全体



B・C区調査前風景



D区掘削状況



E区調査前風景

写真図版2 発掘前状況



A区基本層序



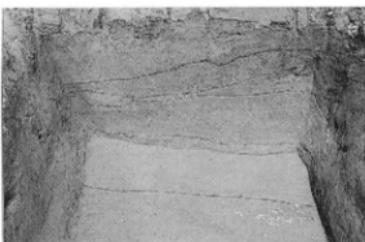
B区基本層序



D区 中央部 基本層序



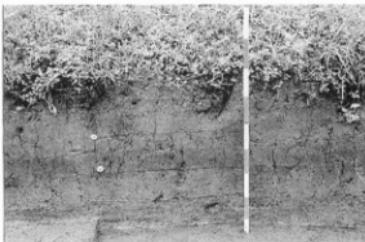
D区最北部



D区東トレンチ



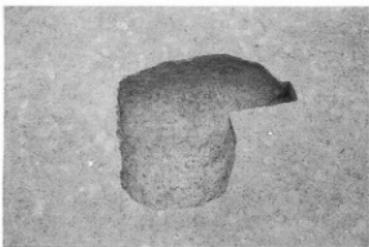
C 区



E区中央部基本層序

写真図版4 土層断面②(C・D・E区)

平成18年度調査分



SK 01 平面



断面



SD 01 平面



断面



SD 02 平面



断面



A 欠闕状遺構 近景



A 欠闕状遺構 遠景

写真図版5 SK 01土坑、SD 01・02溝跡、A欠闕状遺構



S D 03平面



断面



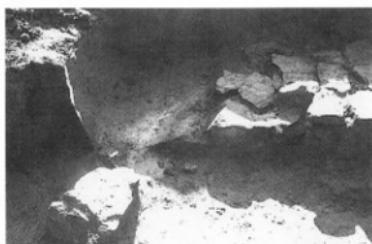
B 欠間状遺構平面



B区最東部トレンチ



敷石遺構平面

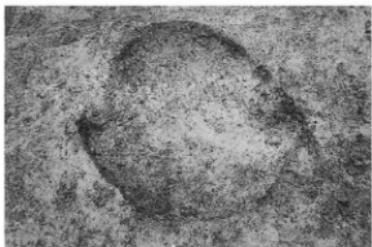


断面①



断面②

写真図版 6 S D 03溝跡、B 欠間状遺構、敷石遺構



SK 02平面



断面



SD 04平面



SD 05平面



断面



断面

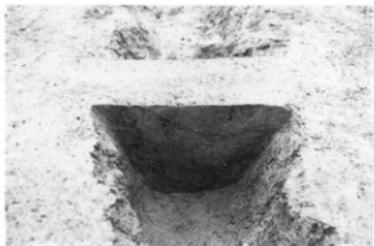
写真図版7 SK 02土坑、SD 04・05溝跡



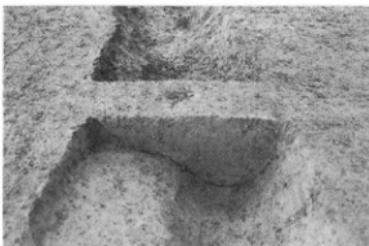
SD 06 平面



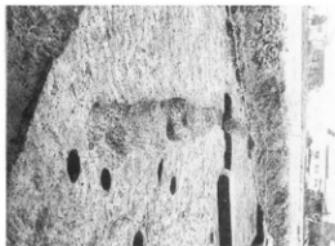
SD 07 平面



断面



断面



SD 08 平面



断面

写真図版 8 SD 06・07・08溝跡



SD 09 平面



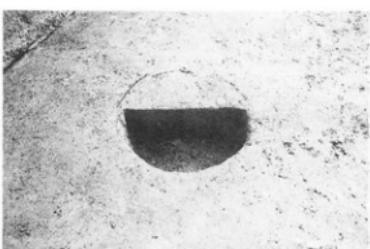
断面



A 柱穴状土坑 平面



柱穴列遺構



A 柱穴状土坑 断面



包含層 1 断面



包含層 1 土器出土狀況



包含層 2 土器出土狀況

写真図版9 SD 09溝跡、A柱穴状土坑群、包含層1・2

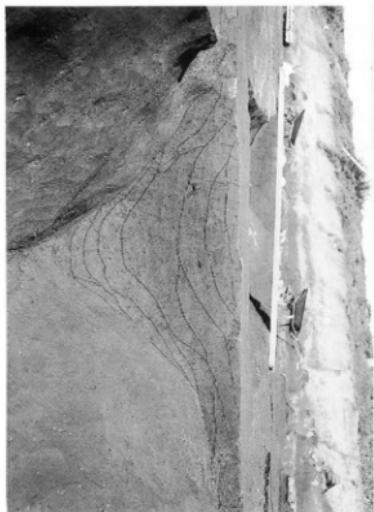


1号堤



2号堀

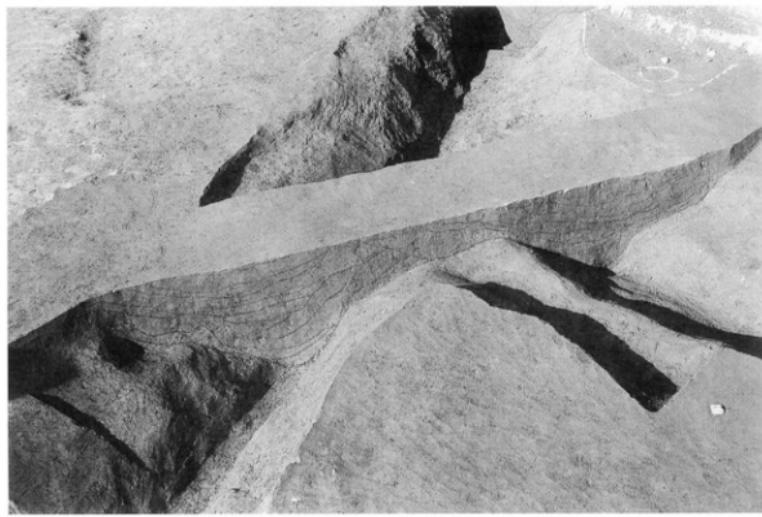
写真図版 10 1・2号堀跡①



1号堤北侧断面



1号堤南侧断面



1・2号堤文差地点断面



平 面



断 面

写真図版 12 3号堀跡

平成19年度調査分



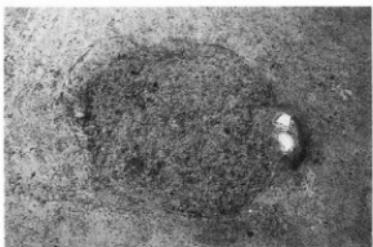
平面



断面(W-E)



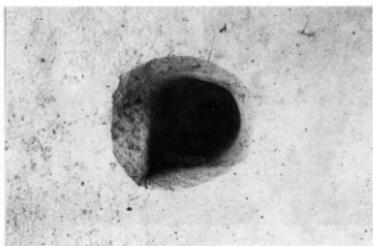
断面(S-N)



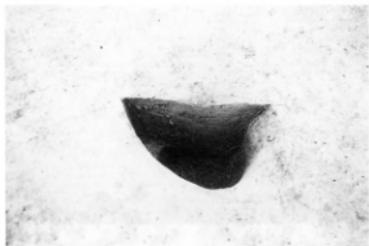
燒土平面



燒土断面



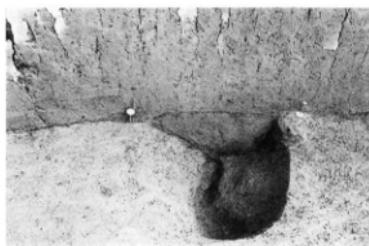
P 3 平面



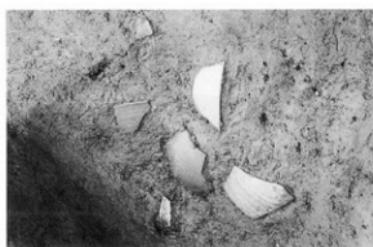
P 3 断面



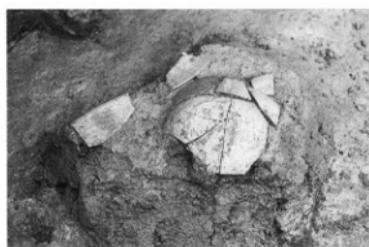
壁溝断面



P 1 断面

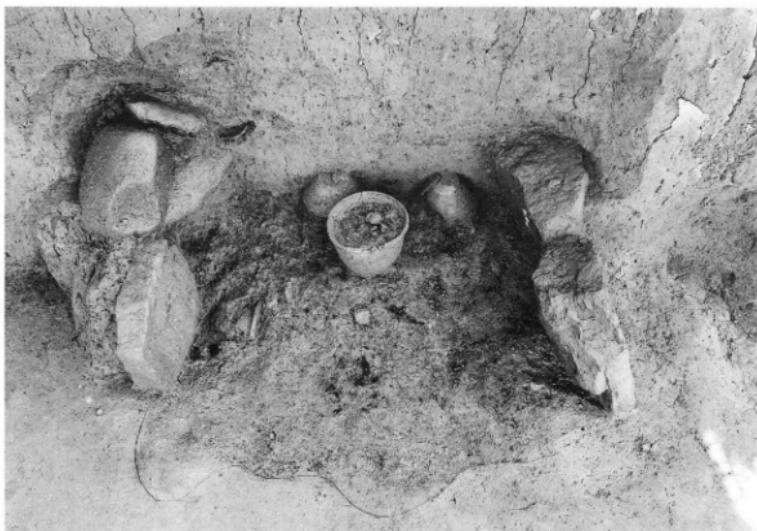


遺物出土状况



須恵器出土状况

写真図版14 S I 01 竪穴住居跡②



カマド平面



遺物出土状況 1



遺物出土状況 2



遺物出土状況 3

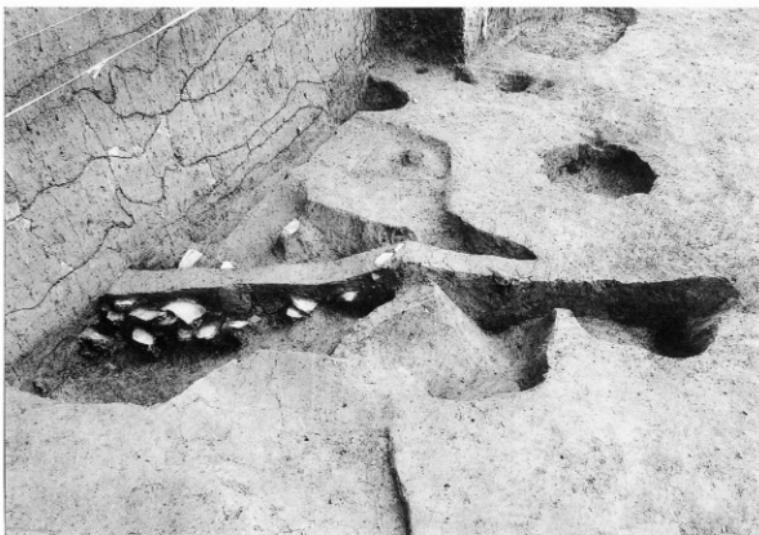


平 面



断 面

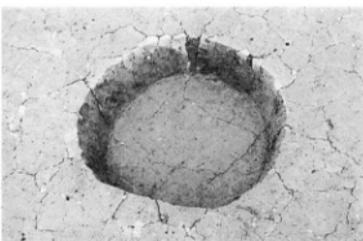
写真図版16 S I 02竪穴住居跡①



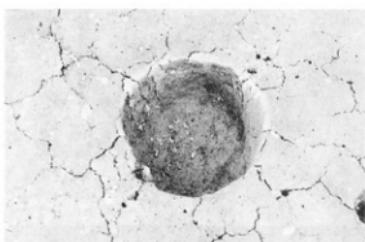
烧土平面



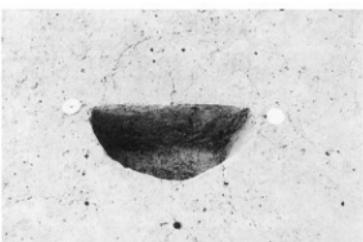
土器出土状况



P 1 完掘



P 5 完掘



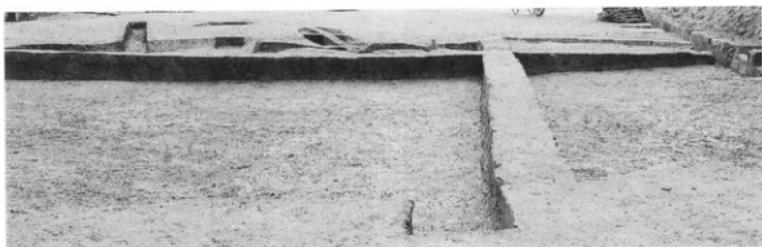
P 5 断面



平 面



断 面 (N-S)



断 面 (E-W)

写真図版18 S I 03 穂穴住居跡①



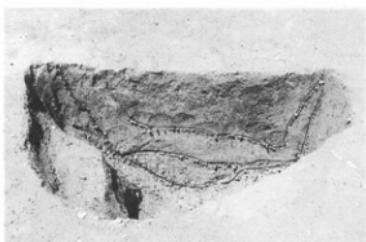
カマド状平面



カマド状 断面 (W-E)



カマド状 断面 (N-S)



P 1 断面



P 3 断面

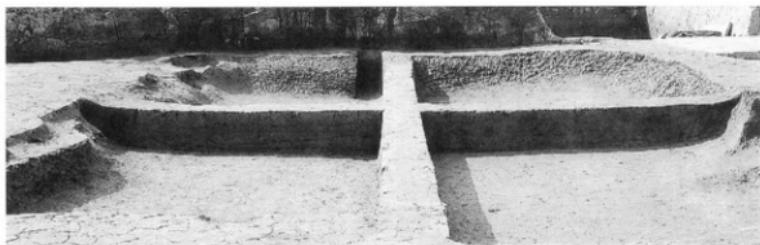


C区1・2面完掘状況

写真図版19 S I 03竪穴住居跡②、C区1・2面完掘状況



平 面

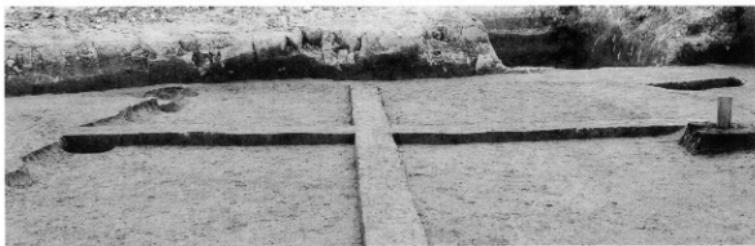


断 面 (N-S)



断 面 (W-E)

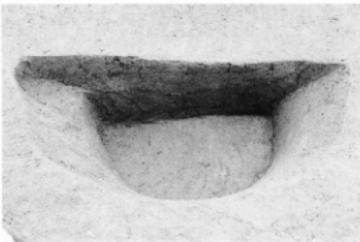
写真図版20 S I 04 穴住居跡①



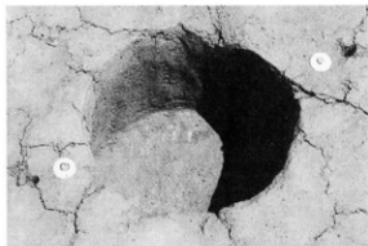
検出状況



P 1 完掘



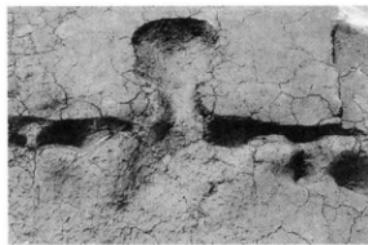
P 1 断面



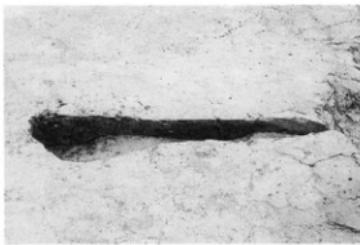
P 2 完掘



P 2 断面



P 7 完掘



P 7 断面

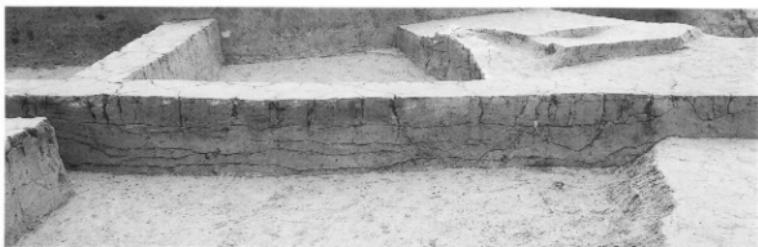


S I 05 平面



S I 06 平面

写真図版22 S I 05・06竪穴住居跡①



S I 06 ~ 05 断面 (W-E)



S I 06 ~ 05 断面 (S-N)



S I 05 断面



S I 06 断面



S I 05 断面



S I 06 P1 断面

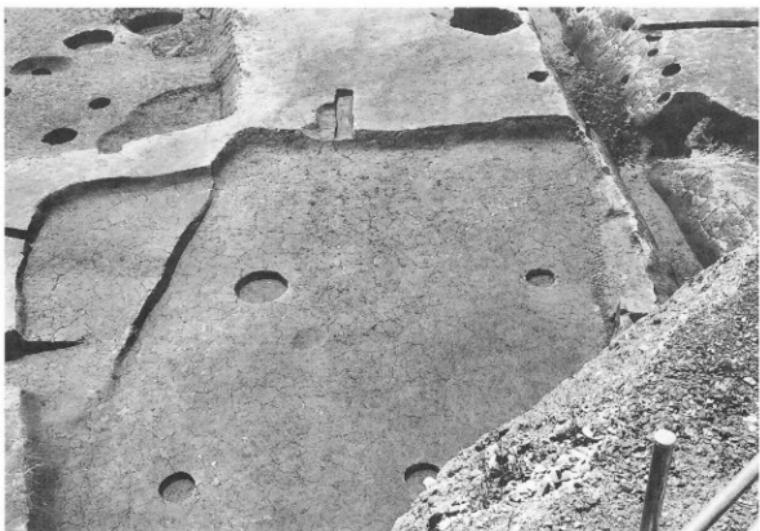


完 摄



断 面

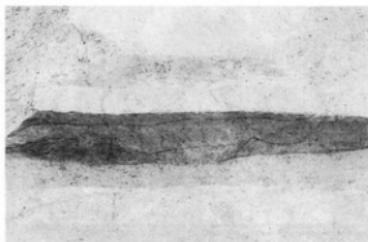
写真図版24 S I 07 竪穴住居跡



平 面



断 面(W-E)



煙道?断面



P 2 断面



D区 完 墓



D区VII層下トレンチ 平面



D区VII層下 断面

写真図版26 D区 完堀状況



B区(精査風景)



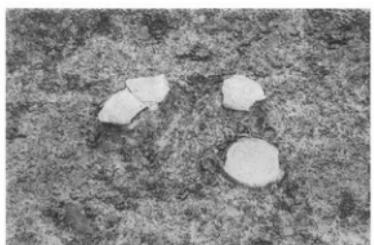
C区(精査風景)



B区(III C 9 f)遺物出土状況



C区(III C 6 b)遺物出土状況



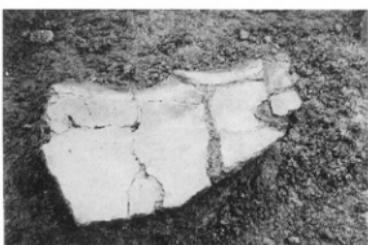
B区(III C 6 g)遺物出土状況



C区(III C 3 g)遺物出土状況



E区(②)遺物出土状況



E区(④)遺物出土状況

写真図版27 B・C・E区VI層 遺物出土状況



完 撮



断 面(W-E)



断 面(S-N)

写真図版28 S I 09竪穴住居状遺構



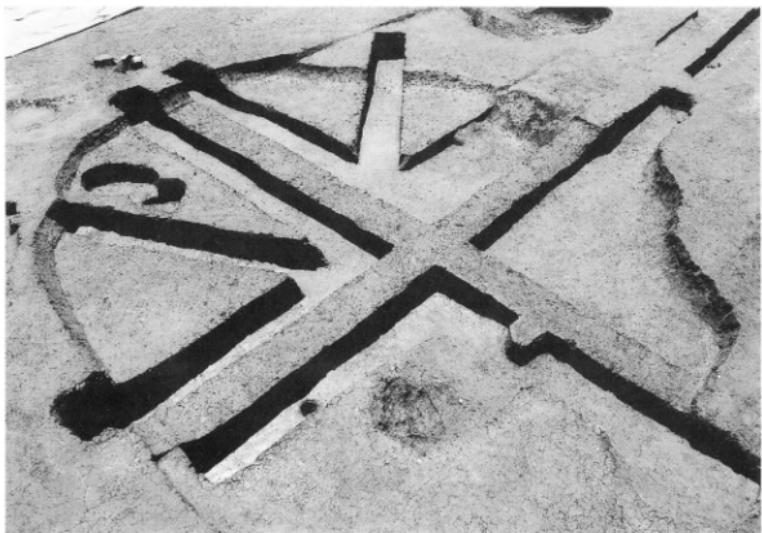
完 据



断 面 (W-E)



断 面 (N-S)



完 摄



断 面(N-S)



断 面(E-W)

写真図版30 S I 11 壁穴住居状遺構①



炉核出状況



炉断面(W-E)



柱穴断面



炉断面(N-S)



B区 弥生時代面完掘

写真図版31 S I 11竪穴住居状遺構②、B区弥生時代面完掘



完 墓



断 面 (W-E)



断 面 (N-S)

写真図版32 S I 12竪穴住居状遺構①



S I 12 土器出土状況



S I 13 宛 拱

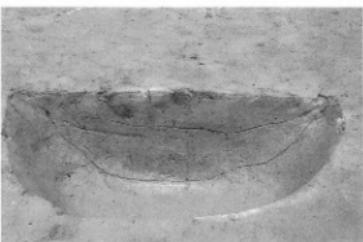


S I 13 断 面

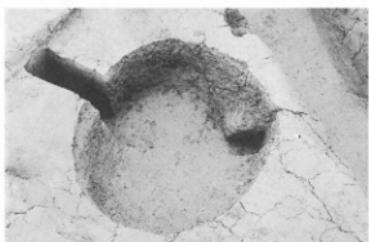
写真図版33 S I 12②・S I 13竪穴住居状遺構



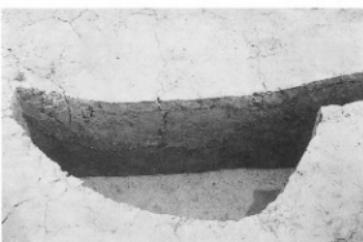
SK 03 完 挖



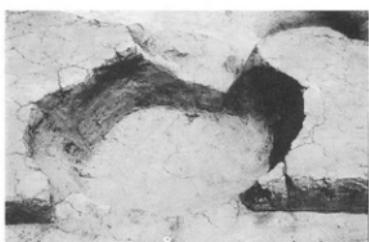
断 面



SK 04 完 挖



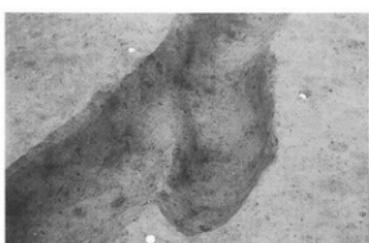
断 面



SK 05 完 挖



断 面

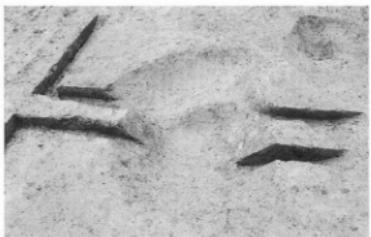


SK 06 完 挖



断 面

写真図版34 SK 03～06土坑



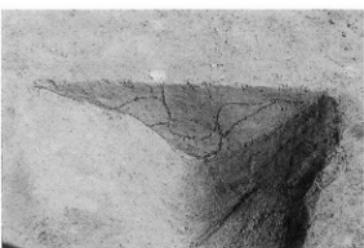
SK 07 宛掘



断面



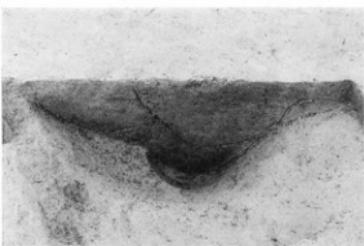
SK 08 宛掘



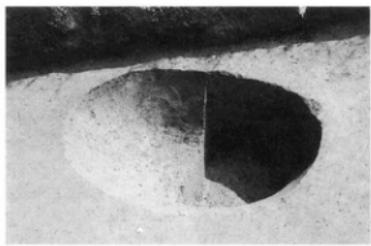
断面



SK 09 宛掘



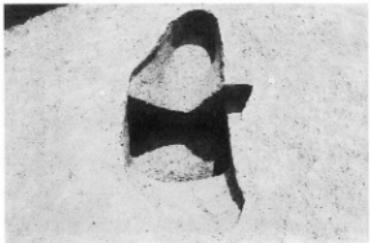
断面



SK 10 宛掘



断面



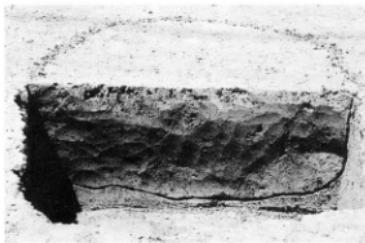
SK 11 完 捨



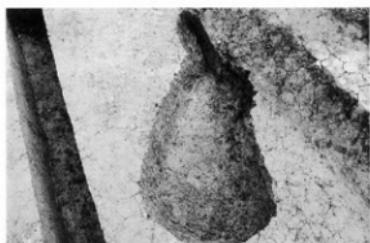
断 面



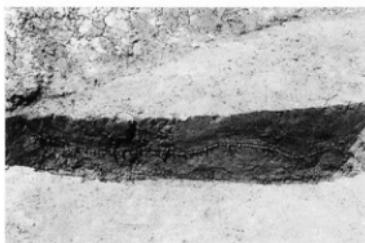
SK 12 完 捨



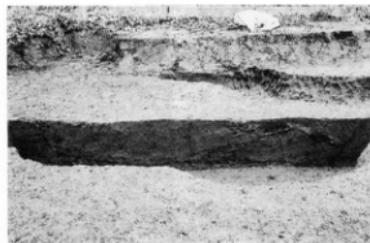
断 面



SK 13 完 捨



断 面

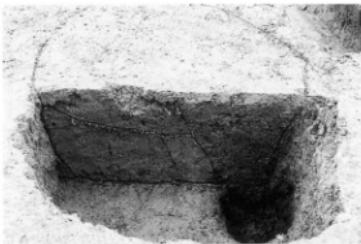


SK 14 断 面

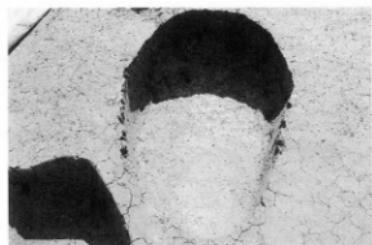
写真図版36 SK 11 ~ 14土坑



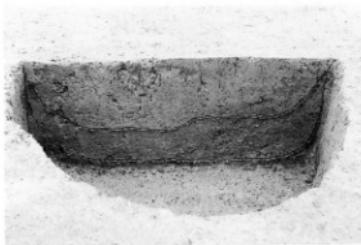
SK 15 完 摘



断 面



SK 16 完 摘



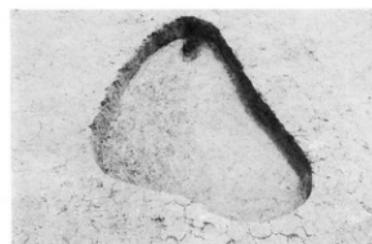
断 面



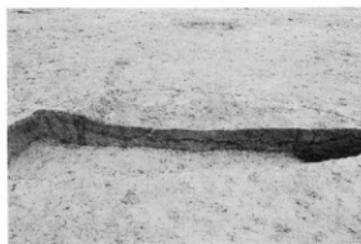
SK 17 完 摘



断 面



SK 18 完 摘



断 面

写真図版37 SK 15～18土坑



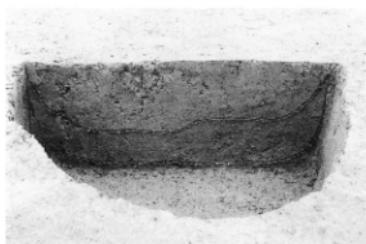
SK 19 完 挖



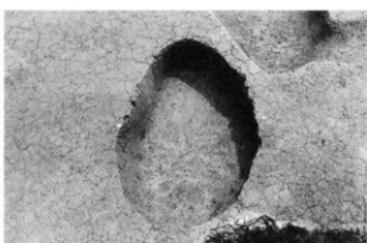
断 面



SK 20 完 挖



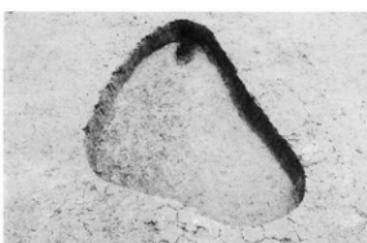
断 面



SK 21 完 挖



断 面



SK 22 完 挖

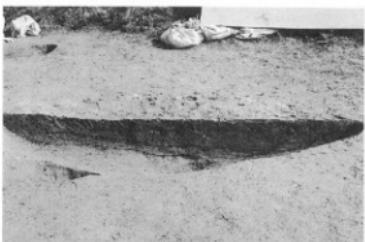


断 面

写真図版38 SK 19～22土坑



SK 23 完掘



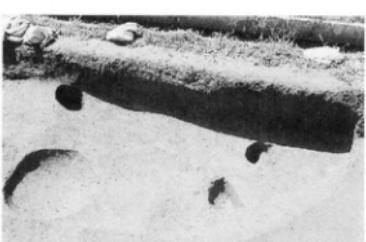
断面



SK 24 完掘



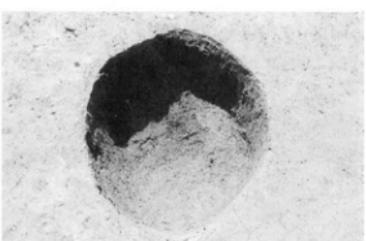
断面



SK 25 完掘



断面



SK 26 完掘

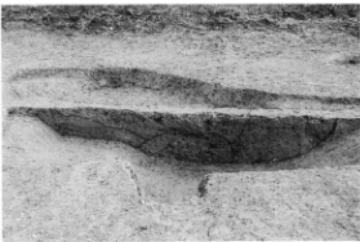


断面

写真図版39 SK 23～26土坑



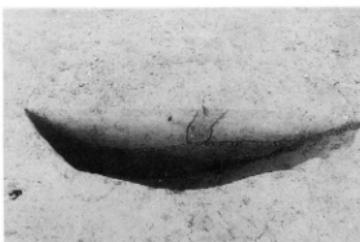
SK 27 完 据



断 面



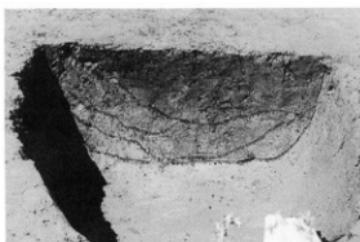
SK 28 完 据



断 面



SK 29 完 据



断 面



SK 30 完 据



断 面

写真図版40 SK 27～30土坑



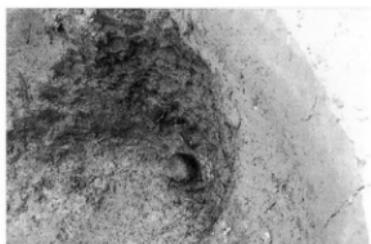
完 挖



断面(南側)



断面(北側)



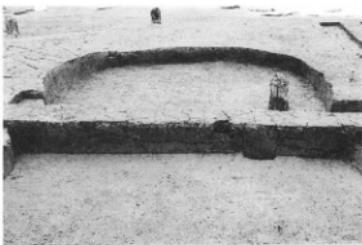
土器出土状況①



土器出土状況②



SK 32 完 挖



断 面



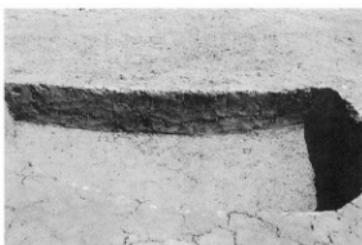
SK 33 完 挖



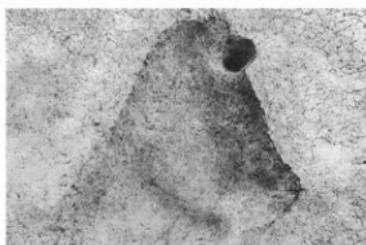
断 面



SK 34 完 挖



断 面



SK 35 完 挖



断 面

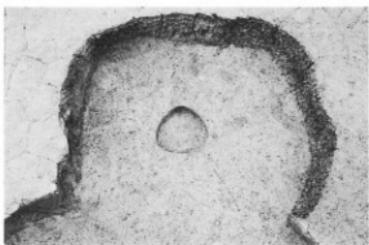
写真図版42 SK 32～35土坑



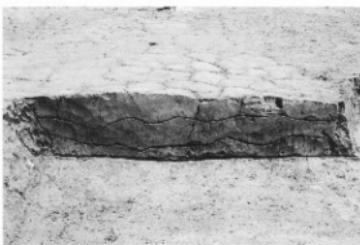
SK 36 完 摘



断 面



SK 37 完 摘



断 面



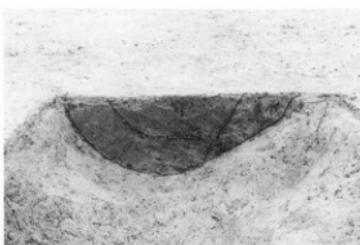
SK 38 完 摘



断 面



SK 39 完 摘



断 面

写真図版43 SK 36～39土坑



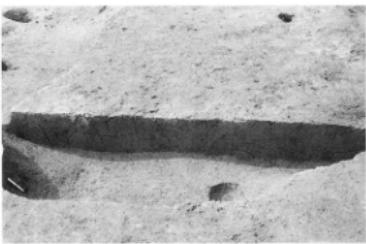
SK 40 完 挖



断 面



SK 41 完 挖



断 面



SK 42 完 挖



断 面



SK 43 完 挖



断 面

写真図版44 SK 40 ~ 43土坑



SK 44 完 捨



断 面



SK 45 完 捨



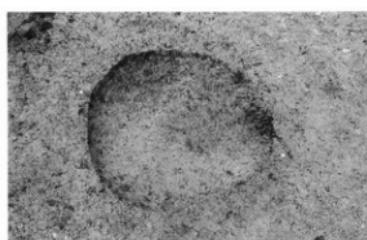
断 面



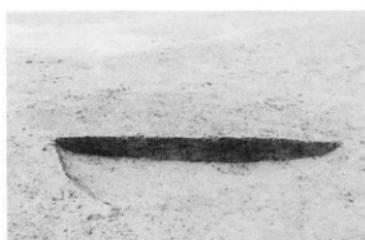
SK 46 完 捨



断 面



SK 47 完 捨



断 面

写真図版45 SK 44 ~ 47 土坑



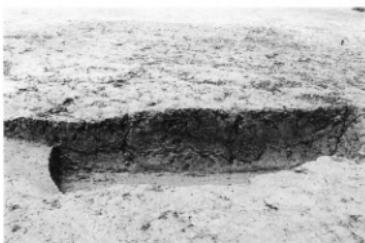
SK 48 完 挖



断 面



SK 49 完 挖



断 面



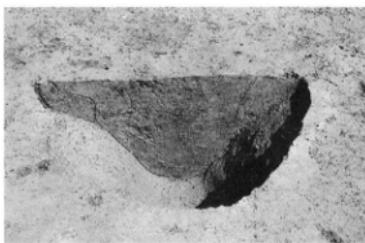
SK 50 完 挖



断 面

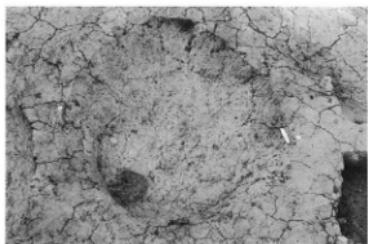


SK 51 完 挖

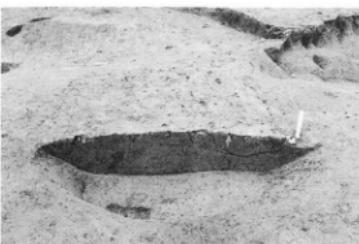


断 面

写真図版46 SK 48～51 土坑



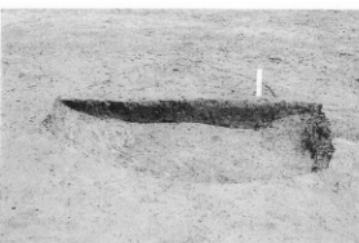
SK 52 完 摘



断 面



SK 53 完 摘



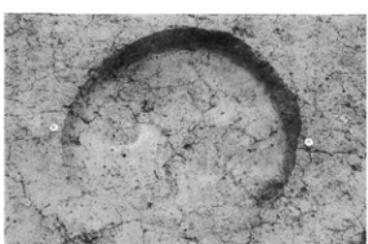
断 面



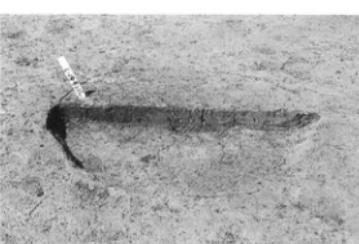
SK 54 完 摘



断 面



SK 55 完 摘



断 面

写真図版47 SK 52～55土坑



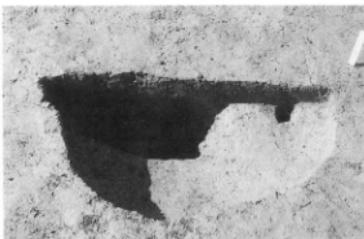
SK 56 完 振



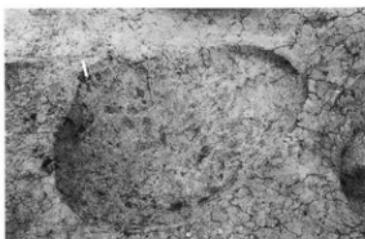
断 面



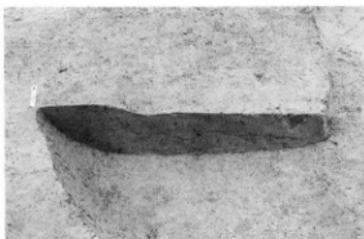
SK 57 完 振



断 面

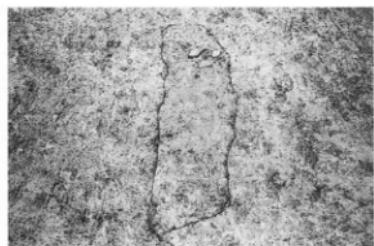


SK 58 完 振



断 面

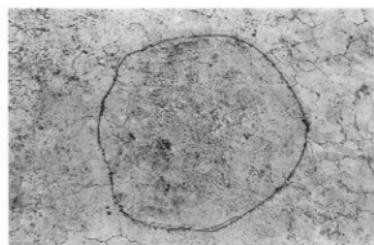
写真図版48 SK 56～58土坑



S X 01 検 出



断 面



S X 02 検 出



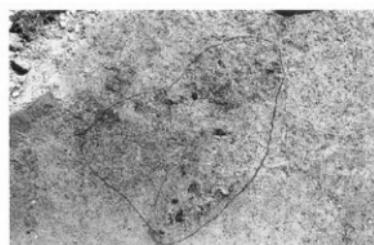
断 面



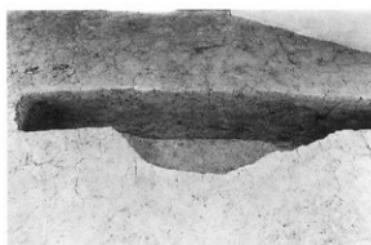
S X 03 検 出



断 面



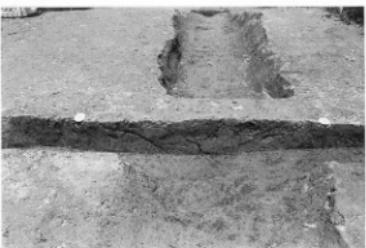
S X 04 検 出



断 面



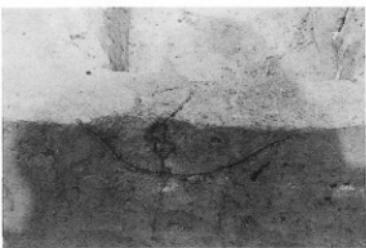
SD 10 完 摘



断 面



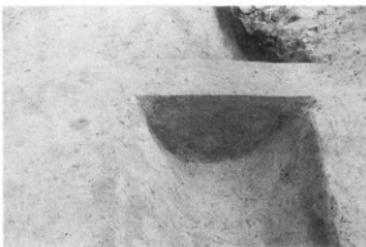
SD 11 完 摘



断 面



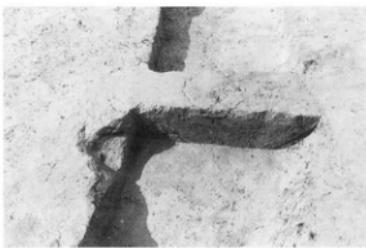
SD 12 完 摘



断 面



SD 13 完 摘



断 面

写真図版50 SD 10 ~ 13溝跡



4号堀 完 挖



4号堀 断 面



5号堀 断 面



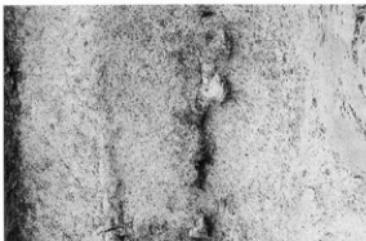
5号堀 北側完掘



5号堀(南側)実掘



南側断面①



炭化物検出状況



南側断面②



精査状況

写真図版52 5号堀跡②



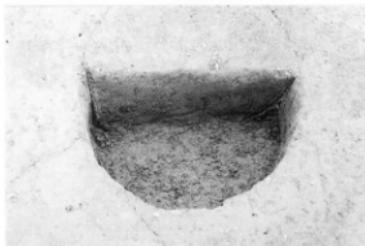
B区 古代面完掘



B柱穴状土坑群 平面



D柱穴状土坑群 1

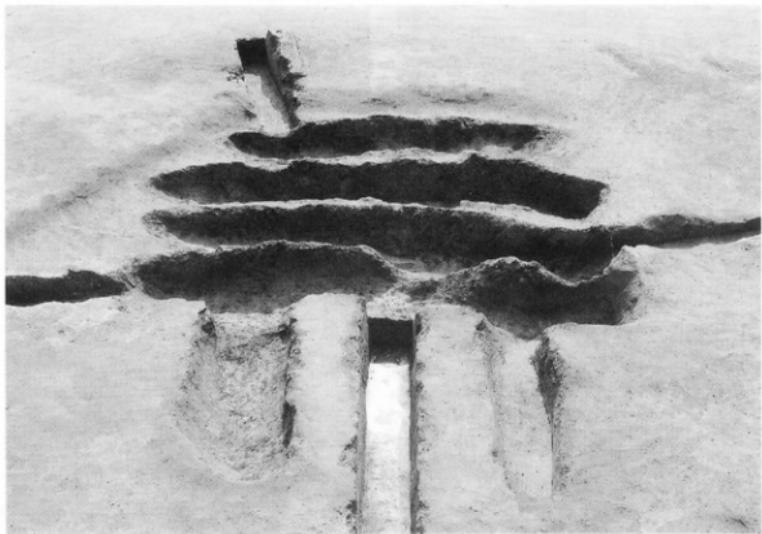


PP 232 断面

写真図版 53 柱穴状土坑群

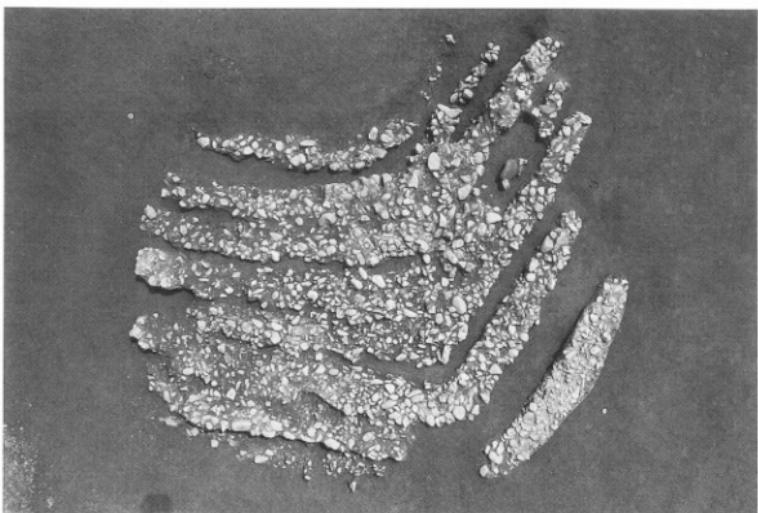


平 面(W→)



掘 刃 方(E→)

写真図版 54 1号配石遺構①



平 面(真上 下がW)



握り方(S→)



1号配石遺構 墓土面



1号配石遺構 配石断面



2号配石遺構 配石断面



配石状況①

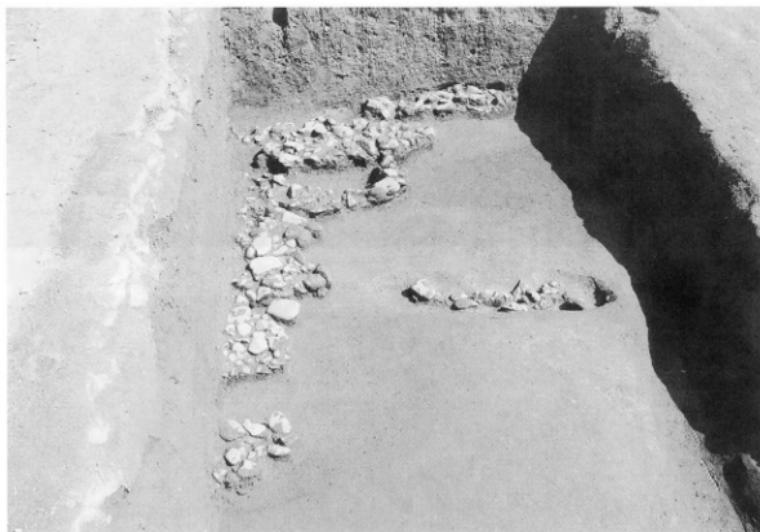


配石状況②

写真図版 56 1号配石遺構、2号配石遺構②



2号配石遺構 掘り方



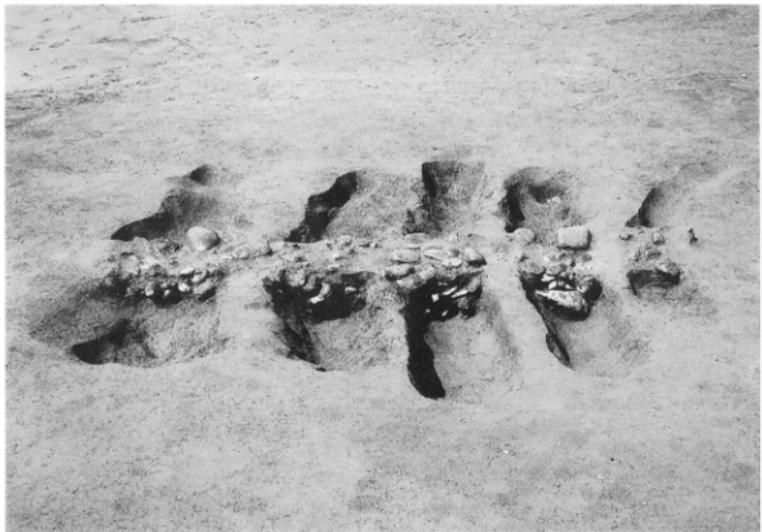
3号配石遺構 平面



3号配石遺構 掘り方



平 面

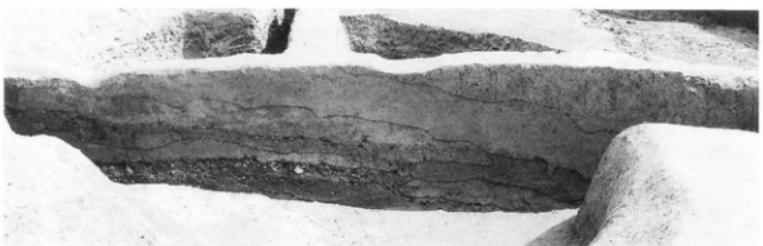


掘り方

写真図版 58 4号配石遺構



旧河道検出状況



旧河道 断面



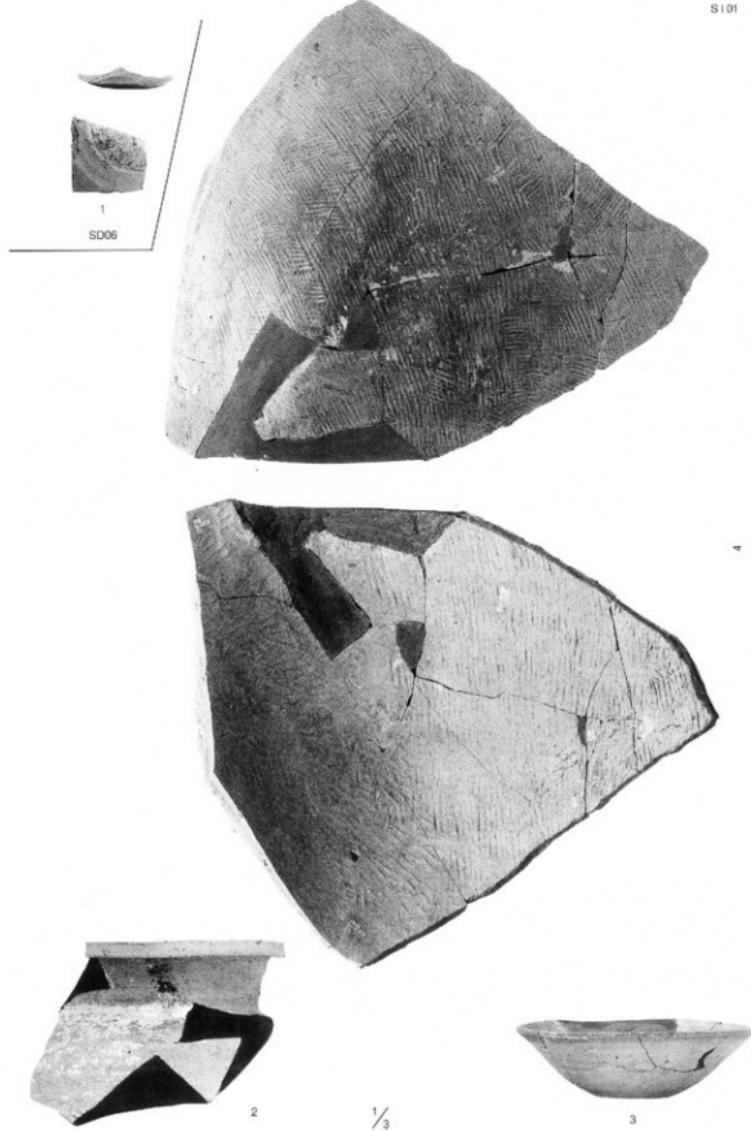
奥州市立大田代小学校体験発掘



現地説明会

写真図版59 旧河道、その他

S101



写真図版60 古代土器 1



5



6



7



8



9



10



9



11



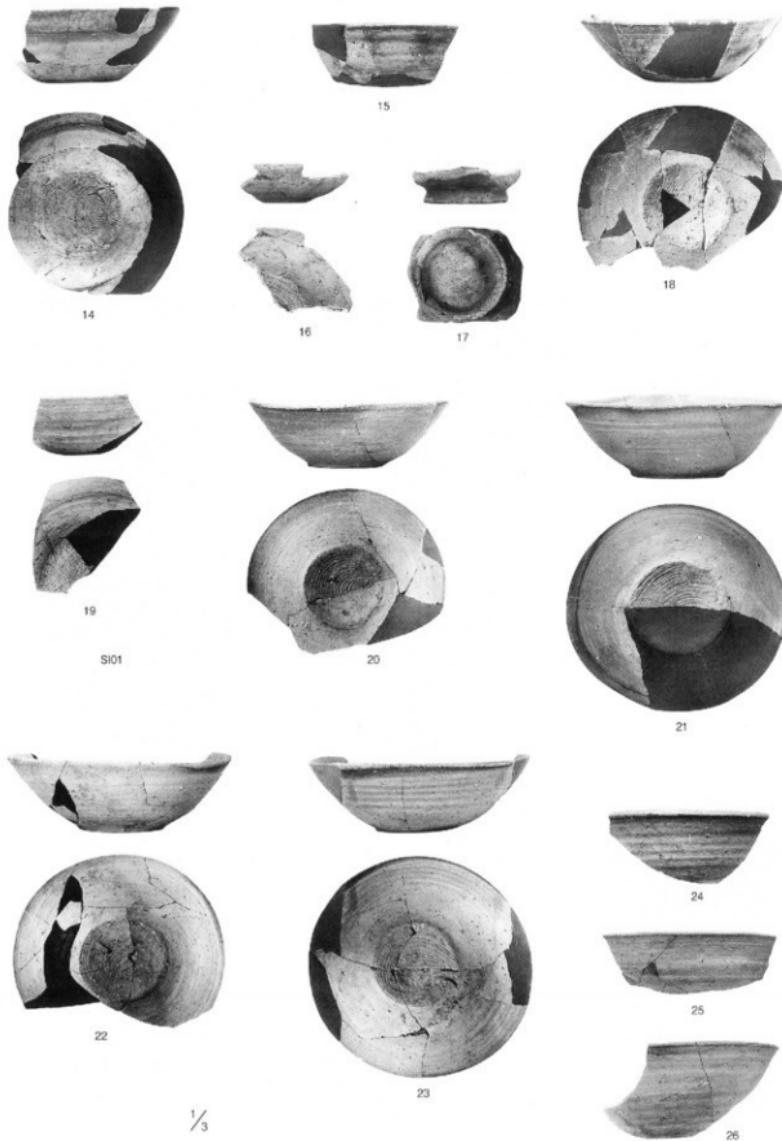
12



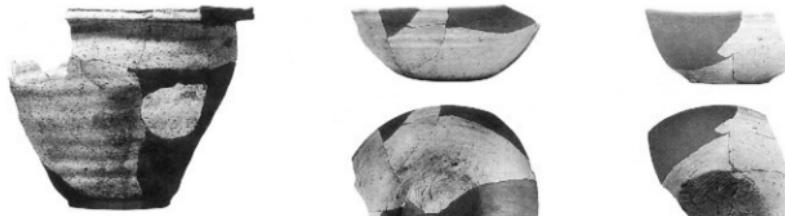
13

SI01

写真図版61 古代土器2



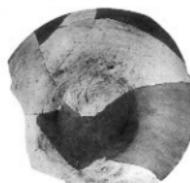
写真図版62 古代土器 3



S102



S105



S105



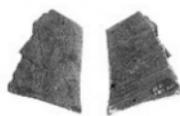
SX01



1号层



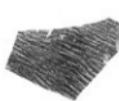
5号层



2号配石罐模



包含层1



包含层3

1/3



42



43



44

造境外



45



46



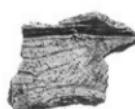
47



48



49



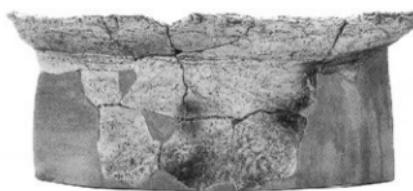
51

1 / 3

SI09



50①



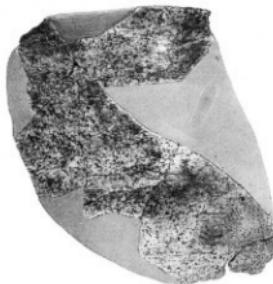
50②

写真図版64 古代土器5、縄文・弥生土器1



52

S109



53



54



55



56



57



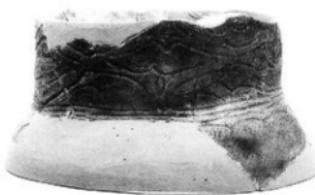
58



59



60



61



62



63



64



65



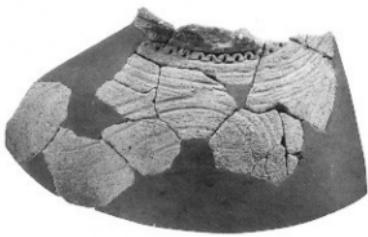
66

59は $\frac{1}{2}$
他 $\frac{1}{3}$

写真図版65 繩文・弥生土器2



67



69



66



70



71



72



73



74



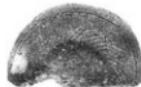
75



76



77



78



79



80

S109



81



82



83

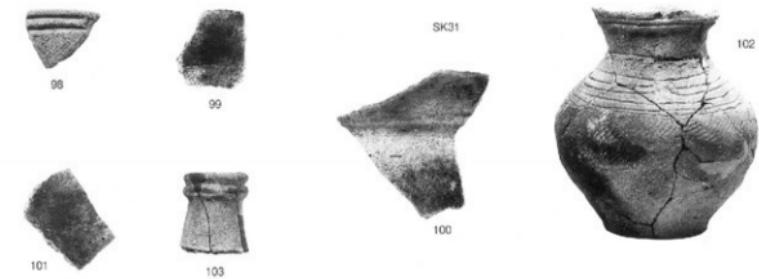
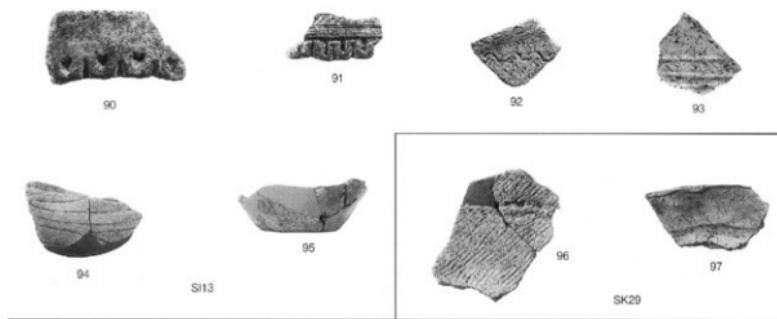
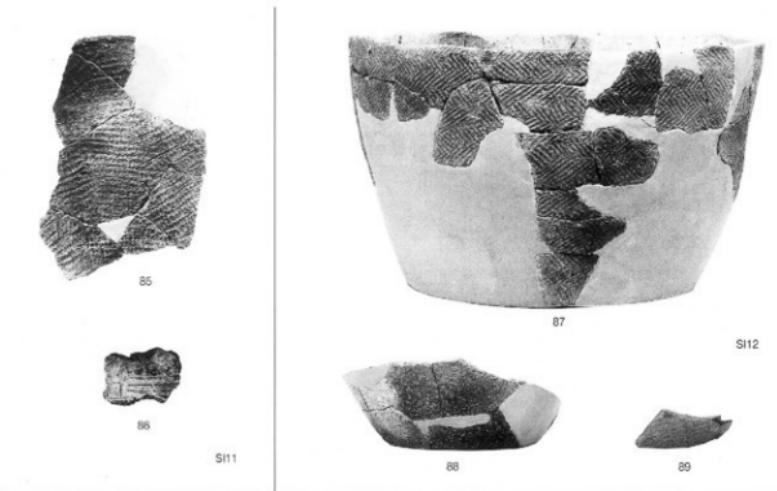


84

77, 83 $\frac{1}{2}$ 他 $\frac{1}{3}$

S110

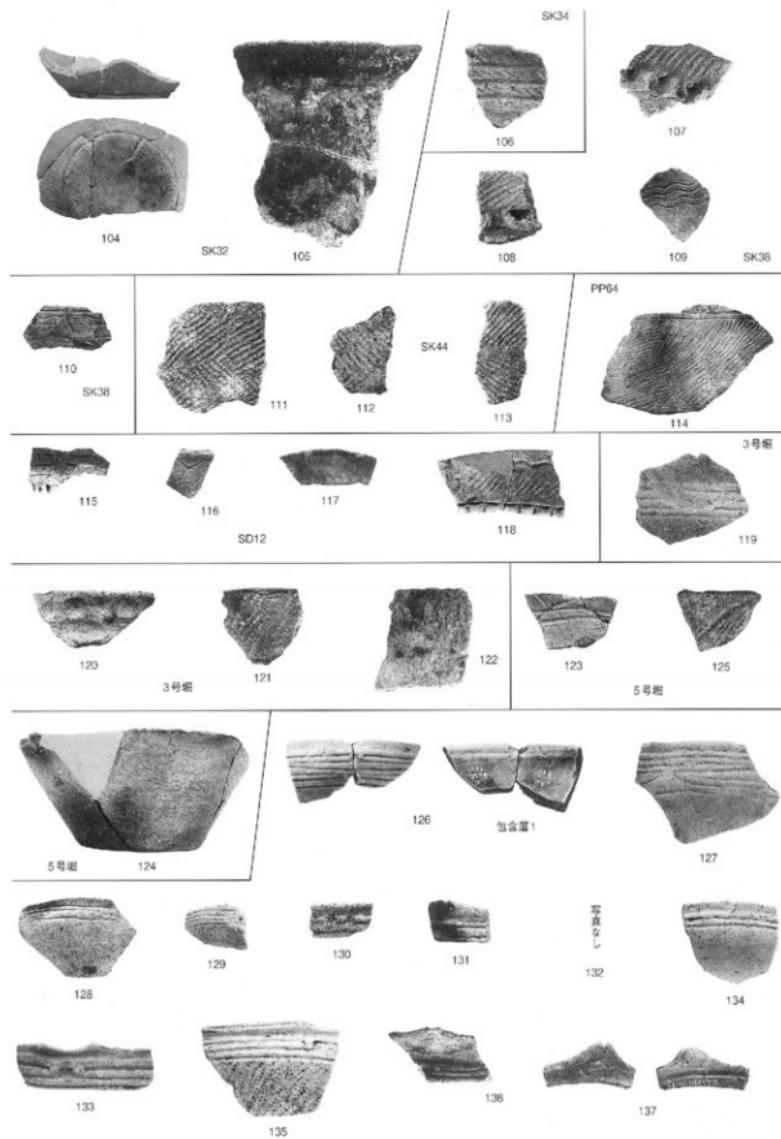
写真図版66 繩文・弥生土器3



86, 90, 91, 92, 93, 98 1/2

他 1/3

写真図版67 繩文・弥生土器4



106, 107, 108 1/2 他 1/3

写真図版 68 繩文・弥生土器 5



138



139



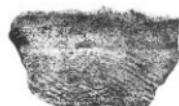
140



141



142



143



144



145



146



147



148



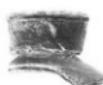
149



150



151



152



152



153

1/3

154

包含層1



155



156



157



158



159

包含層1



160



161



162



163



164



165

包含層2



166



167



169

171



170



172



168

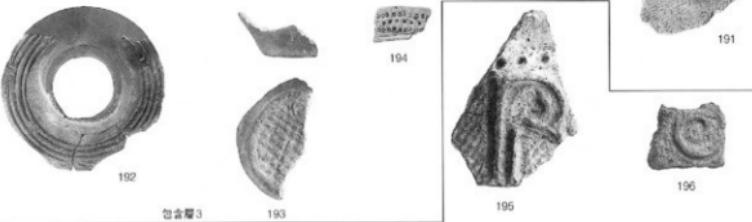
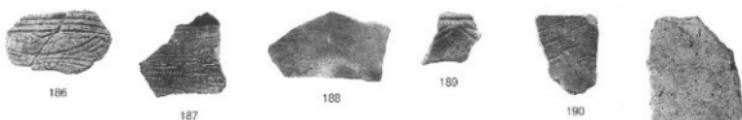
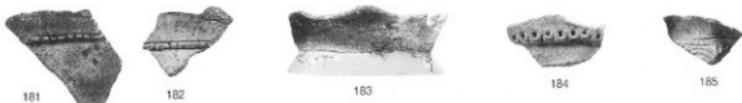
包含圖2



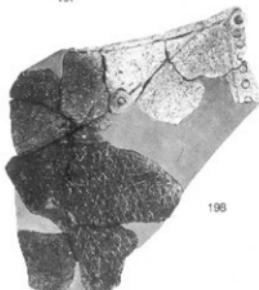
173

1/3

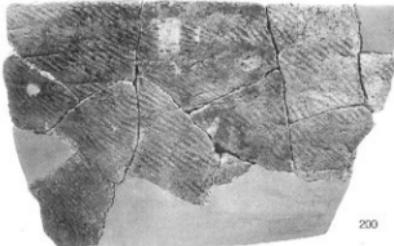
写真図版71 繩文・弥生土器 8



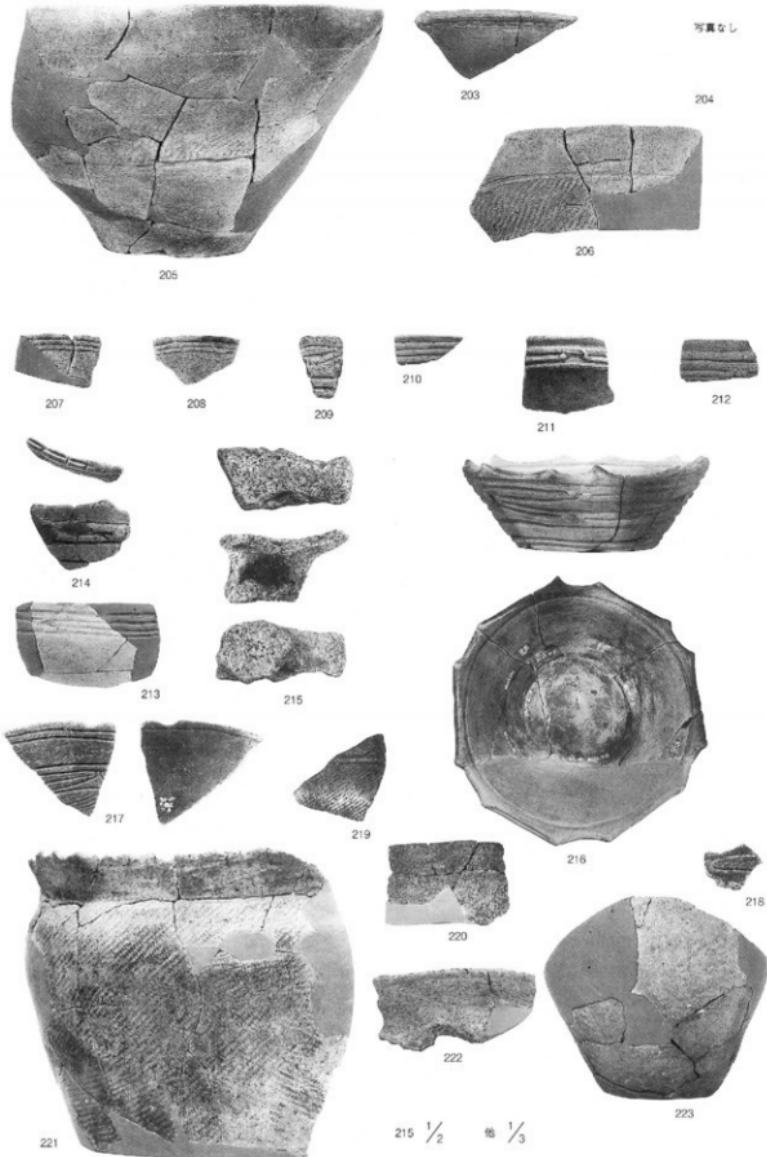
包含層3



175 1/2 186 1/3



写真図版72 繩文・弥生土器9



写真図版73 繩文・弥生土器10



224



225



226



227



228



229



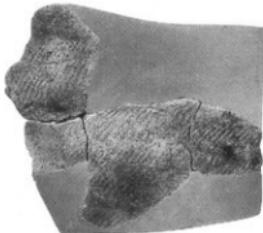
230



231



233



232



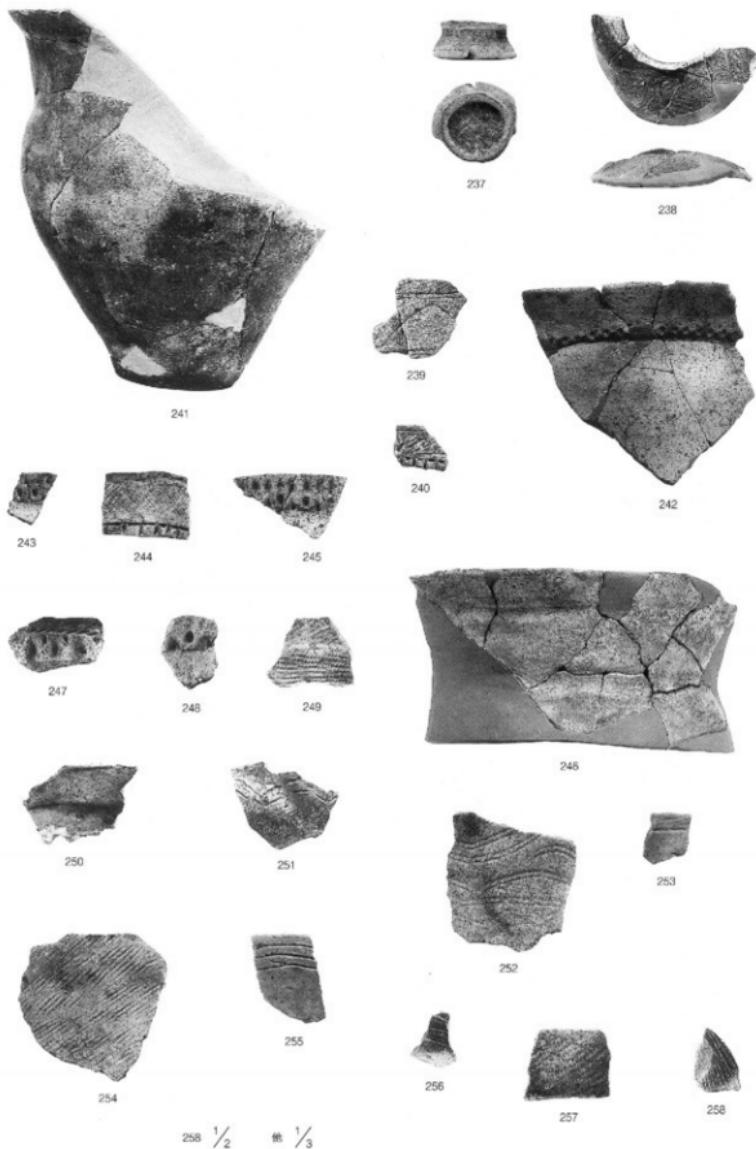
234



235



236



写真図版 75 繩文・弥生土器 12



259



260



262



261



263



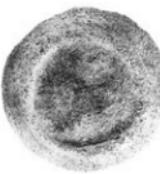
264



265



266



267



268



269



270



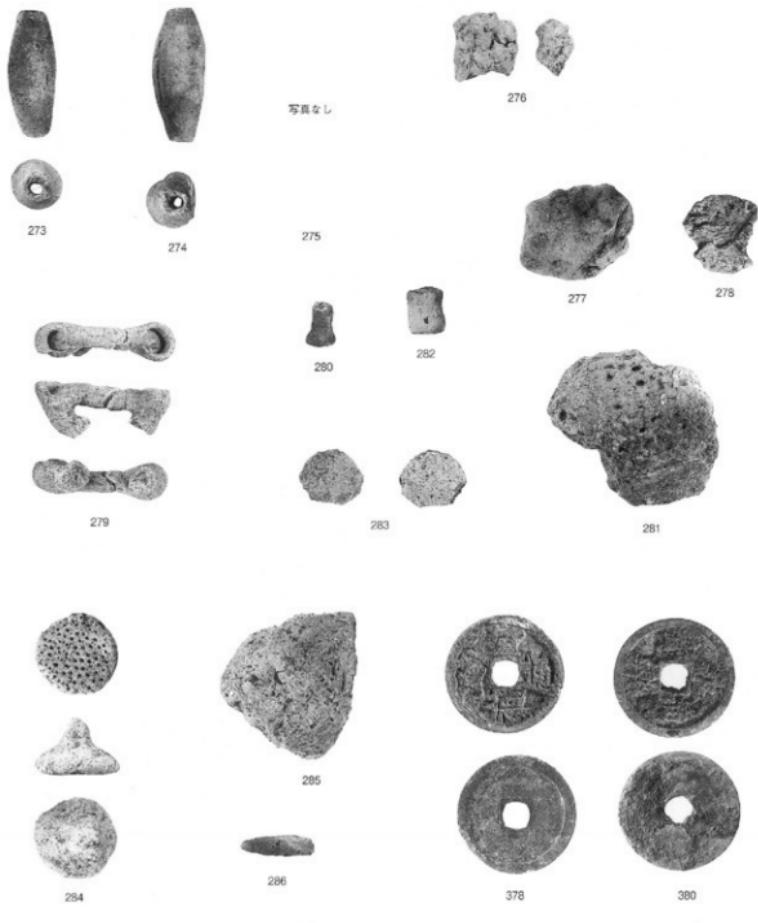
271



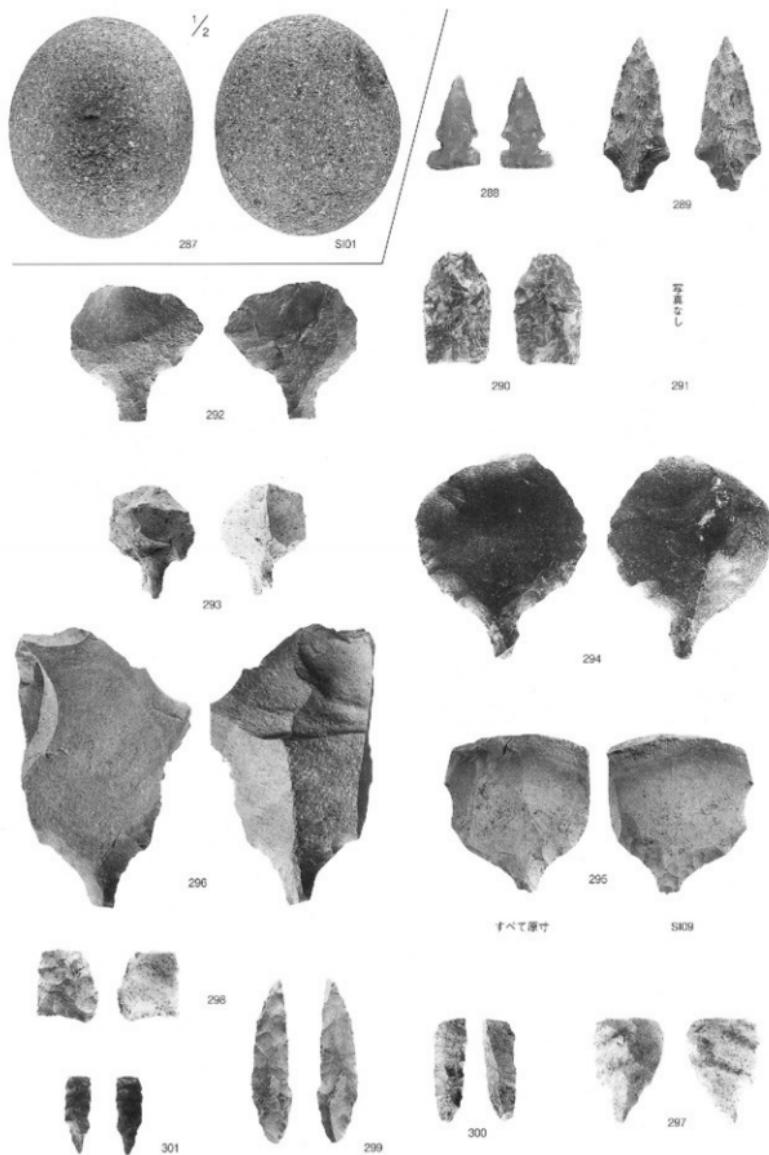
272

259 1/2 268 1/3

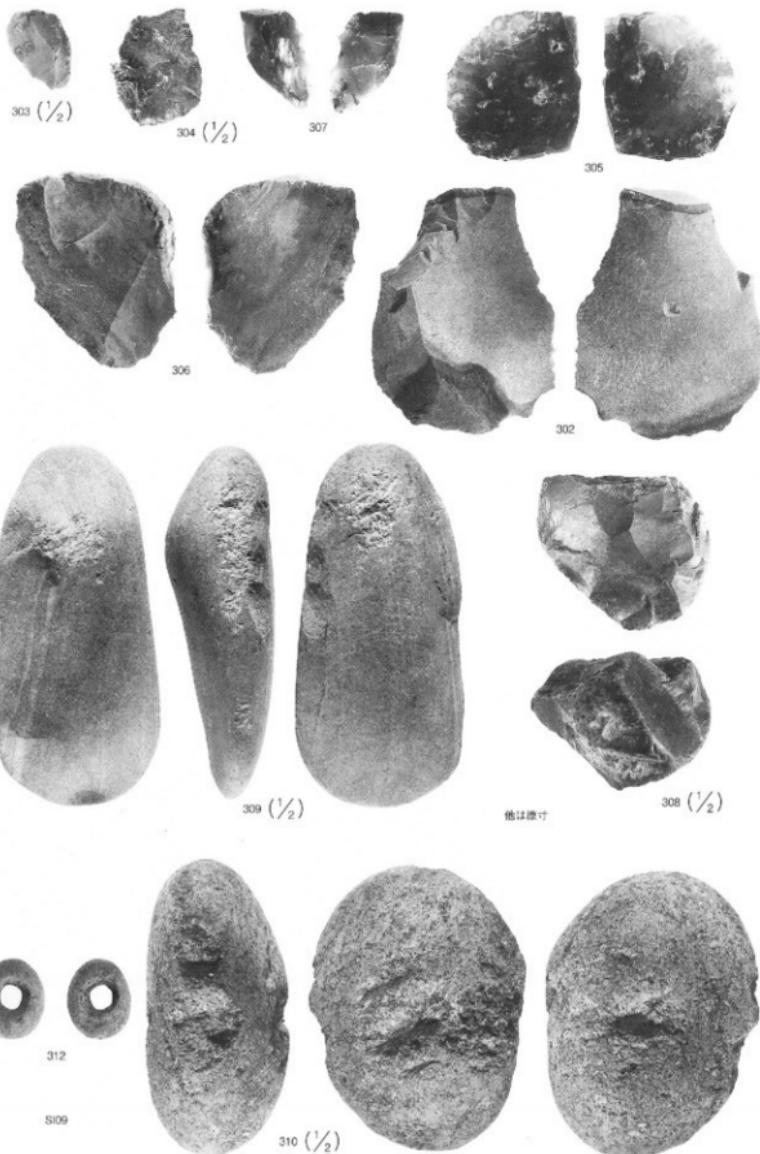
写真図版76 繩文・弥生土器13



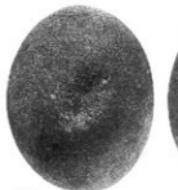
写真図版77 土製品・古銭



写真図版 78 石器・石製品 1



写真図版79 石器・石製品2



SI09

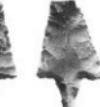


311 (1/2)



313

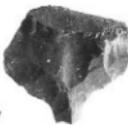
SI10



314



317



SI13



316



SI11



315 (1/2)

SK31



318 (1/2)



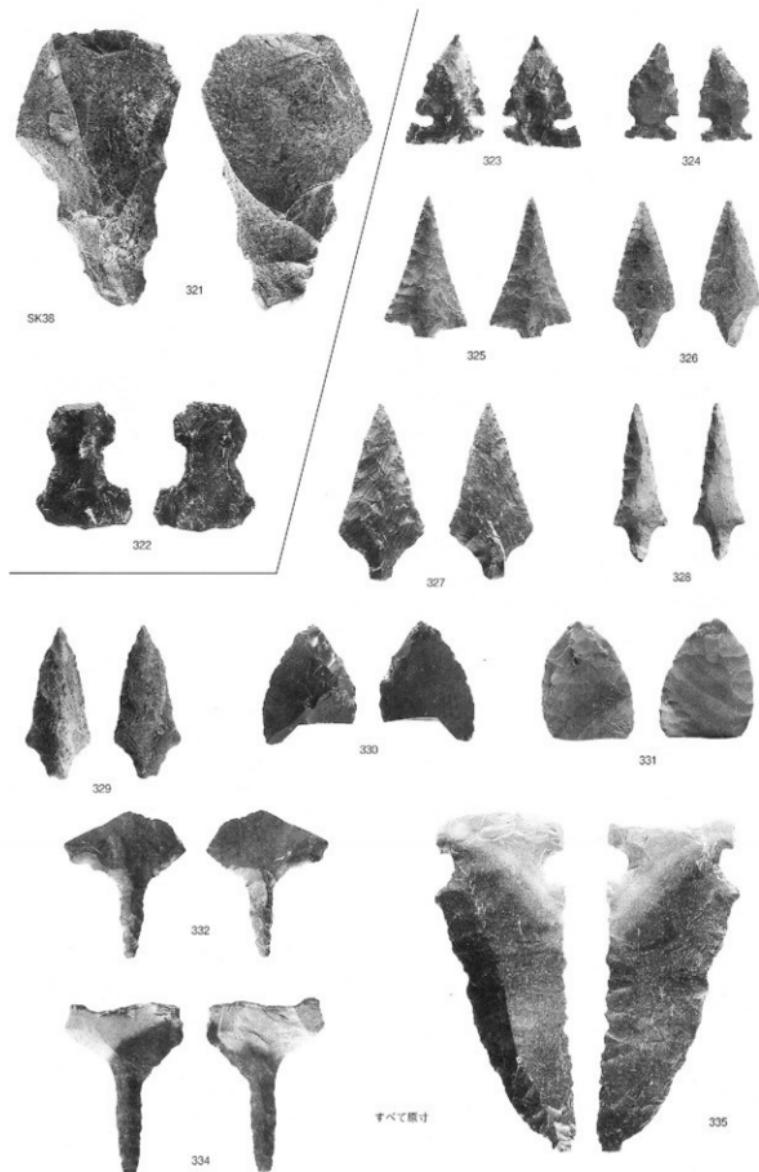
319 (1/2)



320

SK38

写真図版 80 石器・石製品 3



写真図版81 石器・石製品4



333



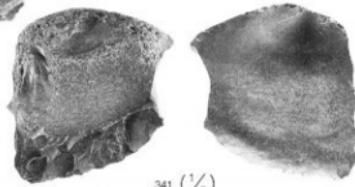
337



336



340 (1/2)



341 (1/2)

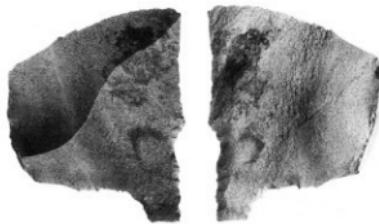


338

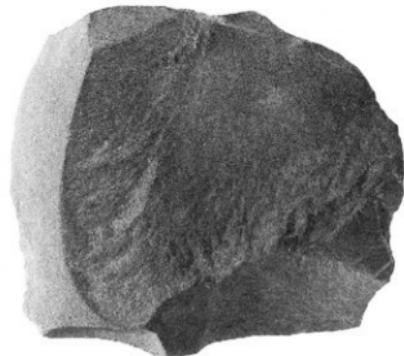


342

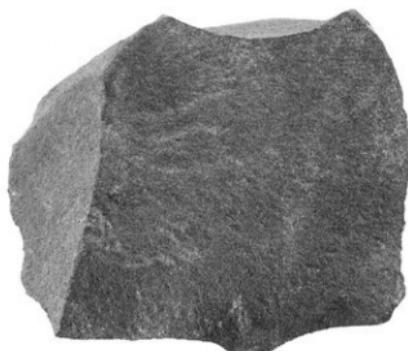
写真図版 82 石器・石製品 5



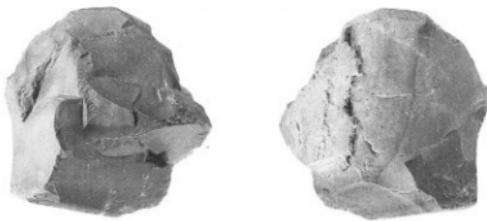
339



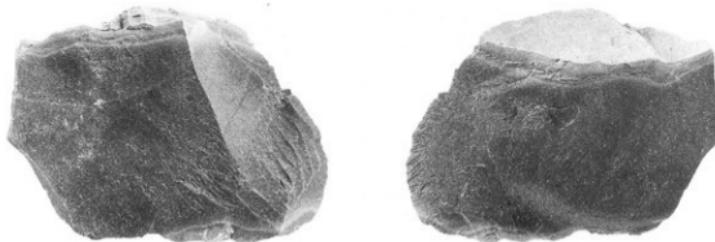
(表)



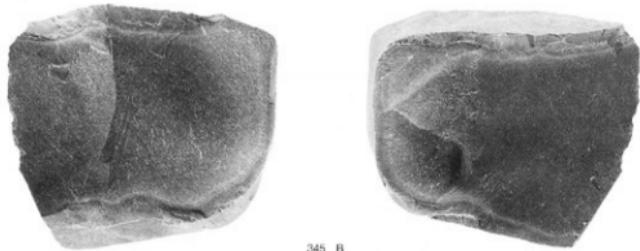
343 (裏)



344



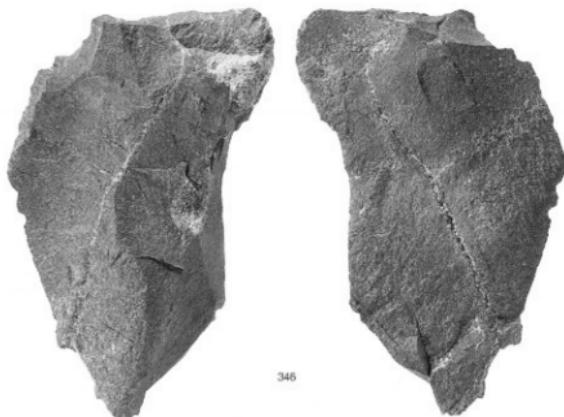
345 A



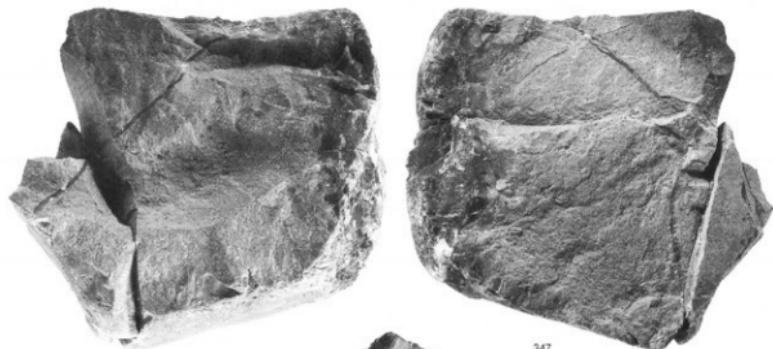
345 B

厘米

写真図版84 石器・石製品7



346

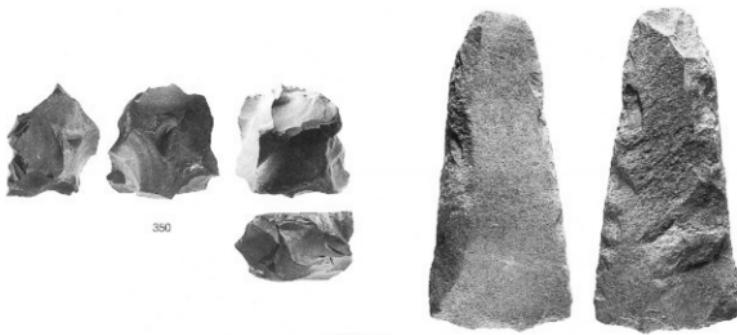


347



348

写真図版 85 石器・石製品 8



350



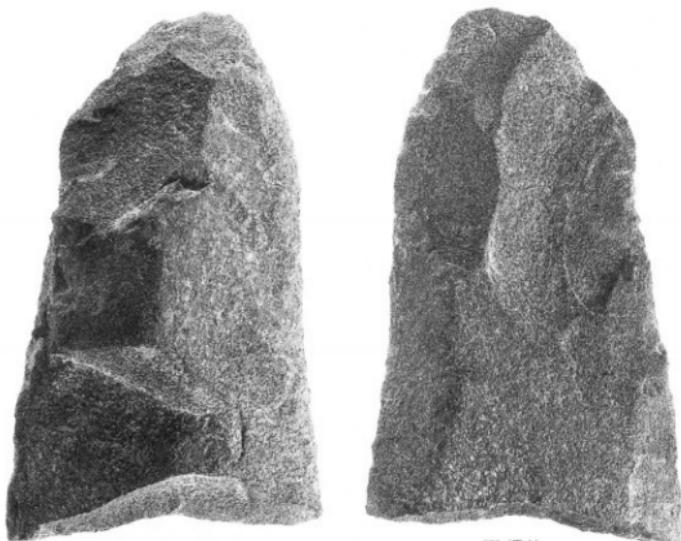
349



351

$\frac{1}{2}$

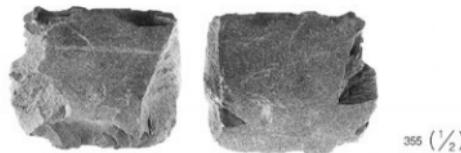
写真図版86 石器・石製品9



353 (厚寸)



354 (1/2)



355 (1/2)



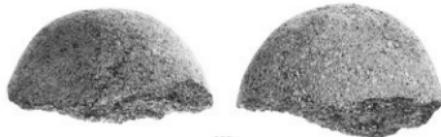
357



358



359



360



362

1/2

写真図版88 石器・石製品11



364



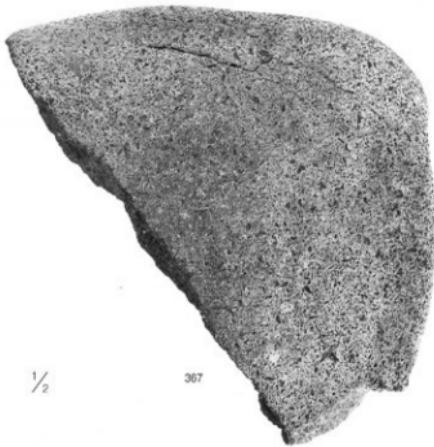
366



365



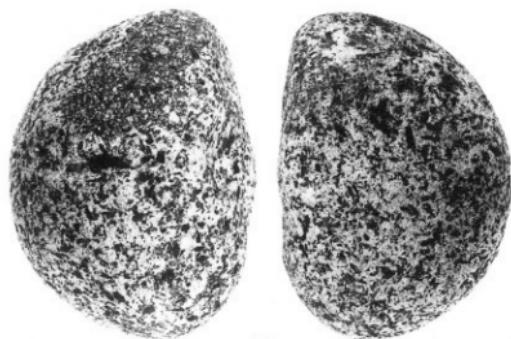
368



1/2

367

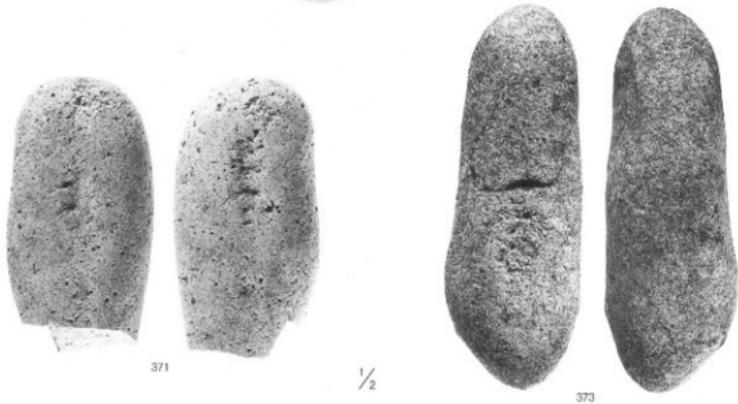
写真図版 89 石器・石製品 12



369



370



371

1/2

373

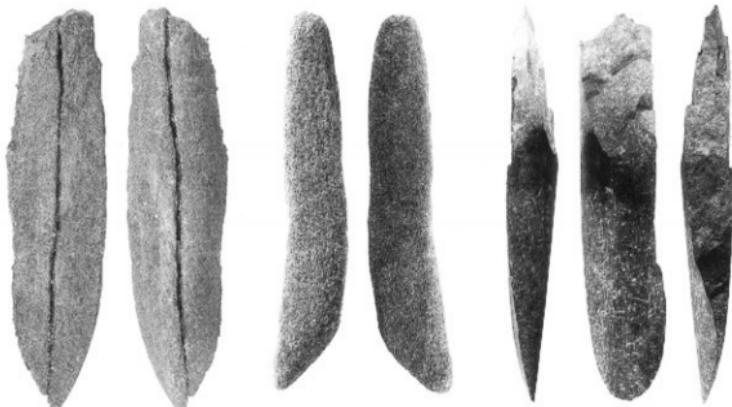
写真図版 90 石器・石製品 13



374 (2/5)



372 (1/3)



375 (1/4)

376 (1/2)

377 (1/2)

写真図版91 石器・石製品14

報告書抄録

ふりがな	さかいいせきはっくつちょうきほうこくしょ							
書名	境遺跡発掘調査報告書							
副書名	主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第539集							
編著者名	鳥居達人							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	2009年2月27日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒	~		
境遺跡	岩手県北上市福浦町地藏堂 3-1他	3206	ME86-0069	39度 14分 19秒	141度 7分 16秒	2006.09.19 2006.12.04 2007.04.11 ~ 2007.09.27	平成18年度 1,035m ² 平成19年度 6,100m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
境遺跡	集落跡	縄文時代 晩期末葉 ~ 弥生時代	竪穴住居状遺構 土坑 包含層	4棟 12基 3箇所	大洞A'土器、砂沢式 土器、湯舟沢式土器、 アメリカ式石器、石錐、 磨製石斧など	弥生時代後期の土器を 出土させる住居状遺構、 弥生時代前期土器 包含層		
		平安時代	竪穴住居跡 配石遺構 溝跡	8棟 4基 46基 1条	土師器甕、壺、須恵器 壺、土製品、石製品など	墨書き土器を伴うカマド を持つ住居跡、配石遺構		
		中世 ~ 近世	堀跡 柱穴状土坑 溝跡 土坑	5条 120個 12条 2棟	古銭、陶磁器片	南北に延びる大型の堀 跡と長く延長する溝跡		
要約	遺跡は、弥生時代初頭期から平安時代、中世にわたる集落跡として板跡を残す複合遺跡である。弥生時代では岩手原内では類例の少ない後期の土器が、アメリカ式石器を伴って出土させる遺構が確認されている。古墳時代の遺構は確認されなかったが、5~6世紀の土師器の甕が出土したことから当時も生活がなされていたことが強調できる。平安時代では大きなカマドを持つ住居跡が確認され、墨書き土器からリーダー的な存在がいたことが考えられる。4基の配石遺構や大型の堀跡など古代から中世にかけても、盛んな人々の活動があったことが予想される稀有な遺跡である。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第539集

境遺跡発掘調査報告書

主要地方道北上一関線下門岡地区道路改良工事関連発掘調査

印 刷 平成21年2月24日

発 行 平成21年2月27日

編 集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話 (019) 638-9001

発 行 岩手県南広域振興局北上総合支局土木部
〒024-8520 岩手県北上市芳町2-8
電 話 (0197) 65-2738
岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電 話 (019) 654-2235

印 刷 株式会社 富士屋印刷所
〒020-0841 岩手県盛岡市羽場13-30-10
電 話 (019) 637-6391

